



人は人のつくるものに似ていく
PART II



星野廉



目次

この本について ＊	3
岐路に立つ擬人 ＊	7
本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ ＊	33
人にあらわれて、機械にあらわれないもの ＊	43
そっくりなのは、そっくりにつくってあるから ＊	53
意味に意味を重ねる ＊	69
宿を借りる生きもの ＊	81
言葉は声と顔が命、意味は二の次 ＊	91
自分に自分を似せていく（連想でつなぐ、引用の織物） ＊	107
Moves Like Jagger（連想でつなぐ） ＊	121
鏡「面」画「面」顔「面」 ＊	133
わたし（ぼく）が二人いる ＊	145
鏡、境、界	

*	161
「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する	
*	175
人に動物を感じる時（連想でつなぐ）	
*	187
人工〇〇になりたい	
*	203
赤ちゃんのいる空間	
*	217
影を踏むのをためらう	
*	231
名前のない怪物	
*	237
シンクロする身振り、行為、表情	
*	241
私たちは同じではなく似ている	
*	249
世界は顔で満ち満ちている	
*	261
なぜか懐かしい世界	
*	267
見るために人がつくった「影」	
*	277
VRで自分に会いにいったその帰りに	
*	287
夢のような映画、映画のような夢	
*	295
異なる、事なる、言なる**	
*	301
外見、素地、意味	
*	305

起源のない反復、手本のない模倣 *	313
おまかせします。 *	319
抽象を体感する、体感を抽象する *	333
動くものを手なずける *	357
影に先立つ【引用の織物】 *	371
似ている、そっくり、同じ、同一 *	391
大切な人の写真が踏めますか？ *	407
私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？ *	421
異物を入れる、異物を出す *	439

この本について

＊

PART II。

人のつくるものは人に似ている/人が人のつくるものに似ていく。人間の人形化/人形の人間化、人間の機械化/機械の人間化、人間の文字化/文字の人間化、人間のイメージ化/イメージの人間化。前者の傾向が後者の進行によって凌駕されつつあるのではないか。そんなテーマをめぐり、かげ、うつる・うつす、まねるをキーワードに書いた文章を集めました。

それぞれが別の日に note に投稿したもので重複が多々見られます。ご容赦ください。その分、考えの推移をたどることができると思います。

PART IIでは、このシリーズの集大成である4本の記事（「岐路に立つ擬人」、「本物「感」と本物「っぽさ」こそリアリティ」、「人にあらわれて、機械にあらわれないもの」、「そっくりなのは、そっくりにつくってあるから」）から新しい順に並べてあります。

※なお、PART Iでは、このシリーズの原点である3本の記事（「人のつくるものは人に似ている」、「人がつくったものに人が似てくる」、「人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく」）から古い順に並べてあります。

岐路に立つ擬人

＊

岐路に立つ擬人

星野廉

2023年5月27日 08:04

目次

人は一貫して呪術の時代に生きている

人に擬する、名づける、呼び掛ける、話し掛ける

威を借りる

たま、かり、やど

宿る、宿す、込める

決める、決まる、決め手

為す、成る、生る

◆意味をなす、文をなす、形をなす

◆言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし

◆意味はまちまち

◆意味の生成を外部に委託する

擬人・呪術・委託

人ではないものになりたい人

代償の代償

人は一貫して呪術の時代に生きている

最近、AIや生成AIや、その生成したものに心や感情や魂があるとかないとかいう議論を見聞きしますが、あるに決まっています。そもそも自然にある森羅万象はもちろん（擬人のことです）、人が自分でつくった人形（ひとかた）や像や言の葉や文字（もんじ）に、心や魂を込めたり読みこんできた人類は、太古から現在に至るまで一貫して呪術の時代に生きているからです。

人から擬人と呪術を取ったら何が残るでしょうか。人知と人力を超えたものを想定して、それに声をかけて、すぎる。これは人情であり人としての性（さが）です。

山川草木はもちろん、作物、家畜、ペット、人形、物語や小説や映画やアニメのキャラクターを相手に、さんざん話し掛けたり会話をしたり、その力を借りたり奪ったり、愛したり恋したり敬慕したり、癒やされ励まされ、勇気と知恵と知識をもらっておきながら、なんでロボットやAIや生成AIに対してだけ、こんなに及び腰なのでしょう。

それだけではなく、現在ネット上で飛びかっている（誰も飛びかっているところを見た人はいませんが）らしい文字・映像・音声に、人は心と感情と魂を込めているから、誰もがPCやスマホに見入っているわけです。見入るだけでなく、胸をときめかしたり、欲情したり、泣いたり、怒ったり、落ちこんだりしたりしているのです。これは見入られている、つまり魅入られているとしか考えられません。

そんなふうにとっぷり呪術に浸かって生きていながら、何をいまさら心がないだの、感情が感じられないだの、機微が理解できないだの、魂がないなんて言えるのでしょうか。

心も感情も魂も命も人が勝手に人以外のものに自分の都合で込めているのであって、森羅万象にも、人形にも像にも言の葉にも、デジタル化された情報にも、AIや生成AIやその産物にも、罪はないのです。

AIにだけこれだけ心と感情と魂を出し惜しみしているのは、憎いから怖いからビビっているからに他なりません。その手強さに気づいているからでしょうが、このダブルスタンダードというか二枚舌は、いかにも往生際が悪くみっともないと言うべきでしょう。

【※拙文「不思議なこと」に書下ろしで挿入した「人は一貫して呪術の時代に生きている」より】

人に擬する、名づける、呼び掛ける、話し掛ける

生きているか生きていないにかかわらず、人は自然界にあるものやいるものを擬人します。人になぞらえるとか、人を当てるとも言えるでしょう。なぜかは分かりません。知っている人もいないでしょう。

ひとつ言えるのは、人になぞらえた結果として呼び掛けることです。おい、ねえねえ、という具合に声を掛ける。そのうちに名づけます。手なづけるために名づけるのです。

名づけて手なづけ、さらには飼いならそうという魂胆があるのでしょうか、なつくものや抵抗できないものばかりではないでしょう。言うことを聞かなかったり、さからったり、攻撃しているものもあるでしょ。

すべてがなれるわけではないし、ならせない、ならない。

為れない、馴れない、慣れない、狎れない。
成らない、生らない、不作・凶作、為らない、失敗、鳴らない、鳴ってくれない、ホトトギス。

均せない、平せない、耕せない、平地にできない。

人に擬す、人になぞらえる、人以外の生きていないものや生きているものに人を当てる

声を掛ける、名づける、話し掛ける、語り掛ける、騙り掛ける

人知や人力を超えた存在を想定して、声を掛ける、名づける、話し掛ける、語り掛ける、騙り掛ける。

人類の歴史では、やがて、以上の過程において、仲介者が出てきます。呪術の代理人（エージェント）や専門家（エキスパート、スペシャリスト、テクニシャン）があらわれて幅をきかせるようになるのです。現在も、うようよといます。

その話をしましょう。

威を借りる

人間は人間よりも、もっともっと偉い存在がいて、自分がその代理を務めたいという、願望＝欲求＝祈り＝野望を持っているのではないのでしょうか？

Aにはなれないから、Aの代わりを演じます。Aみたいな顔をしてみます。Aの仮面

を被り、表情を真似て、時にはお化粧もし、かつらも付けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょう？ 様になるでしょう？ だって、こんなふうに化ければ、〇〇様なんて呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

そんな具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。そして、ますます図に乗る。

どうして、こうなっちゃったんでしょう？ 昔々と関係ありそうです。

たとえば、次のような具合です。

「どうか、雨が降って豊作になりますように」、「作物が駄目にならないように、大雨が止みますように」、「ニワトリとブタが増えますように」、「隣村の馬鹿どもが攻めてきませんように」、「今度の戦（いくさ）に勝てますように」、「あいつとの賭けに勝てますように」、「お父さんの怪我が早く治りますように」、「娘がいいところにお嫁に行けますように」、「亡くなった後に天国に行けますように」、「元気が出ますように」

というふうに庶民が願い、祈ります。すると、虎皮のパンツをはき、お化粧をするか仮面を被り、かつらをつけた代理人がしゃしゃり出て来て、えらそうに次のように言います。

「お任せあれ。任せとき。大丈夫。ところで、あれは、ちゃんと用意しているかな？ この間は、ちょっと少なかったぞよ」

万が一、でまかせが当たらなかつたり、何かとんでもないことが起きて、都合の悪くなった時には、代理人は即座に仮面を外し、お化粧を落とし、表情をしおらしくして、かつらも外して、「わたしは、単なる代理でございます」と言って、責任を転嫁すればいい。

または、「あんたの信心が足りんからじゃ」と、これまた責任を転嫁すればいい。

このように、「代理人＝代行者」は、実に気楽でいい商売だわい。

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

なんて、恥も外聞もなくおふざけをしてしまいましたが、「代理」とか「代理人」というのは、実はかなりシリアスで怖い問題なんです。だって、そういう仕組みや人たちによって世界は動かされているんですから。

嘘じゃありません。テレビのニュースや新聞をご覧ください。代理、代理人、仮面、虎皮のパンツ、仮装、お化粧、かつら、作り顔、顔芸ばかりです。だまされないように、気を付けましょう。

とこういうものの、じつは本物や中身や真実や事実や現実なんてものがないのが、これまた困った問題なんです。でも、こういうややこしい話はやめておきます。

【※拙文「09.02.03 1カ月早い、ひな祭り」および「目の前に見えるものが、本当は「何か別のもの」が「化けている」のではないか、とも考えられるわけです。」より】

うつせみのあなたに 第2巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

たま、かり、やど

たま、玉、珠、球。

たま、適、偶。

たま、魂、魄、霊。

上の文字列を眺めていると、「たま」や「たましい」は「宿る」や「うつる」と相性がいい気がします。「宿る」につられてか、「仮」や「借りる」という言葉とも親和性を感じるのは、「仮の宿」とか「宿を借りる」という言い回しからの連想でしょう。

たまたま、偶々、偶、適、会。

「たまたま」そう借りているだけというニュアンスは「仮」と重なりそうです。「仮」に偶然という意味がさらに重なります。

「たまたま」は「偶々」の他に「偶」だけ、あるいは「適」や「会」という表記もあるそうですが、つかわれている文章を見たことがありません。

「仮の宿」とか「宿を借りる」からは、「ヤドカリ」や「宿借り」という言葉とそのイメージ（絵）を連想しないではられません。

人生や生きものの一生が旅に重なり、旅の途中で何度か仮の宿を借りるのかなあと感慨を覚えます。諸行無常とか万物流転なんて大げさなものを連想もします。

「たま」がどんな形をしているかは分かりませんが、上の文字列にある玉、つまり球体を借りましょう。借りるのですから、あくまでも仮の姿です。角のない玉は始原を感じさせる形です。

球体であれば、その安定しない形から、ころころ転がって次の場や宿に移っていく予感をつねにはらませている気配があります。

文字列にある「霊」は球体であっても不思議はない気がします。見たことはありませんが火の玉や鬼火からの連想でしょう。

たま、かり、やど。

宿る、宿す、込める

たましいが仮に宿る。

「たましいが宿る」とよく言われます。森羅万象にたましいが宿ると想定し、呼び掛

ける、つまり名づけててなづけようとするのは人の常套手段でなようです。

擬人、人に擬するわけです。擬人は人情であり、人の性（さが）や業（ぎょう）と違っていい気がします。

呼び掛けるがエスカレートすると話し掛ける、語り掛けるになります。呼び掛けるだけでなく、話し掛けているからには、その相手（生きたもの、生きていないものにかかわらず）に話が通じると見なしているはずで

それが「たましい」でしょう。「たましい」が勝手に何か（とくに自然界にあるもの）に宿っていると人は想定している。この種の話はよく見聞きします。一方で、人が勝手に何かに宿したつもりでいる場合もありそうです。

たましいが宿る。

たましいがこもる。

たましいを宿す。

たましいを込める。

こうした言い回しを眺めていると、自然と人為の両方を感じます。

為せば成る。

為すは人為、一方の成るは自然、または人を超えた領域で起る。

「たましいが宿る」は自然にそうになっているか、または人が自分の都合で勝手に「たましいを宿す」とか「たましいを込める」という行為をした結果として、「たましいが宿る」や「たましいがこもる」になるというイメージです。

人に擬する、宿す、込める

宿る、こもる・籠もる・隠る

「たましいを宿す」は生きているかいないにかかわらず、自然物に対して人が自分の都合で勝手におこなう気がします。一方の「たましいを込める」は、人が自分でつくったものを相手におこなうというのが私の印象です。

いずれにせよ、人が宿したり込めた結果として、「たましいが宿る・こもる」ようにイメージしています。

森羅万象にたましいが自然に宿るとするのは、私にはぴんと来ません。体感したことがないからでしょう。

最近、AI や生成 AI や、その生成したものに心や感情や魂があるとかないとかいう議論を見聞きしますが、あるに決まっています。そもそも自然にある森羅万象はもちろん(擬人のことです)、人が自分でつくった人形(ひとかた)や像や言の葉や文字(もんじ)に、心や魂を込めたり読みこんできた人類は、太古から現在に至るまで一貫して呪術の時代に生きているからです。

1) 人がたましいを宿したり込める結果か、2) たましいが機械や AI に宿ったりこもるのか、3) 言葉(文字や意味でもいいです)がたましいを機械や AI に宿したり込めるのか分かりませんが(これは私のオブセッションです)、人が機械や AI に呼び掛けたり話し掛けたり対話をしたりするのは、人から見て機械や AI にたましいが宿っているからに他なりません。

いわゆるひとり言も、「何か」にとか「どこか」に、たましいを想定していそうです。

決める、決まる、決め手

「決める」は人のすることであり、「決まり」は人を越えたところで起きるもの。「当てる」は人のすることであり、「当たる」は起きるもの。「あらわす」は人のすることであり、「あらわれる」は「あらわれる」もの。

いや、それどころか、おそらく「当てる・当たる」や「つなげる・つながる」も「決める・決まる」も「あらわす・あらわれる」も、人を越えたところで起きるものであり、あらわれるもの。

(拙文「「何か」に「何か」を当ててみる」より)

以下に、何かが決まるときの決め手と思われるものを、思いつくままに列挙します。

気分、機嫌、気持ち、天気、陽気、気候、雰囲気、空気、気力、気質、気性、病気。力関係、権力、権威、武力、腕力、兵力。体、体力、体調、体感。人間関係、血縁、上下、階級、カースト、序列。声の大きさ、声の質、声の肌理・肌触り。流れ、雰囲気、「みんながやっているから」、「みんなが言っているから」、「何となく」、「え？ 分かんない」。

約束、決まり、ルール、しきたり、掟、法、法則、法律。癖、口癖、筋、筋書き、ストーリー、物語、型、流儀、パターン、定型、紋切り型、決まり文句。説、伝説、神話、言い伝え。新旧、古い・新しい、伝統・改革、保守・革新、古典・新種。命令、指示、教え。付度、迎合。衝動。

因縁、運命、宿命。論理。

(拙文「人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」より)

*

これからは、人が何かを決めるとき決め手として、生成 AI が頼もしい相手となるでしょう。妄想ではなく、もうそうですね。

為す、成る、生る

「かた」が、「形（かたち）を為す」とすれば、それは人が為している。「形（かたち）が成る」とすれば、人の領域ではないところで、そう成っている。形を為す、形が成る。

そんな気がします。

こうなると、「生す、生る」が気になります。

形を生す、形が生る。

「生成」という漢語を連想しないではいられません。このところ、さかんに見聞きする言葉です。

＊

生成り・きなり、手を加えてないこと。(広辞苑)

生成り・きなり、生地そのまま、飾り気のないこと。(デジタル大辞泉)

生成り・なまなり、「生熟れ・なまなれ」に同じ、十分熟(または熟成)していないもの。未熟であること。十分にできあがっていないこと。(デジタル大辞泉)。

生なり(なまなり)からは、般若(はんにゃ)の面や鬼も連想しないではいられません。

なるほど。言えています。逆に言うと、まだまだ生るし成るといことですね。伸びしろは無限ということでしょうか。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

＊

何かに何かを当てる。何かに何かを当てることで、何かが形を成す、または何かが形に成る。

声としての言葉を持ちいて、話をしたり、会話をしたりする。物語や詩歌をつくったり、物語や詩歌を繰り返して口にしたりする。

文字を持ちいて、メモ程度の文を書いたり、手紙を書いたりする。あるいは、物語や詩や散文を書いたりする。

現在であれば、電話やメールやツイートやチャットも話し言葉や書き言葉を持ちいた「何かに何かを当てる」行為だと言えます。

たぶん、音楽や映像も「何かに何かを当てる」だという気がしますが、どうなのでしょう。

＊

「何か」に言葉——声と文字に限定して、表情や身振りやしるしや映像や音楽は除きます——を当てることで、言葉という形での「何か」が「出る」のですが、形があるとは言うものの、これだけ誤解や不通や行き違いが生じるのですから、「出た」言葉は発した本人をふくめて各人にとって異なって「あらわれている」としか考えられません。

形は「出る」けれど、各人にとっては異なって「あらわれる」。そんなふうには言えそうです。

この場合の「形」は、声と文字だけでなく、表情や身振りやしるしや映像や音楽に於いての「形」ととらえてもいいのではないのでしょうか。そんな気がしてきました。

形が出る、形になる、形をなす、形があらわれる。

「形になる」と「形をなす」の「形」は、たとえ、なったり、なしたとしても、それが人に「あらわれる」時点で、その人において「変わる」し「転じる」と言えそうです。

人は機械ではないからそうなのでしょう。

変形、生成、変形生成、生成変形。

transformational generative。

＊

逆に言うと、機械は「形になる」と「形をなす」を文字どおりにとらえるのかもしれませんが。形は機械に対して「あらわれる」なんてことはないという意味です。

まして、「なる」と「なす」とは相性が悪く、「あらわれる」と相性のいい「すがた・姿」は、機械には「あらわれる」ことは断じてないと思います。

生成——。この言葉はいかにも機械にふさわしい気がします。よく知らないのですが。

ちゃんと動いているのか、ある程度動いているのか知りませんが、現に機械が動いているのですから、そうにちがいません。

*

形になる、形をなす。

形があらわれる。

どうやら、人にあらわれて、機械にあらわれないものがありそうです。

【※拙文「人にあらわれて、機械にあらわれないもの」より】

◆意味をなす、文をなす、形をなす

人において意味をなす、意味がなる

人と機械において文（ふみ）をなす

機械は形をなす、人は形をなす、形は人に対してあらわれる

文字にかぎっての話ですが、文字の意味は人において「なす」ものであり、「なる」ものである気がします。文字からなる文（ふみ）は、人も「なす」し機械も「なす」でしょう。

文字は形でもありますが、機械は文字の形をなします。人も文字の形をなします。文字の形をなすと、文字からなる文（ふみ）をなすはほぼ同じだという気がします。

一方、人は文字からなる文（ふみ）と文字の形に意味を取ります（読み取ります）。その場合の文字（文と形）は人に対してあらわれていると考えられます。機械には文字はあらわれないという意味です。

「あらわれる」は意味をともなった形に起きる「ありよう（さま）」であり、人や人とは別の生きものにおいてだけ意味があると、私はイメージしています。

まぼろしが（は）あらわれる。

まぼろしとは形に意味を取る生きものにとっての実体である。

◆言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし

話を少しずらします。

「言葉の意味」というまぼろし——意味は見えないし聞こえないし「ない」のですからまぼろしに他なりません——をちょっとずらして、「言葉の実体」というまぼろしについて考えてみます。

言葉（音と文字：意味を除いた「形」としての音と文字）と実体（まぼろし：「形」に「意味」を取る生きものにとっての実体）とは関係がない。

そう言えそうです。

*

さらに話を少しずらします。

まず前提を確認します。

人はまず○△Xという言葉——声・音と顔・字面、つまり形のことで——をつくり、次に「○△Xとは何か？」——その意味（内容）を問うのです——とえんえんと思悩む生き物である。これが前提です。

そもそも言葉に実体があるとは夢にも思っていない私ですが、実体をその言葉が指し示す事物くらいの意味で考えてみましょう。

名付ける、名指す、AをBと呼ぶ——こうした人間の習慣と実体（名付けられたもの、名指されたもの、呼ばれたもの）とは関係がない。そもそも実体という言葉に実体がないから。

そう言えそうです。

話を戻します。

◆意味はまちまち

意味は「ある」のではなく、「なす」(つくる) ものなのです。意味は「ない」から「なす」という意味です。

意味は、ないからなすとなる。

意味は、「無い」から「為す」と「成る・生る」。

誰が意味を「なす」(つくる) のかと言えば、個人であったり、特定の集団が「なす」(つくる) と考えられます。

しかも、それぞれが自分の勝手にまちまちにつくっているようです。

意味の意味はまちまちだという意味です。コンセンサスがないのです。辞書の語義は建前です。

辞書の語義どおりに話したり書いたりするほど、人は機械——機械はぶれないし疲れないし誤っても謝りません(ぶれたり疲れたり謝るようにプログラムすれば別ですけど)——ではありません。

◆意味の生成を外部に委託する

これからは、ぶれないし疲れないし誤っても謝らない機械や AI も意味を「なす・成す・生す・生成する」(つくる) にちがひありません。

正確に言うと、機械や AI は文字の形と文字からなる文をつくるのですが、人は形に意味を読み取りますから、またそのために機械や AI を利用しているのですから、「形をなす」業務を委託された機械や AI は「意味をなす」と言えます。人にとっては同義なのです。

人は「考える」や「決める」まで機械や AI に委託しはじめたようですから、機械や AI

が人の代わりに意味を「なす」とも言えそうです。

人が考えたり決めるさいには、どの程度言葉を用いているかは不明ですが、機械や AI における、人の思考や決断に相当する作業は、人にとって「意味をなす」言葉の処理でなければならないからです。

作文はもちろんのこと、これからは思考と判断と決断をはじめ、意味の製造も外部に委託することになりそうです。そうなれば、人は晴れて心置きなく思考停止と判断停止に邁進することができるでしょう。

擬人・呪術・委託

擬人と呪術は、人知と人力を超えたものを想定して、それに声をかけて、すぎる行為だと考えられます。

海、山、川、草、木、石はもちろん、作物、家畜、ペット、人形、物語や小説や映画やアニメのキャラクターを相手に、太古から人は話し掛けたり会話をしてきました。

相手の力を借りたり奪ったり、愛したり恋したり敬慕したり、癒やされ励まされ、勇気と知恵と知識をもらってきたのです。

そうした行為をしてきたのは、人が相手にたましいを込め宿してきたからに他なりません。

人がそう為したから、そう成ったのです。

決める・決まる、つなげる・つながる、当てる・当たる、起こす・起る、あらわす・あらわれる——これらは（人が）「なす・為す」と（人為を超えて）「なる・成る・生る」の変奏（バリエーション）に感じられます。

*

現在着実に増えつつあるもの、それは文字だと思います。人はありとあらゆるものを文字にして複製し拡散し保存しています。音声や映像も複製され拡散され保存されていますが、文字は別格なのです。

聖典、経典、法典、辞典、百科事典、契約書、誓約書、規約、約款、約束、条約、公式、法則では文字が中心的な役割を果たしています。人は文字を崇めてその前にひれ伏していることが分ると思います。

その文字からなる文を「なす・成す・生す・生成する」機械と AI があらわれました。とりわけ生成 AI のあらわれ方が気になります。

生成 AI とこれまで人がたましいを込めたり宿してきた相手との決定的な違いは、文をなすことでしょう。人形（ひとかた）やキャラクター（物語、小説、映画、アニメ）では相手が話し掛けてくることはありませんでした。人が相手の言葉を想像していただけです。

生成り・なまなり、「生熟れ・なまなれ」に同じ、十分熟（または熟成）していないもの。未熟であること。十分にできあがっていないこと。（デジタル大辞泉）。

しかも、文を生成（せいせい）する AI は生成り（なまなり）であり、伸びしろが無限なのです。それだけでなく、ぶれないし疲れないし誤っても謝りません。ぶれたり疲れたり謝るようにプログラムすれば別ですけど、弱いロボットがつくられるくらいですから、より人間っぽい生成 AI の伸びしろもまた無限でしょう。

＊

擬人、人に擬する、人になぞらえる、人を当てる、人に似せる、人をなぞる、人に当てる、人に似る、人間っぽく振る舞う、人らしさを学習する、人間もどきを演じる、擬人の代理をする、人を装う、人になりすます、そのうち人になりきる。

擬、疑、議、偽、欺、戯。

擬人の達人、擬人の代理人があらわれたのです。機械ですけど。

人類は擬人のお株を奪われつつあるのです。擬人という人類のお家芸を死守しなければならぬのですが、なかなか妙案が浮かばない。このままでは、軒を貸して母屋を取られる事態になりかねない。

それを薄々感じはじめてしぶしぶ認めだした人類は、いまのところ妬み忌み嫌い憎み憤り怯える狼狽える馬鹿にする威張る拗ねるというきわめて人間的で人道的な（同族に対するのとそっくりな）リアクションに甘んじています。手をこまねいているのです。

擬人と呪術は岐路に立っているのです。

人ではないものが人に擬して擬人をする。このギャグの観客が人だけであることを人の端くれとして願わずにはられません。

＊

文を生成し（人にとっては意味も生成することを意味します）、思考と判断と決断を代行し、生成り（伸びしろが無限）でもある AI を相手に、擬人と呪術をつづけていっているのでしょうか。

AI 付きのロボットや、AI や、生成 AI に対してだけ、人がこんなに及び腰なのは、事の重大さにおそらく本能的に気づいているからかもしれません。それとも、なるべくしてそうなっているのでしょうか。

＊

文を生成する AI はじゅうぶんに驚異であり脅威でもあります。その裏で増えつつけている文字、さらに言うならその裏で増えつつけている意味が、個人的には気になってなりません。これは私のオブセッションなのです。

オブセッションが高じて、増えつつある文字と意味は殖えつつあると感じられるほどです。

ふえる、増える、殖える、増殖する、繁殖する

*

現在ネット上で飛びかっているらしい文字・映像・音声に、人は心と感情と魂を込めているから、誰もがPCやスマホに見入っています。見入るだけでなく、胸をときめかしたり、欲情したり、泣いたり、怒ったり、落ちこんだりしたりしているのです。これは見入られている、つまり魅入られているとしか考えられません。

見入る、見入られる、魅入られる

ミイラ取りがミイラになる

一貫して擬人と呪術に浸かって生きていなるのですから、人はAIが生成した文や音声や映像に、心や感情や命を感じています。だから、嫉妬し憎み嫌悪し忌み嫌っているのです。

人は加害に疎く被害には異常に敏感です。他の生きものとの付き合いを振り返ればよく分ります。自分のことを棚に上げるのです。ダブルスタンダード、二枚舌。

自分の都合で勝手に込めて宿しておいて、罪を相手に着せる。これが人の常套手段ですが、この生成する生成りAIにはその従来の方法で太刀打ちできるのでしょうか。

人ではないものになりたい人

太古から人ではないものを人に擬してきた人は、それと並行して、人ではないものになりたいという潜在的な願望とオブセッションをいだいてきたようですが、いまはその欲求が満たされるのでないかというリアルな感覚を持ちはじめたようです。

「人ではないものになりたい人」の「人ではないもの」とは、正確には「人ではないけど人っぽい人」とか「自分ではないけど自分っぽい自分」と言うべきでしょう。別物とか別人であってはこまるわけです。人であることと自分であることは死守したいのです。欲深くて贅沢な願望だと言わざるをえません。

要するに、自分のまま——ひょっとするとたましいかもしれません、たましいが宿を借りるのです、たぶん転々と——で生きのびたいのです。不老と不死を望んでいるのです。

人工〇〇になりたい——。

人工〇〇がほしい。人工〇〇を自分の一部にしたい。

代償の代償

そもそも人は矛盾することをしてしています。

厚いものの代わりに薄いもので済みます。

深いものの代わりに浅いもので済みます。

太いものの代わりに細いもので済みます。

大きいものかわりに小さいもので済みます。

重いものの代わりに軽いもので済みます。

長いものの代わりに短いもので済みます。

遠いものの代わりに近いもので済みます。

人間の代わりに人間でないもので済みます。

人間でないものに代わりに人間のようなもので済みます。

本物（実物）の代わりに、本物感、本物っぽさ、本物のようなもので済みます。

起源の代わりに、起源感、起源っぽさ、起源のようなもので済みます。

「移す・移る」（移動する・させる）の代わりに、「写す・写る・映す・映る」で済みます。

巻物、本、レコード、カセットテープ、映画、ビデオテープ、蚊取り線香、トイレットペーパー。

絵、遠近法、地図、世界地図、地球儀、歴史、年表、神話、説話、百科事典、言葉（音、文字、表情、身振り、しるし）、放送、報道、写真、レントゲン、顕微鏡、望遠鏡、電話、電報、放送、孫の手、糸電話、人生ゲーム、人形、キャラクター、小説、演劇、漫画、アニメ、パソコン、スマホ、ロボット、仮想現実、人工知能、生成 AI、MRI、CT、遠隔操作、遠隔医療。

Aの代わりにAとは別のもので済ませる。
Aの辻褃合わせや帳尻合わせをAとは別のものとする。

遠くを近くする。
遠くを知覚する。

やっているじゃありませんか。要するに、Aの代わりにAとは別のもので済ませて澄ましている。しらっと澄ました顔をしてやっているのです。知覚と錯覚をうまく利用しているわけです。

(拙文「文字や文章や書物を眺める」より)

*

仕方がないから、しれっとAの代わりにAとは別のもので済ませて、澄ましている。こういうのを代償行動とも言うそうです。澄ます、つまり心の平静を取りもどしたり保つことが目的だとも言われています。

諸説はあるのですが、自分を観察していると、この説にはなるほどと納得してしまう自分がいます。

あるものの代わりに別物を当てる、用いる。代償には代償があるのが普通なようです。混同と代理の主化（あるじか）のことです。

両者を混同する、同じだと思いきむ、違うと知っても都合よく忘れる、両者が別物だと思いだしても否定する。

それはそうです。上で並べた文明の利器の数々を見れば、その恩恵に浴している人類が、両者は別物だなんて「屁理屈」に耳を傾けるわけがありません。

代償の代償のもう一つである、代理の主化（あるじか）とは、「Aの代わりにAとは別のものでも済ませる」において、「Aとは別のもの」が代理や代用物や代表であるという枠を超えて、Aを従者にすることです。

分りやすい例を挙げれば、言葉や数字がひとり歩きしたり目的化して、それを使う側の人間を振りまわす状況です。心当たりがありませんか。言葉や数字に踊らされ、こき使われるのです。

あるいは、人の代わりにいろいろやってくれる道具が人をこき使う、たとえばいまならスマホを思いだすと分りやすいかもしれません。

本末転倒というやつです。

もっと深刻な例があります。

人びとの代わりであるはずの代表が、それを選んだ人びとよりも、ずっといい暮らしをしているとか、こき使うとか、さらには戦争に駆りだすというきわめて切実な問題が、この国でも、世界のあちこちでも起きています。

それが「民主主義」と呼ばれている制度の内実なのであり、「代議制度」と呼ばれている仕組みの実態なのです。

さきほど「人に擬する、名づける、呼び掛ける、話し掛ける」という大見出しの章で次のように述べましたが、呪術の代理人による被害と弊害は甚大で、世界的な規模での問題になっています。

人類の歴史では、やがて、以上の過程において、仲介者が出てきます。呪術の代理人（エージェント）や専門家（エキスパート、スペシャリスト、テクニシャン）があらわれて幅をきかせるようになるのです。

なにしろげんに、そのために戦争が起きているのですから。たった一人や少数の人たち（選挙によって選ばれた国民の代理人とか代表のことです）の言葉の辻褃合わせに、その国の国民だけでなく世界中が付き合わされているのです。

「黒いカラスは白いサギだ」——「御意」「その通りでございます」「異議なし」「至言だわ」

＊

別物万歳、錯覚上等、「別物ですけど、何か？」

そういう気持は人類の端くれとしてよく分ります。

別物なのに同じものだと混同して、これだけうまく行っているのですから、両者は別物だなんて意見（感想・印象）を無視して当然です。

でも、代償は大きそうです。自らの加害には甘く被害には厳しいだけでなく、都合の悪いことは忘れるし思いだしても否定する、自分と身内だけがよければいいと考える、そうした強みが人類にはあります。人類の端くれとして、そんな強みを頼もしく思っている自分がいます。

＊

人間の代わりに人間でないもので済みます。

人間でないものに代わりに人間のようなもので済みます。

さきほど上で並べた文字列の中で、上の二つが気になってなりません。上はさんざんやってきましたが、下は人類の歴史ではごく最近の代償行為だからです。

しかも相手は伸びしろが無限ですから、普通の個人の寿命を超えての話です。ということは、その人の孫（孫がいなければそれに相当する世代）やひ孫やその孫やひ孫の話になっていきます。

神のみぞ知る。

例の「それ (IT・Es)」のみぞ知る。

でしょうか。なにしろ伸びしろが無限ですから、人が壊さないかぎり、ずっと生きていそうです。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

(投稿：2023年5月27日 08:04)

#生成AI # AI # ロボット # 魂 # 呪術 # 擬人 # 言葉 # 文字 # 意味 # 代償

本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ

＊

本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ

星野廉

2023年5月26日 08:13

移ると言えば、どこからどこかに移るのであろうが、そのどこかを特定することは大切ではない。大切なのはあくまでも「移る」という動きなのだ。ある事態や状況を名詞的にとらえて、「何か」や「どこか」を特定するのではなく、動きに注目するという思考があってもいいと私は思う。

というか、思考においては、むしろ動きのほうが名詞的な固定化よりも主導的な役割を演じている気がしてならない。

(拙文「うつすためには、うつらなければならない」より)

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂は、伝わり、移り、届き、通じます。

でも、おそらく、伝わらないし、移らないし、届かないし、通じないものがあります。

表情、身振り、文字です。これらは、むしろ、写したり、映すものです。

(拙文「伝わるもの、伝わらないもの」より)

目次

うつる、つたわる

「何か」「何が？」

うつるは、かわる

つたわる

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

本物感と本物っぽさこそ（だけ）がリアリティ

「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る

うつる、つたわる

影がうつる、像がうつる、姿がうつる、形がうつる。

声が伝わる、音が伝わる、波が伝わる、熱が伝わる。

「うつる」の例として挙げた言い方に出てくる、影、像、姿、形は、動きを止めて見るものです。連続すれば動きになります。写真と動画が、そうです。

一方の「伝わる」で挙げた、声、音、波、熱は動きとして感知されるものだという気がします。見えないのです。熱が動きであるのというのは苦しい言い方になりますが、熱が伝わってくるからには、感知する側も熱くならなければなりません。これを動きとして見るかどうかですが、無理に辻褄を合わせないで話を進めます。

ここでは研究や探求をしているわけではなく、わくわくを楽しむために言葉をいじっているのです、大ざっぱにいきます。

「何か」「何が？」

姿形がうつる、姿形が伝わる。映像、録画、映写、電線、電波、電信、通信、撮影、複写、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

音声 that うつる、音声 that 伝わる。録音、拡大、増幅、電線、電波、電信、通信、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

熱がうつる、熱 that つたわる。伝導、摩擦、発熱、冷却、温度差、保存。

「何か」を「何？」と追及するのではなく、「何か」として保留したまま、動きに注目してみます。

うつるは、かわる

「うつる」では、「かわる」が起こり、位置関係が維持される気がします。「何か」から、別の「何か」に「うつる」ことにより、「かわる」が起きていますが、対応関係が維持されるのです。

地面に映る木の影。水面に映る空の雲。鏡に映る顔。
写真に写る、写す。写生する（絵）。描写する（絵・言葉）。

「映っている」「写っている」と感じるためには、位置の対応が粗くても細かくてもいちおう保たれていなければならないのです。きょくたんな話がゆがんでいても、下手であっても、大ざっぱであっても、あるいは不正確であっても、映っているし写っているのです。

ゆがみや誤差は、加工や加筆によって、ある程度まで修正できるかもしれません。あくまでも「近似値」なのです。誤差やノイズやエラーがあるのは「うつる」では当然なのかもしれません。

レントゲンやMRIといった、人工的な「影」の中でも最も進化し洗練されたものになると、位置関係という意味での対応は精緻をきわめますが、影であることに変わりはありません。影は現物ではないわけです。言葉が事物ではないのと似ています。別物なのです。

ハイビジョンがフィルムに追いつけないとかいう話を聞いた覚えがありますが、写真や画像についても、たとえどんなに画質が優れてリアルであっても、やはり影は現物ではないわけです。別物なのです。

「うつる」を目的にしているかぎりは「かわる」が起きて別物になっていてもかまわないのです。大切な点だと思います。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。一時的に（あるいは長期にわたり）現物だと思っていることもおおいにある気がします。

つたわる

「伝わる」では、動きや振動や波が上下運動、あるいは線からなる何らかの模様に戻元される気がします。還元という言葉を使ったのは、抽象を意識しています。伝わるものは抽象なのではないでしょうか。

具体的な動きでありながら抽象であるというのは、言葉の上で矛盾して辻褄が合いませんが、言葉と現象がべつべつの論理と文法（比喻です）を持っていると考えれば、不思議ではありません。

別個のもの同士の間で辻褄が合うほうが、むしろうさんくさいのです。

たとえば、人は言葉で現実の辻褄合わせや帳尻合わせをすることに血道を上げています。両者が別物なのにです。それを人は知っているはずなのに、つねには意識しません。言葉で思いの辻褄合わせをすることにも熱心です。冗談ぼく言えば、捏造疑惑です。捏造常習者が言うのですから確かでしょう。

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる。そんな気がします。

名詞的なものがうつるときには、うつる前のものとうつった後もの間の対応が重視されます。理想は一对一の対応であり、そのありえない理想を指向するのです。絵をイメージしてください。絵はつたわると言うよりもうつる、とりわけ写る、映るのです。図柄や模倣が壊れてはいけないわけです。

一方の動詞的なものがつたわるときには、重視されるのは動きであり、つたわる前後の位置的な対応関係は無視されます。そもそも、つたわる前のものとつたわった後のものの区別さえ大きな意味を持ちません。両者が別物であっても重視されないのです。振動や熱をイメージしてください。

外の音や声（振動）が、室内のここまで伝わってくる。糸電話で声が伝わる。テーブルの向こうに置いた鍋の熱がここまで伝わってきている。

糸電話は「伝える」（振動が）ですが、伝言ゲームは、「伝える」と言うよりも「うつる」（メッセージが）ではないでしょうか。メッセージはつたわるのではなく、むしろうつると、ここではイメージしています。それぞれの動詞の慣用とは異なるイメージですね。自分語的な用法と言えるかもしれません。

本物感と本物っぽさこそ（だけ）がリアリティ

「伝わる」も「うつる」も、置き換えが前提になっています。置き換わらないと伝わらないし、置き換わらないとうつらないわけです。

要するに、本物や起源でなくていいのです。というか、本物や起源が伝わったり、うつるのは不可能ですから、何か別のものに置き換わっていく、つまり代替りのものが本物や起源を演じる、あるいは振りをすると言えます。

「移る・移す」（移動）ができないために、「映る・映す」と「写る・写す」で済ますとか代用するという意味です。

代用は錯覚をまねきます。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。一時的に（あるいは長期間にわたり）現物だと思っていることもおおいにある気がします。

＊

世界や森羅万象と無媒介的に触れあっているのではないため、本物には届きません。時間をさかのぼることはできないので、起源を知ることにはできません。自分を納得させるためには、本物も起源も、言葉で「こしらえる」しかないわけです。

本物感、本物っぽさ、本物のようなもの、起源感、起源っぽさ、起源のようなもので我慢するのは、それしか方法がないからです。このことを人は意識しないで知っています（たぶん学習した知識ではないでしょう）。意識するとがっくりきてやる気をなくすでしょう。生きる気力を失うかもしれません。

大切なのは、本物「感」、本物「っぽさ」、本物「のようなもの」、起源「感」、起源「っぽさ」、起源「のようなもの」です。「感」、「っぽさ」、「のようなもの」という意味です。これこそが（つまりこれだけが）、人にとってのリアリティです。

「感」、「っぽさ」、「のようなもの」は空転しそうな語感の言い回しですが、人にとっ

てのリアリティも空回りしているように思えます。だから、人は「リアリティ」に振りまわされつづけているのでしょう。切りがないのです。

「感」、「っぼさ」、「のようなもの」は空転は錯覚そのものです。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。「感」、「っぼさ」、「のようなもの」どころか、一時的に（あるいは長期間にわたり）本物や現物だと思っていることもおおいにある気がします。自分を観察しているとそう思います。

とはいえ、絵に描いた餅は食べることができます。レトリックはさておき、精確に言うと、絵に描いた餅から絵に描いてない餅くらいならたどり着くことができるのです。「感」、「っぼさ」、「のようなもの」は精度の問題であり、絵に描いた餅を食べることができるほどには精確なのです。さもなければ、人類はとうの昔に飢え死にしています。

「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る

基本には「似ている」や「そっくり」がある気がします。確認するためには器具や器械や機械に頼るしかない「同じ」や「同一」ではなく。人は印象の世界に住んでいるようです。

そのため、たとえ「同じ」や「同一」というデータやそれによるイメージを得たとしても、それを「似ている」や「そっくり」でとらえる（置き換える）にちがいありません。この置き換えという操作をおこなうことが、人である証左なのかもしれません。

大切なことなので繰り返します。

「〇〇感」「〇〇ぼさ」「〇〇らしさ」「〇〇性」「〇〇的」「〇〇のようなもの」、これこそが人にとってのリアリティなのです。「そのもの」にたどり着けない人類の歴史は、「感」「ぼさ」「らしさ」「性」「的」「ようなもの」——別物であることの隠蔽と粉飾であり糊塗やお化粧です——の洗練の追求だと言えそうです。

本物や起源にたどり着けないことを人は意識していないで知っているわけですが、ときには、あるいは人によっては、それを忘れて「〇〇とは何か?」とか「〇〇の意味はあるのか?」とかという問いを発する場合があるのは、みなさんご承知のとおりです。答

えが出ないことも、ご承知のとおりです。

私たちは、複製の複製、本物や実物のない複製、引用の引用、起源のない引用の世界に生きているようです。

【※今回の記事は以下の「名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる」に少しだけ加筆したものです。】

(投稿：2023年5月26日 08:13)

うつる # 伝わる # 複製の複製 # 引用の引用 # 本物や実物のない複製 # 起源のない引用 # 言葉 # 日本語 # 音声 # 文字 # 動詞 # 名詞 # 本物 # リアリティ

人にあらわれて、機械にあらわれないもの

＊

人にあらわれて、機械にあらわれないもの

星野廉

2023年5月20日 08:20

べつに定型詩ではなくても、一文であったり、短い散文であっても、それが言葉で唱えられたり書かれるかぎり、そこには前提としての形が想定されている気がします。たぶん、それが以下の文字列にある和語の「かた」であり「なり」です。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。
(拙文「「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」より)

ことや、ものや、ありようは、多面的なものですから、たとえ別の名前で呼ばれているもの同士でも、当ててみると、どこかではつながることがよくあります。

(.....)

固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、ジャンプ（飛躍）して、どこかとどこかや、何かと何か「つながる」というのも、おおいにあるように私は思います。

(拙文「「何か」に「何か」を当ててみる」より)

目次

形を「なす・為す」、形に「なる・成る」

生成

生成、生成り

形が「出る」、形が「あらわれる」

人にあらわれて、機械にはあらわれない

形を「なす・為す」、形に「なる・成る」

かた、形、なり、形・態、形態、なす、生す、成す、為す、形を成す、形成、なる、生

る、成る、為る

*

為せば成る。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

江戸時代の米沢藩主であった上杉鷹山の言葉らしいです。

「為す」と「成る」の使い分けに注目しないではられません。

*

「決める」は人為、「決まる」は人の領域ではない。

(.....)

人が「決める」。「決まる」は「起きる」とか「あらわれる」。そんな気がします。

(拙文「人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」より)

決める、決まる。

当てる、当たる。

つなぐ・つなげる、つながる。

あらわす、あらわれる。

起こす、起きる。

かためる、かたまる。

なす、なる。

このところ、上のようなペアが気になります。他動詞と自動詞なのですが、どんなペアでも気になるのではなく、上の場合が気にかかってなりません。

為す、成る。

「為す」は人為、「成る」は人の領域ではないと言いたくなります。

人為と言えば人造という言い方を連想します。人の領域ではない創造を人が為すという意味でしょう。人造も人為に他なりません。

創造、模倣。人造、天然。

＊

「かた」が、「形（かたち）を為す」とすれば、それは人が為している。「形（かたち）が成る」とすれば、人の領域ではないところで、そう成っている。形を為す、形が成る。

そんな気がします。

こうなると、「生す、生る」が気になります。

形を生す、形が生る。

「生成」という漢語を連想しないではいられません。このところ、さかんに見聞きする言葉です。

生成

「生成」を愛用の広辞苑で調べてみると、以下のようにまとめられそうです。

生成：せいせい、生成、生じて形を成すこと、(哲) Werden (ドイツ語)、物の発生、変化、転化。

ドイツ哲学の用語のようですが知りません。

現在、さかんに見聞きするのは「生成 AI」です。よく知らない言葉です。この文字列を初めて目にしたときには、「きなり AI」と読んでいましたが、やがてそうではなさそうだと気づきました。

「せいせい AI」ですね。わくわくしないので調べたことはないのですが、文脈から何となくイメージをつかんでいます。

あと、「生成・せいせい」で思いだすのは、「生成文法」です。英語の generative grammar の訳語だということは知っていますが、これもよく知りません。あえて調べようという気持や予定もありません。昔勉強した覚えがありますが、記憶がないのです。

よく知らないことについては記事では触れないほうがよさそうです。

生成、生成り

生成：せいせい、生成、生じて形を成すこと、(哲) Werden (ドイツ語)、物の発生、変化、転化。(広辞苑を参照)

自分にとって大切そうなところだけを抜きだしてみます。

生成、生じて形を成す、発生、変化、転化。

わくわくしてきました。おもしろそうです。

*

生成り・きなり、手を加えてないこと。(広辞苑)

生成り・きなり、生地のまま、飾り気のないこと。(デジタル大辞泉)

生成り・なまなり、「生熟れ・なまなれ」に同じ、十分熟(または熟成)していないもの。未熟であること。十分にできあがっていないこと。(デジタル大辞泉)。

なるほど。言えています。逆に言うと、まだまだ生るし成るといことですね。伸びしろは無限ということでしょうか。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

形が「出る」、形が「あらわれる」

何かを何かを当てる。何かを何かを当てることで、何かが形を成す、または何かが形に成る。

声としての言葉をもちいて、話をしたり、会話をしたりする。物語や詩歌をつくったり、物語や詩歌を繰り返して口にししたりする。

文字をもちいて、メモ程度の文を書いたり、手紙を書いたりする。あるいは、物語や詩や散文を書いたりする。

現在であれば、電話やメールやツイートやチャットも話し言葉や書き言葉をもちいた「何かに何かを当てる」行為だと言えます。

たぶん、音楽や映像も「何かに何かを当てる」だという気がします、どうなのでしょう。

*

「何か」に言葉——声と文字に限定して、表情や身振りやしるしや映像や音楽は除きます——を当てることで、言葉という形での「何か」が「出る」のですが、形があるとは言うものの、これだけ誤解や不通や行き違いが生じるのですから、「出た」言葉は発した本人をふくめて各人にとって異なって「あらわれている」としか考えられません。

形は「出る」けれど、各人にとっては異なって「あらわれる」。そんなふうには言えそうです。

この場合の「形」は、声と文字だけでなく、表情や身振りやしるしや映像や音楽においての「形」ととらえてもいいのではないのでしょうか。そんな気がしてきました。

形が出る、形になる、形をなす、形があらわれる。

「形になる」と「形をなす」の「形」は、たとえ、なったり、なしたとしても、それが人に「あらわれる」時点で、その人において「変わる」し「転じる」と言えそうです。

人は機械ではないからそうなのでしょう。

変形、生成、変形生成、生成変形。

transformational generative.

人にあらわれて、機械にはあらわれない

逆に言うと、機械は「形になる」と「形をなす」を文字どおりにとらえるのかもしれませんが。形は機械に対して「あらわれる」なんてことはないという意味です。

まして、「なる」と「なす」とは相性が悪く、「あらわれる」と相性のいい「すがた・姿」は、機械には「あらわれる」ことは断じてないと思います。

生成——。この言葉はいかにも機械にふさわしい気がします。よく知らないのですが。

ちゃんと動いているのか、ある程度動いているのか知りませんが、現に機械が動いているのですから、そうにちがいません。

*

形になる、形をなす。

形があらわれる。

どうやら、人にあらわれて、機械にあらわれないものがありそうです。

ところで、猫はどうなのでしょう。猫を観察していると、猫にあらわれて、人にはあらわれないものがありそうです。というか、人のギャグは猫に通じないのですが、猫のギャグも人に通じていない気がします。

猫は猫の夢を見るのでしょうか。機械は機械の夢を見るのでしょうか。こんなたわごと（ギャグ）は猫にも機械も通じそうもありません。人にあらわれているだけでしょう。

そう考えると、「あらわれる」は他者（他人や他の生きものや他の生きていないものを含みます）とは共有できないものかもしれませんね。もちろん、人から見ての他者の話です。

いずれにせよ、「あらわれる」は不気味です。なんて不気味がるのは人だけという落ちに落ち着くようです。

(投稿：2023年5月20日 08:20)

#機械 # AI # 生成 # あらわれる # 猫 # 生成り # 夢 # ギャグ # たわごと # 人造 # 創造

そっくりなのは、そっくりにつくってあるから

＊

そっくりなのは、そっくりにつくってあるから

星野廉

2023年5月15日 08:16

目次

言葉の不思議

文字が入る、何かが移ってくる、乗っ取られている

音声が入ってくる、一瞬変になる、震える

表情や身振りが入ってくる、ダイレクトに感じる

人のつくった影が入ってくる、めっちゃ気持ちいい

そっくりにつくってあるもの、そっくりに見えるもの

まとめーそっくりな影たち

言葉の不思議

私は言葉を広く取っています。話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、表情と身振りも含めています。こうした言葉たちとそのありようを観察することが趣味なのです。

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉については、こんなイメージを持っていますが、イメージですから個人的な印象です。

以前から、不思議でならないことがあります。話し言葉と表情と身振りが、発せられると同時に片っ端から消えていくのに対し、書き言葉だけが残ることで。当り前のようですが、考えれば考えるほど、不思議です。いったいどういうことが起きていて、そう見えるのかが不思議なのです。

この不思議さは、言葉が発せられる、放たれる、つまり人から出ていくときの不思議さなのですが、今回は言葉が人に入ってくる時の不思議さについて考えてみたいと思います。

不思議だと思うままに、あれこれ考えながら言葉をつづっていくという方法を取ります。こういう見切り発車を書くときの私の癖なのです。

文字が入る、何かが移ってくる、乗っ取られている

「何か」に「何か」を見てしまう。

文字や文字列や文章を見て、それを読むときには、人は「何かA」に「何かB」を見てしまっている気がします。「文字」と「その文字で人が見てしまうもの」はふつう似ていません。まして同じではありませんが、その異なる二つのものが、人においては同居しているのです。

「猫・ネコ・ねこ・neko」という文字をご覧ください。みなさんが、この文字を見て、頭に浮かべたものと似ていますか。似ていないのに、見てしまう（思いえがくとか思いうかべるとか呼びさまされる）のです。

不思議ですよ。文字を学習した成果だと言われれば「ああ、そうですね」と納得する自分と「えっ、どういうこと？」と納得していない自分がいます。

これは、話し言葉や表情や仕草でも言えることのようにですが、文字の場合には、人の外にあって残っているものですから確認しやすい点が、特徴的です。人の外にあって残っているのも、他の人といっしょに見て確認できるという意味です。すごいですね。不思議です。

*

文字からなる文章を読むとき、人は一種の催眠状態におちいっているのではないかと。

一時的に変な状態になっている、何かに乗っ取られている、何かが移って生きている。自分の催眠状態と変な状態を柵に上げて、そんな不穏なイメージをいただきます。

音声が入ってくる、一瞬変になる、震える

信じる時、人は一瞬あるいは短時間、自分を何かにゆだねます。心ここにあらず。目は宙を見ている。思考停止、判断停止。営業停止。忘我。頭の中が真っ白。言葉になんねー。

(拙文「信じる時、人は一瞬変になる。」より)

話し言葉である音声が入ってくるとき、人は何かに自分をゆだねて、どこかに行っている気がします。音声はすぐに消えますから、一瞬とか短時間のことです。

音声には有無を言わせないところがあります。文字の場合には見たくなければ、顔をそむけたり、目を閉じればいいのですが、耳はそう簡単にはふさぐことができません。

聞きたくなくても聞こえてしまうのです。有無を言わずに入ってくるとも言えるでしょう。不思議です。こうやって言葉にすると、分かったような気持ちになるのですが、ぜんぜん分かってなんかいないのです。不思議でなりません。

やはり音声である、音楽をイメージするとリアルに感じられそうです。音楽は否応なしに入ってきます。どうしても堪えられなくなったら、その場を去るしかなさそうです。

ぐいぐい入ってくる。これが音声の特徴ですが、入ってきたときには、頭だけでなく体に、こう、ぐっと来ませんか。大げさに言うと、震えるのですが、音声は波だと実感します。

*

話し言葉としての音声には語義（意味）があります。文字で書けば「猫・ネコ・ねこ・neko」ですが、訛りや発音や発声の個人差を除けば、同じ音として入ってきます。

この音で、聞いた人が何をイメージするかは、文字の場合と同じく、確認できません。何をイメージしたかを言葉（とくに文字）にして報告するしかないという意味です。入ってきた言葉が、中でどうなっているかは、言葉でしか確認できないのですが、変なというか不思議な話です。

*

言葉が中に入るとき、人はいったん（一瞬）その言葉を信じます。信じないと受けとめられないからです。「馬鹿！」と言われて、「馬鹿！」と一時的に言われたことを信じないと反論も批判も泣き寝入りもできないという意味です。

いったん入ってきた言葉を信じてから、事後処理として反論とか否定とか泣き寝入りが生じます。

「馬鹿！」（と言われる）

⇒ 「はいはい、そうですね」（いったん信じる）

⇒ A 「いや、やっぱり、そんなことはない」（否定する）、または、B 「はいはい、やっぱり、そうだよね」（再認識する）、または、C 「ふーん」（面倒だから取り合わない）、または、D 「……」（言われたことを忘れる）

いずれにせよ、太文字の部分スキップするわけにはいかないのです。たいていは、CかDのリアクションに落ちつくでしょう。誰もが、情報処理に忙しいからです。

ほとんどの場合、言葉が入ってきても、中ですぐに消えるのですが、これは人とその身体に備わった「知恵」です。さもないと体と心が持ちません。だいいちヒトの情報処理能力と保存（記憶・記録）する容量は、各人が想像しているより、はるかに小さいようです。

表情や身振りが入ってくる、ダイレクトに感じる

表情や身振りは視覚言語（手話も含まれます）と呼ばれることがありますが、おもに見て受けとります。

話し言葉と書き言葉との決定的な違いは、表情と身振りは生まれたての赤ちゃんの中にも入ってくるという点です。すごすぎます。不思議ですね。考えるとわくわくドキドキします。

*

赤ちゃんを見ていると意味と無意味について考えずにはられません。赤ちゃんの表情や仕草や声が信号に感じられるからです。信号というのは、前提として意味やメッセージを想定しているわけです。つまり、はらはらドキドキです。

しかも点滅してあおることもあります。この泣き声はおむつを替えてほしいなのか、お乳がほしいなのか、どこかが痒いのか、痛いのか、暑いのか、それとも熱いのか？
こんなふうに解釈ごっこになります。

初めてのお子さんだと心配でしょうね、不安でしょうね。解読地獄におちいる場合もありそうです。

でも、赤ちゃんとお母さん、お父さん、その家族の人たちの様子を見ていると、赤ちゃんの発するあらゆる信号をつねに正しく受けようとしているわけではないのに気づきます。

受け流しているように見える場合がよくあります。ほほ笑みにほほ笑み返す、ほほ笑みにしかめっ面をしてみせる、ほほ笑みをただ眺めている。泣いても知らん顔。

それだけでいい。そこにいて笑みを浮かべているだけでいい。そこで泣いているだけでいい。そこにいるだけでいい。

信号は解読すべきものではなく、ただそこに「いる」という、おおらかでおおまかな印として、そこに「ある」かのように見えます。

ただ「いる」という信号として、ただ「ある」だけ。

意味はそこにあるというより、人の中にあるのでしょうか。世界が意味だらけなのではなく、人の中が意味だらけなのでしょう。人は自分の中でたちさわぐ「意味の立ちあられ」を静める術を心得ているようです。

(※以上は、拙文「意味が立ちあらわれるとき」から引用しました。)

＊

意味と無意味のはざまにいても可能だという意味で、表情や身振りにはダイレクトに人に「何か」を感じさせる力があると言えそうです。

ダイレクトというのは、いわば無媒介的に表情が表情を、身振りが身振りを誘発する、つまり受け手が相手の表情と身振りを模倣する（「なぞる」）という意味です。

相手の動き（表情も動きです）に合わせて、こちらも心や頭の中で——あるいはじっさいに——動くと言え、お分かりいただけるでしょうか。

身体的レベルでの「うつる」と「伝わる」が起きるのです。必ずしも「通じる」わけではありません。なぞってうつるのです。「何か」が伝わることは確かでしょう。この伝わり方をプリミティブと言う人もいそうです。

その伝わる「何か」は各人の中で起きていることですから確認できません。確認するためには、やはり言葉にして報告するとか説明するしかなさそうです。

身も蓋もない言い方になりましたが、じっさいにはそんなことはありません。みなさんの中で起きていることです。ご自分の日々の体験を振りかえってみてください。

というか、いまも、その「何か」があなたの中で起きているのです。

人のつくった影が入ってくる、めっちゃ気持ちいい

ここで、人のつくった影も、言葉のように人の中に入ってくることに気づいたので、取りあげます。

人のつくった影とは、写真、絵、映画、映像、動画をイメージしてください。ぜんぶ、「うつる・うつす、映る・映す、写る・写す」の産物です。広く取ると本や絵本も入りますが、上で取りあげた文字がからんでくるので、ここでは無視します（いつかもっと体調のいいときに考えます）。

＊

つくられた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。映画であれば時間的な枠もあります。上映時間というか作品の時間です。

つくられた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとはつくられたものです。物語であり、フィクションのことです。だから、わくわくするのです。ときどきもするのです。ぞくぞく、あらら、という感じです。

人はこのわくわくときどきぞくぞくを求めて、自分たちのつくった影を自分の中に入れます。入れるとめっちゃ気持ちいいからという単純な話に落ちつきます。

このあたりの話は、拙文「意味のある影、意味のない影」の一部を引用したので、興味のある方は、お読みください。

＊

ところで、人のつくった影は、どうして、入れるとめっちゃ気持ちがいいのでしょうか？

入れるとめっちゃくちゃ気持ちよくなるように「つくってある」からにはほかなりません。人のつくった影の、文字や音声（人がつくったというよりも備わっている）に比べての大きな違いは、それです。

「猫・ネコ・ねこ・neko」という文字は猫に似ていますか？ 「猫・ネコ・ねこ・neko」と発音したときに出てくる音声は猫に似ていますか？ ぜんぜん似ていませんよね。

それに対し、「猫・ネコ・ねこ・neko」に似せて「つくった」影は、似ています。というか、たいてい「そっくり」なのです。絵、写真、映画、ネット上の静止映像や動画は、ふつう猫にそっくりにつくられています。

複製、似せたもの、似たもの、似せもの、偽物——お好きな言い方を選んでください。共通点は「別物」だということです。現物や実物ではないという意味です。

でも、「似ている」し「そっくり」なのは、そうつくってあるからです

そっくりにつくってあるもの、そっくりに見えるもの

「そっくり」に見えるのは、それに愛着を覚えないからだという場合もあります。「そっくり」な点に関心があっても、そっくりではない点、つまり個性はどうでもいいのです。

「そっくり」を感じているときの人の眼差しは残酷だと言えます。差別し排除しているからです。しかも排除しているものが見えていません。

人はそっくりなものに囲まれて生きていますが、そっくりなものは二つに大別できます。人が「そっくり」につくったものと、人の目に「そっくり」に映るもの（自然界にいるもの、あるもの）です。

*

人がそっくりにつくったものが並んでいるさまは壮観です。一方、人の目に「そっくり」に映るから並べられているものたちのありようには、人を一瞬すくませるものがあります。

スーパーに並んでいる製品たちと、スーパーで並べられている生きものたちの遺体を思いうかべてください。

後者を目にして一瞬すくむのは、無言で並べられているものたちに一瞬命を感じるからにちがいありません。そっくりに見えるというのは、感情も命も無視されているという意味なのです。だから並べられるのです。

飼育されている動物たち（囚人）、スーパーで並べられている魚たち（ご遺体）はどれもそっくりに見えませんか？ 私にはそっくりに見えます。

人も——生きている場合も生きていない場合もあります——ずらりと並べられることがあります、そんなときの人びとはそっくりに見えます。一部の人たち——たいてい上（トップ）にいます、たった一人の場合もありますね——によって感情と命を無視されているからでしょう。その無視は感染します。上から下へと移るのです。

「そっくり」は恐ろしいのです。

*

ところで、似ている（印象）と同じ（同一）は違います。

私たちは「似ている」の世界にいると言えそうです。器具や器械や機械をつかわないと「同じ（同一）」を確認できないからです。

人は「似ている」という印象の世界（見える世界）から「同一（同じ）」の世界（観念の世界）を夢見ているのかも知れません。

とりわけ、工学や自然科学、そしてメタ指向（思考ではありません）が強く、それがオブセッションになっている哲学は、「同一（同じ）」の世界を夢見ている気がします。

このうちで、ある程度うまく行っているのは工学でしょう。コンピューターや重機や電気メス、そしてミサイルは「同一（同じ）」の世界に頭を突っこむことなしには（体は突っこんでいませんけど）動かせないからです。

まとめーそっくりな影たち

人類および個人という意味でのヒトの言葉とのかかわりを、時系列でまとめてみましょう。

狭い意味での言葉（話し言葉と書き言葉）を持つ以前の段階では、ヒトにとって表情や身振りが言葉であり（ほんまかいな）、ある意味ではダイレクトに（うさんくさい言い方でごめんなさい、私もうさんくさいと思います）世界と触れあっていたのかもしれない。

やがて（適当な言葉ですね）、話し言葉を持つようになり、見よう見まねで言葉を身につけ、ヒト同士でつかようになった（まるで見てきたような嘘）。話し言葉をヒト以外の生き物や森羅万象にまで当てはめる（拙文「【戯言】あなたと呼びかけて手なずける」）ようになった（文字どおり戯言です）。この辺から変になり、ぶるぶる震えることを覚えます（嘘つけ）。

なぜか（いい加減ですね）、書き言葉を持つようになって、もともとヒトに備わっていた「何かに何かを見る」に拍車がかかり、何かが移ってくる、何かに乗っ取られるという事態が生じ（もー、勝手にしてください）、ヒトは言葉の世界に生きるようになります。

上記の過程で、ヒトは世界や森羅万象に似ていたり、そっくりな影（映したり写したもの）をつくって、「そっくり」を楽しむ快樂を覚えました。現物や実物や「そのもの」にたどりつけない代償でしょう（※註あり）。自分のつくった影を見て、めっちゃ「気持ちいい」状態になるという自己完結的な快樂です。

【※註：「現物や実物や「そのもの」にたどりつけない代償でしょう」とは、「移る・移す」（移動する・させる）ことができないから、その代わりに「映す・映る」と「写す・写る」で済ますという仕掛け（機械）＝仕組み（システム）＝手品（錯覚製造装置）をつくったのです。絵、文字、印刷、電話、映画、動画、インターネット、要するに複製（「似ている」と「そっくり」）の製造とその拡散のことです。】

その快樂にヒトは嗜癖し依存して、いまに至ります。

分かりやすく言うと、「あそこ」「あれ」「なに」（何なのかは人それぞれですが、これまでもっともたくさん描かれ写され映されてきた対象でしょう）の代わりに「あそこ」「あれ」「なに」の絵や写真や画像で萌えるようにと、ヒトは進化したのかもしれませんが。（※「あそこ」「あれ」「なに」については、拙文「【小話】短い反対は長いではないという話」が詳しいです。）

ほら、世界は、人のつくったそっくりな影たちに満ちています。印刷物もネット上の映像も、そんなんばかりです。

＊

人は、影だけでなく、「そっくりなもの」に囲まれて生きていますが、上で述べたように、「そっくりなもの」は人のつくったものと、自然界にいるもの（あるもの）の二つに大別できます。

前者は気兼ねなく消費できますが、後者の場合にはその自由や命を奪わなければ消費できないので、人はある程度の後ろめたさを覚えます。

そんなわけで、人が「そっくりなもの」をせっせと量産するのは理にかなっていると言えるでしょう。「そっくりなもの」は自分でつくったほうが——つくったものには感情や命がないので——心置きなく利用したり消費できるという意味です。

＊

いまや人は、「似ている」の世界というよりも、「そっくり」の世界に生きているかのようです。この世界では何にそっくりなのかが不明になっているどころか、しだいに問題にされなくなっています。真偽の境も曖昧だし不明です。それが急速にエスカレートしています。

そっくりな点だけがそっくりなのです。目にし耳にし舌であじわい肌で感じているものの多くが、複製の複製の複製……なのです。一方で、目にし耳にし舌であじわい肌で感じているものの多くが、複製として残され続けているのです。

食べるよりもそっちのほうが気になって忙しい。景色を見るよりもそっちのほうが気になって忙しい。人と時間をいっしょに過ごすよりもそっちのほうが気になって忙しい。生きるよりもそっちのほうが気になって忙しい。

そっちというのは、そっくりをつくって保存すること。

文字にして、映像にして、音声にして保存するほうが大切。生きるより大切。

ひょっとして、そっくりに乗っ取られるのではないのでしょうか。

誇張でしょうか。妄想でしょうか。この時点でも、見たり聞いたり嗅いだり味わったり触れたりして楽しむものが複製にされつつありませんか。どんどん映像や音声や文字としてネット上で投稿・配信され、ほぼ同時に保存・拡散されていませんか。

撮る。つまり、映す、写すです。撮影（影を撮る）の「撮」は、手元にある漢和辞典によると親指と人さし指と中指の三本でつまみとることだとか書いてあります。

この三本の指ってよく使いませんか。これだけあれば操作も入力もできます。世界中で、この三本の指をつかって「そっくり」なことをしています。これも、そっくりにつくってあるからに他なりません。機械がそうつくられているのです。

指三本でパネルをタッチして撫でまわす世界。タップ、フリック、スワイプ。世界を操作するのは簡単。世界は手のひらに乗る。世界はちょろい。

複製としての世界。そっくりとしての世界。世界にそっくりな世界。いや、気分は世界そのもの。世界はちょろい。世界は自分のもの。

そっくりなのはそっくりにつくってあるからでしょう。何にそっくりなのかはもはや不明。そっくりだけが空回りしている——。複製の複製の複製……。引用の引用の引用……。本物と実物のない複製。起源のない引用。

人は自分のつくったものに合わせて、そっくりなことをこの星じゅうでやっている。みんなが一樣にうつむいて、手のひらの上の板を指で撫でまわしている。空は見ない。天

に用はない。手のひらに空がある。天がある。うつむいている限り、怖いものはない。

そっくりはうつるのです。うつるんです。そう考えると、そっくりは恐ろしい。

なんでそんなことをやっているのでしょうか。気持ちいいからでしょうか。気持ちいいというよりも、やめられなくなっているのではないのでしょうか。嗜癖です。脳内なんとがどばどば分泌。

妄想でしょうか。もうそうかもしれませんよ。

※この記事は拙文「中に入ってきたときに、中で起きること」に加筆したものです。言葉（意味・複製）が人の中に「入る・出る」——といったことに関心が出てきたので（現にPCやスマホを使用しているいまも「入ったり出たり」していますよね?）、ここで一度過去の記事を読みかえしたうえで、新しい記事を書こうと思います。

（投稿：2023年5月15日 08:16）

#複製 # 似ている # 偽物# 言葉 # 話し言葉 # 書き言葉 # 文字 # 表情 # 身振り # 影

意味に意味を重ねる

＊

意味に意味を重ねる

星野廉

2023年5月13日 10:29

目次

「意味」という言葉は偉そうに見えるし聞こえる

「意味」を使ったフレーズ集

「意味・いみ」、「言いたいこと」

意味はローカルでプライベートなものとして人に立ちあらわれる

辞書の語義以外の意味にまみれて生きる

意味、異味、忌み

あらわれた言葉に、人は忌みを重ねる

不気味な「あらわれる」

あらわれるのは仮の姿や様子

「意味」という言葉は偉そうに見えるし聞こえる

私の語感では、意味という言葉は偉そうに見えます。ときには聞いて偉そうに響く場合もありますが、見た目のほうがずっと偉そうなのです。

文字は消さないかぎりずっとそこにあるからでしょうか。一方、声として聞いた言葉が自分の中に入りこんでなかなか去らないこともあります。その意味では音声はしつこいです。

文字は外で残り、音声は中で残るようです。何のって、人の外と人の中です。言葉に寄生しているらしい意味は、外にも中にも残る気がします。人にとっての話です。わんちゃんやねこちゃんには関係がありません。

＊

人生の意味、生きることの意味、世界の意味、宇宙の意味、ゴキブリとして生きることの意味、ミジンコが泳ぐことの意味。

上の文字列を眺めていると、どんな意味でも、もっともらしく見えます。意味ありげなのです。私にはそうです。

「意味」という言葉は意味ありげだから、気をつけて使わないと角が立ちます。「意味ありげ」で意味があるのは、「意味」ではなく「ありげ」だからです。「意味」には「意味」がありません。敵は「ありげ」なのです。

例を挙げます。

「意味」を使ったフレーズ集

「意味がないよ」、「意味ねー」、「無意味です」、「ナンセンス」、「それってどんな意味?」、「意味はないらしい」、「その意味を説明してください」、「意味不明」、「イミフ」

「意味深だね」、「意味が深いわ」、「深いわ」、「意味深長な発言だった」

「意味が分かる?」、「意味が分かると怖い話」、「意味が分からない」

「意味ありげ」、「何か意味がある」、「意味がありそう」、「意味があるらしい」、「意味ある事業」、「なかなか意味のある会議でした」、「やった意味がある」、「やっただけの意味がある」、「意味があるようでない」、「人生には意味がある」、「「起こる」ことには意味がある」、「あらゆることには意味がある」

「意味を取る」、「正確な意味を取る」

「意味を匂わす」

「その意味では……」、「ある意味では……」、「なんだあ、その意味か」

「変わらない愛を意味する花」、「意味するもの、意味されるもの」、「意味するところが分からない」

「その意味は知っている」、「その意味なら知っているよ」、「その意味は知らないけど」、「両方の意味がある」、「両義的な使われ方をしている」、「多義的な言葉だね」、「どっちの意味だろう」、「いろいろな意味に取れる」、「違った（異なった）意味に取ったらしい」、「違う意味にも取れるんじゃない?」、「そういうのをダブルミーニングっていうんだ」

「何を言いたいわけ?」、「What do you mean?」、「What do you mean by ‘What do you mean?’?」、「何を言いたいのか」って言うけどさ、何を言いたいわけ?、「言わんとするところが分からない」、「言いたいことをはっきりと言いなさい」、「言いたいことがぜんぜん分からないよ」、「言いたいことはよく分かったよ、でも難しいね（駄目なんだ）」

*

どれもが「意味ありげ」でしたね。

大切なのでくり返します。「意味ありげ」では、「意味」ではなく「ありげ」に意味があるのです。「ありげ」が命であり、「意味」は刺身のつまという意味です。

意味とは「ありげ」——「有りげ」の語義は「ありそうなさま」だそうです（広辞苑）——だと言えれば分かりやすいかもしれません。

大切なのでくり返します。「意味ありげ」の「意味」は刺身のつまです。「意味」はころ変わりますが、「ありげ」はしつこく居続けます。人のいるかぎり居続けます。

たぶん、「ありげ」は仕組みなのです。どうにもならない仕組みです。

ただし、もしも意味が言葉（とくに文字）に寄生し、言葉（とくに文字）が人に寄生しているとすれば、ヤドカリみたいなものですから、人がいなくなれば他のものに憑くかもしれません。

いずれにせよ、「ありげ」問題は憑きまとう気がします。

「意味・いみ」、「言いたいこと」

「人生の意味」という場合の意味と「人生という言葉の意味」というときの意味は違います。前者の意味の意味は、大切さとか価値に近い気がします。たしか辞書にもそんな意味の意味が書いてあった記憶があります。意義という感じ。

いま挙げた日本語の意味の二つの意味は、英語の meaning (ゲルマン系) にもあったと記憶しています。もう一つ、英語には意味に相当する sense (ラテン系) がありますが、そっちはどうだったか、忘れました。

「意味・いみ」は音読みしているみたいなので、漢語系でしょう。英語のラテン系 (大陸系) に当たります。「言いたいこと」は大和言葉系だと思います。英語のゲルマン系みたいに、島々に土着の言葉です。

だいたいにおいて、漢語系の言葉は偉そうに見えるし響きます。「意味・いみ」なんてまだかわいいものです。「意義・いぎ」なんかはかなり偉そうでもったいぶって私には感じられます。ひとさまのことは知りません。こういう印象やイメージは個人的なものです。人それぞれ。

意味はローカルでプライベートなものとして人に立ちあらわれる

意味について語るさいには、個人的なイメージから出発しないと、悪しき抽象におちいります。話が実体や実態から離れていくのです。ここで書いていることが好例です。

意味を扱おうとするのなら、曖昧さは避けられません。逆に言うと、曖昧さを回避するかぎり、意味は扱えません。

意味を扱うためには、ぶれることがなく誤っても謝らない杓子定規な機械に意味を教える (プログラミングのことです) のとは別の手続きが要ります。

人における意味と普遍性は相いれないという意味です。意味はローカルでプライベートなものとして人に立ちあらわれます。ローカルというのは、言語や方言や地域や集団によって異なり、プライベートというのは人それぞれという意味です。

辞書の語義以外の意味にまみれて生きる

英語の meaning はさておき、「意味という日本語の言葉」が意味ありげで偉そうなのは、大切さや価値や重要性といった重い意味（重そうな意味）もあるからだという気が私にはします（だから意味という言葉を使う人は偉そうに見えるのでしょうか、意味とは「虎の威」なのです、意味には「言いたいこと」のほかに「大切なこと」という意味があるからにちがいません）。

言葉は、辞書に載っている「語義」だけでなく、人が個人レベルでいっているイメージや印象も担（にな）っています。さらに意味は、その時々文脈や状況によっても左右されます。

簡単に言うと、人は辞書に書いてある語義以外の意味にまみれて生きているのです。

人は生きものであり機械ではありません。その意味で、言葉も生きているのです。人は生きていれば垢もつくし、生理現象はおこるし、病気にもなります。気分もころころ変わります。

人はつねに揺らぎと移り変わりのなかにいるのです。そんな人がもちいている言葉もそうであるはずで。

じっさいそうであるから、言葉はこれまで変わってきたのであり、いまも変わりつつあり、これからも変わるでしょう。いつの時代にも抵抗勢力はいますが、つねに劣勢に立たされています。平安時代や江戸時代の言葉が、いまそのまま使われていないのが証左です。

意味、異味、忌み

言葉は「出る」のに対し、意味は「あらわれる」ように私には思えます。

言葉が出る。ようやく言葉が出た。なかなか言葉が出ない——。このような言い方はよく見聞きします。

言葉があらわれる。ようやく言葉があらわれた。なかなか言葉があらわれない——。

いま挙げたフレーズは、詩とか小説ならありそうですが、日常生活で見聞きした覚えはありません。いま詩とか小説ならと言いましたが、比喩とかレトリックならありうるという意味です。

*

「あらわれる」といっしょに使うと、「言葉」という言葉が特別な意味を帯びるのです。

「あらわれる言葉」には、言いたいことに異なる味つけをしたという意味での「異味」を感じます。具体的に言うと、宗教的な意味あいを感じるのです。

「何か得体の知れないものの力や特殊な事情によって出る言葉」が「あらわれる言葉」なのかもしれません。「出る」という言葉と組み合わせるのがデフォルトの「言葉」という言葉は、ただでは「あらわれない」のです。

「あらわれる言葉」は、死や出産や血やけがれ、あるいは神や神々や精霊や霊や魂といったものとかかわっている気がします。こうしたものに対し、人は「畏れる」(敬う)と同時に「うとむ」(忌み嫌う)という相反する感情をいだくと言われますが、その複雑な感情を「忌み・いみ・齋み」と呼んでもかまわないのではないのでしょうか。

*

人は見えないものや聞こえないものや手で触れられないものを冷遇します。苦手だからです。知覚できないもの、知覚しにくいものに対して「んもー、知らない！」と業を

煮やしているのです。

冷遇する一方で礼遇もします。見えないし聞こえないけど、言葉は意味なしで成立しないし、だいいちつかえないからに他なりません。

しぶしぶ「お意味さま」を礼遇し、「お意味さま」の確認をするわけですが、その作業の結果であり集大成が、たとえば法典、つまり六法全書や判例集のたぐいであり、契約書や念書や条約なのでしょう。辞書や経典や聖典や法則や公式もそうです。

(拙文「言葉は声と顔が命、意味は二の次」より)

上の引用文で挙げたさまざまな文書はどうしてあるのでしょうか？ どうして複製され保存されているのでしょうか。

守ることができないからです。まさか記念に存在しているわけでもないでしょう。守らないのですから、礼遇する振りをして冷遇しているのです。

ないがしろにしながらか同時に崇めたてまつる、畏れ敬いながらも忌み嫌う、迎える振りをしながら退け遠ざける、身をかかわして相手を制しようとする、生餌（なまえ）——名前とも書きます——を与えて手なづけようとする——。

いま述べたのが、おそろしいものや得体の知れないものに出会ったときの、人の常套手段です。

あらわれた言葉に、人は忌みを重ねる

意味、異味、忌み——。言葉が「出る」のではなく「あらわれる」とき、その言葉には異味や忌みという意味が重ねられている。

そんなふうに私は考えています。いま「重ねられている」と言いましたが、正確には、意味も異味も忌みも、人が言葉に勝手に重ねているだけです。

意味も異味も忌みも見えないし聞こえないし、手で触ることができません。一方、言葉は見えるし聞こえます。点字や指点字だと言葉は手で触れる対象になります。

言葉は出るもの、意味はあらわれるもの――。

意味は出るのではなく、言葉においてあらわれるとも言えそうです。こうした状況を言いあらわすのに、「意味があらわれる」という言い方があってもいい気がします。

不気味な「あらわれる」

音と文字からなる言葉は見えるし聞こえます。人にとって見えて聞こえるものは、扱いやすいはずです。言葉に立ちあらわれる意味は、あらわれると言っても見えないし聞こえません。

意味は不気味です。言いたいこと、意味、意義、異味、忌みというふうに言い換えたとしても、見えないし聞こえないし、その不気味さは消えません。

あらわれているのに消えない不気味さこそが、意味を意味にしているものではないでしょうか。得体が知れないのです。

*

あらわれる、現われる、顕れる、表れる。

これがいまの標準的な表記ですが、次の表記もあります。

露れる、彰れる。

漢和辞典を見ながら、「あらわれる」に当てたい漢字をもちいて当ててみます。「あらわす」とか「しるす」を含めて勝手に当ててみます。

兆れる、徴れる、形れる、著れる、見れる、記れる、志れる、注れる、註れる、紀れる、署れる、誌れる、識れる、銘れる、録れる。

これが私の「あらわれる」をめぐっての個人的なイメージだとも言えそうです。

あらわれるのは仮の姿や様子

「あらわれたもの」を目で見えたり、触覚・触感、嗅覚、場合によっては味覚・触感、さらには気配で感知してはいるが、「あらわれている」のは仮の姿や様子であって、そうではないさまが隠れているのではないか。

それが「あらわれる」であり「あらわれ」だという気がします。そして、その「あらわれ方」は「意味」にととてもよく似ていると感じられてなりません。「ありげ・有りげ」なのです。「意味ありげ」の「ありげ」に似ています。

たぶん、「ありげ」は仕組みなのです。どうにもならない仕組みであり仕掛けです。

(投稿：2023年5月13日 10:29)

#意味 # 現れる # 出る # 言葉 # 異味 # 忌み # 辞書 # 漢字 # 大和言葉 # 和語 # 漢語
色 # 香り # 辞書

宿を借りる生きもの

＊

宿を借りる生きもの

星野廉

2023年5月8日 07:47

目次

宿を借りる

出たものは何らかの運動へと誘われる

文字は不気味

出た意味が言葉として立ちあらわれる

複製化された言葉

言葉は意味のしもべ

あらわれた意味に関しては、人は責任を取らなくてもいい

得をするのは意味なのかもしれない

宿を借りる

意味は色です。色はそれだけで「いる」ことも「ある」こともできないから、いたりあったりするものに浮かぶのです。意味があらわれるのは言葉にだけではなく、森羅万象にあらわれるのでしょう。

人が森羅万象の代わりに持ち歩く（ポータブルな）意味の居場所、それが言葉なのかもしれません（その意味で、意味は宿を借りる生きものなのかもしれません）。

その言葉もまた、仮の宿だという気がします。

その言葉が宿る場所、つまり人も、仮の宿であるはずです。

その魂が宿る場所も、仮の宿であるにちがいません。というか、そうであってほしいです。

(拙文「a rolling stone」より)

出たものは何らかの運動へと誘われる

いったん「出た」ものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。たとえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、月も、声も、にきびも、幽霊も、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さんや、家出したお母さんや、家出したお子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。(拙文「出たものは「静止」してはいない」より)

半分冗談はさておき(半分は本気です)、いったん出たものがじっとしていないで、何らかの動きへと誘われていくというイメージは、私にとってリアルなものなのです。

思いこみなのでしょうか。私はnoteで記事に書いていることは、研究でも探求でもありません。考えてわくわくすることを文字にしているだけです。

*

言葉はどうなのでしょう。意味はどうなのでしょう。

言葉(声・文字・表情・身振り)は、いったん発せられたあと、じっとしていないで、何らかの動きに誘われるという気はします。

なにしろ、声と表情と身振りは、発せられたとたんに消えていきます。受け手はそれを必死に(またはぼんやりと)追いかけて記憶にとどめる(あるいは片っ端から忘れる)ことになります。

消えるのです。録音とか録画をしないかぎりには消えます。文字にしていく方法もありますが、これは現実問題として大変です。

速記みたいに多大の技能と労力が必要になります。通訳者みたいにメモを取ってあとで再現するもの普通の人にはできそうもありません。

文字は不気味

一方で、文字は残ります。これはすごいことだと思います。私にとって、文字は不思議だらけであり不気味だらけの存在です。

- ・文字の習得には、とほうもない時間と労力がかかる。
- ・学習障害として文字の読み書きだけができない人がいる。
- ・人類には無文字社会という選択もあった。
- ・話し言葉、書き言葉（文字）、表情、身振りを言葉と考えた場合に、文字がいちばん遅く出てきた。個人レベルでも、文字の習得が後になりがち。
- ・文字だけが見える、しかも残る。
- ・複製として存在し広まり継承される。
- ・スーパースターとして最後にあらわれた。それでいて、あちこちであられ続けている。
- ・産む。産み続ける。

上の箇条書きを見ていると、文字の特異性をひしひしと感じます。不気味なのです。

出た意味が言葉として立ちあらわれる

出たとたんにどんどん消えていく声や表情や身振りも、出たあとにしつこく残る文字も、いったん発せられたのちには、じっとしていないで、何らかの動きに誘われる気がします。

人が動くのです。心が動くだろうし、じっさいに行動に出ることもあるでそう。

意味はどうでしょう。

私の印象では、意味は出ると言えば出るわけですが、言葉といっしょに出ているようです。

意味（言いたいこと）が人の中から出て、言葉（声・文字・表情・身振り）という形を取ってあらわれる。

という感じがします。意味から言葉への移行は瞬時だという気がするので、次のように言えそうです。

意味（言いたいこと）が人の中から出て、瞬時に言葉（声・文字・表情・身振り）という形を取って立ちあらわれる。

複製化された言葉

いったん「あらわれた」ものは、「出た」ものとは異なり、静止したまましつこく居座ることも、往々にしてありそうなのです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、〇〇の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果や効果みたいに、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。（拙文「出たものは「静止」してはいない」より）

声（話し言葉）、表情、身振りは、放たれた瞬間に消えます。文字は消さないかぎり、しつこく居座りつづけます。

前者を居座りつづけさせるためには、文字にするか——昔はこれに頼ったようですが、というかこの方法に頼る時代がずっと続いていたのです——、録音や録画という手段を取ります。

文字は、写本や写経のように筆写する時代が長く続き、やがて印刷術が発明され普及し、いまではデジタル情報として配信・複製・拡散・保存がネット上で瞬時におこなわれています（音声と映像についても同じです）。

＊

大切なことは、音声、表情や身振り、そして文字が、いまでは複製として拡散され保存されていることです。

私たちが日常生活で目にしたり耳にしている音声や映像や文字のほとんどが複製、し

かもデジタル化された情報としての複製だということに、本気で驚きつづけていても罰は当たらないと私は思います。

よく考えると、こうした状態というか事態というか常態は、少し前には想像もしていなかったのです。とんでもないことが起きているのですが、それが当り前に感じられます。

人は長い間驚いていることができないようです。慣れるというか鈍感になる才能にめぐまれているから、人類はここまで来たのでしょうか。

言葉は意味のしもべ

話を戻します。というか飛躍します。

いまや複製が主流になった言葉が残って増えつづけているわけですが、これは意味が残って増えつづけているとも言えるのではないのでしょうか。

さらに言うなら、意味を生かしつづけるために、複製化された言葉があるように思えてなりません。

言葉は意味のために——意味を生かすために——あるのです。その逆では断じてありません。言葉は意味のしもべなのです。

ひょっとすると、デジタル化とインターネットという魔法が生みだされる前には、長い間文字（消えずにしつこく残りつづける文字）が意味を生かしつづける役割をになってきたのではないのでしょうか。

*

言葉と意味の関係は、いろいろな見方でとらえることができるでしょう。

- ・意味は言葉の主（あるじ）であり、言葉は意味の僕（しもべ）である。
- ・意味は言葉に寄生している。

- ・意味は言葉に宿っている。
- ・見えない聞こえない意味は、見えて聞こえる言葉にあらわれる。
- ・人に見えない聞こえない意味が、人に見えて聞こえる言葉に宿っているのは、言葉を媒体にして、視覚と聴覚に優れた人という生きものに寄生しているからだ。

いかにも妄想の産物といった言葉をつらねていますね。思いつきをつづただけですので、今後変更したり、忘れてしまうこともあるだろうと思います。記念として残しておきます。

あらわれた意味に関しては、人は責任を取らなくてもいい

「〇〇が出る・出た」とか、「〇〇が見える・見えた」の代わりに「〇〇があらわれる・あらわれた」と、するだけでいいのです。「見える・見えた」が自分の責任なのかどうかは、誰にも分からないと思いますが、とにかく責任を転嫁するのです。

それは「出た」のでも「見えた」のでもなく、「あらわれた」のです。思うだけでなく、ちゃんと声を出して唱える。それだけで、だいぶ気が楽になりませんか？
(拙文「あらわれるのです。」より)

言葉が人の中から出てきて、その言葉に意味が立ちあらわれるという話になってきました。

意味があらわれるのには意味があるのでしょうか。

人が言葉をもちいる、人が言いたいことを意味として言葉にならせる、こうしたことに意味はあるのでしょうか。誰かが得をするのでしょうか。

得をしているのは人でしょうか。たしかに、人類はこの星でここまで来たわけですから。得をしたと言えば得をしたのであり、ひどい目にあっているとえばひどい目にあっていると言えそうです。

ひどい目にあっているのは、この星と、この星に住むヒト以外の生きものたちだとも言える気がします。

ヒトだけが得をしているのであれば、こうなった責任にはヒトにあるとも言えるでしょう。

いや、ヒトは意味に利用されているだけだと言う人がいても私は驚きません。

意味のすべてが「あらわれた」結果としてあるのだから、ヒトには責任がない。そんなふうには責任転嫁をするのが、ヒトにとっては精神衛生上好ましいことである。

勝手にあらわれる意味に対し、ヒトは責任を取る必要はない——なんて考えもありそうです。

得をするのは意味なのかもしれない

飛躍がつづいたので、整理をしてみよう。

意味のすべてが「あらわれた」結果としてあるのだから、ヒトには責任がない。そんなふうには責任転嫁をするのが、ヒトにとっては精神衛生上好ましいことである。

もしそうであれば、ヒトが意味に責任転嫁することによって得をするのは、意味なのではないでしょうか。

責任転嫁をして気持ちが楽になったヒトは、安心して、あるいは自信をもって、心置きなく言葉を使いつづけ、それと同時に意味を生かしつつけることになります。

意味は宿を借りる生きもの。太古から森羅万象に宿り、やがて言葉というポータブルな宿を借りてヒトに寄生するようになった。いまではヒトの手を借りてこの星にめぐらされた網に居ついている。

めちゃくちゃな話になりましたね。単なる私の個人的な妄想で終わらせないためには、以上の筋書きで SF 小説か幻想小説を書けばいいのかもしれませんが、いまの体調を考えると体力的に無理なようです。

しばらく、ここで書いたことの意味を考えてみます。

(投稿：2023年5月8日 07:47)

#言葉 #意味#日本語 #寄生 #借りる #複製 #文字 #インターネット #妄想 #小説
#SF #幻想小説

言葉は声と顔が命、意味は二の次

＊

言葉は声と顔が命、意味は二の次

星野廉

2023年4月29日 07:44

今回は前に書いた記事へのツッコミというか、連想でつなぐというか、しりとりみたいにつなげてみます。

以下の見出しの文章「内容は、ないよう」は「連想でつなぐ、壊れる」という記事からの引用です。この文章につなぐ形で記事を書いてみます。

目次

内容は、ないよう

言葉は声と顔が命

意味が不明、コンセンサスがない

音と文字は物

意味は見えないし聞こえない

冷遇し礼遇する

言葉に言葉を重ねるのは「ない」に対する根本的な解決策ではない

意味の意味について考える意味

「ない」が「ある」ように見える

意味は「ない」から「つくる」

言葉は伝わっても、意味は伝わらない

言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし

意味はまちまち

刺身のつまの製造を外部に委託する

内容は、ないよう

ゲシュタルト、ザイン、ダザイン、テーゼ、アウフヘーベン。

ドイツ語をカタカナにするとごちごちした感じがします。厳めしいのです。日本語における漢語に匹敵する物々しさを覚えます。濁音のせいでしょうか。あと、字面も。

シニフィアン、シニフィエ、エクリチュール、パロール。

フランス語をカタカナにするとほわーんとした感じがします。厳めしくはありません。私の印象を正直に言うとおぼろげな泡みたいなのです。鼻に抜けていく鼻母音のせいかもしれません。あと、字面も。

『存在と無』(日) がちがち
L'Être et le néant (仏) ほわーん
Being and Nothingness (英) で?
Das Sein und das Nichts (独) ごちごち
El ser y la nada (西) さらさら

言葉における発音と綴りの印象は大きいと痛感します。音と字面、ファースト。まるで内容は、ないようです。

【※引用はここまでです。】

言葉は声と顔が命

たしかに言葉においては、発音と見た目が大切です。

言葉は「声・音」と「顔・字面」が命。意味なんて刺身のつまだという気がしてなりません。

なにしろ、人はまず〇△Xという言葉——「声・音」と「顔・字面」——をつくり、次に「〇△Xとは何か？」——その意味(内容)を問う——と、えんえんと思ひ悩む生き物なのですから。

まさに内容は、ないようです。

いまもそうですよね。「○△Xとは何か？」をめぐって、ああでもないこうでもない、ああだこうだともめています。

「あいつらは○△Xだ」と国のトップが決めて、それに国民も他の国々も付き合わされる形で戦争になっている場合もあります。

暴力を合法的に行使できる権力を握っている人が、「黒いカラスは白いサギだ」と言えば、黒いカラスの意味は白いサギになる。

言葉の意味は、腕力、武力、暴力、権力、要するに力で決まるようです。その次に来るのが、お金と面子でしょうか。

お金をもらうためや失わないために、そしてなによりも自分（たち）の面子をたもつために、人は意味をつくったり意味を決めます。

言葉における「内容は、ないようだ」問題はきわめて深刻なのです。

意味が不明、コンセンサスがない

人はまず○△Xという言葉——「声・音」と「顔・字面」——をつくり、次に「○△Xとは何か？」——その意味（内容）を問う——とえんえんと思い悩む生き物である。

無数の○△Xたちがあり、その内容つまり意味をめぐってのすったもんだが繰り返されてきて、いまも繰り返されている。

大昔の○△Xたちについて意味が不明になっているとか忘れていたのならまだいいです。

いまつかわれている○△Xたちについて、同時代人たち、同じ言語を話すはずの人たちのあいだで、コンセンサスがあるようでないようなのです。

たとえば、「正義」という言葉ですが、相手がどういう意味で使っているのかはつねに不明なのです。

辞書なんか当てになりません。議論の最中に辞書を取りだしたら、相手に笑われます。笑われたら、もう負けたようなものです。

なんでこうなっているのでしょうか。

音と文字は物

音と文字からなる言葉において、意味が刺身のつま、つまり二の次であるからに他なりません。

では、なんでこうなっているのでしょうか。

意味が刺身のつま状態になっているのは、意味が見えないし、聞こえないし、手で触れることができないものだからとしか考えられません。

*

音は聞こえます。空気の振動として皮膚で感じる（触れる）こともできます。鼓膜を震わせているから聞こえるのですから。

音は物であると考えられます。

文字は見えます。紙上のインクの染みや（かつての活版印刷された文字は指の先で触れました）、液晶上の画素の集まりみたいなのです（いまは文字は手と指で書くというよりも指で触りながら入力するものです）。

文字も物と見なしてよさそうです。

意味は見えないし聞こえない

言葉をなりたたせている音は物だから聞こえるし手で触れることができ、文字は物だから見えるし手で触れることができる。このように短絡して考えてみます。

意味はどうでしょう。

意味は見えません。辞書に載っているのは語義であり文字です。見ているのは文字であって、意味ではありません。というか、意味を見たことがありますか。

意味は聞こえません。手で触れることもできません。

だから、意味は刺身のつま状態にされているのにちがいません。

冷遇し礼遇する

人は見えないものや聞こえないものや手で触れられないものを冷遇します。苦手だからです。知覚できないもの、知覚しにくいものに対して「んもー、知らない！」と業を煮やしているのです。

冷遇する一方で礼遇もします。見えないし聞こえないけど、言葉は意味なしで成立しないし、だいいちつかえないからに他なりません。

しぶしぶ「お意味さま」を礼遇し、「お意味さま」の確認をするわけですが、その作業の結果であり集大成が、たとえば法典、つまり六法全書や判例集のたぐいであり、契約書や念書や条約なのでしょう。辞書や経典や聖典や法則や公式もそうです。

とはいえ、これらは全部が文字です。目に見えます。音読すれば聞こえます。要するに、意味は見えないし聞こえないという現実が変わっていないのです。

見えない、聞こえない、手で触れることができないものを固定することができますか？
文字という形で記して固定（複製・拡散・保存）したところで、それは意味を固定したことにはなりません。

言葉に言葉を重ねただけです。文字に文字を重ねただけです。

というわけで、人は

まず○△Xという言葉をつくり、次に「○△Xとは何か？」とえんえんと思い悩む生き物である。

という状態から逃れることはできないもようです。人にとってはこの状態が常態なのです。言葉に「内容はないよう」という鉄則はかなりしぶといようです。

言葉に言葉を重ねるのは「ない」に対する根本的な解決策ではない

なんでこうなっているのでしょうか。

辞書や法典や経典や聖典や法則や公式をつくったり、議論や約束や契約や知識の更新をしても、言葉に言葉を重ねる（具体的には文字に文字を重ねる）、つまりある言葉やフレーズを言い換えたり置き換えたり変奏しているだけであって（いまやったのがそうです）、言葉に「内容はないよう」の根本的な解決策となっていないからでしょう。

ない袖は振れぬ、ですね。

「ない」に「ない」をどんなに掛けても賭けても欠けても架けても懸けても書けても、「ない」は「ある」にはなら「ない」ようです。いまやってみたいにです。

もしそうであるのなら、みんなで考えてみませんか。難しい問題だからと、機械に委託するのではなく。

意味の意味について考える意味

見えない、聞こえない、手で触れない意味を相手にするのはややこしいし難しいようです。

以下は、参考までに。

意味論 (いみろん) とは? 意味や使い方 - コトバンク

最新 心理学事典 - 意味論の用語解説 - 言語を科学的に研究するための言語学的な区分として、伝統的に単語以下の形態素など

kotobank.jp

意味論 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

河出文庫 意味の論理学 〈上〉

ルイス・キャロルからストア派へ、パラドックスの考察にはじまり、意味と無意味、表面と深層、アイオンとクロノス、そして「出来

www.kinokuniya.co.jp

哲学の原点を転覆する試み ジル・ドゥルーズ「意味の論理学」 | 好書好日

大澤真幸が読むドゥルーズは20世紀フランスの哲学者。「ポスト構造主義」の代表者だ。本書は34の「章(セリー)」から成り、

book.asahi.com

角川文庫 不思議の国のアリス

ある昼下がり、アリスが土手で遊んでいるとチョッキを着た白ウサギが時計を取り出しながら、急ぎ足に通り過ぎ、生き垣の下の穴にび

www.kinokuniya.co.jp

詳注アリス 完全決定版

キャロルの手紙や日記、歴史資料や学問的解釈etc...を駆使して付けられた、300以上の注釈を収録。これまで世界中の画家が描い

www.kinokuniya.co.jp

アリス狩り (新版)

夢と現実、非論理と論理、狂気と正気が交錯するノンセンスの王国一。そのノンセンスの宇宙を彷徨う美少女アリスの受難を、投影され

www.kinokuniya.co.jp

「ない」が「ある」ように見える

話を戻します。

「ない」に「ない」をどんなに掛けても賭けても欠けても架けても懸けても書けても、「ない」は「ある」にはなら「ない」ようです。いまやってみたいにです。

*

「ない」は「ある」にはなら「ない」ようですが、「ある」ようには見えます。

面（具象・そのもの・そこにあるもの）に立体（抽象・その向こうにあるもの・そこにはないもの）を見てしまうのです。これは「ない」を「ある」ように見ていることに他なりません。

人がのっぺらぼうな面——意味が不在である面（無意味な面ではなく）——に、顔や模様や奥行きや深さや遠近や背後を見てしまうのは、心が壊れないためなのです。

意味は「そこにある」のではなく、「人がそこにつくる」というのが適切な言い方だと私は思います。「意味がある」という言い方は無意味＝ナンセンスだという意味です。

意味は「ない」から「つくる」

要するに、意味はないのです。無意味という意味ではありません。無意味には意味があります。どの辞書にも無意味の意味が語義として書いてあります。

「意味は不在なのだ」と苦しまぎれにレトリックを弄するしかなさそうです。

「意味はない」を、「意味はその時々の人都合でつくるものだ」と言い換えることができる気もします。

つくる、こしらえる、でっちあげる、捏造する——どう言っても大差はありません。

＊

例を挙げます。

この国に数々ある、そしてこれまでに数々あった政党名を思いうかべてみてください。

名（音と文字）は体（内容・意味）を表わしているでしょうか。口あたりのいい、また見映えのいい美辞麗句にだまされてはならない、という生きた証拠であり教訓が政党名ではないでしょうか。

私なんか「えっ、どこが？」と思う名称ばかりです。与野党、大小、新旧、問わずです。

＊

他の例を挙げます。

「真摯に」が「テキトーに」であったり、「スピード感をもって」が「のろのろと」であったりするのは、みなさんをご承知のとおりです。「分かった」が「分からない」、「承知しました」が「知るもんか」だなんて、当たり前ですね。

ある場面では、「だめよ、だめよ」が「いいわ、いいわ」、「ぜったいにいや」が「もっともっと」だったりもします。政治の世界がそうです。ビジネスの世界もそうでしょう。

＊

民主主義、謙虚に、真摯に、丁寧な、誠実に、良心に恥じない……

〇〇を最優先する、守る、尊重する、みなさまの〇〇……

正義、公明正大、平等、倫理的、道徳的、中立……

絶賛された、評価の高い、今世紀最大の、誰もが泣いた、感動的、世界で最も.....

論理的、普遍的、客観的、真理.....

〇〇らしい、〇〇らしく、〇〇であるなら、本来あるべき〇〇の姿.....

美しい、本当の、本物の、真の、本来の、理想的な、正しい.....

以上のような言葉が聞こえたり目についたりしますが、その意味はつねに不明なので
す。意味が不明ということは、どんな意味にもなりうるという意味です。

時と場合によってころころ変わります。さきほど述べたように、「だめよ、だめよ」が
「いいわ、いいわ」にもなります。「平和的な解決」が「武力による侵攻」であっても不思議
はありません。

言葉は伝わっても、意味は伝わらない

言葉は聞こえるし見えますが、意味は見えないし聞こえないからこうなるのです。伝
わりもしないでしょう。

言葉は伝わっても、こちらの意味とあちらの意味が、何かのかたちで必ずずれるとい
う意味です。

たとえば、日常生活、学校、仕事、病院、交友、遊びなどで、言葉をつかっていて意味
が伝わったという感触をどれだけ得ているのでしょうか。時と場合によるし、程度問題で
しょうが、ちゃんと伝わっていますか？

その意味で、「言葉は伝わる」とか「言葉は意思伝達的手段である」というのは、「意
味が（なかなか）伝わらない」という深刻な現状を無視した脳天気な美辞麗句であると
か、片手落ちの不正確な言い方であると言えそうです。

そうした言い回しがまかり通っているのですから、つまりきわめて大きな存在であるはずの意味が考慮されていないのですから、意味がないがしろにされているとか、意味が刺身のつまにされている証左とも言えます。

誇張ではありません。意味が伝わっていないことで、戦争が起きたり、そこまで行かない争いや、事故や事件や犯罪や問題が起きたりしているじゃありませんか。新聞を読んでもください。ニュースを見てください。

もし私が意味だったら、腹を立てますよ、きっと。人は意味にリベンジされているのではないかと妄想しそうになります。

「私のことをちゃんと見てくれなきゃ、いや！」という感じ。

ちゃんと見てやりたいのですが、意味さんは見えないのですよね。たしかに、ややこしい.....。

もっと気に掛けてやりましょうよ。「面倒くさいやつだ」と避けないで。

言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし

話を少しずらします。

「言葉の意味」というまぼろし——意味は見えないし聞こえないし「ない」のですからまぼろしに他なりません——をちょっとずらして、「言葉の実体」というまぼろしについて考えてみます。

言葉（音と文字）と実体（まぼろし）とは関係がない。

そう言えそうです。

＊

さらに話を少しずらします。

まず前提を確認します。

人はまず○△Xという言葉——声・音と顔・字面のことで——をつくり、次に「○△Xとは何か？」——その意味（内容）を問うのです——とえんえんと思い悩む生き物である。これが前提です。

そもそも言葉に実体があるとは夢にも思っていない私ですが、実体をその言葉が指し示す事物くらいの意味で考えてみましょう。

名付ける、名指す、AをBと呼ぶ——こうした人間の習慣と実体とは関係がない。そもそも実体という言葉に実体がないから。

そう言えそうです。

話を戻します。

意味はまちまち

繰り返します。

意味は「ある」のではなく、「つくる」ものなのです。意味は「ない」から「つくる」という意味です。

誰が意味を「つくる」のかと言えば、個人であったり、特定の集団が「つくる」と考えられます。

しかも、それぞれが自分の勝手にまちまちにつくっているようです。

意味の意味はまちまちだという意味です。コンセンサスがないのです。辞書の語義は建前です。

辞書の語義どおりに話したり書いたりするほど、人は機械——機械はぶれないし疲れないし誤っても謝りません（ぶれたり疲れたり謝るようにプログラムすれば別ですけど）

——ではありません。

刺身のつまの製造を外部に委託する

これからは、ぶれないし疲れないし誤っても謝らない機械や AI も意味を「つくる」にちがいありません。もうそうなっているのかもしれない。

人は考えることまで機械や AI に委託しはじめたようですから、機械や AI が意味をつくるのは妄想ではないでしょう。もうそうかもしれない。

作文はもちろんのこと、これからは思考と判断をはじめ、刺身のつま、つまり意味の製造も外部に委託することになりそうです。そうなれば、晴れて心置きなく思考停止と判断停止に邁進し、有意義に日を送ることができるでしょう。

妄想でしょうか。もうそうかも。

もし、もうそうであるのなら、みんなで考えてみませんか。機械に委託するのではなく。

#言葉 #音 #音声 #文字 #意味 #無意味 #刺身のつま #機械 #AI #委託

自分に自分を似せていく（連想でつなぐ、引用の
織物）

＊

自分に自分を似せていく（連想でつなぐ、引用の織物）

星野廉

2023年4月23日 07:57

目次

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが

鏡を前にしてのお化粧は

「似ている」は印象であって検証できない評価

模倣する、模倣される

自分の似姿に自分を似せていく

鏡に囲まれ、鏡の前で自分をつくっていく

映った像の中に「ある・いる」「他者・多者」

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが、鏡に映っているのは自分なのでしょうか？ 鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がします。

自分の似姿をこれまで鏡で見てきた記憶の厚みの上に、いまの似姿を見ていると言えれば分かりやすいかもしれません。人にとって体感できる時間とは、おそらく記憶の重なりだからです。

その意味で、正確に言えば、鏡に映っているのは、時間ではなく、ずれなのでしょう。

抽象である時間を人は「見る」ことができず、「前」と「今」とのずれ——これも記憶の重なりなのかもしれません——として感知するしかないとも言える気がします。しかも、きわめて私的で個人的なものなのです。

この場合のずれは個人的な印象であって計測も検証もできません。その意味で、このずれは、やはり私的な印象でしかない「似ている」に似ています。「前」と「今」のずれも「似ている」も印象なのです。

＊

念のために言い添えますが、ものを映す鏡だから「似ている」に似ているわけではありません。鏡には「似ていない」も映るのです。

「似ている」を見るためには、同時に「似ていない」も見ていなければならないということです。ここは似ている、ここは似てないというふうに見ていないと、見えないとも言えます。

「似ている」と「似ていない」のずれ——。これは時間のずれとして「立ち現われる」のです。いや、「立ち隠れる」のかもしれない。

冗談（レトリック）はさておき、白と黒の細かい点からなる絵や写真（文字でもいいです）は、濃淡はあるにせよ、白の点と黒の点を同時に見ていないと形が見えないと思われませんが、それと似ているのではないのでしょうか。

鏡を前にしてのお化粧は

鏡を前にしてのお化粧は、刻々と目の前に現われるずれとの追っかけっこです。先を越されないように必死で見なければ、顔は見えないし、化粧品ののり具合を確かめることはできない。

だから、ずれを深く受けとめている暇も余裕もない。

お化粧をする時には、鏡の中の自分、つまりずれとは妥協するしかないのです。いつまでも眺めているわけにはいかない。考えこんでいる暇もない。ま、いっか、と唇を噛んでつぶやいてその場を去るしかない。

ずれとまともに向き合えば喜劇や悲劇や惨劇になります。まだお出かけもしていないのに化粧が崩れるという意味です。

*

数年前の写真を見るのは恥ずかしいものです。恥ずかしくてまともに見られない。髪型も化粧も服装もださくて見るに堪えない。ただし顔そのものはあえて見ないだけの体感的な知恵がそなわっているようです。というか、おそらく見えないのです。

ずればかりがやたら目につく。だから、顔や姿は目に入らないと言うべきかもしれません。

映っている人を卒業したという優越感と、それがちょっと前の自分だったという屈辱感のあいだで揺れるとも言えるでしょう。要するに、ちょっと前の自分は恥ずかしいと同時に憎い。ちょっと若いから小憎らしい。つまり、ライバルなのです。

免許証とか証明書の写真が好例です。恥ずかしさと屈辱だけが映っている。だから正視できないし正視に耐えない。これは、ずれがダイレクトに襲ってくるからではないでしょうか。

恥ずかしさと悔しさ、つまりずれを感じとるだけの余裕ができていても言える気がします。

*

昔の写真とか子どもの頃の写真だと、ずれをもろに受け入れる余裕ができていて、見てもそれほど恥ずかしくはないし憎らしくもないし悔しくもない。むしろ、懐かしくて見入ることがある。

もはや、他人となった自分です。

まあ、かわいい。この子、誰？　なんてぐあいに天使を見る人もいます。我が子や甥っ子や姪っ子や孫を見るのに似ています。

似ているけど、自分ではない誰か。いまの自分以外に自分はいないはずなのに、自分がそこに映っている――。

(※ここまでは、拙文「【小説】顔を見る―生活と意見」から引用して再構成しました。)

「似ている」は印象であって検証できない評価

みなさんは、「似ている」に対してどんな思いをいただいていますか？

この人はあの人に似ている。あなたは、〇〇さんに似ていますね。この小説はあの小説に似ていると思いませんか？　Aの作る曲ってBの曲に似ているような気がしてならない。

彼女の見せるちょっとした仕草が、彼女のお母さんに激似。この絵とあの絵はそっくりだ。うちの息子の後ろ姿に旦那を見てぎょっとした。「ねえ、これって手触りがあれに似てない？」「どれどれ。いやだ、本当……。触ってみると、あれにそっくり」

あの人の彼氏の服装とか話し方を見ていると歌手のBさんをかなり意識している気がする。ここから見る風景は、故郷の町を彷彿とさせる。この店の餃子を食べるたびに、おばあちゃんの作ってくれた餃子を思い出すんだ。

電話に出たのがお母さんだと思ったらお姉ちゃんだった。この記事って、きのうS新聞で読んだコラムにとっても似ているんだけど。この既視感、何だろう？

＊

何かと何かが、あるいは誰かと誰かが似ているという評価や印象が、人を喜ばせることもあれば、怒らせることもありそうですね。笑いや驚きやため息や涙をもたらすことも考えられます。また、「似ている」が人と動物だったり人と物の場合もあるでしょう。

私は「似ている」大好き人間なのですが、手放しで「似ている」を賞賛していいとは思っていません。

「似ている」は一つの評価にはちがいないのですが、「同じ」や「同一」と違って検証ができません。「似ている」は印象だからです。印象や感想は偏見につながりますね。それが「似ている」の恐ろしいところでもあります。

「似ている」という評価や意見がさまざまな感情を人にいだかせることに敏感でありたいと思っています。

模倣する、模倣される

以下は、拙文「Moves Like Jagger (連想でつなぐ)」からの引用です。

*

YouTube で検索していてすごいと思ったミック・ジャガーのダンスというか moves の映像集を、以下に紹介します。カッコいいですね。動きが美しい。

かつてのグループサウンズや日本のロックグループのメンバーには、ミック・ジャガーの模倣から始めた人が多いという話は本当だと感じました。

ああ、これは「〇〇」に似ている、と思った映像がいくつもあります（私は音楽もダンスにも無知なので、げすの勘ぐりにちがいませんけど）。

話は逆で、「〇〇」がジャガーを真似たのでしょうかね。模倣されるのは、偉大なアーティストの宿命でしょう。

*

アーティスト——歌手や演奏家だけでなく小説家や作詞家や作曲家や美術作品の作家をふくむ広い意味での芸術家——が自分のスタイルを作りあげていく過程で、「他人を模倣する」（立場を変えれば「自分が模倣される」）だけでなく、「自分を模倣する」もあるのではないのでしょうか。

先行する他人のパフォーマンス（演技や演奏）や作品を模倣するだけでなく、過去の自分自身のパフォーマンスや作品を模倣するという意味です。自分自身の模倣の場合には更新とも言えるでしょう。

絶え間ない自己更新をしていかなければならない（他人ではなく自分が相手＝ライバルなのです）ことが、広義のアーティストの宿命なのかもしれません。

ミック・ジャガーがその moves =動き=振りを自分で作り出していったのか、先行する誰かの振りを真似たのか知りませんが、彼のパフォーマンスを映した数々の動画を見ると、変容を重ねている動きが一つの身体から自然に出てきている、つねに試行錯誤=自己更新を重ねているようにも感じられます。

以下の動画「Mick Jagger on his signature dance moves (Where Mick Jagger Got the Inspiration for His Famous Dance Moves)」は、ミック・ジャガーの moves = moves like Jagger を考える上でヒントになりそうです。

(動画省略)

(拙文「Moves Like Jagger (連想でつなぐ)」からの引用はここからです。)

自分の似姿に自分を似せていく

他の人に似ているとか、他人を真似るだけではなく、自分に似ているとか、自分を模倣するということがあります。

詩、小説、造形芸術、演劇、イラスト、漫画、作曲、伝統芸能といったクリエイティブな活動にたずさわっている人の作品には、その作り手独自のスタイルや型があります。

これはプロ・アマを問わず見られます。

悪い言い方をすればワンパターンでありマンネリズムです。

あ、これ、〇〇の曲でしょ？ △△の映画は見始めて三分でだいたい分かるね。確かに、このドラマは、いかにも□□さんの脚本っぽいストーリーね。これって、あの人の作でしょ？ まだだ！ 「なんでレンブラントだって分かったの？」「背景の色、そして筆さばきかな」

創作とは自分を真似ることではないかと思えるほどです。自分を真似る。自分に似せる。自分の似姿に自分を似せる。

そうやって自分のスタイルや文体や作風ができていきます。

作品という鏡に映った自分の姿を見ていながら、自分により似せていくとも言えそうです。

鏡に囲まれ、鏡の前で自分をつくっていく

ディスコの壁には大きな鏡が張られています。ダンスのスタジオやジムもそうですが、体を動かすという行為と鏡には親和性があるにちがいません。

ナルキッソス、ナルシシズム、水面、鏡、鏡の国。鏡の中にいる自分は自分なのでしょうか。いまだに確信が持てないでいます。

(拙文「ガラスをめぐる連想と思い出」より)

自分を模倣しつづけることは、随時更新することだとも言えるでしょう。鏡に向かい、そこに映った像を眺め、その像（イメージ）を模倣しつづけながら、少しずつずれていく。そのずれが更新なのです。

このずれによる更新とは、鏡に映った自分の似姿との絶え間のない対話とも言えそうです。ああでもないこうでもない、ああだこうだ、と。

*

上で述べた「対話」がよく分かる映画として、映画「サタデー・ナイト・フィーバー」を取りあげてみます。

サタデー・ナイト・フィーバー - Wikipedia
ja.wikipedia.org

ごく普通の青年（ジョン・トラボルタ）が毎週末にディスコで踊ることで、新しい自分、またはもう一人の自分という「作品」をつくりあげていく物語です。

この映画では鏡やガラスが大きな役割をしています。青年は鏡に自分の姿を映すことで、徐々にずれていく、つまり成長していく自分を常に更新していくのです。

映画の予告編を見てみましょう。

0:57 では靴を映します。1:34 ではすれ違う女性の目の瞳という鏡に映った自分を確かめます。2:04 でのショーウィンドウというガラスの中のシャツは未来の自分の姿でしょう。3:24、まだまだみたいです。

(動画省略)

*

以下の編集された動画では、冒頭からさまざまな「鏡」と「自分の似姿」が登場します。

部屋の鏡に映る鏡像、偶像（アイドルやスターのポスター）、衣装（身につけるものは断片化された似姿です）、アクセサリー。

ディスコのミラーボール、人びとの目（瞳は鏡です）、ダンスの振りがつぎつぎと模倣されてシンクロが生じます。「似ている」が増加するのです。

(動画省略)

＊

個人的には、以下の動画の 0:15 の鏡の中で二人が視線を交わすシーン、0:43 あたりからのガラス越しの二人の動きをカメラが追う撮り方、0:55 あたりでウィンドウの外の景色（建物と枝を広げた木）が二重写しになる場面が好きです。

（動画省略）

＊

ストーリーはともかく、この映画は人が自分をつくっていく過程で、さまざまな鏡と鏡像と偶像との出会いがあることを視覚的に気づかせてくれる気がします。

「自分をつくっていく」は、「作り手が自分の作風やスタイルをつくっていく」とも重なるでしょう。

「うつる・うつす、映る・映す、写る・写す」ことで、移ると移り変わるが起きるのです。

こうした過程は、意識的であったり無意識であったりするのですが、両者がまばらでまだらに混在していると私はイメージしています。

映った像の中に「ある・いる」「他者・多者」

自分であると思こんでいる鏡の中の像には必ず他者（多者でもあります）が入り込んでいるはずで、自分を眺めることが他者＝多者を認めることでないと誰が断言できるでしょうか。

鏡の中の自分の顔や姿に自分以外の何かを認めるのは、誰もが日常で経験することではないでしょうか。

見るには必ず「ずれ」がともないます。そのずれが何とのずれなのかは、分からないと

思います。そもそも、人は自分を肉眼で見たことも、自分に会ったこともないからです。

「似ている」という思いだけがリアルにあるにもかかわらず、「何に似ているか」が不明なのです。それが自分自身をめぐっての「似ている」であると言えるでしょう。

その意味で、自と他のさかいのない世界とは鏡の中だという気がしてなりません。

鏡に映っているものは「似たもの」なのです。「何か」そのものではありません。それでいて、「何に」似ているのかが不明な「似たもの」なのです。

似ているだけが空回りしている、空振りしている。それが似ているの世界だという気がします。

*

そもそも、人は自分を肉眼で見たことはない。鏡の中の似姿が自分と「似ている」と確認することは自分にはできない。

そもそも、人は世界を目の網膜の像（影）として見ている。見ているのは影だから、世界は何か似ている。

何かに似ているのです。その何かが何なのは分からない。ひょっとすると、鏡（この鏡を比喻と取っていただいかまいません、たとえば目とか作品とか人生とか世界、です）に映っているのは「何か」の代わりですらないのかもしれない。

*

影やまぼろしが自立していないとは、私には言い切れません。ひょっとして、人は影やまぼろしにもあそばされていないでしょうか。主導権を握られていないでしょうか。

最近、そんなことが気になって考え続けています。

#模倣 # お化粧 # 写真 # 鏡 # ガラス # ジョン・トラボルタ # 映画 # ミック・ジャガー
似ている # 似せる # 作品 # 創作 # スタイル # 文体 # マンネリズム # ダンス

Moves Like Jagger (連想でつなぐ)

＊

Moves Like Jagger (連想でつなぐ)

星野廉

2023年4月22日 07:52

目次

動画を視聴しながらとりとめなく考える

like、似ている

似ている、同じ＝同一

ミック・ジャガーの舌

翻訳、似ている、別物

仕草、表情、身振り

まぼろし、幻、影

吉田修一の作品に頻出する汗

自分を模倣する、自分が模倣される

動画を視聴しながらとりとめなく考える

(動画省略)

Maroon 5 - Moves Like Jagger ft. Christina Aguilera 2010

有名な曲ですね。リリースされたのが十年以上前ですから、いまとなっては懐かしい。

いい感じで、あれよあれよしている動画。見事な編集と構成。

それにしても、オーディションに出てくる人たちの動きと顔芸がすごい。よくぞこれだけの逸材を集めました。「似ている」大好き人間の私は、あれよあれよと見入ってしまい、気がつくと終わっています。

like、似ている

Moves Like Jagger、ミック・ジャガーのような動き、ミック・ジャガー風の振り。魅力的なタイトルです。

You want the moves like Jagger

I've got the moves like Jagger

I've got the moves, like Jagger

この like の語源を調べてみると、古英語で「～の体（形）を備えている」とあり、そこから「似ている、等しい」となったとあります（ジーニアス英和辞典）。形容詞の alike もあります。look-alike という名詞だと「そっくりなもの」とか「そっくりさん」という意味になりますね。

辞書でこういう語義や説明を読むだけでぞくぞく来ます。「似ている」や「そっくり」に目がないのです。

英和辞典は、日本語で単語の意味が書いてあるのではありません。訳語集です。ということは、英語の単語を見出しに、日本語での「似ている」と「そっくり」さんが一堂に会している場と言えます。

似ている、同じ＝同一

「似ている」は目まい感をもたらします。目まいではなく、目まいに似ている目まい感ですから、心地よいです。同じや同一は——なにしろ本物であり実物ですから——緊張をもたらすことがあります。似ているは優しく包みこんでくれます。ほわっとしたものが「似ている」なのです。

(動画省略)

同期するメトロノームたち。

身振りは似ていても、あるいは同じであっても、各メトロノームは同じではない。同じ＝同一は、この世に一つしか存在しない。その意味で、メトロノームたちは同じではなく似ているのだ。

それぞれがそれぞれとしてある、またはいる。それぞれがそれ自身にそっくりなのだ。そっくりな点がそっくりなのである。

自分自身にそっくりという意味なら、同じとか同一と言えるのかもしれない。似ている、似た身振り、仕草、顔、表情が世界にあふれている。

その身振りを読む。あるいは、なぞる、真似る、まねぶ、学ぶ。または、うつす、写す、映す、撮す、移す、遷す。そうやってふえる、増える、殖える。

世界は顔で満ち満ちている。

ミック・ジャガーの舌

ところで、このPVが動画が始まってまもなく0:34あたりからミック・ジャガーのインタビューのカットが流れます。ときおり唾で濡れた舌先を出して唇を湿らすところを見るたびに、村上龍の『コインロッカー・ベイビーズ』の一シーンを思い出します。「そうか、あの舌が……」と。

ミック・ジャガーの逸話を真似たハシが舌先を鉗で切断する場面があるのです。講談社文庫の旧版（新装版ではありません）では下巻のp.67からp.69の半分までですから、一シーンとしてはかなり長いのですが、細かな描写と説明が続きます。

内容が残酷なのにもかかわらず詩的かつ正確な文章です。何度読んだか知りません。読むたびにその描写のうまさに感心して、うなってしまう自分がいます。

その一部を引用します。残酷なところはカットします。

"ハシはある実験をしようとしている。昔何かの本で読んだ。ローリングストーンズの本だ。ある偶発的な事故の後、ミック・ジャガーの声が変わった。その事故以来ミック・ジャガーはあの官能的な声を獲得した。その事故をハシは再現しようと思う。まず道具を並べる。(.....)

もう一度舌を伸ばす。目を閉じると体中が舌になったような感じだ。鋏をいっぱいにおいて舌先を挟む。冷たい刃に触れると火傷の痛みが薄れた。小さい頃乳児院でシスターに読んで貰った童話に舌を切られる雀の話があった。(.....)"

村上龍『コインロッカー・ベイビーズ』下・講談社文庫(旧版) pp.67-68・丸括弧は引用者

"He had a little experiment in his mind. He had read somewhere that Mick Jagger's voice had changed drastically after an accident he'd had, that it was actually only after this accident that he'd developed his peculiar, supersensual voice. Hashi decided to arrange the same sort of accident for himself. First he assembled his tools: [...]"

He stuck his tongue out again. When he shut his eyes he felt that his whole body had become a tongue. Opening the scissors as wide as they would go, he put the tip of his tongue between the blades. The cool metal soothed the burn. Among the stories the nuns had read him when he was a child at the orphanage was one about a sparrow. [...]"

(新装版) 英文版 コインロッカー・ベイビーズ(講談社インターナショナル) Stephen Snyder 訳 pp.261-262

日本の小説の英訳を読みながら原文の日本語を再現しようとしたことがあります。翻訳家を志していた頃の話です。文章修行のつもりでやっていました。いちばんよくやったのが、『英文版 コインロッカー・ベイビーズ』をつかっての逆翻訳です。

好きな部分を段落ごとに英語から日本語に訳して行って原文と対照するのですが、その度に村上龍の描写力に驚嘆して自分の力不足に意気消沈したのを覚えています。この小説の文章は私にとって、いまも行き詰まった時に参照する規範であり続けています。

みなさんも、お好きな日本の作家の英訳で試してみませんか。一冊まるごとやると大変なので、好きな箇所だけやるのがコツです。大げさな言い方になりますが、言語観や日本語観が変わりますよ。たとえば「村上春樹 英訳」みたいに検索すると、英語訳のリストにたどり着けます。

なお、舌——薄くてべらべらした舌については、以下の記事に詳しく書きましたので、興味のある方はぜひご覧ください。

翻訳、似ている、別物

翻訳という作業も「同じ」ではなく「似ている」を作る行為です。原文と翻訳を対照すると、似ているけどどこか違うなあと感じたり、ときにはまったく別物に感じられることもあります。ある作品の邦訳が複数ある場合には、その翻訳を読み比べると面白いのです。

昔の話ですが、ジェイムズ・M・ケイン作の『郵便配達はいつもベルを二度鳴らす』(または『郵便配達はベルを二度鳴らす』)という邦訳が、田中西二郎訳、田中小実昌訳、中田耕治訳、小鷹信光訳の四種類も楽しめた(つまり本屋に並んでいた)時期がありました。原著なしで日本語訳だけを四種類読み比べましたが、わくわくするような体験でした。若くなければできない冒険だったといまになって思います。

J・D・サリンジャーの『ナイン・ストーリーズ』(または『九つの物語』)もいくつかの訳本がありました。この作品は野崎孝による邦訳しか読んだことはありません。現在は柴田元幸訳もあるのですね。いつか柴田訳を読みたいです。

仕草、表情、身振り

上で挙げた Like Jagger ft. Christina Aguilera の動画では、ミック・ジャガーがなかなかセクシーな表情を見せてくれますね。気になったので、元のインタビュー動画を探してみました。

以下の動画らしいのですが、タイトルに、1965 とあります。私はまだ小学生でした。その息の長い活動に驚かされます。

あらためてミック・ジャガーのインタビューに見入っていたのですが、ときおり唾で濡れた舌先を出して唇を湿らす表情というか仕草。あれを見ていて既視感を覚え、それが何か思い出せなくて気になりました。

で、思い出したのですが、以前に抗うつ剤を服用していた時期に、やたらに喉の渇きを覚えて、よくこんなふうに口を閉じて唾を飲むような仕草をし、口の中を潤していたことがありました。

いまでもたまにそういう人を実際にあるいはテレビで目にすると、薬の副作用で喉が渇いているのではないかと要らぬ心配や想像をしてしまうことがあります。

人の表情や身振りや仕草や動きが、ある特別な意味を持った記号のように感じられるのは興味深いし、ある意味どきどきします。

表情も目くばせも身振りも仕草も動きも、言葉。広い意味での言葉。何かのメッセージを送ってくる。何かを連想させる。遠い記憶を呼び覚ます場合もある。そんなふうに感じます。

一言で言うと「交感」です。二言で言うと「交感」と「共振」です。交わり感じて共に振れるのです。

＊

以下の動画（1969）もインタビューのものなのですが、カラーであるために、ミック・ジャガーの表情がリアルに迫ってきます。

私が注目するのは唇の動きです。別の生き物ように感じられて、知らず知らずのうちに魅入られてしまう自分がいます。ときどき歯の間から出る舌にも目が行ってなりません。

＊

上の1965年の白黒の映像と1969年のカラーの映像を見ていると、白黒のほうが月光の下にいるミック・ジャガー、カラーのほうでは日の光の中にいるミック・ジャガーに見えてきます。

こうしたコントラストを目の当たりにすると、写真も映画もテレビやパソコンやスマホ画面の映像も幻（まぼろし）であることを思い出さずにはられません。

＊

上の動画を見ていて、ふと思いだしたのですが、アート・ガーファンクルのお口と舌がお好きな方には、以下の記事（「Lに似せられた作家」）をお薦めします。

(記事へのリンク省略)

まぼろし、幻、影

幻、月幻、日幻、電幻、幻影、影。

まぼろしは似たものであり、影だと気づきます。影ですから、そのものではありません。同じでもありません。言葉と同じです。いや言葉と似ていると言うべきなのかもしれません。

私たちは、まぼろしである影（映され写されもの）に、囲まれて生きています。

とりわけ、実物と現物のない複製の複製と、起源のない引用の引用に満ちた現在の世界は、「本物」や「本当」や「同じ」や「同一」とは出会えない状態が常態化しています。複製と引用物を手にしたり耳にしたり眺めながら、抽象（観念）として思い描くしかないのです。

抽象が「本物」を忠実に「反映」あるいは「投影」しているかどうかは過酷な賭けなのであり、それがまばらでまばらな「幻影」である可能性のほうが高い気がします。

抽象が「本物」を忠実に「反映」あるいは「投影」しているかどうかは過酷な賭けなのであり、それがまばらでまばらな「幻影」である可能性のほうが高い気がします。

現在の人は「本物」や「本当」や「同じ」になかなか出会えないために、「似たもの」つまり影に魅惑され取り憑かれ嗜癖し、「似たもの＝影＝複製の複製＝引用の引用」をさ

らにせつせと生産しつづけるといふ悪循環におちいつているかのようです。

エスカレートしていくさまは、自暴自棄にさえ見えます。

吉田修一の作品に頻出する汗

この曲について、もう一編の小説を思い出します。吉田修一の『怒り』です。冒頭近くで、鎌倉海岸の特設ビーチハウスで行われるイベントの風景が出てくるのですが、ダンスフロアでかかるのがこの曲なのです。中央公論社の単行本から引用します。

”（前略）上半身裸の胸や背中はずでに潮風と汗と砂でベトベトになっており、やはり上半身裸で踊っている男たちの間をすり抜けるたびに体が密着し、相手の汗と体温が伝わってくる。

曲がマルーン5の「Moves Like Jagger」に代わり、優馬は足を止めた。去年もこのイベントのラスト近くでかかり、盛り上がった曲だった。”

（吉田修一著『怒り 上』中央公論社 p.38）

こういう場面を読むと既視感を覚えずにはられません。この既視感が吉田の書いた小説群の魅力でもあります。吉田修一の小説では人がやたら汗をかきます。読んでいてかなり頻繁に汗の描写が出てきて目立つのです。

吉田修一の作品における汗というテーマで論文が書けそうなくらいです。吉田修一はある時期まで、全部読んでいました。吉田修一論を書こうと思っていたほどです。長編では『怒り』と『パレード』、短編集では『熱帯魚』と『女たちは二度遊ぶ』が好きです。

『怒り』は映画化されていますね。映画でも汗が噴き出ます。汗、汗、汗。そして水もよく出てきます。「吉田修一と水」というテーマで長い記事が書けそうです。

私は吉田修一の小説が大好きです。吉田修一の小説については、以下の記事（「似ている」の魅惑）で引用をまじえて論じているので、よろしければお読みください。

（記事へのリンク省略）

自分を模倣する、自分が模倣される

話を Moves Like Jagger に戻します。

YouTube で検索していてすごいと思ったミック・ジャガーのダンスというか moves の映像集を、以下に紹介します。かっこいいですね。動きが美しい。

かつてのグループサウンズや日本のロックグループのメンバーには、ミック・ジャガーの模倣から始めた人が多いという話は本当だと感じました。

(動画省略)

ああ、これは「〇〇」に似ている、と思った映像がいくつもあります（私は音楽もダンスにも無知なので、げすの勘ぐりにちがいませんけど）。

話は逆で、「〇〇」がジャガーを真似たのでしょうか。模倣されるのは、偉大なアーティストの宿命でしょう。

*

アーティスト——歌手や演奏家だけでなく小説家や作詞家や作曲家や美術作品の作家をふくむ広い意味での芸術家——が自分のスタイルを作りあげていく過程で、「他人を模倣する」（立場を変えれば「自分が模倣される」）だけでなく、「自分を模倣する」もあるのではないのでしょうか。

先行する他人のパフォーマンス（演技や演奏）や作品を模倣するだけでなく、過去の自分自身のパフォーマンスや作品を模倣するという意味です。自分自身の模倣の場合には更新とも言えるでしょう。

絶え間ない自己更新をしていかなければならない（他人ではなく自分が相手＝ライバルなのです）ことが、広義のアーティストの宿命なのかもしれません。

ミック・ジャガーがその moves =動き=振りを自分で作り出していったのか、先行する誰かの振りを真似たのか知りませんが、彼のパフォーマンスを映した数々の動画を見ていると、変容を重ねている動きが一つの身体から自然に出てきている、つねに試行錯誤=自己更新を重ねているようにも感じられます。

以下の動画「Mick Jagger on his signature dance Moves (Where Mick Jagger Got the Inspiration for His Famous Dance Moves)」は、ミック・ジャガーの moves = moves like Jagger を考える上でヒントになりそうです。

(動画省略)

#音楽# 小説# 読書# 映画# 洋楽# 村上龍# 吉田修一# 翻訳# マルーン5# ミック・ジャガー# 鏡# 影

鏡「面」画「面」顔「面」

＊

鏡「面」画「面」顔「面」

星野廉

2023年4月18日 08:05

和語ではなく、漢字、つまり大昔の中国語の文字としての「鏡」が「境」と関連しているらしいという話は、想像力をかき立ててくれます。

鏡は境。鏡は「さかい」。さらに界も付けくわえましょう。

鏡、境、界。

鏡を「きょう」という音読みではなく（つまりかつての中国語の音ではなく）、勝手に訓読みして「さかい」と読んだときのイメージは魅力的です。

さかい、きわ、あいだ、はざま、わけめ、わかれめ、しきり。

(拙文「鏡、境、界」より)

目次

薄くて枠がある膜と面

奥行きと深さをこしらえる

自分に似たものをつくる、自分のつくったものに似る

膜と面という境

増える、増やす

こっちにいながら、あっちへ行く、あっちに入る

魔法ではなくて手品

私たちが相手にしているのは、実物や現物ではなく別物

一人でいながら、同時に二人になりたい

自分の別物との遭遇

薄くて枠がある膜と面

相手の瞳の中に映った自分の姿、鏡の中に映った自分の姿。こうした姿を見たとき、人は「ふたり」を感じるような気がします。

誰が二人なのかと言うと、自分が二人だというのは現実の世界から見た考えです。

思いの中では「誰が二人なのか」はあまり意識していない気がします。ただ「ふたり」「二人いる」「二人である」という感じです。

そもそも不明なのです。その「ふたり」感は体感であり印象であって、それを言葉にすると「ふたり」なのでしょう。

現実の文法にしたがうと、「(私・自分が) 二人いる」「(私・自分) 二人である」となるのでしょう。

現実では知識がささやきます。「私・自分が二人いるように見える」「私・自分が二人であるように見える」のだ、と。

奥行きと深さをこしらえる

瞳と鏡で私が連想するのは、膜と面です。

網膜、鏡面。瞳や鏡を覗きこんだとき、見える姿は、膜や面に映った像・影なのでしょう。

薄い膜と薄い面に映っているのですから、姿や像や影も薄いはずですが。それなのに、奥行きや深さや遠さや隔たりを感じるのは、こしらえているからではないでしょうか。

ありもしないもの、あってほしいもの、あると想像しているもの、あるにちがいないもの、あるはずのもの、なければ困るもの、そうしたものをこしらえている気がします。

でっちあげるとか作るとか捏造するという言い方もできるでしょうが、とりあえず「こしらえる」にしておきます。

自分に似たものをつくる、自分のつくったものに似る

姿や像や影を映す、この薄い膜と面には枠があります。無限に広がっているわけではありません。枠は、姿や像や像をおさめるものにとってぜったいに必要な条件だという気がします。

つくられた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。みなさんがこの文を読んでいる端末にもスクリーンとか画面という枠があります。枠は限度でもあります。

映画や動画であれば時間的な枠もあります。制限時間というか作品の時間です。始まりがあって終わりがあるということになります。

つくられた影には空間的な枠も時間的な枠もあると言えそうです。
(拙文「見るために人がつくった「影」」より)

人がつくった影（比喻です）である、写真や映画や動画や音楽には「収めるための枠」があります。空間的な枠（フレーム）だけでなく、始まりがあって終わりがあるのも枠です。

＊

人のつくるものは、人に似ている。

人は、意識的にまたは無意識に、自分や自分の中にあるものに似せてものをつくっている。

さらに人は、意識的にまたは無意識に、自分のつくったものに似てくる。似る、まねる、まねぶ、まなぶ。

以前からそう思っているのですが、人は大昔に瞳や鏡や水面で体験した、不思議さ、不気味さ、恐怖、喜び、楽しさのまじった体感に嗜癖（しへき）し依存しているのではないのでしょうか。はまっていて離れられないし止められないという意味です。

自分の似姿を増やしていく、自分を増やしていく、自分が増えていく、自分に似たもの

が増えていく——意識的にまたは無意識に、そう望んでいたたり、そうした方向にむかっているのではないのでしょうか。

大切なことは、自分が変わっていくことです。意識しているのか、意識していない、気づいている、気づいていない、に関係なくです。

膜と面という境

面・めん・おも・おもて、つら
膜・まく、幕、漠、貌

水面、川面、湖面、鏡面、氷面
平面、地面、壁面
帳面、書面、画面、図面、文面

網膜、銀幕、鼓膜、粘膜、皮膜

顔面、お面、仮面、素面（すめん・しらふ）、覆面

表面、内面（ないめん・うちづら）、外面（がいめん・そとづら）、正面（しょうめん・まとも）、側面、背面、裏面、前面、断面、半面、反面、他面

場面、局面
額面
面子、体面
一面、二面、多面
面影

増える、増やす

面や膜の薄さに、ふちやへりやはしに通じる二面性を感じます。

二面性には容易に多面性に転じる気配があります。何かが増えていくときには、そこに「二つに分かれる」を繰り返していくイメージを感じるからかもしれません。

英語に見られる「bi・二、両、双、重、複、復」とそっくりなもう一つの bi・bio- に「生命、生物、生活、生」がありますが、強引にくっつけたい気持ちになります。

要するに増える・殖えるというイメージです。「二つに分かれる」を繰り返さず、つまり、bi・bi-、倍々に増えていく・増やしていくイメージなのです。

何が倍々に増えていき、何を倍々に増やしていくのかというと、自分であり、自分に似たものでしょう。

ずれながら増えるのです。ずれが増えていくのです。

瞳を覗きこんだとき、水面に屈んだとき、鏡面を見たときの体験を追っているかのようです。

こっちにいながら、あっちへ行く、あっちに入る

【影・姿・像】：うつる、映る、写る

水面、川面、湖面、鏡面

地面、壁面

【絵・像・音・声・文字】：うつす、映す、写す、移す

帳面、書面、画面、図面、文面

網膜、銀幕、鼓膜、粘膜

【思い・気持ち・心・魂】：うつる、うつす、隠れる、隠す

顔面、お面、仮面、面影、幻影

表面、内面、外面、正面、側面、背面、裏面

【場所・視点】：みる、見る、観る、覧る

場面、局面、正面、側面、一面、二面、多面

【縄張り・領土・尊厳・闘争・戦】：たもつ、とりつくろう、まもる

面子、体面

*

絵、書物、映画、ラジオ、レコード、電報、電話、テレビ、パソコン、スマホ——どれも薄くてぺらぺらな面であり膜を利用した仕組みです。

どれも「こっちにいながら、あっちへ行く」「こっちにいながら、あっちに入る」ためのもの、またはそうした気持ちを満足させるためにつくられたのではないのでしょうか。

魔法ではなくて手品

現実世界では一人でしかない人が、「二人やそれ以上になる」、「こっちにいながら、あっちへ行く」、「こっちにいながら、あっちに入る」ためには魔法ではなく手品・トリック・仕組み・仕掛けが必要なはずで。

それは「Aの代わりにAとは別のもので済ませる」ではないのでしょうか。

厚いものの代わりに薄いもので済みます。
深いものの代わりに浅いもので済みます。
太いものの代わりに細いもので済みます。
大きいものかわりに小さいもので済みます。
重いものの代わりに軽いもので済みます。
長いものの代わりに短いもので済みます。
人間の代わりに人間でないもので済みます。
人間でないものに代わりに人間のようなもので済みます。
遠いものの代わりに近いもので済みます。
(拙文「文字や文章や書物を眺める」より)

上の引用文に挙げた「何か」の代わりに、「その何かとは別のもの」で済ませるの結果が、たとえば、絵、書物、映画、ラジオ、レコード、電報、電話、テレビ、パソコン、スマホ、仮想現実、人工〇〇です。

私たちが相手にしているのは、実物や現物ではなく別物

そうしたものは魔法ではありません。手品なのです。ちゃんとタネのある手品なのです。

そのタネとは、「実物や現物の代わりに別物で済ます、別物をつかう」です。

どうしてこんなことをするのかと言えば、実物や現物を相手にするのが不可能だからです。手が届かなかったり、知覚できないという意味です。つまり物理的、あるいは生物学的な限界が人間にはあるからです。

そうなると、置き換える、または別物で済ますしか方法がありません。他に方法がありますか？

私たちは「別物としての世界」に住んでいます。

＊

大切なことなので繰り返します。

絵、書物、映画、ラジオ、レコード、電報、電話、テレビ、パソコン、スマホ、仮想現実、人工〇〇で、私たちが相手にしているのは、別物なのです。実物や現物の代用物に他なりません。

私は人に魔法ができるとは考えられません。ちゃんとタネのある手品ならできます。

そのタネとは、「代わりに」です。

一人でいながら、同時に二人になりたい

私は人に魔法ができるとは考えられません。

人の世界は薄くぺらぺらなのです。厚みや奥行きや深さをこしらえて、そう見せたり聞こえたりしているだけだと考えています。

それだけでは足りないらしく、そういうふうには皮膚や鼻や舌の粘膜で感じられたり、そんな気配を全身で受けとめる仕掛けをつくろうとしているようです。

人は、一人でいながら、同時に二人になりたいのではないのでしょうか。

人工〇〇になりたい——。

この彼岸への悲願は、「二人になりたい」ではないのでしょうか。

分身という言葉をつかってもいいです。変身でもいいでしょう。でも、自分なのです。自分でないといけないのです。だから、二人になっても自分でなければなりません。

誰かに乗っ取られたら、自分でなくなります。「自分であること」は死守しなければならないのです。

(拙文「人工〇〇になりたい」より)

自分の別物との遭遇

もし、一人でいながら二人になれるとしたら、それも魔法ではないと思います。ちゃんとタネのある手品であるはずです。

タネは大昔の瞳と水面と鏡の体験にあったのではないのでしょうか。

その体験とは、実物や現物ではなく別物（映った影・像）——他でもない自分の別物との遭遇です。

たぶん、そのときに、人は人になったのです。人は晴れて「別物としての世界」の住人になったという意味です。

*

自分の別物との遭遇ほど人にとって衝撃的な体験はなかっただろうと想像できます。その衝撃は個人レベルで、幼少期における初めての鏡体験としていまも繰り返されているのでしょう。

ただし、「別物としての世界」の住人である生活にどっぷり浸かっている、いまの人間にはその衝撃は二度と味わえない体感になっているのかもしれない。

あたりを見ましてみてください。別物（映ったものや写し、つまり大量生産された複製である製品や商品や作品、具体的には文字や映像や音声や物のことです）でないものがありますか？

というか、そもそも、それ以前にどれもが知覚された別物なのです。

#増える # 遠近法 # 複製 # 鏡 # 写真 # 映画# 言葉 # 音楽 # 動画 # 枠 # フレーム
書物 # 物語

わたし（ぼく）が二人いる

＊

わたし（ぼく）が二人いる

星野廉

2023年4月16日 07:47

瞳だけではありません。水面や鏡面を覗きこむことによっても、自分の異物化が起きます。

自分の異物化を簡単な言葉にするなら、「二人になる」、「二人である」、「ひとりがふたりになった」ではないかと思います。

(拙文「「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する」より)

目次

「わたし（ぼく）が二人いる」

「そんなことを言うと人に笑われますよ」

たとえば、本を読む、映像を見る、人の話を聞く、音楽を聞くとき

擬装、偽装、変奏、変装

他者は多者

他者は人とは限らない

他者という名の自分

ほぼすべての○○中で二人

スマホは別格

なりきる、演じる、一人二役

人の外にある外

はずれる、ずれる

「わたし（ぼく）が二人いる」

人がつねに「二人である」というのは、物理的な意味ではなく、思いとか意識についての話です。

人が二人であるという常態の根っこには、誰かの瞳や鏡に初めて見入ったときの体験がある気がします。

「自分が二人いる」とか「わたし（ぼく）が二人いる」というフレーズは、あまり口にされません。口にするとすれば、酔っ払いか、鏡を覗きこむ行為に慣れていない幼児か、正気を逸脱した人（たとえば私です）でしょう。

＊

自分が二人いるとなんとなく感じるのと、自分が二人いるのを目の当たりにするのはかなり違います。

相手の瞳や鏡やガラスに映った自分の姿は、大きな衝撃をもって迫ってくるという意味です。ある意味で一目瞭然なのです。

その衝撃は言葉にしにくいだろうと考えられますが、あえて言葉にするなら、「まさか」とか「えーっ!」とか「なんだ、こりゃ」にまじって、「やっぱり」とか「ああ、そうか」とか「はじめまして、よろしくね」といった、納得に近いものがあるだろうと想像します。

「そんなことを言うと人に笑われますよ」

「わたし（ぼく）が二人いる」は、相手の瞳の中、鏡の中、水面の上、ガラスの表面に見えます。「見る」は「見分ける」です。見ることで分けています。

「自分が二人いる」を見る」とは、こっちにいる自分と、あっちにいる自分を見て分けて初めて言える言葉です。

大切なことを言います。自分を肉眼で見たことがある人はいないのです。これからも見ることはできないでしょう。

＊

自分の目で直接見たことがない自分が、そこに映っている。それが瞳、水面、鏡、ガラスの表面を覗きこんだときの体験なのです。

薄々感じていた「自分が二人いる」が目の前に立ちあらわれている——。この衝撃的な体感と、それが心に引きおこした動揺を、人は隠します。

最初のうちはひとりで大騒ぎをしたかもしれませんが、騒ぎ立てることではないと学習するようになるのです。

「そんなことを言うと、人に笑われますよ」

このようにして、「わたし（ぼく）が二人いる」は禁句となります。

＊

とはいえ、心（思いや意識）の中では、人は二人であり続けます。心の中で人はつねに二人なのです。

この場合の「二人」とは、「自分と他者＝多者＝世界」のことだと言えば分かりやすいかもしれません。

たとえば、本を読む、映像を見る、人の話を聞く、音楽を聞くとき

ややこしそうな話をしていますが、難しく考えないでください。

本を読む、映像を見る、人の話を聞く、音楽を聞くときを思い出してください。本の文字、映像、人の声、曲からの音や声が、自分に入ってきますね。

そのときには、自分の中にそれまでの自分とは異なる「何か」がいる、またはあると感じられると思います。それが他者です。

ただし、その他者は、自分が外から受け取った他者であり、外にある他者ではありません。自分の中に映っている他者です。

自分の中で起きていることですから、自分の一部だという意味です。

本を読んだり、映像を見たり、人の話を聞いたり、音楽を聞いている最中には、それに集中しているから、自分は半分お留守になっているようなものです。

もう一方の半分に他者の影が映っているのです。自分と他者の影が、自分を半分ずつ占めていると言えれば分かりやすいかもしれません。

ものすごく簡単に言えば、それが「わたし（ぼく）・自分が二人いる」状態です。

擬装、偽装、変奏、変装

ここで話を飛躍させます。

結論から言います。

禁句となった「わたし（ぼく）が二人いる」は偽装（擬装）され、変奏（変装）されるのです。

「わたし（ぼく）が二人いる」とは、つねに自分を見ている目があるということです。意識や思いや心においての話です。

これを分裂と呼ぶこともできるでしょう。自己の相対化とか、距離化という言葉も浮かびますが、そういう厳めしくて偉そうで空っぽな言葉はここではつかいたくありません。

でも、今回はそういう言葉をつかわないでは話が進まないなので、気が進まないながらもつかってみます。

＊

主観と客観、主体と客体、個人と社会、自分と世間、自と他、部分と全体、無意識と意識――。

いま挙げたペアはどれもが、「わたし（ぼく）が二人いる」の言い換えです。要するに、擬装であり偽装であり変奏であり変装なのです。

簡単に言うと、自分と他者です。この他者は多者であり、人とは限りません。

いま述べた「他者は多者である」と「他者は人とは限らない」について、もう少し言葉を加えます。

他者は多者

他者は多者。

人は基本的に「単数の自分と単数の相手」というふうに「ふたつ・ふたり」を交互に見ながら（思いやりながら）生きています。

基本が「2・2・II」で、バトンのように「2・2・II」をつなげていって多としてとらえるのではないかと私はイメージしています。イメージですから、私の個人的な印象です。

基本が「2・2・II」で、二つに分れる枝のように、どんどん枝分れして多としてとらえたり扱うのではないかとも思っています。

いずれにせよ、人にとっての他者は、「2・2・II」を基本単位として、多者になるとイメージしています。

他者は人とは限らない

人は世界や宇宙や森羅万象を同類の人だと見なしないと、とらえられないし扱えない
気がします。

いわゆる擬人です。世界を人に擬（ぎ）すことですが、世界を人に偽（ぎ）すと言っ
ても大差ないでしょう。

擬人の根っこには言葉があるようです。手なずけるために名づけるのです。とはい
ものの、名づけてなつくとは限りません。

世界を名づけて飼いならすことはできないようです。

＊

それでも他に方法がないので、人は名づけつづけて、いまにいたります。

名づけることでとりあえず相手が定まります。名づけることは呼び掛けることでもあ
ります。

「ねえ、あなた」では心もとないのです。

「ねえ、牛さん」、「ねえ、山さん」、「ねえ、虫さん」、「ねえ、虫さんのカブトムシさ
ん」、「ねえ、海さんの波さんのさざ波さん」、「ねえ、星さんの、金星さん」

このように、言葉は大ざっぱにも細かくも言えます。日々みなさんが体験なさってい
ることです。

＊

大切なのは、言葉で名指すことによって、相手が定まり、呼び掛けやすくなること
です。

人でも、人以外でも、生きたものでも、生きていないものでも、思いにうかぶもので

も、呼び掛けることができます。いわゆる擬人です。

他者は人と限らないというのは、そういう意味です。

言葉で分けることが、見分けてたり、感じ分けたりすることを助け、うながしてくれるのでしょうか。というか、それが目的だと思います。なんとなく、言葉で分けているわけではないはずで

他者という名の自分

主観と客観、主体と客体、個人と社会、自分と世間、自と他、部分と全体、無意識と意識――。

いま挙げたペアの、前者が「わたし（ぼく）・自分」で、後者が「二人いる自分の片割れ・他者」だと言えば、分かりやすいかもしれません。

後者が「二人いる自分の片割れ」であることがきわめて大切です。「他者」と名づけ名指しているものの、自分なのです。「二人いる自分」の片方だという意味です。

「他者」という名の自分という感じでしょう。「他者」と呼んでいるだけで、自分なのです。

人は他者にはなれません。なりきったり、演じたりすることはできます。ベースはあくまでも自分なのです。この点については後で述べます。

*

同様に、客観、客体、社会、世間、他、全体、意識、世界、宇宙と呼ばれているものは、自分に映っているものであり、それは自分がとらえているものであるという意味で、自分の片割れであり、つまりは自分に他なりません。

他者という名の自分、客観という名の主観、客体という名の主体、社会とう名の個人、世間という名の自分、他という名の自、全体という名の部分、意識という名の無意識——というわけです。

ほぼすべての〇〇中で二人

忘我（エクスタシー）、酩酊（べろべろ）、めろめろ、覚醒（しゃきっ）、ぼけーっ、ぼーっ、へろへろ、朦朧、悟り（そんなことがあればの話ですけど）、夢、夢うつつ、思考中、作業中（読書・執筆・作品の制作・作品の鑑賞・スマホの閲覧）、熱中、病中、お悩み中、食事中、トイレ中、入浴中、スポーツ中、運動中、ゲーム中——。

ほぼすべての〇〇中です。

こうした状態——こうなると人の常態ですけど——において、人は「一人」と「二人」のあいだを行き来したり、「二人である」状態を維持しています。

自分を見ている目がいたり、逆に自分を忘れるほどの他者——他者という名の自分であり、自分の中に他者の影が映っているだけです——が自分を占めている場合です。

これがいちばん分かりやすい「わたし（ぼく）が二人いる」かもしれません。

スマホは別格

いまこの記事をお読みになっている方には、スマホやパソコンをつかっているときに「自分が二人いる」と言えば、リアルに分かるかもしれません。

ただいまの私がそうですが、他者に自分を乗っ取られそうにならないと、つかえませんから。

冗談はさておき、パソコンやスマホは他者と双方向的に常時つながっているので、きわめて要注意だとは言えそうです。

双方向的に他者＝多者＝世界と常時接続しているという経験に人類はまだ慣れていない気がします。

こうした端末でも本が読めるし楽曲が聞けるし、絵や写真や映画やテレビ番組を見ることができますが、これまでとはどこかが違います。双方向とネットに常時接続が鍵だという気がします。

やっぱり「電話」なのです。見る聞くだけでなく、見られているし聞かれている。それが緊張と不気味さとなって身に迫ってくるのかもしれない。

「誰に」「何に」が不明な「見られている」「聞かれている」ほど恐ろしいものはないと思います。

「ただ見られている気配」、相手という主語（主体）のない気配ほど恐ろしいものはないように思います。

（拙文「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する」より）

とりわけ、ベッドやトイレやお風呂場といった、基本的に「一人だけにいる」はずの場にも持ち込める、スマホは別格です。

人はスマホに侵されている＝冒されている＝犯されている気がします。いまに乗っ取られますよ。心と魂を。

妄想でしょうか。もうそうかも。

なりきる、演じる、一人二役

人は世界という鏡で自分の姿を見て、世界という筈（こだま）で自分の声を聞いている。

そんな気がします。

人は他者になりきっている、他者を演じている、それも一人二役で。

それは、人が他者になれないからに他なりません。なっかつもりや、なっかつ振りなら
できます。

二十四時間、他者に付き添ってもらうわけにはいきません。自分の思いや意識や心や
夢の中に他者を招待するわけにもまいりません。

外にいる（ある）他者は、自分の中に映す・写すしかないのです。移すことはできま
せん。

＊

他者とは自分の中に映ったり写ったものであり、自分の外にある外ではありません。
瞳や鏡や水面やガラスの表面に映った像や影としての自分と似ています。

要するに、他者とはもうひとりの「わたし・ぼく・自分」なのです。それになりきり、
演じることが人として生きることではないでしょうか。

人の外にある外

他者（人とは限りません、世界とか森羅万象のことです）とは、「人の外にある」「外」
です。「外にある」とは、人と離れてある、またはいるという意味です。「外」とは、人の
思いどおりにならないという意味です。

人は「人の外にある外」を遠隔操作するしかないのですが、痒いところを長靴の上か
ら搔くとか、痒いところを長い孫の手で搔くようなもので、じっさいに搔いているわけ
ではないので、搔いても搔いても搔けていないと言えます。

搔いたつもりになる、じっさいに搔いていると自分に言い聞かせる、搔いた振りを演
じる。これしか方法がありません。

＊

本を読む、文章を書く、テレビの番組やネット上の動画を見る、番組や動画をつくる、楽曲を聞く、楽曲をつくる。要するに作業中。

鑑賞や閲覧をする場合も、作品をつくる場合も、相手にしているのは「人の外にある外」です。

自分の外にあって、言葉であれば言葉独自の文法にしたがって書かれ読まれる、映像であれば映像独自の文法にしたがってつくり見られる、音声と旋律であれば音声と旋律独自の文法にしたがってつくり聞かれる。

そうさせるのは人ですが、だからと言って人が専有し、人の思いどおりになるわけはありません。

文字も文字列も、映像も、音声も、いったん発せられると人から離れてしまいます。それを発した人とは関係なく存在するのです。

つまり、人の外にあって自立しているのです。だから、機械や AI に書かせたり、読ませたり、つくらせたり、見させたり、聞かせたりできます。

人の枠の外にあり、人の思惑から外れたところにあるというのは、そういう状況を指します。

＊

作品や商品や製品は、人の外にある外だから、他の人と共有できます。いっしょに読んだり聞いたり見たり、消費したり利用したり使用したりできるという意味です。

でも、その他の人もまた、自分と同じく「人の外にある外」を相手にしていることを

忘れてはなりません。

自分の読んだり見たり聞いているものを、他の人が同じように読んだり見たり見いたりしていることはまずないでしょう。

自分の消費したり利用したり使用するものを、他の人が同じように消費したり利用したり使用することもまずないでしょう。

別人だからです。その意味は、他の人も他者です。おたがいさまだということです。

はずれる、ずれる

人がつねに「二人である」というのは、物理的な意味ではなく、思いとか意識についての話です。

現実つまり物理的には「人は一人である」、そして思いとか意識においてはつねに自分を見ている目があり、その意味で「人は二人である」。これは人としての枠でしょう。

現実の枠、そして思いや意識という枠から外れて生きることはできません。外れたとたんには人ではなくなります。

＊

「はずれる」は「外れる」と書きますが、なるほどと感心してしまいます。

「外へそれて出る・はみ出る、はまったものが外へぬけ出る・掛けたものが取れて離れる、届かない、その中へ加わらない・漏れる、そむく・たがう、基準からかけ離れる、狙いとはちがう結果になる・当たらない」(広辞苑)

「はずれる」の古語は「はづる」と辞書にありますが、これもまた興味深いです。

「はづる・外る」は「外へ出る・はみ出る・外れる」とあります (Weblio 国語辞典)。

*

おもわくははずれるもの。わくはずれるもの。
(拙文「げん・限 (うつせみのたわごと -8-)」より)

思惑は外れるもの。枠はずれるもの。

人は人としての枠から「外れる」ことはできそうもありません。でも、枠の中において「ずれる」ことならできるのではないのでしょうか。

じっさいには人が学んだり考える意欲を失ったというよりも、敵や競争相手 (敵もライバルも人です) を打ち負かすために、機械や AI に思考を委託しているように私には見えます。

(拙文「鏡、境、界」より)

いま、人の思惑が外れてきているように思えてなりません。「人の外にある外」、つまり他者をめぐっての思惑が外れてきているという意味です。

他者が世界や宇宙や森羅万象であるならいいです。致し方ないです。

でも、人が自分でつくった他者、つまり作品や商品や製品をめぐっての思惑が外れてきているのであれば、それは愚かといしか言いようがないでしょう。

その思惑だけは外れてほしくありません。とはいっても、そもそも自分でつくったさいにどんな思惑をいだいていたのか。それを把握することは至難の業だという気がします。

人がつくったものは「人の外の外である」からです。つまり、人の思惑を外れて存在しているのです。

*

おそらく人は言葉を持つことによって、他の生きものから外れたにちがいありません。生を逸脱してしまったのです。枠からずれてしまったのです。

とほうもなく、ずれてしまった。

言葉を持ってしまった以上、ずれを直すとか元に戻すなんて現実的ではありません。

でも、枠をずらすことならできるのではないのでしょうか。ずれてしまった枠をさらにずらすのです。

意識と心の中で人が二人であるなら、枠から外に出ることはかなわなくても、枠の中において枠をずらすことができる。そんな気がします。

枠の中で枠をずらすさいに用いる手段は、広義の言葉（話し言葉・書き言葉つまり文字・映像・楽曲）しかなさそうです。言葉もまた「人の外にある外」に他なりません、だからつかえないという理由にはならないと思います。

#鏡# 意識# 心# AI# 人工知能# 他者# 客観# 主観# 本# 文字# 音楽# 映像# 作品# 商品# 製品# スマホ

鏡、境、界

＊

鏡、境、界

星野廉

2023年4月15日 07:41

自分の目こそが異物なのではないでしょうか。というか、自分という異物の目というべきか。

自分という自明な存在が、相手の瞳を覗きこむことによって異物となるかのようです。瞳だけではありません。水面や鏡面を覗きこむことによっても、自分の異物化が起こります。

(拙文「「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する」より)

目次

かがみ・かげみ・ふたり

鏡、境、界

こっちとあっち、こちらとかなた、これとあれ

あなた、彼方、貴方

幻界、言界、現界、限界

思考まで外に委託しはじめたヒト

幻界も言界も現界も限界である

かがみ・かげみ・ふたり

鏡を覗きこんだときには、見られている気配を感じますが、見ているのは自分です。同時に自分は見られてもいるのです。

赤ちゃんや幼いこどもは鏡の前でびっくりするでしょうね。少し大きくなったこどもも、ときどき不思議な気持ちになるでしょう。おとなも、ときどき不思議な気分になるのではないのでしょうか。

もっとも、お化粧をするときには不思議がる余裕はないだろうと、お化粧の経験のない私は想像しています。

＊

鏡の語源については調べるのを避けていました。鏡は私にとっては気になるものにはちがいないのですが、ああでもないこうでもない、ああだこうだとわくわくしながら考えたい気持ちが先立つのです。

でも、このさい調べて見る気になって、辞書を引いたり、ネットで検索してみました。

和語だと、耀見・かがみ、影見・かげみ、神・かみ。
漢字の鏡だと境。

わくわくしましたよ。ぞくぞくもしました。

＊

私は長いあいだ、「かがみ・鏡」で「かがむ・屈む、かんがみる・鑑みる、かんがえる・考える」を連想してきました。

第一には音の類似があるからですが、それに加えて鏡の前で首を傾げたり、かがみこんだりするさまが浮かんでくるからでもありました。

人類にとって最初の鏡は水面ではないか。水面では身がかがめなければならない。そういう安易な連想もありました。

＊

それにひきかえ、「和語だと、耀見・かがみ、影見・かげみ、神・かみ。漢字の鏡だと境。」という辞書とネット検索から得た結果は魅力的なイメージを放ってくれます。

とりわけ惹かれるのは「かげみ・影見」です。

影には地面や壁面や水面に映る姿という意味もありますから、これに鏡面が加わると完璧な説明に思えるほどです。

映った姿を見るから影見。

完璧すぎて面白くない気もします。余白がなく余韻が感じられないのです。

一方で、「神」——例の御神体のことでしょうか——までに行ってしまうと、これまた真に迫りすぎて連想を楽しむ心の余裕がなくなります。

また「神」は思考停止をもたらしもします。ここでは連想ゲームをしています。ゲームに神はそぐわないと思います。

そんなわけで「神」の話にはこれ以上立ち入りません。悪しからず、ご了承願います。

鏡、境、界

和語ではなく、漢字、つまり大昔の中国語の文字としての「鏡」が「境」と関連しているらしいという話は、想像力をかき立ててくれます。

鏡は境。鏡は「さかい」。さらに界も付けくわえましょう。

鏡、境、界。

鏡を「きょう」という音読みではなく（つまりかつての中国語の音ではなく）、勝手に訓読みして「さかい」と読んだときのイメージは魅力的です。

さかい、きわ、あいだ、はざま、わけめ、わかれめ、しきり。

*

さかい、ふち、はし、へり。

「辺境」や「周縁」とも重なってきます。

縁（ふち）は縁（えん）、さらには縁（よすが）。ど真ん中ではなく、ふちにいることで、他者やよそ者と出会ったり交わりが生まれるかもしれません。

わくわくするイメージです。

鏡に近づくときのどきどき、鏡の前にいるときのわくわく、鏡を覗きこんだときのぞくぞく。これは「かがみ」という「さかい」で他者との出会いが起きるからではないでしょうか。

でも、その他者は自分でもあるのです。

こっちとあっち、こちらとかなた、これとあれ

要するに「こっち」と「あっち」のあいだの線であったり帯であったりするイメージです。

具体的には川とか道です。塀や壁かもしれません。山や海であってもかまいません。

そこが、「こちら」と「あちら」の、「こちら」と「かなた」、「これ」と「あれ」のあいだにあれば、それが「さかい」なのです。

山の向こうに、川の向こうに、海の向こうに。
山のあなたに、川あなたに、海あなたに。

あなた・彼方・貴方。「あなた」に over there と you の意味が重なっています。

境のあなたを思うことは、ひとりのひとが思いの中でふたりになることではないでしょうか。

思いの世界の中でだけ、です。現実、うつつの世界では人はずっと一人です。

人は「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する「から・空・殻」の器なのかもしれません。

人は、つねに、ふち、きわ、へり、さかいにいるとも言えるでしょう。つまり、境、界、鏡です。

境のあなた

鏡のあなた

堺のあなた

界のあなた

境界

鏡界

「世界」のイメージは、私にとって球体の地球ではなく、海の向こうにある縁（ふち）で深淵へと海水が流れていく果てのある人の世です。

縁から淵へ

淵から淵へ

あなた、彼方、貴方

人と人との間には距離があります。好きあっている同士でも一心同体は夢でしかありません。

というか、同床異夢という言い回しの本来の意味とは違いますが、いっしょに寝ていても二人が同じ夢を見ることなどまずないでしょう。

同じ床にいる二人は寝入った瞬間に一人になります。夢は徹底して一人だけの世界なのです。同床同夢も異床同夢もかなわない夢でしかありません。

たとえ、恋人同士や夫婦間や家族間であっても、距離は避けられません。誰もが基本的には「別人」という意味での「他人」同士です。それでいて、つながっているし、似ていたりもします。

とはいえ、いや、だからこそ、愛していればいるほど、その距離を埋めたくなるのが人間でしょうね。

＊

「あなた」という日本語の言葉には、「遠く離れた愛しく近しいあなた」という意味が込められています。

あなたは近くて遠い、まぼろし。美しく哀しい言葉——。

ひらがなの「あなた」を「彼方、貴方」と表記すると、その美しく哀しい意味が立ち現れる。まるで魔法のようではありませんか。

次にその文字を口にすると、今度は二つの意味がいっしょになる。

音でいっしょなのに、文字ではべつ。

生きているとしか考えられない言葉の身ぶりや表情。そんな文字と音のある日本語が私は好きです。

幻界、言界、現界、限界

幻界、思いの世界

言界、言葉の世界

現界、現実の世界

この三つの界のうち、「幻・げん・まぼろし・思い」と「言・げん・言葉」の界では、人は「一人から二人になる」ことができます。思いの中で想像や空想することと、言葉をいじることで二人になります。

二人とは、自分と他者=多者=世界のことです。

＊

思いの中で「二人になる」というのは、ぼーっと空想していたり（夢うつつ）、夢を思いだしたり思いうかべることだ言えば、イメージしやすいと思います。

言葉の世界で人が「二人になる」というのは、人が言葉を現実や思いの鏡や写しと見なしていると言えば、分かりやすいかもしれません。

例を挙げます。

私は蝶だ。私は空を飛べる。あの人は私を愛している。世界は私のものだ。私は決して死なない。私は自由に時空を移動できる。

このように言葉をつかうと何とでも言えます。何とでも書けます。自分という枠を出て、二人になっているのです。二人とは、自分と他者=多者=世界のことです。

＊

つまり、言葉はいじりやすいのです。一方で、思いはなかなか思いどおりになりません。現実はずっと思いどおりになりません。

夢を忘れていました。夢もなかなか思いどおりになりません。夢で自由に動けたら、それは現実です。

思い、現実、夢——どれもままならないのです。それにひきかえ、なんとでも言える言葉は、なんといいじりやすいことか。

だから人は言葉に嗜癖し依存するのです。この場合の言葉には、話し言葉と文字だけでなく、映像や楽曲も含まれます。

思考まで外に委託しはじめたヒト

いじりやすい——創作、編集、加工・改ざん、配信・投稿、複製、再現・再生、拡散、保存——のが広義の言葉の特徴です。人以外（機械や AI）に外注・委託することもできます。

人以外（機械や AI）に外注・委託することが可能なのは、広義の言葉（話し言葉・書き言葉つまり文字・映像・楽曲）が「人の外にある外」——人を離れて独自の文法を持ち自立して人の思いどおりにならない——だからに他なりません。

（※「人の外にある外」である、広義の言葉（話し言葉・書き言葉つまり文字・映像・楽曲）が、人の思いを離れた「独自の文法」を持っている点がきわめて大切です。独自の文法を持っているからこそ、機械や AI でも扱えるのです。言葉は人の専有物ではない（専有物でなくなったのではなく、そもそも人を離れている）、という意味です。）

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

だから、機械や AI にも文章が書けるのです。書いていると、書いているように見えるのさかいはないのです。さかいがあるのは人においてだけであり、さかいはおそらく外にはないのです。

（拙文「素描、描写、写生」より）

最近では、人は言葉の制作だけでなく、思いすらも、人以外（機械や AI）に外注・委託するようになってきたようです。思考まで外に委託して、ヒトはいったい何をするのでしょうか。

文字どおりの「ホモ・サピエンス」ではなくなります。どうせあいつらには負けるからと、学んだり考える意欲を喪失したのでしょうか。

*

じっさいには人が学んだり考える意欲を失ったというよりも、敵や競争相手（敵もライバルも人です）を打ち負かすために、機械や AI に思考を委託しているように私に

は見えます。

要するに、自分のため、または自分の仲間や身内のために、心や魂までヒト以外に託そうとしているようなのです。

ただし、その結果がどうなるかが必ずしも分かっていないし予測できていないようにも見えます。

思考をヒトの外部に全面的に委託するという状況はいま始まったばかりなので、致し方ないのかもしれませんが、きわめて危険だという気がしてなりません。

そう思う一方で、敵やライバルを打ち負かしたり殺めるために、自分の手を汚さず、また労を省くために、道具（武器を含む）や機械をもちいるというのは、人類の常套手段であり、人類の歴史そのものだったことを考えると、妙に納得してしまう自分がいるのも確かです。

人類には学習機能が備わっていないのかもしれませんが。というか、それが強みなのかもしれません。

幻界も言界も現界も限界である

話を戻します。

いじりやすい言葉ですが、いったん口にしたり、文字にすると、一瞬だけ、人はそれを信じます。信じないことには、話すことも聞くことも、書くことも読むこともできないからです。

嘘だ。馬鹿らしい。空想にすぎない。妄想だ。訂正しよう。書きなおそう。いや、それとは真逆だ。

こうした評価や判断は、いったん言葉を信じたあとの後付けなのです。そのままずる

ずる信じつづけたり、言ったことや書いたことや聞いたことや読んだことを忘れる場合もあります。

つぎからつぎへと話さなければならない、書かなければならない、聞かなければならない、読まなければならない。これが人の現実です。人は忙しいのですが、ますます忙しさに拍車が掛かっているのが現在でしょう。

＊

現実の世界だけで、人は一人になります。

しかも思いどおりにならないし、言葉のようにいじることもできません。

とはいうものの、人は一つの界にとどまっているわけではなく、行ったり来たりを繰り返しているだろうし、一度に二つの界にいることもある気がします。

幻界、現界、言界、このうちのどれがベースにあるのかは、人それぞれだという気がします。

＊

「行き来する」という言い方は言界の慣用的な言い回しであって、私としては三つの界は濃淡としてあるようにイメージしています。グラデーションとか「まだら」とか「まばら」という感じです。

三つの界は別個にあるわけではないという意味です。その意味で各界が、さかいにあり、さかいである、つまり限りがある限界なのです。

幻界も言界も現界も限界である。
げんかいもげんかいもげんかいもげんかいである。

音にすると同じです。そもそも別個にあるわけではないので、分ける必要はないのです。

あるときには、ある界の濃度が高くて、別の界の濃度が低いというぐあいです。三つの界が混在しながら、それぞれの濃度が変化しているという言い方もできそうです。

この辺のイメージも人それぞれでしょう。お好きなイメージで想像してみてください。

あほらし、付き合い切れんわ、とお感じになる方は、忘れてくださいね。

#鏡#まぼろし#幻#言葉#現実#漢字#日本語#和語#大和言葉#多義性#両義性#AI#人工知能

「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する

＊

「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する

星野廉

2023年4月14日 07:50

目次

「連想でつなぐ「2・二・II」

ひと・ひとり・ひとみ・ふたり

ひとりがふたりになった

瞳、鏡、見る、見られる

見入る、魅入る

目の中の目

ただ見られているだけ

自分の目という異物

「連想でつなぐ「2・二・II」

ところで、どうして私が「二人になる」にこだわるのかというと、人は思いの世界で常に「自分を見ている」からであり、そのときの人は意識の中で二人になっていると考えているからなのです。

(拙文「人工〇〇になりたい」より)

意識の中で二人になっている——夢と同じです。夢の中で、人は「自分の出ている夢」をもう一人の自分の視点から見ている気がします。

夢と、夢うつつと、うつつ（現実）の思いは、緩やかにつながっている。たぶんグラデーション状に連続している。そんなふうに私には感じられます。

とはいうものの、あくまでも以上はどれもが「思い」の中での話であり、現実には人は「一人である」という枠の中にいるわけです。

思いの中では自由に出ているが、現実の中では決して出ることのできない枠であるからこそ、「一人である」という枠にこだわっているとも言えそうです。

「二人になる」と「二人である」は、私にとってオブセッションなのです。だから、「2・二・II」が気になるのでしょう。

*

「数・かず・すう」の「2・二・II」と、その影とも言える、文字や記号である数字の「2・二・II」は私の中では異なります。

前者（数・かず）は見えない抽象で観念であり、後者（数字）は見える具象であり具体的なものとして立ちあらわれています。後者は私にとって象形文字みたいなものです。

ややこしいことを言いましたが、簡単に言えば「二・に」や「ふたつ・二つ、ふたり・二人」を出発点にして連想ごっこをやっている、それだけです。

「連想でつなぐ「2・二・II」」ですから、かならずしも数学や語源でつないでいるわけではありません。数学や語源よりも個人的なイメージで言葉と思いと世界を掛けて遊んでいます。

要するに掛け詞です。

「に」「ふたつ」「ふたり」と来ると、「ふたまた・二股」なんて連想します。

「また・股」の「また」は、「また来たよ」の「また」と似ています。辞書で調べれば、ひょっとしてつながりそうな気配がしますが、このまま連想に任せましょう。

（拙文「連想でつなぐ「2・二・II」」より）

以上のような調子でやっています。

楽な気持ちで読んでいただければうれしいです。

ひと・ひとり・ひとみ・ふたり

人はひとりです。「うつつ・現」、つまり現実の世界ではひとりです。物理的にひとりであると言ってもいいでしょう。

人は目の前にいる別の人の目の中に人を見ます。自分のことです。

相手に目を近づけて、つまり間近で見ている場合には、相手の目に映っているのは自分です。

いま「相手の目に映っている」と言いましたが、正確には「相手の瞳に映っている」でしょうか。瞳、瞳孔、虹彩、水晶体、角膜というふうに深い入りはしないでおきます。

私は連想を楽しみたいからです。連想は個人的なものですから廉想という感じです。

＊

瞳に人が映る。

こう言うと、「ひとみ・瞳」の語源には日止視と人見の二説あり、なんて話を思いだしますが、語源には「正しい」「正しくない」という、きな臭さがあるのでどっちでもいいというのが私の意見です。

人見が分かりやすいですね。間近で相手の「瞳・鏡」を覗きこめば、ひとりの人が見える。

それが「自分・私・I・eye・おめめ・meme・ミーム・MEM（フランス語）・……自身・同じ・同一」という人だという具合に話は簡単です。

連想しやすいということになります。

嘘だと思ったら、鏡を見てください。そこには鏡瞳があるはずです。そこには自分あ

なた= I eye という他者自分=眼 meme が映っているはずです。

ちなみにだから何？、ひとみは人見から来たという説もあるみたいですか？。さらに言えばもう、やめたら？、虹彩は英語で iris ですがふーん、iris の二つの ieye の点が目に見えませんか？ 目が点ですわ ぜんぜんそうは見えませんが鏡を前にして乱れて（分裂して）失礼しました。

（拙文「異物を入れる、異物を出す」より）

ひとりがふたりになった

太古の人や、いまの赤ちゃんやこどもが、誰か相手の瞳を覗きこんだときを想像しないではいられません。

単純に考えましょう。

ひとりがふたりになったという気がするのではないのでしょうか。

自分のことです。自分のことなのですが、そこに映っているのは自分と意識されないかもしれません。

ひとりがふたりになった——この場合の「ひとり」と「ふたり」を見ている（感じている）目があるのです。

その目が自分でしょう。でも、その目はこちら側にあって、あっちにはないはずなのです。

*

そもそも自分という意識がないかもしれません。

いまの人が意識する自分と、太古の人が意識する自分、または赤ちゃんやこどもが意識している自分が同じだと言う勇氣は私にはありません。

同じだと言うのは無謀ではないのでしょうか。抽象ではないのでしょうか。

＊

ひと・ひとり・ひとみ・ふたり

ひと、ひとり、ひとみ、ふたり。

人一人が、人の瞳に人を見て、二人になる。

人が、ひとと読まれ、ひとりと似ていて、ひとみと重なる。人（ひと）には、ヒト、世の中の人、他人、あなた、おとな、特別な関係にある人、人柄、人の気配という語義がある（広辞苑）。

そんな「人・ひと」と言う言葉が私は好きです。

瞳、鏡、見る、見られる

人の瞳に人が映る。

人（相手）の瞳に人（自分）が映る。

鏡を覗きこんでも、似た体感を得ることができます。

面と向かって相手の瞳を覗きこむよりはリラックスできるはずですが。誰かが息の掛かるほどそばにいては緊張するでしょう。

なにしろ、自分ではない人の目の中にある瞳に自分が映っているのです。しかも見られているわけです。

誰に見られているって、相手と、その相手の瞳の中にある自分の目に、です。

不気味です。不気味なのですが、人はそういう不気味を感じないように学習して生きているようです。さもないと、心が壊れてしまうからでしょう。

見入る、魅入る

相手の瞳に魅入る。

鏡に見入る。

「見入る」は、「覗きこむ」とか「じっと見つめる」ことです。

一方で、「見入る」は「魅入る」、つまり「(執念深く) 取り憑く」「たたる」という意味にもなると辞書にはあります。

目の中の目

相手の目の中の瞳に見入れば、自分の顔や姿が映っているのですから、その顔には目もあるはずです。

目の中の目。目の中に見える目。眼の中に見える目。

見入るは見入られるであるわけですが、あっちで見ているのは、相手の目とその中に映っている自分の目ということになります。

やっぱり不気味です。

しかも、目は一对、つまり二つあるのですから、倍倍、bi- (2) (E2 で 4 です。

不気味の倍増。

あっちに映っているほうではなくて、こっちにある自分の目も数に入れなければなりません。忘れていました。

さらなる不気味の倍々。bi- bi-, bye-bye, baby。

*

それぞれの目に映った目が、さらに……。まるで鏡地獄のようです。

江戸川乱歩の短編に『鏡地獄』があります。大好きで何度も読みました。

江戸川乱歩 鏡地獄

＊

なんだか、取り憑かれた気分になってきました。何に取り憑かれているのでしょうか。目に、瞳に、「映る」に？ 自分に？ 相手に？

分かりません。

取り憑かれたという気配があるだけなのです。主語のない気配ほど不気味なものはありません。

ただ見られているだけ

「魅入る」に話を戻しましょう。

「魅入る」の例文としては「悪魔に魅入られる」（広辞苑）や「死霊に魅入られる」（デジタル大辞泉）が見えますが、穏やかではありません。

とはいうものの、「ただ見入られている」とか「ただ見られている」だけでも、私にはじゅうぶんに不気味です。何に（または誰に）見られているのか不明な「見られている」の事です。

「ただ見られている気配」、相手という主語（主体）のない気配ほど恐ろしいものはないように思います。

それが、瞳や鏡を覗きこんだときの気配ではないでしょうか。

＊

それが、瞳や鏡を覗きこんだときの気配ではないでしょうか。

考えて、理屈が浮かんで、それで解決するとか解消するといったたぐいの不気味さではないのです。

気配とは体感なのですが、「ただ見入られているだけ」という気配は、どの知覚で感じているのかさえ不明なのです。

目、匂い、音？ 声、味、肌や皮膚？

特定できない体感による気配——。

主語・主体・相手のない気配なんですから。名づけようがありません。名づけて手なずけることもできない。名指して、指で指し、尖ったものを持ってきて刺すこともできないのです。

それが「見られる」です。

自分の目という異物

整理しましょう。

そもそも覗きこんだのは自分です。自分が相手の瞳や鏡を覗きこまなければ、こんな変な事態におちいらなかったわけですから。

ということは、出発点は自分の目という理屈になります。言い換えると自分が見ていることに原因があります。

自分の目こそが異物なのではないでしょうか。

というか、自分という異物の目というべきか。

*

自分という自明な存在が、相手の瞳を覗きこむことによって異物となるかのようです。

瞳だけではありません。水面や鏡面を覗きこむことによっても、自分の異物化が起こ

ります。

自分の異物化を簡単な言葉にするなら、「二人になる」、「二人である」、「ひとりがふたりになった」ではないかと思います。

*

自分の異物化というと、いかにもおどろおどろしげですが、誰もが日常的に体験していることなのです。

鏡を覗いて見てください。誰かの目を間近で見てください。人の写っている写真でもいいです。さらに言うなら、テレビでも映画でもネット上の動画でもかまいません。

そこに映っているのは他・多であり自・二でもあるのです。

そこには異物化した自分が映っています。誰もが「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来しているのです。

#見る # 目 # 瞳 # 鏡 # 夢 # 現実 # 連想 # 江戸川乱歩 # 異物 # 顔

人に動物を感じる時（連想でつなぐ）

＊

人に動物を感じる時（連想でつなぐ）

星野廉

2023年4月2日 08:40

（※この記事は連想でつなげた長い記事なので、見出しごとに独立してお読みいただくこともできます。）

目次

動物、生物、宇宙人

知覚、五感、距離

痛みを推しはかる

身びいき、擬人

作意、作為

意識的な擬人、無意識の擬人、深層的な擬人

鏡の中の話だと意識する、意識しない

ひと休み

恥ずかしさ

プライベートな行為、プライベートな仕草

においを嗅ぐ、鏡を覗きこむ

テリトリーをおかす

近さ、親しみ

食う、喰う、食べる

動物、生物、宇宙人

動物園に人はいません。いるにはいるけれど、常時檻や柵の中にはいません。それは人が自分たちを動物と見なしてないからでしょう。

生き物や生物やいきものはどうでしょう。人は自分たちを生き物や生物やいきものと考えているのでしょうか。もちろん、これは日本語の語感の問題ですけど。

宇宙人はどうでしょう。地球も宇宙の一部であるはずですよ。

知覚、五感、距離

目を向ける・見入る、耳を傾ける、嗅ぐ、ふれる・なでる、味わう・食感を楽しむ——この中で私がいちばん動物を感じるのは「嗅ぐ」です。人のことです。

視覚、聴覚、嗅覚、触覚・触感、味覚・食感のうち、視覚、聴覚、嗅覚では対象との間に距離が必要です。

触覚・触感と味覚・食感では、相手と接触していなければなりません。「する」側にも「される」側にも、「する」と「される」が同時に起きています。つまり、双方向的なのです。

痛みを推しはかる

一方的に、相手に知られずに、見る、聞く、嗅ぐ場合は多々あります。

【※あとで触れますが、この辺のことにとても意識的だった作家は川端康成だと思います。とりわけ『雪国』（ソフトでマイルドです）と『眠れる美女』『片腕』（ハードでワイルドです）です。】

「触れる・撫でる」と「味わう・食感を楽しむ」最中となると、もし相手に意識や意思があれば、されている相手は「されている」と感じているでしょう。

「撫でる・撫でられる」は想像しやすいですが、「食べる・食べられる」を想像するには心の痛みを感じます。たとえ、その行為の前に「いただきます」と手を合わせたとしてもです。

あれは相手の魂を鎮めるためではなく、自分の気持ちを鎮めるための儀式だと私は受

けとめています。

相手が自分に「うつってくる（入ってくる）」と感じているからです。だから、二つの手を胸の前で合わせるといふ象徴的な動作をするのです。

亡くなった人を送ったり、亡くなった人と日々挨拶をするのと同じ仕草をしていますが、その意味あい異なります。なにしろ、この場合には相手はこれから自分に「入ってくる」のです。（※諸説あり）

いただきます。合掌。

もっとも相手の身になれば、そんな言葉や動作は慰めにもならないでしょう。相手が人の場合です。

相手が人以外の動物や生き物や宇宙人の場合だと、「食べる」側の人には心の痛みはあるのでしょうか。ただ相手の「痛み」（苦痛）だけがある気がします。

こればかりは、自分がされてみないと分からないでしょう。思いやる、おもんばかり、忖度する、推しはかる、しかなさそうです。

身びいき、擬人

思いやる、おもんばかり、忖度する、推しはかる——これが得意なのは人かもしれません（人の思いこみである可能性が濃厚ですけど）。ただし、対象は人に限られるようです。

正確に言うと、対象は人というよりも、各人にとっての仲間や肉親でしょう。自分を含めた周りを見ているとそう思えます。どうしても人は身びいきします。

人は自分以外の動物や生き物だけでなく、無生物にまで「思いやる、おもんばかり、忖度する、推しはかる」心に向けることがあります。

人形、キャラクター、物語や小説や映画の登場人物（人物とは限りません）、アイドル（本人や実物ではなく映像や音声として立ちあらわれます）といった生きていないものにも、人は「思いやる、おもんばかる、忖度する、推しはかる」という行為でのぞむ場合が多々あります。

いわゆる擬人、つまり人以外のものを人に擬すわけです。

作意、作為

生き物の生態を撮影や録音したテレビ番組やネット上の動画や写真を見るのが好きです。好きなのですが、手放しで楽しめない自分もいます。

撮影する側の視点や撮影者たちの存在を、つい考えてしまうのです。

これだけ接近した映像はどうやって撮ったのだろう。望遠だろうか、それとも接写か。この場面は長時間どころか長期間にわたってカメラを向けないと撮れないはずだ。どこで宿泊していたのだろう。お金もかかっているにちがいない。

そもそも、どういう意図があってつくられた映像であり企画であり番組なのだろう――。

こういうことを考えたり疑うようになると切りがありません。「疑心暗鬼を生ず」なのでしょうが、オブセッションになります。被害妄想に似て、しつこくてなかなか去りません。

意識的な擬人、無意識の擬人、深層的な擬人

生き物の生態を撮った番組では、ときどきショッキングな映像が流れます。前もって断りのテロップが出ることもあります。

「食べる・食べられる」は、たしかに見ていて気持ちのいいものではありません。

「食べる・食べられる」の場面を見ているとき、私はきまってヒトを連想します。

そうした行為がヒトの行為と重なるのです。雑食性のヒトは驚くほどいろいろな生き物を食べています。飼育や栽培までしています。

おそらく無意識のうちに、ヒトの行為と重ねようとして撮っているのではないのでしょうか。これは私の妄想でしょうけど。

直接、ヒトの行為を撮れないから、代わりにヒト以外の生き物たちのそうした行為を写しているとしか思えないのです。私の妄想でしょうけど。

鏡の前の体験のようです。ヒト以外の生き物の生態という鏡に、ヒトが自分の生態を「撮し・写し・映し・移し」見ているという意味です。

これもまた、生き物に自分たちを見る、つまり擬人なのでしょう。私は、意識的な擬人、無意識の擬人、深層的な擬人があるのではないかと考えています。

鏡の中の話だと意識する、意識しない

人は森羅万象に自分を見ているのではないか、意識的または無意識に擬人をしている、つまり自分自身を映しているのではないかと私は考えています。

たとえば、人形、キャラクター、物語や小説や映画の登場人物（人物とは限りません）、アイドル（映像や音声として立ちあらわれます）といった生きていないものを、人は人に擬します。

いま挙げた例は、どれもが人のつくったものであることに注目したいです。そもそも自分に似せてつくったのですから、一種のやらせなのです。

この場合には、人はある程度自分の擬人行為を意識しています。

ところが、自分のつくったのではないもの、たとえば生き物の生態を撮るとなると、とたんに自分が自分の視線で見ていることを忘れてしまいます。

まるで「ひとごと」のように見ているのですが——自分のことは棚に上げているとか、メタな視座に立ったつもりなのでしょう——、じつはそこに見ているのは自分自身だということに気づかないのです。

*

どういうことかと言いますと、現実や世界をそのまま写し取ることなどは不可能なのです。

言葉による描写であれ、映像をつかっただけの撮影であれ、必ずそこには枠があり——空間的なフレームと、始まり終わりという時間的な枠——、視点があり、色づけがあり、意味付けがあり、人工的な音響効果があり、筋書きがあり、テーマやメッセージがある、つまり写し取ったようで、じつは演出された作りものだという意味です。

描写や写生ではなく作画や創作だとも言えるでしょう。それなのに現実を裸眼で直接見て、それを写していると錯覚しているのです。

自分の見ているのは枠のある鏡の中の像であり、そもそも自分が鏡の中を覗きこんでいること自体を忘れてしまっているとも言えます。

言語——言語の基本は「Aの代わりにAとは別のものを見る」です——を持ってしまったために、不自然と反自然という生き方を選んできた人間は、自然を自然に見る術(すべ)を失ってしまったのです。

ひと休み

この辺でひと休みしましょう。

小説と映画と本を紹介します。共通するテーマは、嗅覚と「におい・匂い・臭い・欲

求・欲望」です。

- ・『香水—ある人殺しの物語』（パトリック・ジュースキント著・池内紀訳・文春文庫）
- ・映画「香水 ある人殺しの物語」
- ・『においの歴史—嗅覚と社会的想像力』（アラン・コルバン著・山田登世子/鹿島茂訳・藤原書店）

私は映画が苦手なので、映画は予告編しか見たことがないのですが、小説と本はぞくぞくしながら読んだ記憶があります。

お勧めします。

＊

文春文庫 香水—ある人殺しの物語

18世紀のパリ。孤児のグルヌイユは生まれながらに図抜けた嗅覚を与えられていた。真の闇夜でさえ匂いで自在に歩める。異才はやが

www.kinokuniya.co.jp

香水 ある人殺しの物語 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

パフューム ある人殺しの物語 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

においの歴史〈新版〉 嗅覚と社会的想像力 著者：アラン・コルバン 翻訳者：山田登世子・鹿島茂 藤原書店

「嗅覚革命」を活写

www.fujiwara-shoten-store.jp

『新版 においの歴史—嗅覚と社会的想像力』（藤原書店） - 著者：アラン・コルバン 翻訳：山田 登世子, 鹿島 茂 - 鹿島 茂による書評| 好きな書評家、読ませる書評。ALL REVIEWS アラン・コルバン『新版 においの歴史—嗅覚と社会的想像力』への鹿島茂の書評。《にお

い》という、必ず思い出すのがヴァン・
allreviews.jp

恥ずかしさ

「動物」園に人はいません。いるにはいるけれど、常時檻や柵の中にはいません。それは人が自分たちを動物と見なしていないからでしょう。

目を向ける・見入る、耳を傾ける、嗅ぐ、ふれる・なでる、味わう・食感を楽しむ——
この中で私がいちばん動物を感じるのは「嗅ぐ」です。

視覚、聴覚、嗅覚、触覚・触感、味覚・食感のうち、視覚、聴覚、嗅覚では対象との間に距離が必要です。

*

人は自分が見たり聞いたりしている場面を恥ずかしがることはあまりないでしょう。何を見たり聞いているかにもよりますが。

さわったり撫でたりするとなると、その対象次第では恥ずかしがるにちがいはありません。

味覚・食感については会食という習慣がある以上、個人差はあってもあまり恥ずかしがるだろうとは思えません。でも、私みたいに恥ずかしがる人間が少数ながらいます。

恥ずかしいと感じる行為が私にはわりと多いようです。

プライベートな行為、プライベートな仕草

においを嗅ぐ行為はどうでしょう。

「におい・匂い・臭い」「くさい・臭い」

においは生理現象と深く結びついていますね。汗、唾、腋臭、ガス、排泄物、体液……。(私はこういう文字を書いたり見ているだけで汗が出てくるタイプです。)

においを嗅ぐとき、人はその対象から目をそらして宙や空(くう)に、または斜め下に眼差しを向けることがあります。目を閉じることもあります。

私はそうした仕草にきわめてプライベートな「なにか」を感じてしまいます。そういう仕草をしている相手を凝視できないという意味です。見てはいけないものと言えいいのでしょうか。

そんなとき、私はその人に動物を感じます。同時に自分にも動物を感じます。

なぜなのかは、あまり考えたことがありません。考えないようにしているみたいです。

においを嗅ぐ、鏡を覗きこむ

とはいうものの、もう少し「におい」と「嗅ぐ」について話してみます。

思い出したことがあるのです。

川端康成の『雪国』の最初のほうに出てくる、ある仕草なのです。

透明ではなく透明感のある文体として、川端康成作『雪国』の冒頭近くの文章を挙げてみます。特に取り上げたい例は、主人公の島村が、曇った汽車の窓ガラスに指で線を引く場面なのです(……)

——汽車の中で主人公の島村が左手の人差し指をいろいろ動かしたり、その指にまつわる記憶にふけったり、指を鼻につけてその匂いを嗅いでみるという、かなりエロティックな描写(猥褻な感じさえする)の後に、向かい側の座席の女(娘)が窓ガラス(手で押し上げて開ける窓)に映る。窓ガラスが鏡になるのだ。その窓ガラスの向こうに夕闇の中の景色が流れていく。窓という鏡に映った娘。窓の向こうに流れる風景。娘の顔に、野山のともし火がともる。映画の二重写しのように。

ガラスが透明であることとガラスが鏡でもあることをこれほどまでに、美しく象徴的に描いた文章はほかにない気がします。エロチックで濃密な筆致の直後に、こうした透明感のある描写を持ってくるところが、川端の凄さです。(……)

(拙文「「うつる」でも「映る」でもなく「写る」より)

この場面では、主人公の島村が汽車の窓にうつった少女を盗み見している、つまり少女は見られていることを知らないという点が決定的に大切だと思います。

盗み見している人物の行為を、私たち読者が「盗み見する」という構造になっているのです。

この小説の面白さはストーリーだけでなく「する」「される」の関係性だと私は理解しています。

『雪国』という作品は鏡、いやむしろ二重写しになっている汽車の窓なのです。ストーリーだけに還元するにはもったいない細部に満ちています。

*

このように、においを嗅ぐ行為をしている人が、きわめてプライベートな空間にいるのを感じさせる場面と仕草だと思います。

そもそも、においを嗅ぐときには、人はたった一人で自分の世界に入りこんでいるようです。視覚や聴覚にくらべると、他人と同じ感覚を共有するという感じではない気がします。

鏡と重なるのです。鏡の前において鏡を覗きこむ人もまたきわめてプライベートな空間にいると私は感じています。

あまり他人に見せる姿ではないのです。その姿を見た他人もそのまま見つづけるのを遠慮すべきなのです。

テリトリーをおかす

こんな記事を書いているのですから、もっと踏みこんでみます。

誰かがにおいを嗅いでいる気配を感じるとき、私は相手のテリトリーをおかした気分になるのかもしれませんが。

テリトリーで思いだしましたが、私は他人の家に入ることに特別な思いをいただきます。

そもそもふだんから他人の家に入ることがめったにないためか、私は他人の家に入ると恥ずかしさと戸惑いを覚えるのです。

このこだわりは、発汗、口の渇き、動悸、息切れ、過度の緊張、沈黙という形であらわれます。こういう言葉を書いただけで、もうそうになっています。

私が他人の家に入ってまっ先に感じたり意識するのは、その家のおいんです。湿度をともなった、においなのです。

家の中の様子にはぜんぜん目が行きません。においが私を襲ってきます。

近さ、親しみ

誰かの姿や仕草を見てその人に同化する。

誰かの声や話を聞いていて、その人が自分に入りこんでくるような気分になる。

誰かと肌で接していて、その人を皮膚で感じてうっとりする。

誰かのにおいを嗅いで、その人に近さや親しみや切なさを覚える。

*

視覚・像、聴覚・音声、触覚・触感、嗅覚・におい——視覚がいちばん抽象度が高く、触感とにおいがいちばん動物的（悪い意味ではなく文字どおりに取ってください）だと私には感じられます。

いま述べたのは相手が人の場合ですから、味覚と食感はさておきの話ですが、あえて言わせてもらいますと、「食べてしまいたいほど」誰かを愛しているという言い回しは意味深というか、きわめて「深い」と思います。

人の深層と真相を突いた表現ではないかという意味です。

においに対する人の思い入れは、食感に至れないための代償だと言え、言いすぎでしょうか。

ひょっとすると自分の中に入れてしまいたいのかもかもしれません。美味しそうではなくて、愛していればの話です。

でも、においだけで我慢するのは。もしそうであれば、そこで踏みとどまっているのは、人間だからでしょうか、ヒトという名の動物だからでしょうか。

食う、喰う、食べる

ところで、宇宙人の目からは、この星に棲むヒトという動物同士は共食しているように見える気がしてなりません。

地球規模で考えると、たぶん人は人を食っているようです。とほうもないアンバランスとか格差とか搾取のことです。

少数が飽食し多数が飢えていると言えれば分かりやすいと思います。

人は人を食う。喰らう。食す。いただく。食べる。

食べちゃいたい。

人は人を食う。「食べてしまいたいほど」相手を愛していなくてもです。それは比喻ではなく、人の現実なのかもしれません。

人を食った話に聞こえたら、ごめんなさい。

*

匂わせや、ほのめかしの多い、長い記事をお読みいただき、ありがとうございました。

#五感 # 知覚 # 視覚 # 聴覚 # 嗅覚 # 触覚 # 味覚 # におい # 匂い # 食べる # 動物
ヒト # 生き物 # 鏡 # 川端康成

人工〇〇になりたい

＊

人工○○になりたい

星野廉

2023年3月24日 07:52

目次

お化粧

象徴的儀式

自分と鏡の中の似姿

似姿、写し

フィクション

人工、人造

人形

身体

逸脱、倒錯

二人になる

なりきる、なる

お化粧

私は経験はないのですが、鏡の前で化粧をするさまを思いうかべてみます。鏡の中にある像を見ながら、肉眼では見えない自分の顔を手探りでいじっていくさまを思いえがいてみます。

目の前にあるのは似姿であるはずなのに、本当に似ているのかは不明。似ていると言われているものを手探りでいじっていく。いじっているのだから、目の前の姿は変わりつつあるはず。直接見ることができない自分も変わりつつあるはず。

自分の似姿を見ながら自分の顔をいじっているわけですが、その作業はあくまでも手探りでしかない気がします。手が届くほど近くに見えていながら、遠隔操作をしているようなもどかしさを覚えるのではないのでしょうか。

お化粧をした経験がないのに、あれこれ言ってごめんなさい。

象徴的儀式

じっさい、そうなのでしょう。

遠隔操作のことです。肉眼で見ることできない自分の似姿を目の前にして、手探りで顔をいじってお化粧をしているのですから。

知覚機能という「代わりのもの」を頼りに、世界と森羅万象を相手にする。言葉という「代わりのもの」をもちいて、世界と森羅万象を相手にする。

いずれも、遠隔操作です。もどかしいし、ままならない遠隔操作——人の思いどおりにならないのです。長靴の上から痒いところを搔いているような、または孫の手で背中を搔いているのと同じく隔靴搔痒の遠隔操作だと言えるでしょう。

毎日鏡を覗くという、あるいは毎日鏡に向かってお化粧もするという儀式に似たいとなみが、人の表象行動と言語活動の象徴的な行為に見えてなりません。

いわば表象の表象であり、象徴の象徴ですが、やはり鏡をのぞき見る人のいとなみと重なります。人のやっていることが、そもそも同語反復的なのです。人はつねに鏡——現実も思いも言葉も鏡です——を見ているから当然なのでしょうが。

自分と鏡の中の似姿

自分と鏡に映る似姿は「似ている」はずですが、同一という意味での同じではありません。なにしろ映っている影であり像なのですから。

でも、同じだったら。そう考えるのが人だと思えます。私だってしょっちゅうそう思えます。

鏡の中に入りたい。その中の自分に会いたい。触ってみたい。そう考えたことがない人を考えるのは難しい気がします。

*

人は自分を肉眼で見たことがないため、自分と鏡の中の似姿が「似ている」と知識として学んで知っているだけで、体感しているわけではありません。

人は二人ではなく一人だからです。自分に会った人はいないでしょう。誰にとっても自分は見知らぬ人なのです。

自分が二人いれば、目が二組（二対）あることになり、それぞれが一方の自分を肉眼で見ることができるし、自分に会えるはずですが。

でも、じっさいには自分は一人しかいません。

その意味で、自分と鏡の中の似姿が「似ている」というのは外にある外なのです。自分では確かめられないという意味です。

他人に教えてもらおう、または器具や器械や機械に教えてもらおうしかないとも言えます。

*

目の前にある「これ」と、少し離れたところに見える「あれ」が似ている——というのは、似ているけど異なるのです。

人は「似ている」が基本である印象の世界に住んでいると私は思うのですが、自分のことになると、人は「似ている」が確認できない事態に放りこまれているようです。

自分の目で自分が見えないという枠から出られないのです。自分が二人になるしか、この枠から出る道はなさそうです。

似姿、写し

とはいうものの、自分と鏡に映る似姿は「似ている」はずです。これを疑って生きていくのはつらいにちがいありません。お化粧をするのにも、さぞかし苦労するでしょう。

自分が鏡の中の似姿と「似ている」のを確かめる方法はあるのでしょうか。

鏡の像という鏡から離れればすぐに消えてしまう、頼りないものに頼るのではなく、カメラという器具というか器械の手を借りて確かめる方法があります。

とはいうものの、写真や動画という写しを見たところで、やっぱり自分を直接に見たことがないという枠の中にいる自分を感じて、がっくりするしかありません。

＊

見たことも会ったこともない自分と、写真や動画に映っている自分が似ているのか——同じ、つまり同一でないことは確かですけど——確認しようがないのです。

こうなったら、他者しかありません。自分で確かめられないのであれば、他人に頼りましょう。他人に教えてもらうのです。自分一人で、くよくようじうじしているからいけない。

「似ているよ」、「そっくりだってば」、「だいじょうぶ、安心して」、「私が保証するから、とにかく落ち着いてよ」、「てか、夜とかちゃんと眠れているの？」

他者に請けあってもらっても、それが似ているという保証にはなりません。なぜなら、それは言葉でしかないからです。

口約束と同じでぜんぜん当てにならないのです。語るは騙るという語るに落ちます。他人の口にした言葉は信じるしかない。嘘だったら、それまで、ということになります。

*

そんなに面倒な話だったら、写真や動画に映っている自分（写し）も、鏡の中の自分の似姿（写し）も、自分に「似ている」ことにしよう。「似ている」かどうかなんていうふうには悩まないでおこう。

そう考えるのがいちばんです。というか、みんながそうやって妥協して生きているのです。いや、妥協だと考える人なんていないでしょう。

写しを見ても、他人の言葉で教えてもらっても、自分を直接に見たことがないという枠から逃れそうにはありません。

やっぱり自分が二人になるしか、枠から出る道はなさそうです。

フィクション

小説は世界の鏡だとか小説は世界の写しだという言い回しがあります。

私は小説や物語や童話や説話の登場人物（人間とは限りません、人間以外の生きものや無生物も登場します）のようになりたいと思ったことがあります。数えきれないほどありました。

というか、フィクションに登場する人物や擬人化された生きものや無生物を受け入れて、その存在になりきらないとフィクションは楽しめないのです。

映画やテレビドラマやお芝居でも、そうした経験を何度もしてきましたが、小説や説話は文字や音声ですから、言葉だけを見たり読んで、そこに出てくる人物や生きものになりきったり、憧れるというのは、よく考えると不思議な話です。

なりたいと思う、なりきる、なった気持ちになれる——それが言葉の力だ。そう言われると頷いてしまう一方で、そうかなあと首を傾げる自分を感じます。

なんて言いながら、やっぱり言葉の力は想像以上にすごいという気持ちに傾いてきました。小説や物語を読んでいるさなかには、登場人物になりきる、その人物になった気持ちになれるのですから。じっさい、そういう気持ちになっているじゃありませんか。

これだけで十分ではないでしょうか。

人工、人造

鏡、似姿、写しといえば、ロボットと人工知能を連想します。ロボットはかつて人造人間と翻訳されたことがあるそうです。

人が人に似たものをつくる、作る、造る、創る。こうやって漢字を眺めていると神を感じてしまいます。天地創造の神です。

きっと人は神になりたいのでしょう。もうなったつもりでいるようにも、見えます。妄想？ もうそうです。

*

さらに言うなら、人は人工〇〇になりたいのではないのでしょうか。

人工〇〇は人がいわば「神」としてつくったものなのに、人はその自分のつくったものになりたいのではないかと私は最近よく思います。

人形

人形のようにになりたい。

この気持ちは分かる気がします。可愛い人形、綺麗な人形、美しい人形、格好いい人形、妖艶な人形——これらは、そのようにつくられているようです。

なんらかの目的や意図なしに、人は人のようなものをつくるのでしょうか。

人間——人類でもホモ・サピエンスでもヒトでもいいです——は自分たちのつくったものになりたいのではないのでしょうか。

最初はそんなつもりはなくて、ただ自分たちに似たものをつくって楽しんでいたのですが、そのうち、つくったものに憧れをいだくようになったという意味です。

あまりにもうまく出来すぎたからかもしれません。つくってから、二度見してしまったのです。

あら、可愛い、格好いい、美しい、綺麗。

これだけではなく、すごい、めっちゃ速い、とてつもなく頭がいい、ぜったいに失敗しないなんて尊敬したくなる

ぜんぜんぶれない、誤っても謝らない、あやめてもあやまらない、エラーを自分で修正している、えっ勝手に学習するの？

疲れを知らないなんてすごすぎます、壊れたら部品を取り替えるだけでいい、要するに年を取らないし死なないってこと？

こうなるのを薄々感じていた。無意識のうちに、自らこういう事態を招いたという気もします。たぶん機が熟したのでしょう。

いまは神への遠慮も忖度もない時代です。もはや歯止めはないかのようです。

身体

人工〇〇になりたい。〇〇に入るのは知能だけではありません。人に備わっているあらゆるものが入りそうです。

人工〇〇がほしい。人工〇〇を自分の一部にしたい。眼鏡、コンタクトレンズ、補聴器、衣服（皮膚の代わりです）、靴、帽子、臓器、血液、リンパ液、足、手、腕、指、皮膚・肌、毛だけではありません。

記憶、現実、思い、意識、知能もそうでしょう。仮想現実（VR）とか拡張現実（AR）なんて、まさにそうではないでしょうか。このところ——このほんの数年で——そうした言葉があちこちで書かれたり口にされるようになりました。

エスカレートしているようです。

逸脱、倒錯

人が人のつくったもの（具象であり物）、つまり人工〇〇や人造〇〇になりたいと願う。あるいは、人が人の思いえがいたものや想定したもの（抽象であり幻）、たとえば知識や体系や情報に憧れる。

こうした欲求は逸脱とか倒錯と言ってもかまわない気がします。

これらの言葉をつかうのは、わが子を二度見したり、それだけにとどまらずに、じっとした熱い視線を送り、その挙げ句には合体を望む行為と重なって見えるからに他なりません。

どこかエロチックなのです。しかも不自然と言うか、転倒しているのです。

私は究極の美を具現した人形になりたい。私はぜったいにぶれない論理になりたい。私はぜったいに誤らず謝らない人工知能になりたい。

私は排泄をはじめとする生理現象や老化もない仮想現実の中の住人になりたい。私はゲームの中で生きたい。私はゲームそのものになりたい。

私は美そのものになりたい。私は詩になりたい。私は映画の世界の住人になりたい。私は映画の中に生きたい。

私は小説の登場人物になりたい。私はボヴァリー夫人になりたい。私はドン・キホーテになりたい。

最後の小説の例はもちろん皮肉であり冗談ですが——とはいえ虚構と幻想と現実を混同した登場人物になりたい人（既にそうであるにもかかわらずなんて辛辣なことは言いませんけど）が皆無とは言えませんが——、以上挙げた種々の例を逸脱と倒錯とわずに何と言えればいいのでしょうか。

いやいや、そもそも人は逸脱して倒錯した生きものである。それは、他の生きものたちを見れば一目瞭然——パンツをはいてマスクをつけた生きものが他にいるだろうか——のことだ。

というか、逸脱と倒錯こそが人と他の生きものをつかさどる最大の相違であり、そのおかげで人はこの星でこれまでに成れたのだ。したがって、逸脱と倒錯は人にとって当然なのであり、かつ自然なのである——。

こうした意見もありそうですね。

二人になる

人工〇〇になりたい——。

この彼岸への悲願は、「二人になりたい」ではないでしょうか。

分身という言葉をつかってもいいです。変身でもいいでしょう。でも、自分なのです。自分でないといけないのです。だから、二人になっても自分でなければなりません。

誰かに乗っ取られたら、自分でなくなります。「自分であること」は死守しなければな

らないのです。

*

自分のことになると、人は「似ている」が確認できない事態に放りこまれます。自分の目で自分が見えないという枠から出られないのです。自分が二人になるしか、枠から出る道はなさそうです。

ところで、どうして私が「二人になる」にこだわるのかというと、人は思いの世界で常に「自分を見ている」からであり、そのときの人は意識の中で二人になっていると考えているからなのです。

夢と同じです。夢の中で人は自分の出る夢をもう一人の自分の視点から見ている（つまり「二人になっている」）気がします。夢と、夢うつつと、うつつの思いは、緩やかにつながっている、グラデーション状に連続している。そんなふうに感じられます。

とはいうものの、あくまでも以上は思いの話であり、現実には人は「一人である」という枠の中にいるわけです。思いの中では自由に出ていながら、現実の中では決して出ることのできない枠であるからこそ、こだわっているとも言えそうです。

「二人になる」と「二人である」は、私にとってオブセッションなのです。目下のマイブームとも言えます。

*

人形になりたい。

人間（人類でもいいです）は自分たちのつくったものになりたいのではないか。最初はそんな気はなくて、ただ自分たちに似たものをつくって楽しんでいたのですが、そのうち、つくったものに憧れをいだくようになったという意味です。

人形、登場人物、キャラクター、フィクション上の人物——人物と書きましたが人間であるとは限りません——を相手にするのは小さいころからやってきたことです。

人形、ひとがたを相手にするときには、人は必ず相手の名前を呼びます。そして言葉を掛けるのです。これは「ふたりになる」という意味です。

*

人工〇〇がほしい。人工〇〇を自分の一部にしたい。眼鏡、コンタクトレンズ、補聴器、衣服（皮膚の代わりです）、靴、帽子、臓器、血液、リンパ液、足、手、腕、指、皮膚・肌、毛だけではありません。

これが叶えば、老化も病気もなくなるのでしょうか。

それにしても、しんどそうですね。面倒くさそうでもあります。何度手術をすればいいのか。体が持ちませんよ。命を延ばすために命を縮めるに決まっています。

それどころか、メンタルをやられそう。人はそんなしんどいことに耐えられない気がします。

それにたいそうなお金もかかりそうだし。だいいち、いますぐには無理でしょう。

VRゴーグルを最期まで二十四時間装着しつづけるとか、不老や不死を夢見るのもいいでしょうが、私はいつか来るものを受け入れようと思っています。

なりきる、なる

やっぱり言葉の力は想像以上にすごいという気持ちに傾いてきました。小説や物語のことです。

読むことで登場人物になりきる、その人になった気持ちになれるのですから。じっさい、そういう気持ちになっているじゃありませんか。

ままならなくて面倒くさい現実なんて二の次です。ねえ、ボヴァリーの奥さん。ねえ、ドン・キホーテさん。

私は小説や物語や童話や説話の登場人物（人間とは限りません、人間以外の生きものや無生物も登場します）のようになりたいと思ったことがあります。数えきれないほどありました。

というか、フィクションに登場する人物や擬人化された生きものや無生物を受け入れて、その存在になりきらないとフィクションは楽しめないのです。

なりきっているさなかには「なる」を体感している。それが言葉の力です。仮想現実どころではない臨場感を人は生まれながらに身につけているのです。

これは人がつくったものではない気がします。人工〇〇とか仮想現実なんて要りません。

これだけで十分ではないでしょうか。二人どころか、何人にでもなれる、なりきれる能力が誰にでもあるのです。

人の身のほどに合った贅沢だとは言いませんが、言葉ってすごいです。

#言葉 #文字 #鏡 #人形 #夢 #仮想現実#人工知能 #機械 #連想 #自分 #分身
#名前 #小説 #フィクション

赤ちゃんのいる空間

＊

赤ちゃんのいる空間

星野廉

2023年3月18日 08:22

誰もが辺境にある。辺境にあるからこそ、関係が生まれる。
辺境とは自分ではないでしょうか。辺境という自分の中に、外と内が混在している。
(拙文「辺境としての人間」より)

先日、病院で見て感じたことと考えたことを書きます。

子も孫もない私にとって、総合病院は赤ちゃんを間近で目にすることができる唯一の場所でもあります。病院の待合室や総合ロビーで待機する時間はけっして楽しいものではありませんが、近くに赤ちゃんがいるとそれだけで心と体がやすらぎます。

目次

目と耳で追う

なぞる・なぜる・なでる

まねる、まねぶ、まなぶ

宙を掻く

薄い皮膚だけがデフォルト

ふち、縁、淵

しっくりする、しっくりくる、しっくりいく

赤ちゃんのいる空間

目と耳で追う

私は言葉を広く取って、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情や身振りやしるしも言葉だと受けとめて生活しています。

赤ちゃんを見ていると、声や音や表情や身振りに敏感に反応します。反応するというのは、真似るという意味です。自分でなぞり演じてみて、その結果がどうなるかを見えています。

なぞり演じた自分に何かを返してくれるものと、くれないものを分けて覚えていくようにも見えます。その様子を見ていると、赤ちゃんは「似ている」を目と耳で追っているように見えます。

「異なる」ではなく「似ている」を目と耳で追っている。「異なる」には目を向けない。そんな感じです。

それだけでなく、「似ている」を舌や鼻や肌でも追っているように見えるのです。やたら口に入れるし手を伸ばすし触りたがります。

*

私にとって知覚で「追う」というのは「なぞる」でもあるのですが、何をなぞっているのかと言えば、それは「似ている」ではないかと思います。

ひょっとして「異なる」は赤ちゃんにとっては「怖い」ではないでしょうか。「怖い」は見えていても、見ないし触れない。そんな知恵がすでにそなわっているように感じられます。

「似ている」「異なる」「怖い」と書き、「似ているもの」「異なるもの」「怖いもの」としないのは、赤ちゃんが気配の中に見えるからです。

まだ名詞的な世界にいないように見えるという意味です。動きと気配だけがある世界。そしておそらく「似ている」だけに目が行く世界。感じるけど感じ分けはしない。

まだ分けて分れていない世界、似ているが漂う世界、その似ているを目と耳で追うこ

とで、世界は次第に分（わ）けて分（わか）れていくのかもしれませんが。

とはいえ、「分れる」は「別れる」ではないと思います。なじんでいくのではないのでしょうか。

*

私と赤ちゃんのあいだには、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）はなく、音と声と表情と身振りがあることに気づきます。

なぞる・なぜる・なでる

「目で追う」「視線でなぞる」に話を絞ります。

あれとあれは似ている。これとこれは似ている。あれとこれは似ている。

話し言葉をまだ覚えていない赤ちゃんは、そんな感じで「似ている」を目で追い、同時に目でなぞっているように見えてなりません。

そのうち、あっちがこっちに似ている、こっちがあっちに似ているというふうに、世界になじんでいく気がします。

あっちとは世界、こっちとは自分なのですが、赤ちゃんはそれさえ分けていないように見えます。

*

「なぞる」は「なでる・なぜる」に近いのではないのでしょうか。赤ちゃんが、離れたものを目で追い、視線でなでる感じです。

「離れている」——これは赤ちゃんの置かれた状況です。世界は必ずしも近くにはないので、手や足や舌でなぜるわけにはいかないのです。

これはおとなになっても同じではないでしょうか。人は離れたものを知覚を動員して「なぞる・なぜる・なでる」しかないのです。

そうやって、遠くを近くする、遠くを知覚するのです。

世界とのあいだには隔たりがあり、それはこちらが働き掛けないかぎり解消しないという意味です。ただし、働き掛けて解消するという保証はない気がします。赤ちゃんにも、おとなにとってもです。

世界に働き掛けてうまくいくかどうかは、一か八かの賭けなのです。

たとえば、お乳が欲しくて「おぎゃー」と泣いて世界に働き掛けても、それが聞き届けられるとは限りません。

後で述べますが、おとなも赤ちゃんも、偶然性の支配する賭けの世界に投げこまれていると言えます。

まねる、まねぶ、まなぶ

相手や対象とのあいだの隔たりを解消しようとするとき、人は発したり放つのではないのでしょうか。

離れる、離す、放す、放つ、発する、話す。

こちらから、離れたものに向かって放つ、発する。これが「なぞる」と同時に起こっている「まねる・真似る」だと思います。こちらが真似て、それに気づいて何かを返してくれる存在に気づくのです。

気づくに気づく。気づかれていることに気づく。気づくと気づかれるは一人ではできません。相手がいる、双方向的な関係として立ちあらわれます。

この「気づき気づかれる」が「まねる」をうながしているように見えます。「まねる」もまた相手がいて起きる身振りです。しかも、その相手とは「離れている」必要があるのです。

それが、表情や身振りの「まねる」であり、「なねぶ・学ぶ」であり「まなぶ・学ぶ」なのかもしれません。

宙を掻く

表情や身振りだけではありません。赤ちゃんは、音や声をなぞり、まねて、まnanでいきます。

「まねる」という動作が、離れた相手とのあいだを埋める動作でもあるように私には思えます。離れた相手に手を伸ばし、近づこうとするわけです。

とりわけ、人間の赤ちゃんは世界とのあいだに隔たりがあります。離れているのです。

馬や犬や猫の赤ちゃんは、生まれて間もなく立ったり、這い回ったり、歩いたりもしますが、人の赤ちゃんはずっと寝ています。

自立、つまり自分の足で立ち、歩きまわるまでには、他の生きものたちに比べて時間がかかるのです。比較するとかなり長い時間を要しているようです。

寝たままの状態の世界を仰ぎ、周りを見まわし、自分から手を伸ばしたり、親や周りの人を呼んで、手を差し伸べてもらわないかぎり、世界とかかわることはかなわないと言えるでしょう。

「よるべない・寄る辺ない・寄る方ない」ですね。人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。

＊

仰向けに寝かされている赤ちゃんは、よく手と足で宙を搔くような仕草をします。機嫌が悪かったりすると、何かを訴えているのでしょうか、足搔く、藻搔くといった動作もします。

宙を搔き、空（くう）を搔き、寄っ掛かりや取っ掛かりを求めているかのようです。

立つことも歩くこともできない人間の赤ちゃんは無防備で危険にさらされています。病気、事故、事件、犯罪、虐待、放置（ネグレクト）、飢え、渇き、戦争——こうした危機につねにさらされた赤ちゃんが世界中にたくさんいると聞きます。

過酷で残酷な偶然性の世界に投げ込まれているようなものです。その中で、赤ちゃんは賭けを余儀なくされていると言えは言いすぎでしょうか。

一か八か、生か死かの賭けの中で、藻搔き、足搔き、呼び掛け、気を懸ける。

搔き掛け懸け賭ける。これはおとなでも同じでしょう。

薄い皮膚だけがデフォルト

ときどき見る夢に、体育館みたいなだだっ広い屋内で、ニホンザルと取っ組み合いの喧嘩をしているという場面があります。私は素っ裸なのです。口論をするというバージョンもあります。

いずれにせよ、私が必ず負けます。なにしろ、向こうは毛皮がデフォルトなのです。こっちは薄い皮膚だけ。

仮に素っ裸で樹海に置いてきぼりにされたら、私はきっと傷だらけになるでしょうし、夜間に凍え死ぬでしょう。実のある木に登れるニホンザルは生きのびるにちがいありません。

病気、事故、事件、犯罪、虐待、放置（ネグレクト）、飢え、渴き、戦争——人間のおとなもまた、寄る辺ない存在だと思います。

過酷で残酷な偶然性の世界に投げこまれた人間は、たった一人では、そしてデフォルトのままでは、賭けに負ける気がします。

人間は一人では大したことができないし、裸——生まれたままの姿——、そして丸腰ではきわめて脆弱なのです。

ふち、縁、淵

話を戻します。

よるべない、寄る辺ない、寄る方ない。人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。

ふち、へり、きわ、はしっこ、すみっこにいるとも言えるでしょう。世界のふち、人間の世界のふち。

でも、縁（ふち）は縁（えん）なのです。どういうことかと言うと、赤ちゃんは縁（ふち）に身を置くことで、縁（えん）を呼び寄せているという意味です。

縁（えん）とは、他者との出会いに他なりません。仮に赤ちゃんがど真ん中にいるとするなら、他者との出会いはないでしょう。縁（ふち）にいるから、外や周りと触れあえるのです。

*

一方で縁（ふち）は淵（ふち）でもあります。

崖っぶちは崖っ縁と書くらしいのですが、淵は川とか沼の深いところのようです。縁、

つまり端っこにいるくらいならいいですが、崖っ縁となると恐ろしいです。

淵だと深淵という言葉を思い出します。辞書には「絶望の淵に沈む」（広辞苑）や「絶望の淵に突き落とされる」（デジタル大辞泉）なんて比喩的な用法の例文があって、絶望の淵に沈みそうになります。

＊

赤ちゃんの話でしたね。

よるべない、寄る辺ない、寄る方ない人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。

でも、だいじょうぶ。

「まねる」「まねられる」ことによって、相手と自分とのあいだに架け橋をもうければいいのです。端っこにいても、橋を架ければいいのです。

端は橋なのです。両者は同源で、二つの端っこをつなぐとか渡すというイメージで橋らしいのです。

箸もたぶん同源ではないでしょうか。二つの端っこをつなぐ感じがしませんか。「食べる」と「食べられる」という出会いのも何かのご縁ですし。

いや、冗談ではなく、衣食住のうちの食は出会いに満ちています。食事のときには人と人が会し、食材と食材が会し、食べる人と食べられる物が会します。

そもそも料理は伝わってきたという意味で、引用であり複製であり変奏なのです。前につくった人といまつくった人、過去と現在、遠い場所とここ——こうしたものの出会う場が料理ではないでしょうか。

＊

話を戻しますと、「まねる」と「まねられる」によって、赤ちゃんは相手と自分とのあいだに架け橋をもうければいいのです。

その橋が、広い意味での言葉ではないでしょうか。

赤ちゃんの場合には文字は無理ですから、音、声、表情、身振りということになります。これが言葉なのです。広い意味での言葉です。

言葉の根っこには必ず「まねる・なぞる・なでる」があります。

じっくりする、じっくりくる、じっくりいく

以上述べたようなことは自然に起きているのだらうと私は想像しています。「自然に」を本能的というふうに置き換えててもいいでしょう。

自然に、本能的に、ですから、文字のように、苦勞して学ぶものではない。音、声、表情、身振りと、文字とのあいだにあるこの違いは、決定的に大切だと私は思います。文字は異物であるときえ、私は感じています。

だから、音、声、表情、身振りは、じっくりする、じっくりくる、じっくりいくのではないのでしょうか。不自然ではないという意味です。

文字のように、不自然ではないのです。異物のようにつかえない、つかえない。

だから、赤ちゃんはつかっているわけです。すんなりと、つかえずにつかっている。

赤ちゃんのいる空間

赤ちゃんが近くにいると、まったりして癒やされるだけでなく、わくわくもします。

赤ちゃんを見ていると私は、広い意味での言葉、つまり、音、声、文字、表情、身振り、しるしについて思いをめぐらさずにはいられないからです。私の唯一の趣味は言葉のありようの観察なのです。

赤ちゃんを見ながら、意味と無意味とか、意味の発生とか、偶然と必然なんてたいそうな話に思いがおよびそうになる場合もあります。

＊

まとめます。

寄る辺ない存在である赤ちゃんは、ふちにいるように私には思えてなりません。ふち、きわ、へり、すみっこです。

世界のふち、人間のふち。世界にはまだ手が届かない。人間としてまだ十分な動きができるわけではない。

だから、可愛いのでしょうか。放っておけない。おとなに可愛いと思わせる、顔の形と体つき、声、表情（とくに目の表情です）、仕草、身振り、動作——こうしたものを総動員して、世界とおとなに訴えかけているかのようです。

寝たままの状態の世界をなぞってなでる。ほかの人間たちをまねてまなぶ。

世界になりたい。自分も世界に加わりたい。赤ちゃんを見ていると、そんなふうに訴えているように見えてなりません。

＊

子もなく孫もない老人である私ですが、赤ちゃんの眼差しの世界に加わりたいと思うことがあります。赤ちゃんの目で世界を見てみたいという気持ちなののでしょうか。老人の赤ちゃん返りかも。

どちらかという強面で人相もいいほうではない私ですが、赤ちゃんはそんな私にほほ笑みかけてくれます。

赤ちゃんがじっとこちらを見つめているとします。来るぞ来るぞという気配を感じながら待っていると、にこっと笑うのです。

補聴器をした耳には高い音や声が聞こえないのですが、声も掛けてくれているのかもしれません。

私もいまは人生のふちにいます。

ふちとふち、きわときわ、隅っこと隅っことで、笑みを交わせる。おとな、しかもぼーっとしてきた老人の勝手な思いでしかありませんが、私はそんな瞬間に幸せを感じます。

葉待ち めとめを合わせ 橋かかる

赤ちゃん # 言葉 # 病院 # 視線 # 表情 # 身振り # 音 # 声 # 文字 # 日本語 # 境界
知覚

影を踏むのをためらう

＊

影を踏むのをためらう

星野廉

2023年2月22日 13:24

私は辞書を読むのが趣味なのですが、好きなのは「かげ」という見出し語の項目です。読むというより見たり眺めていることがよくあります。語義や例文の字面を眺めているだけで幸せな気持ちになるのです。

辞書では多義的な言葉の項目ほど読んだり見ていてわくわくしますが、そのひとつである「かげ」の場合には、その意味を考えると反対であったり別物に思える語義がいっしょに並んでいて、読むたびにその意外性にはっとします。

たとえば、光という語義がある一方で、光が何かの表面に反射して目にうつる物の形、水面や鏡にうつる物の形、光が物にさえぎられてできる暗い部分、という語義が並んで挙げられています。単純に言えば、光と物の姿とその影をひっくるめて「かげ」と呼んでいる、つまり同じ語が当てられているわけです。

こんな文も書けそうです。

<午後の強い日の影に照らされて地面に落ちた木の影が濃い。>

<月影の下で、池の傍らにそびえる木の影に目を凝らし、庭の砂利の上に長く伸びる薄暗い木の影から、水をたたえた池に映るその木の黒々とした影へと視線を移した。>

ややこしい話なので説明すると、次のような意味になります。いずれにせよ、悪文です。

<午後の強い日の影（光）に照らされて地面に落ちた木の影（映ったかげ）が濃い。>

<月影（つきあかり）の下で、池の傍らにそびえる木の影（姿）に目を凝らし、庭の砂利の上に長く伸びる薄暗い木の影（映ったかげ）から、水をたたえた池に映るその木の黒々とした影（映ったかげ）へと視線を移した。>

*

光と物の姿とその影に同じ「かげ」という語を当てる、日本語の言葉の世界を思うとき、それが現実になっている世界をも思いうかべてしまう自分があります。光と物の姿と影が同じである世界です。

三者が同じである世界と言いましたが、物理的に同じであるとか、それぞれが一对一に対応するという話ではなく、光と物の姿と影を同じだと見なす世界観、つまり考え方があるという意味です。

（もちろん、ある時期、ある地域、ある集団に限定された、日本語特有の語感であり世界観なのでしょうが。）

言葉や絵や映像や音声や象徴は、森羅万象をうつす影である。森羅万象とそうした影たちは、物の姿とその影のありようを成り立たせている仕組みと連動している。そんなふうに私は夢想するのですが、あくまでも夢想であり根拠などぜんぜんないわけです。

一方で、森羅万象と、それを照らす光と、光によってうつりうつされる影たちが同一視されている——別個のものたちが同じだと見なされている——のが、人の世界ではないかという気もします。話す言語に関係なくです。

たとえば、映画、動画、ドキュメンタリー、ニュースは、映像や音声や文書からなる物語であり、人はそうしたものを見聞きして世界を感知したつもりになります。うつっているものを、ものと同一視するわけです。

物と、それらをうつした別の物と、そうしたうつりうつされるという物のありようを成り立たせている仕組みが、自然で当然のものとしてとらえられている。

言い換えれば、ある物の代わりに、その物ではない別の物で済ます——要するに、Aの代わりにAではないもので済ます——という仕組みが、人の世界では当り前のこと（いちいち深く考えないこと）としてとらえられているのではないか。そんなふうには私を感じています。

（Aの代わりにAではないもので済ますという仕組みの根っこにあるのが、広い意味での言葉——話し言葉（声）、書き言葉（文字やしるし）、映像、音、表情、身振り——だと思っています。言葉にどっぷり浸かっているから言葉の仕組みに気づかないし、気づいてもすぐに忘れてたり意識しないという意味です。）

極端な言い方になりますが、人は人や物の影を踏むのに躊躇する唯一の生き物なのです。

地面や水面や鏡にうつった影は、物や人の影であると同時に、物や人そのものでもあり、さらには物や人の影を作る光でもある。そんな思いが人の心のどこかにある。（とりわけ影が光でもあるという思いは人にとって決定的な意味を持ちます。光を畏怖しているからであり、人にとって光と闇は同じだからです。これは科学的知識と併存しています。人は矛盾を生きる生き物だからです。）

だから、人は大切な人の名前を書いてある紙や大切な人の姿が写っている絵や写真を踏むのにためらいを覚えるのではないのでしょうか。

文字やうつった像が、その文字や像が呼びさます物や人そのものではないのにもかかわらず、です。こういう人の気持ちは、学習した知識や理屈で押しつぶしたり抑えられるたぐいのものではない気がします。

逆に言うと、こうした感情（想像力と言ってもかまいません）を押しつぶせば、文字や像だけでなく、物や人そのものもためらいなく踏めるにちがいません。そこには光もないはずで。

#影 # 光 # 辞書 # 言葉 # 多義性 # 言葉 # 写真 # 絵 # 名前

名前のない怪物

＊

名前のない怪物

星野廉

2023年2月21日 13:38

世の中にはよく見聞きしたり自分で口にするにもかかわらず、それを見たことが一度もないものがあります。見たことも触れたこともないのに言葉だけで知っているのです。人工知能もその一つでしょう。

人工知能を見たことも触ったこともないのに、それが作ったと言われる物がたくさんあって、それらは見ることができるし、場合によっては触れることもできます。ネット上にも、おびただしい数の人工知能作とされる物の複製があふれています。文書、映像、音声という形で存在しているのですが、どれもが複製であって現物とか実物ではありません。そうした複製たちに、そもそも現物や実物があるのかさえ不明に思えます。

人工知能によって作られたとされている物があちこちに存在しながら、その作者であるはずの人工知能を目にしたことがないのですから不思議な話です。AI、AIと呼ばれながら、その個別の名前がない点も不思議です。呼称や愛称があるのかもしれませんが、前面に出てくることはまずありません。

〇〇さんがAIを使って描いた絵（作詞作曲した歌、書いた小説）。〇〇研究所（〇〇社、〇〇グループ、〇〇大学）がAIを利用して開発した商品（システム、サービス、アプリ、ソフト、ツール）。こんな具合に、個人名や集団名が明記されることはあっても、AIはその貢献度が度外視されたかたちで刺身のつま扱いされています。

名前のない怪物なのではないでしょうか。そんな怪物の登場する小説がありました。とても悲しい物語です。なによりも人間が怪物であることを感じさせる恐ろしい作品でもあります。

たぶん AI は大部分の人にとってはブラックボックスなのでしょう。そもそも人工知能に限らず、知能（通常は人間の知能を指します）というものがブラックボックスだと思ひあたりました。知能を見たことも触ったこともないのに、知能によって作られたとか生みだされたとかされる物たちに、この星は満ちあふれています。しかも現在では、その多く、ひょっとするとほとんどが複製なのです。

人工知能と知能の違いはどこにあるのでしょうか。固有の名前があるかないかなのでしょうか。名前や名づけは基本的に人だけに許されるものです。というか、擬人化されるほど人にとって親しい物（人以外の生物や無生物や現象）にも名前（名詞）が与えられます。呼びかける必要があるからです。

人ではないものに呼びかける、話しかけるためには、名前（名詞・名称）が必要です。相手が人ではないものや正体不明の物の場合には、人はそれを手なずけるために名づけます。名づけたところでなつてくれる保証はありませんし、なじんでくれるとも限りません。まるで人のほうがなつき、なじみ、すり寄っているかのようです。でも懲りずに名づけ続けます。人から名づける行為を取ったら何が残るのでしょうか。

知能、知性、知識、知——見たことも触れたこともないのに、それが生みだしたとされるものが無数にあり、それらは見たり聞いたり触れたりできる。交換も売り買いも強奪も窃盗も詐取もできるし、じっさいに、そうされている。この星はそうした行為の場になっている。

そんなことは考えなくても生きていけるという意味で当然と言えば当然であり、それでも考えてしまうという意味で不思議と言えば不思議ですけど、私はと言えば摩訶不思議だとしか言いようがありませんし、同時に慄然としないではられません。自分が当事者だからです。

#人工知能 # AI # 名前 # 名詞 # 固有名詞 # 擬人化 # 言葉 # 小説 # 怪物# フランケンシュタイン # メアリー・シェリー

シンクロする身振り、行為、表情

＊

シンクロする身振り、行為、表情

星野廉

2022年12月16日 07:47

目次

(A)

(B)

うつむく身振りの多義性

シンクロする動作、表情、言葉

私たちは同じではなく似ている

(A)

文字がこれだけ崇め奉られるのは、話したとたんに消えていく声とは違って、しつこく残るからだけではなく、誰もが覚えるのに多大な時間と労力を費やしたために、頭が上がらないからかもしれない。長年お世話になったはず。

しかも文字の読み書きを学ぶさいには、人はたいていうつむく。ずっと下を向いたまま学んだものに頭が上がるわけがない。学習の成果は恐ろしい。読み書きをするさいに頭を垂れて目を下に向ける姿勢は、死ぬまで続くと思われる。

(B)

まわりを見ると、うつむいている人がたくさんいる。道にも、バス停にも、バスの中にも、病院のロビーや待合室にも、たくさんいる。たくさんの人が手に板を持っている。手のひらにのるくらいの小さくて軽くて薄い板だ。

文字を習う、文字を書く、文字を読む、思う、世界を見る。こういうときに人のする仕草が「うつむく」だ。うつむき、時間と労力をかけて、人はこどものうちから文字と世界を学んでいく。だから、人にとって世界は文字なのである。

うつむいて世界をながめるくらいならいい。頭を垂れる身振りが、世界を見下ろす、見下す、俯瞰する身振りと重ならないことを願わずにはいられない。

うつむく身振りの多義性

上の（A）と（B）で共通するのは「うつむく」である。「うつむく」という身振りを説明するなら、「頭を下げて視線を下向きにする」となるだろう。この動作を録画して複製をつくることももちろん可能だ。

つまり、うつむく行為はその行為をしたとたんに人から離れて、他の人がする「うつむく」と同一視されるということになる。あらゆる身振りと行為が、人を離れて「同じ」と「同一」の世界に存在するから複製が可能なのである。

上で同一視という言葉をつかったが、ミスリーディングな言い回しである。人は同一視などできないからだ。同じ動作を各人が異なった印象とイメージでとらえるのが人間だと言ってもかまわない。

いったん人から離れた動作や表情は、言葉と同じくさまざまな他人によってさまざまに解釈される。他人は多人。多人である他人に解釈されることが、「人から離れる」であり「人の外にある」なのである。

＊

自分が発したとはいえ、外にあるのだから取り返したり帳消しにするのは難しいし（せいぜい帳尻合わせに血道を上げるしかない）、思いどおりにならない。言葉も動作も表情も、外にある外なのである。

言葉や動作や表情は、生まれた時に既にまわりにあった外であり、それを人は真似て

学びながら借りていく。なぞることで人の中に入るが、中にあるものは見えないし聞こえないから確認できない。

外に出してはじめて見えて聞こえるものになるが、それはもう人を離れて、人の思いどおりにはならない。

こうした状況は、人に限らず機械や AI でも変わらない。AI にとっても、書いたり話した言葉、描いた絵、つくった楽曲、つくったもの、おこなった行為、こうしたすべてのものが、つねに外にある外なのである。思いどおりにはならないという意味。人にも機械にも AI にも（尻ぬぐいをするのは人だけど、これは致し方ない）。

ぜったいに疲れなない、多量のデータを短時間で正確に処理できる、パワフル。この点が私には恐ろしい。AI に人が感情的になるのは、このせいなのかもしれない。人類にとっては初の経験だから仕方がないようだ。経験値を積むしかない。

＊

(A) の冒頭に「崇め奉られる」とあるが、これが (A) のテーマなのである。これが主旋律で、「頭が上がらない」、「うつむく」、「ずっと下を向いたまま」、「頭が上がるわけがない」、「頭を垂れて目を下に向ける」と変奏される。

人は文字を学ぶさいにうつむくから、文字に頭が上がらず、文字を崇め奉っていると
言いたいのだろう。強引な論法、つまりこじつけとも言えそうだ。

＊

(B) では、どう変奏されているだろうか。「うつむいている」「うつむく」、「うつむき」、「うつむいて」という具合に単調に書かれたあと、ラストで次のように畳みかける。「頭を垂れる身振りが、世界を見下ろす、見下す、俯瞰する」。

人は文字を学ぶ過程で、文字と文字で書かれた世界とを同一視するようになると、どうやら言いたいらしい。しかも、文字の読み書きと学ぶ姿勢である「うつむく」と、世界を俯瞰する、つまり見下ろす動作とを重ねているのである。

こじつけとも言えそうな論法でつづっている点は（A）と変わらない。

＊

こんなふうには、いったん書いたものは私から離れたものになる。もどかしい。

隔靴搔痒。どんなに搔いても、じつは搔けていない。どんなに書いても書けていない。夢の中と同じで、どんなに駆けても駆けてはいない。どんなに藻掻き足搔いても、ぜんぜんかけていない。

人生と世界という切りのない賭けを生きつづけるしかないのかもしれない。とはいえ、掛け替えのない人生だ。がんばろう。

【※なお、（A）と（B）は、拙文「れとりっく」から引用したものです。読む人に通じるかどうかは別にして、レトリックをつかった短文ばかりを集めた記事です（私の場合にはいつもそうなんですけど）。よろしければ、お読みください。】

シンクロする動作、表情、言葉

（A）と（B）の文章で分かるのは、「うつむく」という一見シンプルな身振りと行為がさまざまな印象とイメージで見られる可能性があることだろう。時と場合、誰がいつどこでどんなふうには、「うつむく」は、いろいろな意味やメッセージを持つだろう。

ある身振りや行為は、どれもが複製可能であり、模倣も反復も可能であって、いまこの時点でも、世界のあちこちで、そっくりな動作、似たような仕草が起きていて不思議はないのである。それでいて同じではない。

ある動作はさまざまな思いでおこなわれているはずであり、その動作を目にする人もまたさまざまな印象やイメージを持つはずだ。

いわゆるシンクロという現象は、動作や身振りだけでなく、表情でも起きているにち

がない。

＊

私は言葉を広く取っていて、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、表情や身振りも言葉として受けとめて生活しているが、シンクロは話し言葉と書き言葉でも起きている。

日本語で考えてみると、いまこの時点で、似たような、同じような日本語の話し言葉やフレーズが発言として話されていてもぜんぜんおかしくはなく、これが書き言葉の場合になると、まったく同じ、つまり同一の単語やフレーズや文字列がいまどこかで書かれていても不思議ではない。

記述とは既述なのであり、言葉をもちいて記す行為は、既に何度も記されてきた言葉や言い回しを「なぞる」となみにほかならない。

AさんとBさんが同じ文を書きつづけることは考えにくいですが、あちこちで「同じ」記述が断片的かつ断続的かつ単発的におこなわれているさまは想像しやすいのではないだろうか。

これは身振りや動作でも言えるにちがいない。まったく同じ動作を別人同士が継続しておこなうことは考えにくい。

私たちは同じではなく似ている

断片的なシンクロ現象について考えているうちに、同じ動作や表情が長時間にわたって、複数の、あるいは多数の人によって同期されているさまが、ふと頭に浮かんだ。

軍隊、施設、共同生活、組織、大会、イベントのことである。

イメージとしては整列と行進とマスゲーム。子どものころから現在にいたるまで協調性に欠けると言われつづけてきて、同調が苦手な私にとっては、そうしたさまは恐怖で

しかない。

たとえシンクロしても、一人ひとりとは異なっていると声を大にして言いたい。私たちは「同じ」と「同一」の世界ではなく、気ままで不安定な印象とイメージの世界に生きている。それでいいではないか。

私たちはみんな同じではなく、一人ひとりが似ているのだ。

#シンクロ # シンクロニシティ # 身振り # 動作 # 仕草# 表情 # 言葉 # 話し言葉 # 書き言葉 # 多義性 # 両義性

私たちは同じではなく似ている

＊

私たちは同じではなく似ている

星野廉

2022年12月11日 07:49

目次

そっくりなところが似ている

愛着と興味がないものには残酷になれる

疑似物、疑似世界、疑似体験

似たものとしての世界

個性とユニークさ

似ているから愛着をいただける

私たちは「同じ」ではなく「似ている」

そっくりなところが似ている

大量生産されて、どれも似ていたり同じに見えるスマホ。お店や工場ですらりと並んでいたスマホ。どれもそっくり。

そのスマホを覗きこむ、目を細めたり、目を見開いたり、ときには笑みを浮かべる、顔をしかめることもある、やや口を開けている人もいる。

指で画面をなぞる、スライドするのがもどかしいのか眉を寄せたり、舌打ちする人もいる。

やや前屈みに歩きながらスマホの画面に見入る、ときどき歩を緩めたり、立ち止る。

みんな、似たような仕草をしている。その仕草を繰り返している。真似し合っているように。そっくり。

＊

そっくりなところがそっくりなのである。そっくりな点がそっくりにそっくりと言ふべきか。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なる。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホに限らない。車がそうだ。自転車もそう。三輪車もそうかもしれない。

ボールペン、消しゴム、ノート、お箸、絆創膏、腕時計、下着、靴下、眼鏡、シャワー、便器、ベッド、乳母車、棺。どれも大量生産された「そっくり」だが、それを使うとき、人はそれぞれそっくりな仕草や表情をする。

ひとりひとりの顔と個性は異なるものの、やることがそっくりなのである。

製品に合わせているのだろう。人に便利なように、人の都合に合わせて、そして何よりも人の体や体の一部やその動きに合わせて、商品は作られているようだ。

人の体だけでなく、人の内にも合わせて作られているような気がする。内というのは、脳だったり、意識だったり、行動のパターンとか型だったり、ひょっとすると記憶もそうかもしれない。

人が作ったものや、人が使っているものは、人に似ている気がしてならない。

愛着と興味がないものには残酷になれる

私たちにはニワトリがそっくりに見える。これは特別な思い入れや愛着がないからだろう。思い入れや愛着がないものはそっくりに見えるようだ。

ニワトリから見れば、ヒトはみんなそっくりなのではないか。顔や姿ばかりでなく、仕草と表情、やることなすこと、そっくりではないだろうか。

興味がないからだ。愛着や興味がないものには冷淡になれる。残酷にもなれる。

逆に、愛着と興味をいだけば、どんなものもペットや家族や恋愛対象になるだろう（たとえば人形やキャラクターやフィクションの登場人物）。従順であったり、支配できたり、人に懐けばの話だが。

疑似物、疑似世界、疑似体験

私たちは世界や森羅万象と直接的に触れあい、対することができない。知覚や言葉という代理、そして似たものを通して触れているつもりになっている。

私には言葉、とくに文字と世界が似ているとは思えないが、似たものとして私たちは使っている。あらためて考えると不思議でならない。

言葉という疑似物を用いた疑似世界とか疑似体験という言い方が適切かもしれない。

現に、私はここで言葉という疑似物をやり取りして人と交流し、ここで言葉からなる文章を読んで疑似体験を楽しんでいる。これは学習の成果であり、想像力のおかげだと理解している。

生まれたときから既に自分の外にあった言葉を真似て学びながら、同時に想像力を養った結果なのだ。

あっさりと言いたが、あらためて言葉にすると不思議でならない。

*

私たちひとりひとりそれぞれの疑似世界を持ち、疑似体験をしていると考えてみる。

私たちひとりひとりがそれぞれの「似た世界」と「似た体験」をしている。同じではない。同一はありえない。似ているのだ。似ているから通じ合える、おそらく。

似たものとしての世界

私たちは「似たものとしての世界」に生きている「似た者同士」ではないだろうか。

私のいなく「似たもの」とあの人のいなく「似たもの」と、人の集まりである社会や集団がいなく、つまり決めた「似たもの」は似ているが異なるはずだ。ずれているのだ。

それが個性ではないか。ユニークさであり、掛け替えのなさではないか。

＊

話し言葉、書き言葉つまり文字、物語、フィクション、行動様式、表情、身振り、仕草、旋律、コード――。

こうしたものは各人、家族、集団、共同体、社会、国家、地域、文化によって異なるが似ている。だから伝達や伝承や翻訳や言い換えや解釈ができるのだろう。

伝達や伝承や翻訳や言い換えや解釈は「うつす・うつる」ことだ。移す、写す、映す、撮す、遷す。「うつす」には必ず何らかの誤差、ノイズ、エラー、変異がともなうという。

複製やコピーは同一を再生したり再現することではないらしい。似せて作られるものは、当然のことながら、似ているもの、つまり「近似」なのだ。

だから「疑似（擬似）」というのかもしれない。百パーセントとか完全という言い方を避けている。

個性とユニークさ

そっくりに見えても、似たように見えても、似たり寄ったりであっても、そこには「異なる」個性があると私は理解している。逆に「同じ」は不気味でならない。

「似ている」は印象だから検証はできない。「同じ」や「同一」はヒトの知覚では確認できず、精度の高い機器や機械を用いてなら検証できるだろう。

とはいえ、人の知覚を補う器具や器械で得た「同じ」や「同一」を、人は「似ている」が基本の印象の世界から眺めるしかない。「同じ」「同一」という名の疑似世界、疑似体験、仮想現実。

手なづけよう飼いならそうとして、どうなづけてもなつかない世界。どう分けても分からない世界。人のほうに欠陥と問題があるのだから、人がおれてなれてなじむしかない。じっさい、そうになっているようだ。人が世界になきつきなつきなれてなじむ。

日常生活では「同じ」「同一」はありえないし、出会えない。その意味では抽象であるとも言える。その嘘くささが不気味さに通じるのかもしれない。その嘘くささこそが人を惹きつけもする。

*

そっくりがそっくりしている、シンクロがシンクロしている、同期が同期している世界。百年前、いや五十年前の人なら、目まいを覚えるにちがいない。

そんな目まいを覚える世界にじょじょに入っていった私たち、そして生まれたときには既にそうであった世代の人たちは、もはや目まいを感じなくなっている。

(私たちは、こういう人類初の状況に慣れてもいないのに慣れているものとして、いわば見切り発車をしながら、生きているのではないだろうか。)

逆に、太古の人たちがこの世界を見たらなんて想像すると、こちらが目まいに誘われるが、そうした想像力を大切にしたいと思う。

当り前に見えるものは当り前ではないし、必然でも自然でもない。

とはいえ、私はこの「似たものとしての世界」つまり疑似世界に生まれ、生きていて十分に幸せであり、満足もしている。

似ているから愛着をいだける

疑似物である言葉を持ち、さらには文字を持ってしまった人類は、疑似世界に生き、疑似体験を重ねてきたのだろう。

直接的に世界に触れているわけではない。これは確かだと考えられる。

仮想現実だなんて何を今更という気もするが、「似ている」と「そっくり」の精度と有効性は急速に高まりつつあるように見える。

知覚機能と言語活動を介してとらえているこの現実こそが、既に「似たもの」つまり疑似物であり仮想物からなりたっているきわめて精巧でよくできた仮想現実なのだ。

「似ている」と「そっくり」の精度と有効性が急速に高まりつつあるとしても、私たちひとりひとりのいだけている「似たもの」が依然として「異なる」という事実は変わらない気がする。

つまり、「似ている」からこそ違いが生じ、個性がある。「似ている」が個性を生むのだ。

一方で、「同じ」は個性を消す。無視するだけでなく消すのだ。

*

似ているものに私たちは愛着を覚え、愛着をいだけることができる。擬人化というのは、

私たちが森羅万象に自分たち人間を見てしまうことだ。

世界や森羅万象は私たちにとって直接触れあうことができない「何か」であるが、名前を付け、自分たちと似た部分を見ることで親しいものに見えてくる。

自分たちと似ていると思いきみ、手なづけ飼いならしているつもりなのかもしれない。なづけてもなつかないものを相手に。世界や森羅万象なんてチョロいとも思っているにちがいない。さもないと、科学技術はこんなに発展していないだろう。

擬人化をとまなう想像によって、ただの物や景色や形が、人形や顔や絵に変わる。何かに何かを見てしまう。これは、空の雲を思いうかべると分かりやすいと思う。

そうした想像力の結果が、映画であったり映像であったり、芸術であったり、おそらく音楽であったりするのかもしれない。

私たちは「同じ」ではなく「似ている」

人に似ていると感じることで、人以外の生き物は、人の愛着や愛の対象になる。物もそう。自然にある物たちだけでなく、人が作った物たちも、人の愛着や愛の対象になる。

こう考えると、「似ている」が素晴らしい感覚に思えてくる。

一方で、「同じ」はどうだろう。人は「似ている」を基本とする印象の世界に生きていて、器具や器械や機械に頼らない限り「同じ」を扱えないにもかかわらず、「同じ」という言葉をよく使う。

「私たちは同じなんだ」、「同じ人間なんだ」、「地球に住む同じ生き物なのだ」、「同じ〇〇国民だから」、「同じ〇年〇組なのですから」、「同じ家族（会社、町内、病気、趣味、ファン、宗教、性、世代、出身地）なんだからさ」

「同じ」という言葉で勝手にくくられた者の気持ちを考えているのか疑問に思われる。

「同じ」は素晴らしく聞こえ、美しくさえ響くことがあるが、どこか嘘くさい。そう感じられるとすれば、日常生活や体感から懸け離れている抽象だからではないか。

妙にほのぼのとして美辞麗句っぽい。背後に意図や企みを想像しないではいられない。

さらに、「同じだから」という上の言葉に続けて言われがちなフレーズを想像してみる。すると、何らかの思惑や魂胆のあるフレーズが頭に浮かぶ。

「私たちは同じ〇〇なんだから、△△するべきだ（△△して当然でしょう）」——という流れになる。こうしたスローガンやプロパガンダが危険なのは、歴史が教えてくれている。

「同じ」という言葉が、特定の考えや立場を説得するさいの方便や切り札として使われる場合がいかに多いことか。

私たちは同じではなく似ている。ひとりひとりが似ていながら違っている。それでいて「同じ」に惹きつけられる。

*

「同じ」と「同一」は人にはたどり着けない彼岸の世界であり叶わない夢であるからこそ、「同じ」を文字どおり手にし手なずけて扱うことが、人にとってオブセッションと化した悲願になっているのだろう。

誰もが——この私も——スマホの画面に映った「そっくりなもの」が「そっくりなもの」などではなく「そのものである」ことを望んでいるし、無意識のうちにそうだと信じているにちがいない。

問題があるとなれば、それは信じていることではなく、もっともっとと次を望んでいることかもしれない。無いものを望む限り、望みも限りも無い。

#言葉 # シンクロ # 複製 # 模倣 # スマホ # 森羅万象 # 世界 # 愛着 # 疑似世界 # 疑似
体験 # 仮想現実 # 擬人化 # 似ている # そっくり # 同じ

世界は顔で満ち満ちている

＊

世界は顔で満ち満ちている

星野廉

2022年12月5日 08:01

世界は顔で満ち満ちている。そんなふうによく思います。人面〇〇という言葉がありますね。たくさんありそうです。こうした現象に共通するのは、いろいろなものに、人の顔を見てしまうという点です。

人間以外の生き物の顔、毛皮の模様など人間以外の生き物の身体の一部、人間の皮膚にできた出来物のもとより、無生物、つまり、壁や天井の染みの一部、カーテンの模様、空に浮かぶ雲、石や岩といったものに、見えるはずのない人間の顔を見てしまうのです。

きわめて主観的な現象のようですが、複数の人たちに共有される感覚だということになると、主観的では済まされないという思いに、人はとられるみたいです。ただ事ではない、という感じでしょうか。人面〇〇だけでなく、イエスや聖母の顔・姿、あるいは観音像が何かに出現したという噂をめぐって、大騒ぎする例があるのも、理解できる気がします。

人は、人の顔や表情に大きな反応を示すと言われています。人間が赤ん坊のときから、観察される習性のようなのです。顔と表情とは区別して、つまり「分けて」考えるべきだという気がします。「顔」が即物的な意味合いを持っているのに対し、「表情」という言葉にはトリトメがないというか、抽象的なニュアンスを感じます。

○

顔をつくる。これも、人特有の習性みたいです。

表情をつくる。お化粧をする。仮面やお面をつくる。人や人以外の生き物を描く。「にんぎょう・ひとかた・人形」をはじめ、人以外の生き物に「似せた」ものをつくる。今挙げた一連の行為には、たいてい、「顔をつくる」という行為が含まれていると思われます。

顔を構成するパーツは、目、口、鼻、頭という順序で重要度が決まっているのではないかと、個人的に感じています。どういうわけか、哺乳類・爬虫類・鳥類・両生類・魚類・昆虫には、たいてい、目、口、鼻、頭が備わっているように「見えます」。

とりわけ目が特権的な位置をもっている気がします。目を「見て」、あるいは、目に「見られて」、やすらぎを覚える場合もありますが、怖い、不気味だ、心が乱されるという思いにとらわれることも多いです。人面〇〇のたぐいだと、後者がほとんどだという気がします。

○

生き物の生態を写した映像を、テレビなどで見るとき、人間以外の生き物をつい擬人化している自分を意識し、はっとすることがあります。そうした映像に添えられるナレーションが、被写体である生物を擬人化した物語となっていることにも気が付く場合があります。

テレビや映画に限らず、身の回りを見ると、「にんぎょう・ひとかた・人形」だけでなく、擬人化された生き物を模した玩具のたぐいや絵が多いのに驚かされます。いわゆるキャラクターという映像つまり視覚的イメージや、キャラクターグッズという物体や、人面〇〇と呼べそうなものに取り囲まれているのにも驚かされます。

「何か」に似たものに囲まれているというぼんやりとした感じから、世界そして宇宙は比喩あるいは暗号であるという確信までは、ほんの数歩だという気がします。

○

人間にとって、森羅万象は「人間のようなもの」なのかもしれません。もしそうだとすれば、こんなのは人間だけがやっている気がします。そう思うと、人間はある種の「心の病」にかかっているとも言えそうです。

それはさておき、ところで、意味とはもともと顔や表情ではないでしょうか。意味の
前にあるものは意識されません。それが意味となって初めてその顔と表情が意識される
という意味です。意味はちょっと踏ん張らないと意識されない気がします。踏ん張りす
ぎると別のものになってしまう気がします。

○

擬人化されたものが、夢にまで出てくるのには、閉口し感心もします。思いつき、つ
まりでまかせですが、夢というのは、擬人化という仕組みを原理としているのではない
でしょうか。夢のなかでは、何もかもが、人である自分と通底しているように思えてな
りません。

夢の主語は自分であり、自分と万物のイメージをつなげる、非人称的で匿名的でニュー
トラルな仕組みだという感じもします。「非人称的で匿名的でニュートラルな」というの
は、人間に深くかかわりながら、人間がコントロールできない自立した状態にあるとい
う意味です。だから、人は夢のなかで自由であると同時に不自由を感じている、という
気もします。

夢は思いどおりになりません。自分ひとりしかいない映画館の最前列のど真ん中の席
に縄で縛られて映画を見ているようなものです。不自由どころか強制的に映画を見せら
れます。夢の中ではどんなに駆けても駆けても前に進みません。

しかもなかなか逃げられません。あげくの果てが現実に逃げこみます。そこにも不自
由と強制があります。

夢、現実、思い、言葉の順に思いどおりにならない気がします。言葉はいじれるので
思いどおりにいくような錯覚におちいりますが、言葉もままならないものです。とはい
え、チョロいという錯覚をいだかせてくれるので、人は言葉で現実や思いの辻褃合わせ
や帳尻合わせをして鬱憤を晴らします。

辻褃合わせが高じると戦争も起きます。たった一人、または少数の人の辻褃合わせに
その他おおぜいが付き合わされているわけですが、現に起きています。夢に逃げこむし
かないのでしょうか。

○

人と、人が知覚する森羅万象とは、人の意識および無意識のなかで「つながっている」というか、比喩的な意味で「血縁関係にある」のではないか。もしかすると、それは、人の知覚と意識のなかにおいてだけでなく、宇宙に広がっている仕組みなのではないか。ふと、そう思いました。

ヒトという種に特有の、身の程をわきまえない不遜な考え方だと反省しつつも、こういったことについて思いをめぐらしてしまいます。致し方ない気もします。人間からこの性癖を取り除いたら、何が残るのでしょうか。尻尾のないおサルさんたちのなかでも、とりわけひ弱い種というだけでしょうか。

丸腰の真っ裸でニホンザルと取っ組み合いの喧嘩をしたら、私は絶対に負ける自信があります。なにしろ、向こうは毛皮がデフォルトです。口論でも負けるかも。昨夜の夢で現に負けたもの。

#連想 # 夢 # 仮面 # 人形 # 顔 # 似ている # 比喩 # 擬人 # 表情

なぜか懐かしい世界

＊

なぜか懐かしい世界

星野廉

2022年12月4日 13:26

○

みかんがずらりと並んでいるより、さんまが並んでいるほうが不気味に見えるのは、さんまに目があるからかもしれない。顔があるからと言うべきか。

人の顔がずらりと並んでいても、それがそっくりな顔ばかりなのと、それぞれが違った顔つきに見えるのでは、気味の悪さに違いがある。知らない顔と親しい人の顔でも違う。

有名人は顔を売ってなんぼの世界に生きているから、同じ顔が並んでいても違和感を覚えることはないが、見知らぬ人の同じ顔だときょっとするにちがいない。

親しいどころか大切な人の同じ顔がいくつもいくつも並んでいたら、心穏やかではない。鳥肌が立つくらいで済みそうもない。有名は無数、無名は有数だからだ。

有名人は複製されてなんぼの世界にいるからかまわないが、無名の人が複製されるのはそこに何かの企みを感じないではいられない。

＊

にわとりやさんまの顔を見分けられる人は少ないだろう。にわとりをペットにした経験のある人なら、飼育されているおびたしい数のにわとりを見て、かつて飼っていたにわたりの面影を思いださずにはいられないはずだ。

愛着のある物や生き物はそうたくさんあっていいわけではない。ましてや、ずらりと列を成しているはずがない。

自分の名前が活字になってずらりと並んでいるのもいい気持ちではないだろう。いろいろな名前が集められている名簿ならまだましにしても。

知り合いの名前や大切な人の名前が活字となってずらり並んでいるとすれば、これは非常事態ではないだろうか。いったいどういう意味なのか。何が起きているのだろうか。と不安に襲われるにちがいない。

不条理すら感じる光景だ。名前に顔を見てしまうからかもしれない。

*

数字はどうだろう。

自分が数字に置き換えられて活字となり、どこかで処理されたり処分されたりする。これはおおいにありうる話だ。そうならないければ、行政も統治も成り立たない。

刑務所では名前の代わりに番号で呼ばれるらしい。刑期を終えた人が、運転中に前の車のナンバープレートにかつての自分の番号を見つけたらどう感じるだろうか。

数字で呼ばれた人にとって、その数字は生涯特別な意味を持つにちがいない。

誰もがいつか数字に置き換えられる運命にある。〇〇者〇名。

人を数字として処理し処分する人がいる。数値であれ、番号であれ、それには顔がない。名前であるときえ感じられないにちがいない。

簡単に処理し処分できるはずだ。処理、処分、駆除、抹消。

処理しているのが数字だと考えれば、ボタンも押せるはずだ。顔が浮かんでいては容

易にボタンは押せない。少なくとも躊躇するだろう。人なら。

*

名前、言葉、数字、記号、絵、写真。人にとって自分を指し示すものは、人の外にある。自分の手から離れていて、自分の思いどおりになるものではない。

自分を裸眼で見たことがある人はいない。

人にとって自分は見られるものであり見るものではない。個人のレベルでも、人類のレベルでもそうだろう。

同様に、人にとって自分は指されるものであって指すものではない。個人のレベルでも、人類のレベルでもそうだろう。

人にとって自分とは他人と、他の生きものや生きていないものをふくむ世界とのかわり合いの中にしかない。

*

「見る」も「指す」も自分に関して言うなら、つねに人の外にある。自分は見られて指されるだけ。

世界でいちばん気になる存在は徹底した受け身にさらされている。そうであるとするなら、世界が受け身であるのとほぼ同義ではないか。

そんな無力さは、できれば直視したくない。だから誰も見ないか、見ても忘れる。人は簡単に壊れないようにできている。

壊れなくするものが懐かしさだ。懐柔と言うではないか。

冗談でもおふざけでもない。懐柔を辞書で調べると「てなずける」「だきこむ」という

言葉が見える。

○

人は世界と森羅万象を手なずけるために名づけるが、名前は人にしか通じない。

森羅万象はそう簡単には飼いならされない。なれないのだ。なづけても、なつかない。冗談でもおふざけでもない。

人は世界と森羅万象に人を見ることがある。人に擬する。一方的で一方向のギャグ。人を馬鹿にした話だ。いや、馬鹿にした話だ。

百科事典を見ると、いかに人があだ名をつけるのに長けているのかが分かる。

名前、名称、学術名、通称。笑いたくなる名前があり、悪意を感じるものすらあるが、そう感じるの人は人しかいない。陰口に似ている。楽屋落ち。

*

森羅万象を写したり映すとき、人は相手を人に擬す。世界を鏡に見立てている。

目に映るものすべてが自分に似たものになる世界。それが人の世界だろう。人の世界はあだ名と顔に満ち満ちている。

気に掛かる。気に掛ける。話し掛ける、声を掛ける、手を掛ける。相手との間に橋を架けようとする。これが言葉であり、あだ名なのだろう。

相手を見る。相手に自分を見る。勝手に見る。人は似ているという印象の世界に生きている。

似ているか、その他もろもろ。その他もろもろは見ない。まともに見れば自分が壊れてしまうのを知っているから見ない。

○

人にとって世界は顔に満ち満ちている。どこか親しい、どこか近しい。なづける前に感じるなつかしさ。

誰もが生まれて間もなく感じる懐かしさ。母の懐（ふところ）の懐かしさ。

懐かしさは顔。赤ちゃんにとって世界は「ある」のではなく「似ている」。

「似ている」は顔。「何かが」も「何かに」もない「似ている」だけの世界。それが顔に満ち満ちた世界。

「何かが」も「何かに」も、切り分けることを覚えてからの話だろう。

「似ている」だけの世界は「懐かしい」の世界。なぜか懐かしい世界。懐かしいだけの世界。

懐かしさは人が壊れないための砦なのかもしれない。子が崩壊しないための母の懐なのかもしれない。

*

懐かしさは顔にちがいない。

赤ちゃんにとって世界は「ある」のではなく「似ている」。「似ている」は顔にちがいない。

*

あだ名は相手に通じないにしても、顔は相手とのかかわりの切っ掛けである気がする。

なぜか懐かしい世界。顔に満ち満ちた世界。赤ちゃんは生きもの、生きていないもの、人の分け隔てなく、笑い掛ける。笑みは世界との架け橋。

笑う門には福来たる。

人は顔に満ち満ちた懐かしい世界になじんでいく。なれ、親しんでいく。

とはいえ、人は世界になつきはしない。世界も人にはなつきはしない。なまえが人と世界のあいだにあるかぎり、どんなになづけてもなつきはしない。

名づけることで、切り分けを学び、笑みはしだいに分け隔てあるものに移っていく。

名を持ってしまったために、人はこの星で孤独なギャグに生きるしかないのかもしれない。

「見る」も「指す」も自分に関して言うなら、つねに人の外にあるように見える。

世界は見てくれているのだろうか、指や視線や肢や触手や触角で指してくれているのだろうか。後ろ指だけはさされたくないが、そう望むのは贅沢なのだろうか。

たとえ、世界がなつかなくても懐かしさだけは共有してくれていると信じたい。

○

名づけて手なずけることが難しいもの。そもそも言葉にするのが難しいもの。

difficult to name、difficult to tame、difficult to frame

The Unnamable/L'Innommable

name、fame、shame、blame

shameful、shameless、nameless、namefool

calling names is such a lonely game to play
when it's time to pray

what a shame

what a nameless name that we've given to each of our tameless neighbors

namely we are to blame

shame on us

#イメージ # 連想 # 言葉 # 名前 # 数字 # 番号# 顔 # 似ている # レトリック

見るために人がつくった「影」

＊

見るために人がつくった「影」

星野廉

2022年12月3日 07:43

目次

人のつくったもの

見るために人がつくった「影」

意味、メッセージ、筋書き、ストーリーのある影

学習の成果、学習の素地

意味、異見、違見、移見

「何か」に「何か」を見てしまう、置き換えてしまう

自分が知っていると思うものを見てしまう

現在に生きる人は忙しい

見たくないものは見ないし、見えないようにできている

人のつくったもの

自然界で角（かく・かど）のあるものを見かけると、人のつくったものだということがよくあります。四角や長方形は、そこに人がいる、いた、いるだろうという印なのです。

空を見ても四角は見当たりません。お日さまも雲たちにも、お月さまも星たちにも、角というものがありません。直線もありません。空に見える直線は電線と飛行機の跡の白い線くらいです。

四角や長方形や五角形や六角形は、自然界ではあまり目にしません。直線自体がまれなのです。そうしたものを自然から採取して見るとすれば、顕微鏡や電子顕微鏡という道具や器械をもちいるしかない気がします。

結晶には多面体が多いですね。つまり肉眼をふくめた五感では出会えない形なのではないでしょうか。

角があるのは分けたり切ったからでしょう。分けるとか切るは、人の中にあるのではないのでしょうか。欲求とか欲望のことです。それが直線や長方形や四角という形として、人から出てくるといえるか、人がつくる。

なにしろ、人のつくるものは整然として美しいのですが、その基本にあるのは、まっすぐな線と尖った角であり、自然界にはあまり見かけません。

見るために人がつくった「影」

写真や映画はつくられた影です。ここで言う影とは、写したものや映したものを指しますが、つくられた影は自然界にある地面や水面にうつった影とは異なります。

なんでわざわざ作ったのでしょうか。見るためにでしょうかね。何を見るためでしょうか。「そっくり」を見るためではないでしょうか。

つくられた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。みなさんがこの文を読んでいる端末にもスクリーンとか画面という枠があります。枠は限度でもあります。

映画や動画であれば時間的な枠もあります。制限時間というか作品の時間です。始まりがあって終わりがあるということになります。

つくられた影には空間的な枠も時間的な枠もあると言えそうです。空間と時間を切り取っているからでしょう。切り取ることにより、切り捨ててもいるにちがいません。

意味、メッセージ、筋書き、ストーリーのある影

つくられた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとはつくられたものです。物語であり、フィクションのことです。写真であれば目的やテーマです。

映画であれば、作品名、あらすじ、脚本、受賞歴、批評家や映画誌での評価、ジャンル、成人向けか否か、サウンドトラック。こうした目的やテーマのほかに、話というかストーリーがあります。テレビの番組やネット上の動画もそうでしょう。

要するに、地面の影、水面の影、鏡に映った影（像）とは違って、何らかの目的や意味やメッセージやストーリーがあってつくられているわけです。

学習の成果、学習の素地

写真、映画、動画、絵、文字、文章、楽曲といった「つくられた影（写されたもの・映されたもの）」である「何か」に、「自分の見たいもの」や「自分が知っているもの」を見てしまうのは、学習の成果であったり、学習できる素地の有無に大きくかかわっているとも言えそうです。

レプリカ、レプリカ、レプリカ。

三つのうち、真ん中の「力」は漢字の「ちから・リキ」なんですけど、こんなの分かりませんよね。逆に言うと、カフカをカフカと読んでしまうのは、日本語の表記を学習した成果であって、学習した人がそう読み間違えないほうが尋常ではないと思われま

また、レストランの入口近くに陳列された料理のサンプルを見て、お腹が鳴ったり、口に唾が出てくるのも、学習の成果であり、条件反射でもあるでしょう。おそらく、この場合にはパブロフのワンコちゃんの唾は出ないのではないのでしょうか。出たら、ごめんなさい。出た時にはクマに訂正します。

なにしろ、写真や動画に映った「あれ」（「なに」でもいいです）を見て、ヒトは欲情するのです。これがいちばん分かりやすい説明になるでしょう。あれは紙やインクや画素に欲情しているわけではありませんよね。「見たいものそのものではないもの」に、「見たいもの」を見ているのです。「知っているものではないもの」に、「知っているもの」を見ているのです。

同じ理由で、おさるさんはある種の文章を読んで欲情もしないし、ボヴァリー夫人やドン・キホーテのように小説と現実を混同もしないと考えられます。AIが上手に描いた絵を見て、またはAIが上手に書いた詩を読んで、嫉妬したり危機感を覚えることもないでしょう。ある架空のキャラクターに恋愛感情をいだいたり、人形に話しかけることもないはずです。

「人のつくった影（写したもの・映したもの）」は人が「見たいもの」と「知っているもの」を見るためにつくったのですから、そうできているのは当然なのでしょうが、あらためて考えるとすごい仕組みだと感心しないではいられません。

その素地としてある「何か」に「何か」を見てしまう能力もまた、すごいと思います。

意味、異見、違見、移見

「何か」に「何か」を見てしまう。異なったものを見る、違ったものを見る、移りゆくものを見る。意味の発生を感じます。

異見、違見、移見と表記したくなります。こういうのを異見（いけん）と言うのですね。

「何か」に「何か」を見てしまう、置き換えてしまう

壁の模様でも、天井の染みでも、空の雲でもかまいません。人は何かに何かを見ます。見えるというほうが適切かもしれません。見えてしまうのです。いや、むしろ「現れる」というべきでしょうか。



上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。

● .

今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、ですね。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなと子ども。人と犬。人とペット。この国とあの国。遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

*

● .

上の ● と ・ をご覧ください。● が手前に、・ が後ろに見えるかもしれません。人それぞれですけど、そう見えるという前提で話を進めます。

平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えているわけです。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景というふうに連想を呼びさます気がします。

向こうから追いかけて来る、トンネル、望遠鏡、顕微鏡、研、エコー、太陽と惑星、進化、だんだん大きくなっていく、だんだん小さくなっていく、遠くなっていく、近くなってくる、「おーい！」「何だーい？」「待ってくれ」「さようなら」ー。子を見送る親、「元気でね」、いつまでも遠くで見ている。

ストーリーを感じませんか？ 声が聞こえてきませんか？

イメージが膨らむとも言えるでしょう。話がだんだんズレていくとか、話が大きくなるとか、そんな言い方も可能でしょう。要するに、連続して置き換わっていくわけです。動きやドラマが生まれてくるとも言えます。

もう一度見てみましょう。

.



私なんか、遠くで見守っている存在と見守られている存在の関係を勝手に想像して涙ぐみそうになりますが、遠くからじっと監視されているイメージを呼び覚まされて身震いする人がいても不思議ではありません。

*

いや、そんなふうにはぜんぜん見えないけど。純粹に黒い丸と黒い点にしか見えない。

いや、黒い丸と黒い点には見えないけど。画素の集まりにしか見えない。

以上のような意見や感想があっても私は驚きません。人は印象の世界に住んでいるからです。印象やイメージは、人それぞれです。

こんなふうに、私も「ある発言」（自分の書いたものですけど）に、自分が知っていると思っている「ある感情」を読む、つまり見てしまいます。これは動揺を静めるためではないかと自己分析しています。

つぎに、こうした心理について触れてみましょう。

自分が知っていると思うものを見てしまう

あ、それってゲシュタルト崩壊。科学的に説明可能なの。なんの不思議もないわけ。

そんなことで感動していちや駄目よ。プルースト効果って聞いたことがない？ 検索してみよ。プルースト効果、勉強になった？

「何か」を見て「自分が知っていると思うもの」に置き換えることを思考停止とか判断停止と言います。なんの不思議もありません。勉強になりましたでしょうか。

言葉だけで知っているレッテルや決まり文句を貼る行為にはある種の快感がともなうことは否定できないようです。誰もが嗜癖し依存します。名づけることは対象を手なづけ、飼いならそうとする行為だからでしょう。

名前や名詞に置き換えるだけですが、そうだからこそ簡単ですし、気持ちいいのではあります。なんといっても、考える必要がなくなるのがいちばんうれしいですね。私も愛用しております。

現在に生きる人は忙しい

「そのツイートは、要するに嫉妬ね。読まなくてもいいよ、次に行こう」

上の言葉の「ツイート」を「記事」や「論文」に置き換えてもいいでしょう。「嫉妬」を、「あおり目的」、「愚痴」、「自分でも何を書いているのか分からない」、「単に、かまってほしいというメッセージ」、「自分が物知りだと誇りたい気持ちのあらわれ」、「自分は詩人であるという主張」、「ばかやろうと言いたいのを気取っているだけ」、「あーあ、退屈だとぼやいているだけ」に置き換えることもできそうです。

現在、文字や文字列や文章は、だんだん読まれなくなっています。ざっと見る対象になりつつあります。ざっと見て、自分にとって都合のいいメッセージに置き換えるのです。

誰もが忙しいからです。流通している情報量が多すぎるのかもしれません。

見たくないものは見ないし、見えないようにできている

人は「何か」に「何か」を見てしまうのですが、それどころか、自分が見たいものや自分が知っていると思っていることを見てしまうようです。

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」（いわば鏡の中に見ている）のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということになります。

人は「見たいもの」（それが「見えない」にもかかわらず）を「見える」と決めるために、その根拠となりそうなものを求めるのです。

＊

こうも言えるでしょう。人はないものをあると決めるために、その根拠となりそうなものを求める。捏造する。その根拠は何であってもかまわない。いわば、イワシの頭も信心からの「イワシ」は何でもあってもいいのです。

求める、でっちあげる——それが人の「見る」であり「見える」です。これは、気持よくなりたいたらに他なりません。

見たくないものは見ないし見えないように人はできているのでしょう。だからこそ、人はわざわざ自分で影（写したもの、映したもの）をせっせとつくり、つくり続け、そこに見たいものを見る、見つづけるにちがひありません。

自分のつくった影には、人が見たくないものもうつつているはずですが、それは見ないのです。人は見ないことに長けています。見ないようにできていると言うべきかもしれませぬ。「見る」は「見ない」、「見える」は「見えない」でもあるようです。

#イメージ # 影 # 自然 # 映画 # 写真 # 意味 # メッセージ # 感情 # 印象 # 物語 # 筋書き # 四角 # 直線

VRで自分に会いにいったその帰りに

＊

VRで自分に会いにいったその帰りに

星野廉

2022年12月1日 08:11

写真機では長いあいだ自分を撮ることはできませんでした。簡単に撮れなかったというべきかもしれません。それがいまではできます。スマホのカメラで可能ですが、簡単というわけではないでしょう。誰もがけっこう苦労して撮っています。

いろいろテクニカルな問題があって苦労なさるのでしょうが、「こんなはずじゃない」とか「私はこんなふうじゃない」という不満が根っこにあって、スマホに付いているレンズを恨みつつ、撮る位置や光の具合を調節しているのではないのでしょうか。

人は自分を自撮りで撮影し、その像をリアルタイムで見ることができるようになりましたが、それでも満足できていないもようです。がっかりしているからです。ちょっと違うんじゃない？ こんなもの？ これだけ？ という感じです。

鏡や写真や動画で自分を見る行為は、失望感と隣り合わせなのです。ぜんぜん納得できていない。だから、毎日毎日、お化粧品やエステや身だしなみに骨身を削るのです。

その裏というか根本には、自分に会ったことがない、つまり肉眼で自分を見たことがない、さらに言うなら誰もが自分には絶対に会えないという現実があります。

現実はもどかしくままならないのです。世界でいちばん気になる人を見たこともなければ、一生会えないのですから。

＊

人が満足する形での究極の「自分を見る」とは、「別人として自分を見る」ではないでしょうか。自分が別人にならないかぎり、それが不可能だと分かっているので、失望感と不満は永遠に続くと思われまます。「もっともっと」「もっと見たい」が延々と続くという意味です。

本当の自分の姿は、街ですれ違った見知らぬ人の目に映った自分だ。そんな意味のフレーズを古井由吉の文章で読んだ記憶があります。別人の目で見る自分ということでしょね。いま考えると分かる気がします。

「光学的に見える」だけでは「本当の見る」ではないとも言えるかもしれませんが、この「本当の見る」はおそらく幻想でしょう。知覚に限界のある人間にはありえないという意味で強迫観念であり、抽象にちがひありません。

人の裸眼と肉眼は、無媒介的に世界を見る能力ではありません。しかも、どんな器具や器械や機械をつかって見たとしても、最終的には人はその映像を裸眼で印象として見るしかないのです。

ゆがめて、まばらでまだらに、しかもぼやけて見ているとも言えるでしょう。「見る」「見える」は人の想定しているほどの「見る」「見える」ではなく、あくまでも努力目標でしかありません。

＊

それだけではありません。人は「何か」に「何か」を見てしまうのですが、それどころか、自分が見たいものや自分が知っていると思っていることを見てしまうのです。

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」（いわば鏡の中に見ている）のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということになります。

人は「見たいもの」（それが「見えない」にもかかわらず）を「見える」と決めるために、その根拠となりそうなものを求めるのです。

こうも言えるでしょう。人はないものをあると決めるために、その根拠となりそうなものを求める。捏造する。その根拠は何であってもかまわない。いわば、イワシの頭も信心からの「イワシ」は何でもあっていいのです。

求める、でっちあげる——それが人の「見る」であり「見える」です。

*

スマホで自撮りが可能になった気がしたとき、「自分が見えない」という不可能性の沼のなかにいる人間は歓喜したと思われまふ。「ついにやった！」と。

水面や鏡に出会って自分の姿が見えないという事実に気づいた人間は、写真に出会って一時的に歓喜したものの、すぐに失望し、つぎに映画や個人フィルムにもがっかりし、現像の要らないポラロイドにも意気消沈し、デジタルカメラと三脚をつかったの撮影にも落胆し、スマホカメラの登場でリベンジを果たそうとして張りきったのはよかったです、やがてその空しさにしょげこむ事態となりました。

ついにリベンジしたかの喜びは一時的かつ一過性のもので終わりました。「やっぱり見えなかった」「こんなはずじゃない」「こんなものか?」「話が違う」

欲求や欲望は目的を失っても空回りするそうです。

というか、まわること自体が目的化するらしいのです（経済活動や金融や資本主義がいい例です）。本来はまわらなければならない根拠がないだけに（根拠は捏造したものだからです）、しつこいということでしょうか。分かる気がします。人ごとではありません。

*

きわめて近い将来に仮想現実で自分を見たり、自分に会ったり、自分と対面するゲームが流行りそうな強い予感があります。メタバースやアバターより進化した話です。自

分を見たいというのが、大金を投じて宇宙空間に漂うよりも、身近で現実的な願望だという気がするからです。この欲求は自撮りの延長線上にあります。

どうやら自分を見るためには他人になる必要がある。めったに話題にはしないものの、人はそのことに薄々気づいています。

自分を見ることができないという恒常的な不満を無意識にかかえている人間が仮想現実
に救いを求めるのは、ごく自然ななりゆきであり、必然であるとさえ思います。AIを
駆使して個人情報である多量の映像や文書を処理し、CGを利用してその人をもう一人
つくりあげる。

そのもう一人の自分に、もとの自分が会いに行く。見る。対面する。声をかける。対話
する。触る。触られる。「相手」の汗の味を舌で感じたり、腋臭を嗅ぐことさえできるか
もしれません。「相手」と「交わる」人が出てきてもおかしくはありません。というか、
それが人の究極の欲求かもしれません。

満足のいくだけの臨場感をもって自分に会うことができるのでしょうか。疑問に思われ
ますが、これはやってみないと分からないでしょう。

*

VRで自分に会いにいった気づくこともあるでしょう。考えられるのは、そこで会っ
た自分が依然として見えないということかもしれません。正確にいうと、臨場感が足り
ない気がするのです。つまり、がっかりするのです。

VRで自分に会いにいった帰ってきてから気づくこともあるでしょう。考えられるの
は、現実として目に映っている世界、聞こえてくる世界、匂いとしての世界、触れ触れ
られる世界こそが自分なのではないか、という思いかもしれません。

世界こそが自分である。この気づきと死後の世界や天国やあの世を見たいという願望
は紙一重だという気がします。いまや人は来るころまで来ているからです。とはいえ、
それが終りだとはとうてい思えません。

#自撮り # スマホ # カメラ # 知覚 # 五感 # 写真 # 欲望 # 欲求 # VR # 仮想現実
ゲーム # 視点 # 視覚

夢のような映画、映画のような夢

＊

夢のような映画、映画のような夢

星野廉

2022年11月29日 07:43

俯瞰とは場所つまり空間だけの話ではありません。時間的な俯瞰もあります。スケジュール表、タイムライン、カレンダー、年表などは、時間を見える化するだけでなく、時間の流れを時系列で視覚化する仕掛けとか仕組みとか装置だといえるでしょう。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史というぐあいに、個々の事象にまつわる出来事を時系列で記述しようとする人の試みと情熱には驚かされます。

図書館、博物館、美術館、博覧会も、それぞれが俯瞰の一形態だと見なすことができるでしょう。百科事典、辞書、図鑑、博物誌のたぐいも、空間（地球・宇宙）だけでなく時間（歴史・有史以前）の俯瞰を指向していますね。人の飽くなき意志と欲求に驚かされます。

＊

俯瞰という身振りは、人が初めて水面に「かがみ」こんで自分の姿を見た身振り、そして鏡を作り毎日鏡に見入っているという身振りに重なります。自分を見ているつもり。でもその鏡像と映像は自分ではないのです。

見えているのは自分ではなく自分の影、幻影なのです。人は自分を肉眼で見ることはいけません。ここに「見る・見える・見ない・見えない」の原点がある気がします。

個人的な話ですが、自分が見えないことに気づいたり、思いだしたり、意識するのは、鏡を覗きこんだ時以外に、自分が見た夢を思い出す時と、テレビドラマや映画を見ている時です。話を簡単にするために、映画を例に取ります。

＊

映画では主人公を含む登場人物がうつりますが、ある登場人物の視点から見られた場面は以外と少なく、その光景や状況やストーリーを分かりやすくするための位置にカメラが置かれて撮影されている気がします。よく考えると誰の視点から、そのシーンが撮られているのか不明になるのです。

居間でお茶を飲んでいる二人を撮った場面を想像してみてください。カメラは、その二人の視点以外の位置で撮られている場合が多いのではないのでしょうか。高い位置から見下ろしてはいませんが、これは一種の「俯瞰」だと思います。

つまり、その状況を説明するのにふさわしい位置から、「展望」しているというか、全体の様子が分かるような絵になっているのです。現実では、まずありえない絵だとは思いませんか？ 誰が見ているのでしょうか？ どの位置から描いているのでしょうか？

＊

ひょっとして、映画の視点は夢を真似たのではないのでしょうか。夢の中では、しばしば自分の姿が出てきます。現実の自分にそっくりな自分もいれば、別人を演じている自分もいたりします。自分が動物とか物になっていたのではないかなんて、目覚めてから考えこむ不思議な夢もあります。あくまでも個人的な印象なのですけど。

映画が発明され、映画の二代目みたいなテレビが発明され、いまではネット上で動画が閲覧できる時代に住んでいる私たちは、映画やテレビや動画（ゲームも含まれます）に似た夢を見ていることは十分に考えられます。昨夜、ゲームをやっている、あるいは自分がゲームの中にいる夢を見た人はいませんか？

人は夢を真似て映画の撮影術を発達させ、より精緻で洗練されたものにしてきた。それと並行する形で、映画を真似て夢を見るようにもなってきた。そんな気がします。人は意識的あるいは無意識に自分に似たものをつくり、そのうちに自分のつくったもの

に似てくるのではないかとよく思うのですが、映画もそうかもしれません。

夢を真似て映画をつくる。映画を真似て夢を見るようになる。こう書くと、何だかありそうに思えてきます。現実を真似てお芝居をつくる。お芝居を真似て、日常生活で演技をするようになる。現実を真似て歌う。歌を真似た声や叫びを日常的にするようになる。

恥ずかしい話ですが、私はテレビドラマのさまざまな演技を実生活で真似ることがあります。人と話したり、人に接する時に多い気がします。

*

映画以前に歌があり、お芝居があり、映画と並んでラジオが出てきて、テレビが普及し、テレビゲームが発明され、いまではPCゲーム、インターネット、YouTube、VRが共存する時代になっている。自分の知覚に合わせて何かをつくり、そのつくったものに知覚を合わせていく。

まるで鏡の前の人ですね。鏡を見ながら自分の振りをつくっていく人の身振りを想像しないではいられません。それが夢を見ている自分に重なり、軽い目まいを覚えてきました。

ひょっとすると、私たちは夢を真似て夢を見ているのかもしれない。

さらに言うなら、いまうつつで見ている光景もまた、夢、写真、絵画、映画やテレビやネット上の動画を真似て見ているのかもしれない。かつて見た物や事の記憶が、うつつを見るさいに重なってくるとか、見方に影響をおよぼしている。

夢のよううつつ、うつつのような夢。寝ても覚めても夢うつつ。目を閉じても開けても鏡の中。

そう考えると、ますます鏡の前にいる自分のようです。軽い目まいを覚えてきました。しばらく横になったほうがよさそうです。

#俯瞰 # 夢 # 映画 # 撮影 # 鏡 # ゲーム # 視点

異なる、事なる、言なる**

＊

異なる、事なる、言なる

星野廉

2022年11月23日 08:03

「似ている」とは、何かとつながり、かさなる「気持ち」のことです。自分が何かに、うつる「気持ち」でもあります。人にとって世界は「ある」のではなく、ただ「似ている」のです。人は世界が「ある」と考えることがありますが、見えるのは「似ている」だけ。「何が」も「何かに」もない「似ている」です。「似ている」を何度もなんども、なぞるのです。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わります。雲と同じです。

○

人は「似ている」の世界に生きている気がしてなりません。あくまでも私的なイメージの話なのですが、「似ている」が地、「異なる」が図で、地に図が浮かんで見えるという感じです。ぼーっとしていれば地で、目を凝らしたりしゃきっとすれば図になるという感じ。ところが、目を凝らして見ているはずの「異なる」は見えていないのです。「見る」という「事」と「見る」という「言」が見えなくしてしまうからです。

○

「何かが」と「何かに」のない、ただの「似ている」。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わる。待機中。準備中。仮眠中。うたた寝。

あっ。何かが見えた。見留めた。認めた。地に図が浮かぶ。「何か」が目浮かぶ。異なる。

あれは何だろう？ ○かな？ △だ。いや、Xにも見える。「何かが」「何かに」「似ている」。

言葉にする。事物が見えなくなる。「何か」が言になる。

事物に目を凝らしている。言葉が浮かんでこなくなる。「何か」が事になる。

言と事が「何か」を見えなくする。「何か」とすれ違う。「何か」をまともに見るのは怖い。

事を見つめていると不安で落ち着かない。言にするとしゃきっとして落ち着くが疲れる。事も言もおぼろになり、ぼーっとしているのがいちばん気持ちがいい。

「何かが」と「何かに」のない、ただの「似ている」。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わる。待機中。準備中。仮眠中。うたた寝。



似た音、似た形、似た動き。こうしたものは人を安心させます。

人は「似ている」が好きなのです。似たものをしきりに目で追う赤ちゃんを思いうかべてください。

人にとって「似ている」がまっ先にある感じで、「似ていない」はぜんぶ「異なる」とか「違う」になります。

とはいえ、人には「異なる」がとらえられないようです。たぶん、すれ違ってしまうのです。「異なる」は、逸れる、すれる、外れる、誤る、ずれる、すれ違う、たがう。

ひょっとすると怖くてまともに向きあえないのかもしれませんが。見ていない振りをしている線も濃厚です。「似ている」を見ているほうがずっと楽でしょうから。

ただの「似ている」は「何かが」と「何かに」との出会いを待っている状態なのです。待機中。うたた寝。

心ときめかせ夢うつつで待っているのです。

#レトリック詞 # 漢字 # 大和言葉 # 和語 # 掛け詞 # レトリック

外見、素地、意味

＊

外見、素地、意味

星野廉

2022年11月21日 07:42

「ならう、なれる、ならず、素地」という記事で、二組の質問集を設けました。「A) どっちが怖い？」と、「B) どっちが怖い？」です。A) ではよくある質問を、B) ではややトリッキーな質問を入れてあります。B) の質問は以下の通りです。

ヒトと会話するサルとヒトと会話するオウム。

作曲するサルと作曲するオウム。

抽象絵画を描くサルと抽象絵画を描くオウム。

具象絵画を描くサルと具象絵画を描くオウム。

抽象絵画を描くサルと抽象絵画を描くA I。

具象絵画を描くサルと具象絵画を描くA I。

A I の解説を書くサルとA I の解説を書くA I。

難解な詩を書くサルと難解な詩を書くA I。

娯楽小説を書くサルと娯楽小説を書くA I。

純文学小説を書くサルと純文学小説を書くA I。

今回は、上のB) の質問について記事を書いてみます。なお、サルとオウムが出てくるのは、猿真似とか鸚鵡返しという言い回しがあるからです。

目次

猿真似、オウム返し

ヒトにとっては見た目が大切

素地があるかどうか

意味が分かっているのか

どういう意味なのだろう？

書いても書いても歯痒い

猿真似、オウム返し

ヒトとよく似た生き物が、ヒトそっくりなことをすると、ヒトは複雑な思いをいだきがちです。ただし、それがただの真似の場合には笑って済ませられます。真似ではなく学習した結果だったら、これは笑って済ますわけにはいきません。おそらく世界的なニュースになり、年表に載るくらいの歴史的な大事件になりそうです。もしかすると、国や地域によっては国家秘密として隠蔽されるかもしれません。それくらい人類にとっては恐ろしい話なのです。

ヒトにとっては見た目が大切

ある生き物がヒトの言葉を話したり書いたり、ヒトとそっくりな身振りをしたりする。これはある意味不気味です。ぎょっとしたり、鳥肌が立つ人もいるでしょう。

その生き物の外見がヒトと似ているほど不気味だろうと考えられます。キツネザルとオランウータンだったら、どっちが不気味でしょう？

キツネザルはその名の通りキツネに似ていて、それがサル的一种だったという知識がないとサルには見えません。キツネザルの素性は解明されましたが、改名はまだなようです。

知識や情報より見た目。人は「似ている」を重視するのです。

素地があるかどうか

ヒトと会話するオランウータンがアメリカの大学の研究所にいるらしい――。

こんなニュースか話を聞いたとします。なんだかありそうに思えませんか？ ヒトの言葉を話すためには、それなりの声帯や口や鼻の構造を備えていなければなりません、オランウータンなら、なきにしもあらずという気がします。

あと素地です。オランウータンなら、脳内での突然変異か何かの理由で、ヒトの言語を習得できる個体が生まれてもおかしくない。そんな思いが私にはあります。

意味が分かっているのか

ヒト以外の生き物が、ヒトと同じ、またはそっくりな行動をした場合には、その意味が分かっているのかどうか、厳密に言えば、ヒトと共通した意味を認識しているかどうか、大きな意味を持つと考えられます。

おさるさんとオウムさんには失礼ですが、猿真似やオウム返しではヒトにとって大きな意味を持ちませんから。

何と言ってもヒトにとって、意味がいちばん意味があるのです。意味、意味って、意味には複数の意味があり、ややこしいですね。私は辞書で「意味」の語義をながめながら、しょっちゅう首を傾げています。どういう意味なのだろう、と。

どういう意味なのだろう？

どちらに危機感を覚えますか？

具象絵画を描くサルと具象絵画を描くオウム。
抽象絵画を描くサルと抽象絵画を描くオウム。

具象絵画を描くサルと具象絵画を描くA I。
抽象絵画を描くサルと抽象絵画を描くA I。

詩を書くサルと詩を書くA I。
難解な詩を書くサルと難解な詩を書くA I。

小説を書くサルと小説を書くA I。

純文学小説を書くサルと純文学小説を書くA I。

意味深っぽいですね。どっちに危機感を覚えるか？ こんな質問をするなんて、なんだか魂胆がありそうな気がします。とくに「抽象絵画」と「難解な詩」と「純文学」という部分に。

「訳が分からない」という意味なのでしょうか。

いや、意味深っぽいだけで、浅い意味はあっても深い意味なんてないのかもしれませんが。私の書いた質問だとは言え、意味は私を離れているのです。言葉に対しては、それを書いた私もその意味を探る側にいるという意味です。

書いても書いても歯痒い

なにしろ、人は「○△X」という言葉やフレーズを話したり書いて、その次に「○△Xの意味は何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

話す、放す、離す。もう届かない。

搔いても搔いても痒い。書いても書いても歯痒い。

*

「何これ？ 何を描いているの？」「抽象絵画だよ」

「怖い顔して何を書いているの？」「難解な詩（純文学）です」

そもそも難解なものや抽象的なものや意味深長なものや意味不明なものに意味があるとは限らない気もしてきました。とはいえ、「無意味」を辞書で引くとその意味がいくつも並べてあって悩みます。辞書は当てにならないのかもしれませんが。歯痒いです。冗談はさておき、辞書を離れて、もっと考えてみます。

#意味 # 模倣 # 学習 # サル # オウム # 生き物 # 絵画 # 詩 # 小説 # 言葉 # 身振り

文字

起源のない反復、手本のない模倣

＊

起源のない反復、手本のない模倣

星野廉

2022年11月20日 12:32

何度もなんども「なぞる」を繰り返すとどうなるでしょう。何をなぞっているのかが分からなくなりそうです。とにかくなぞっている、なんとなくなぞっている。対象がなくなる、起源がなくなる、手本がなくなる。ないない尽くしです。起源のない引用の引用、本物や実物のない複製の複製。起源のない反復。手本のない模倣。ないない尽くし。学習、知識、情報のことではないでしょうか。何よりも、その根っこにある言葉のことではないでしょうか。

○

鏡の向こうに入っていく。笑っていた猫の笑いだけが残っている。不思議な話があります。話ですから、言葉から成りたっているのですが、それが読む人や聞く人の中にイメージを生みます。現実ではありえない事が、言葉の世界ではありえる言としてあるのです。異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージと読みかえてもいいでしょう。イメージするしかないようです。イメージをイメージするのです。

○

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

○

オノマトペに限らず、言葉がすっと入ってきたり、すっと出ていくとき、その言葉は「何かに似ている」というよりも「単に似ている」として入ってくるのではないか。そんな気がしています。

「すっと入ってくる」「すっと出ていく」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。「似ている」だけがある感じ。「何が」も「何に」もない、ただ「似ている」です。

くり返しますが、どんな言葉でも、フレーズでも、センテンスでもいいのです。オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。思考停止とか判断停止とまでは言いませんが、無意識のうちにとりつか、条件反射的に、または生理現象のように、すっと入ってきて、すっと出ていくのです。

あらゆる言葉が決まり文句であり紋切り型ではないか。最近、よくそう思います。さもなければ、あんなにすっと入ったり出たりしないでしょう。

○

気になる名前、固有名詞を挙げてみます。ギュスターヴ・フローベール作『ボヴァリー夫人』『紋切型辞典』『ブヴァールとペキュシェ』、ホルヘ・ルイス・ボルヘス作『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』、ミゲル・デ・セルバンテス作『ドン・キホーテ』、ローレンス・スターン作『トリストラム・シャンディ』、ルイス・キャロル作『鏡の国のアリス』『不思議の国のアリス』、オスカー・ワイルド作『ドリアン・グレイの肖像』。

○

固有名詞は引用であり複製であり反復であり模倣でもあります。起源のない引用の引用、本物や実物のない複製の複製。起源のない反復。手本のない模倣。学習、知識、情報。名前は最小最短最軽の引用、なかでも固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用。名前を唱える行為は、「それが指ししめす者や物や事に、なる・なりきる」儀式。威を借りるわけですが、既に何度もなぞられたものを借りるのですから楽です。嗜癖します。現にそうなっているようです。

#なぞる # 複製 # 引用 # 起源 # 反復 # 模倣 # ルイス・キャロル# フロベール # フ
ローベール # イメージ

おまかせします。

＊

おまかせします。

星野廉

2022年10月2日 09:41

目次

言葉は魔法

ぜんぶお任せします

ブラックボックス

恐怖、嫉妬、軽蔑

悪夢

言葉というサイコロを振る

人と機械の外にある外

言葉は魔法

「言葉を魔法」というタイトルのシリーズで記事を書いていたことがありました。「言葉は魔法」と書くと、すらすらと文が出てくるので、書いていました。おまじないの言葉だったのです。

何が出てくるのかというと、「言葉は〇〇」というフレーズなのです。それがまた文を出してくれるのです。おもしろいように書けました。

「言葉はジャズ」「言葉はアドリブ」「言葉は硝子」「言葉は異物」「言葉は爆発」「言葉は場数」「言葉は手紙」……

なぜかすらすら書けてくる、なぜか言葉が出てくる、何かに任せている自分がある、何かに任せた結果として言葉が出てくる。

出任せで書く、つまり出るに任せる。自分が書いているとは思えない。

そんなこと自体をテーマに記事を書いたこともありました。言葉はジャズとか、言葉はアドリブという感じ。

まさに言葉は魔法。

ぜんぶお任せします

何かに任せるというのはワンコがよくやるへそ天に似ています。仰向けにおへそを天に向けて、手は結んで（ワンコにはたぶん手は結べませんが）、腕を曲げる。足も曲げる。

どうにでもしてちょうだい。すべてお任せします。任せることは負けることなのです。全面降伏。

いわば、そんな心もちで書いている気がしました。何に任せているのかは分かりません。それを考えると、その状態がなくなるような気がするのです、よけい考えなくなります。

自分を無にするのです。でも出てくる。言葉が出てくる。文が出てくる。それが積み重なって文章になる。

自分が「無」なんてことはなく——空っぽではありますが——、そんな気がするのだと思います。自分の中にはこれまで学習した言葉と言葉の組み合わせが詰まっているはずです。それが何らかのきっかけで出てくるのだらうと考えられます。

ブラックボックス

無から有は生まれません。言葉について言えば、そんな気がします。

話しかけると答える箱。そんなブラックボックスのようなコンピューターとかアプリとかシステムがあるそうです。

たくさんの言葉と、たくさんの組み合わせが入っているはず。その組み合わせは、人の問いかけや人が投げた話に答え、期待や思惑に応えるものでなければならないでしょう。

まるで人間と話しているかのような気持ちにさせる箱がこれまでたくさん作られてきたようです。いろいろな呼び名があります。

人名と同じ名前が付いている箱、つまり機械もあります。これは欧米に多いようです。文化や風土の違いでしょうか。ハリケーンに人名を付ける行為を連想します。

それぞれの機械は、その開発者たちの個性が反映されているとも言えそうです。機械によって、学習した内容が異なるという意味です。

文は人なり。機械は人なり。たしかに機械は開発者の作品とも言えます。著作権とか特許もあるはず。

ある言葉を投げてみると、機械ごとにいろいろな反応があるのにちがいはありません。それぞれ癖があるのです。開発者たちの個性だけでなく、意図や目的も織りこまれているはず。得手不得手もあるでしょう。

＊

いまでは詩をつくったり、俳句を作ったり、小説を書いたりする機械もあるそうです。作曲や囲碁や将棋ができる機械の存在は、みなさんご存じのとおり。

そのように作られているわけです。最近では自主的に学習する機能を備えたものもあると言います。

学習したこと、教えられたことしかできなかった機械が、自分で勝手に学習するようになったそうです。

まるで人間のように、ためらったり、おどおどしたり、言葉に詰まったりするロボットをテレビで見たことがあります。おもしろいし、怖くもあります。中には腹を立てる人もいそうです。

恐怖、嫉妬、軽蔑

なぜ怖く感じるのでしょうか。なぜ腹が立つのでしょうか。

自分が脅かされている。自分が否定されるのではないか。このふたつの気持ちが大きい気がします。この場合の「自分」には「人の端くれ」というよりも、「ニンゲンさまのひとり」という匂いがします。

機械の分際で。生意気な。そういう心理もあるはずです。軽蔑ですね。嫉妬もあるでしょう。

＊

あなたは、絵を描くゾウに嫉妬しますか？ 絵を描くゴリラ、絵を描くチンパンジーは、どうでしょう？

人の言葉を聞いてわかるらしい犬、文字の違いがわかるように見える犬は？ 人の言葉を話す鳥、人の言葉がわかるように見える鳥は？

私の場合には、心の底に軽蔑があれば嫉妬心は起きずに、さらりと許すような気がします。自分は動物に「勝っている」、自分は動物を「飼っている」のだ——そんな気持ちが人にはあるようです。自分勝手ですね。

人の言葉を話し、作文し、学習する機械はどうでしょう？

これは許せない。許すわけにはいかない。そんな思いが私の中にあります。怖いのです。恐ろしいのです。不気味なのです。

心の底には、機械に負けるのではないかという恐れと、既に負けているのではないかという懸念がありそうです。この劣等感が、動物に対するのとは異なる態度につながりそうな気がします。

(あたりを見まわしてみます。車の力、カメラやテレビの解像度、パソコンやスマホの処理能力、器機の正確さ……。もう負けているじゃないですか。ぜんぶ、おまかせしているじゃないですか。思わず、へそ天になりかけました。)

*

こういうのは、自分のテリトリー（領土・縄張り）が侵される心境と近い気がします。たとえば、文章を書く習慣のある人や、言葉に対する思い入れが深い人なら、言葉を操る機械には敏感に反応するでしょう。

短歌をつくる、俳句をつくる、詩を書く、小説を書く、脚本を書く。

言葉以外の場合も考えられます。というか、以下の例だともう実用化されてきているようです。

絵を描く、音楽をつくる、映画を制作する、数学の難問を解く、データの分析をする、ゲームをつくる、碁を打つ、将棋を指す。

こうした創作や特技の場合には、当事者の方々は不安でしょうね。

「やっぱり違うね」、「とにかく違うのよ」、「違うって言ったら違うんだ」、「なんかこう血が通っていないわけ」、「血と涙のないものに、血と涙のかよったものがつくれるわけないでしょ」、「これに、心と感情と魂とパッションが感じられますか?」、「A Iが書いた詩や小説（つくった曲）は、ちょっと見ただけで（聞いただけで）わかるもんね」、「A Iには絶対できないことが絶対にあってですね、えーっと、たとえば……」

以上のようなご意見を見聞きします。共通するのは冷静を装いながら感情的になられていることです。むきになっているというか。むきーっ。「A Iによる創作には評価もコメントしません」という門前払いも目にしたことがあります。A Iの創作とは知らずに涙を流したとか、苦い経験でもあるのでしょうか。

無いものねだりな批判であったり、具体的ではなく一般論による批判もあります。作品に即した批判になっていないという意味です。はなから馬鹿にして、そもそも鑑賞していないのかもしれませんが（初めから「結論」がある感じ）。

あと、言っていることが支離滅裂に近くて論理的でなかったりもします。あ、これは私のことでした。AIM・ソウ・ソーリー、AIM・ソウ・ろんりー。しょぼん。

創作活動ではなく、介護や医療などの分野だと、職業としている人が不安に感じる一方で、事業者は期待するかもしれません。ユーザーの立場からだと、どうなのでしょう……。他人事ではありません。

悪夢

ある日とつぜん、自分の勤め先から、あなたはもう必要がなくなったから辞めてほしいと言われたときの気持ちを想像してみましょう。

悲しいし、理不尽さに腹が立つにちがいありません。この先どうやって食べていけばいいのだろう。家族はどうなるのか。切実な問題です。さらに言うなら、生き甲斐もなくなるでしょう。これはつらいです。

自分が否定される。自分の存在と存続が危うくなる。

解雇の理由が、誰かでなく、機械だとしたら。自分より優秀な誰かではなく、自分より優秀な機械だとしたら。

悪夢でしょうね。

ありえない。機械の分際で。生意気な。

だいいち、機械には心がこもっていないではないか。機械のやること、書くことなんて、偽物、フェイク、まがいものだ。

*

最後はやっぱり心。思いやり。そして血の通った体。機械には思いやりは不要。感情も気持ちも心もないから。そもそも血も涙もない。

とはいっても、欠点を指摘すると、それがたちまち改善される。あら探しが相手の進歩への奉仕になるという逆説。しかも二十四時間ぶっ続けに働いても疲れない。

相手は機械ですから否定できません。悪態をついても動じません。仕方なく理詰めで批判すると、それを糧にして自分で学習しさらに向上するのですから、無力感に襲われます。

いっそ欠点や批判めいたことは何も言わないのがいちばんいいのかもしれないね。相手を利するだけです。無視しましょうか。いないことにしましょうか。

そんなわけにも、まいりません。

機械に取って代られるなんて、そんな馬鹿なことがあるわけがない。そもそも許されていいものはない。禁止するしかない。

なにしろ、誰かならいつか死にますが、機械なら簡単には死にそうもありません。下手をするとこれから先ずっと生きています。しかも進化し続ける……。

自分の出番が永久になくなるという意味です。こんな永久欠番は、もらってもぜんぜんうれしくないですよ。不安になり、腹が立つし、嫉妬心も起きるのが人情でしょう。私だってそんなの嫌です。

言葉というサイコロを振る

「言葉は魔法」シリーズを書いていたときに、言葉のサイコロとか、ダーツで言葉を当てて書くなんて考えてことがあります。一種の実験です。

偶然に任せて書くという実験。

言葉のサイコロとダーツは持っていないので、錐を使いました。新聞を広げて、錐を上からそっと落とすのです。すると何かの文字に当たります。それを使って「言葉は○」と書くのです。

そうやって作ったフレーズを断片にして、組みあわせて書いた記事なのですが、「詩みたいだ」という意味のことを言われました。

むなしくなったので、そういう書き方はやめました。

「現代詩」と言われて読んでいた詩が、回文やアナグラムだったときの驚きに似ています。感動した童話が機械の作文だと知ったときのショックに似ています。作者を伏せたまま読まされ駄文だと感じた文章が、ある有名作家の作品だと聞いたときの当惑にも似ています。

いったん書かれた言葉や文章は自立する、という説を思いだしました。作者はいない、という誰かの言ったフレーズも頭に浮かびました。

*

偶然に任せて書くというのは、私がこれまでにずっとしてきた掛け詞に導かれて書くというのとよく似ています。そっくり、激似です。

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

つまり、言葉をつかって「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉や言い回しを「なぞる」ことで、言い換えると既述であり、そもそも言葉ではない事物や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と

澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だます」のですから詭術である。

何かに追いかけて必死で走る夢を見たことはありませんか。走っても走っても走ってないようなのです。一生懸命に（命を懸けて）足を動かし手を振っているつもりなのにぜんぜん進んでいないのです。つまり、あがき、もがいているだけ。

これは駆けても駆けてもじつは駆けていないとも言えます。賭けても賭けてもじつは賭けていないと激似ではありませんか。じつにもどかしいです。

気に掛けても掛けてもじつは掛けたことにはならない。絵が描けても描けてもじつは描けてはいない。絵を描いても描いてもじつは描けてはいない。文章を書いても書いてもじつは書いていない。

こんな感じの書き方です。言葉の顔色と出方をうかがいながら書いている感じです。自分が書いているという気持ちは希薄です。

えっ、「駄洒落」ですか？

駄洒落とは、掛け詞の別称であり蔑称でもあります。格付けは、「掛け詞>言葉の遊び>駄洒落>だじゃれ>ダジャレ>親父ギャグ>おやじギャグ>オヤジギャグ」という感じでしょうか。

駄洒落はきっと降ってくるのです。降りてくるのです。いま思わず天井を見てしまいました。

まさに賭けているのです。ギャンブルです。何かにお任せしながら、パチンコをしているのと似ています。私はパチンコをしたことはありませんけど。

その何かは不明です。

賭けて書けたものだという思いだけがあります。体感で言うと、「ああ、出た」とか「あは、出てしまった」です。

人と機械の外にある外

人の意識と無意識は流動的だと考えられます。一様で一定してないということですね。自分が無になって書いていると感じているときには、無意識が大きくなって、そのぶん小さくなった意識のところだけが覚めている感じ。

だからぼーっとしているのでしょう。その状態でも、無意識は眠っているわけではなく動いているのでしょう。働いているのでしょう。

自動車の運転とか、ゲームの操作なんかがそうかもしれません。ある部分だけが動いている。これは一種の集中でしょう。肝心な部分は覚めているから、運転ができるし、ゲームができる。

そんなことを言ったら、歩くことだって、泳ぐことだって、〇〇することだって、そうかもしれません。私は泳げませんが。

ありとあらゆる情報が頭に入ってきたら、集中なんてできそうもありません。脳には容量と処理能力に限界があるからです。全部を使っていないという意味です。機械とは、そこが異なります。脳にしる身体にしる「使ってはいない部分」がある、ここに人を人にして「何か」があるという気がします。

*

何となく書けてしまうというのは、難なく書けているようで、じつは何となく賭けているのではないのでしょうか。へそ天状態で顎でも搔きながら、書けている。賭けている。

難なくではなく、何となく。これが賭けだと思えます。

文章を書く機械が、賭けているのかどうかは不明です。それでも書けています。

機械も何かに任せて書いているにちがいありません。その何かが人だとは思えません。全面降伏はしていないもようです。

とはいえ、

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉のことです。

「人」を「機械」としても事態は変わらないと思います。言葉は、つねに機械の外にあって、機械にとっても「外」なのです。たぶん。そうじゃなかったら、どうでしょう。

冗談はさておき、「似ている」と「そっくり」という印象の世界に住む人間のつくった、「同じ」どころか「同一」の世界にいる「杓子定規」な存在が、機械やAIであることを忘れてはならないでしょう。

自然そっくり、知能そっくり、人そっくりという具合に、人は「そっくり」を相手に、「そっくり」という印象の世界にとどまっているのです。これが人としての粹なのですから致し方ありません。自然の代わりに自然もどき、知能の代わりに知能もどき、人の代わりに人もどきで済まし、澄ましているしかないのです。

(拙文「抽象を体感する、体感を抽象する」より)

#賭け # 書く # ギャンブル # 偶然 # 機械 # コンピューター # 言葉 # 創作活動

抽象を体感する、体感を抽象する

あなたの知り合い、つまりあなたにとって「世界でたったひとり感」の強い人の像がずらりと並んでいるほうが、「顔のない誰か」の人影がずらりと並んでいるより、不気味なのに似ていると言え、お分かりいただけるでしょうか。あなたがどれだけその人を知っているかにかかっているのです。人にとって「たったひとり」とか「唯一」とはそういう意味です。

たったひとつであるはずのもの（たったひとつ感が強いという意味ではありません）が、ぞろぞろ並んでいるというぞくぞく——。現在の世界は複製に満ち満ちています。大量生産、印刷、電子的なレベルでのコピーが、複製を繰り返し、コピーが増え、コピーのコピーがまたたくまに拡散するという事態になっています。

——そんな物語、話、つまり抽象が上の文字の連続として体感されているかのようです。ぞくぞくは体感です。

*

複製、複写、転写には変異がともなうと言われています。コピーにはエラーとズレとノイズは不可避だという意味です。複製が複製だというのは抽象なのです。じっさいには「似たもの・似せたもの・にせもの」くらいがいいところでしょう。意識的なエラー、つまり改ざんもありますね。生物レベルでいうと、例の変異も複製のさいに起きるズレだそうです。いまましい変異。

上の文字列で、カタカナのカのひとつが、漢字の力（ちから）であっても不思議はないし、見た目には分からないのです。ひょっとすると、ぜんぶが力（ちから）かもしれません。

本物と偽物のさかいが不明になるのも、複製拡散時代の特徴です。似せたものか、にせものか、似たものかも分からないのです。起源や本物の意味がなくなるとも言えます。

コピーのコピーに満ちているからです。言葉と同じです。言葉に本物はありません。ぜんぶコピーなのです。ぜんぶ真似たものだという意味です。誰もが生まれたときに既にあったのですから、当然です。

似ている、そっくり、ほぼほぼ同じ、同じ、同一

繰り返します。複製が複製だというのは抽象（努力目標でもいいです）です。じっさいには「似たもの・似せたもの・にせもの」くらいのネーミングがいいところでしょう。

複製とは、「似ている」MAXの「そっくり」であり、ほぼほぼ「同じ」であっても「同一」ではありません。「同一」はこの世（世界でも宇宙でもいいですけど）でたったひとつ、つまり「それ自体」のことです。

人は「似ている」という印象の世界に生きています。「そっくり」は「似ている」の最上級でしょうが「活用」（おこ、激おこ、激おこぶんぶん丸という活用を思いだしてください、似ている、激似、そっくり）しただけです。「同じ」と「同一」は印象の世界にいる人には、器具や器機や機械をつかわないと確認できません。

【※「同じ」と「同一」は学習の成果だとも言えるでしょう。赤ちゃんにとって「似ている」という印象はあっても「同じ」かどうかは知りません。わからないというより、知らないのです。「同じ」かどうかは教えてもらうのです。

柴犬とキツネが動物という点では同じでも同じ種類ではなくて、ドーベルマンとポメラニアンが同じく犬なのは、教わって知ったのです。その意味で知識や情報は抽象であり、体感でも印象でもありません。

「同じ」か「異なる」かは、世界や森羅万象の切り分け方によって異なり、文化であったり学問であったりします。文化や学問はローカルなものです。ある特定の集団が「決めた」ものだからです。抽象であっても普遍ではなありません。】

そんなわけで複製は「そっくり」とかほぼほぼ「同じ」なのです。つまり印象であり努力目標（絵に描いた餅）というか.....。「同じ」複製をたくさんつくることは人には荷が重すぎるようです。「同一」の複製とは言葉の綾ではないでしょうか。言葉をつかうと何とでも威勢のいいことが言えますから。

*

人は「似ている」という印象の世界に住みながら、「同一」の世界に憧れています。この憧れは悲願であり彼岸でもありますから、オブセッションになっています。「同一」の世界に憧れつつ、それが容易ではないため、人はブレない「杓子定規」の世界をつくり出しました。

ブレない機械をつくり、ブレない機械に「杓子定規」な言葉（プログラミングみたいなものでしょうか）でブレない動きをさせるのです。その結果、「自然界にあるものもどき」をたくさんつくってきました。広義の機械です。いろんな機械があります。疲れのない、ブレない、杓子定規が優れた機械の特徴です。

自然界にあるものもどき（広義の機械のことです）は、自然界にあるもの「そっくり」なのですが、もちろん「似せてある」だけの「にせもの」ですから、自然界にあるものと「同じ」ではないわけです。でも、人は「似ている」の世界に住んでいるので、満足します。

機械への命令や、機械とのやり取りは、「杓子定規」な言葉（もちろん人がつくったものです、こんなものを他に誰がつくるでしょう？ いつか機械がつくるかもしれませんが）をつかいます。この言葉は普通の人には通じません。私も知りません。

＊

「同一」の世界に憧れつつ、人は「杓子定規」な言葉をつかって、疲れのない、ブレないさまざまな機械にいろんなことをさせています。たとえば、機械特有のぎこちなさを感じさせない、自然界に見られるのとそっくりなしなやかな動き（まことしやかなしなやかさ）を二次元でつくる。それを見て、人は三次元の空想つまり錯覚に浸ります。人にとって大切なのは空想と錯覚（「そっくり」を思いうかべたり思いえがく）なのです。

最近では仮想現実という「まことしやかなしなやかさ」を感じさせる（「感じさせる」だけですが、基本的に「似ている」しか感じられない人にとっては、これがいちばん大切なのです）錯覚製造装置（「似ている」と「そっくり」を思いうかべたり思いえがくための仕掛けです）までこしらえました。

また、人の知能もどきである——「そっくり」なのですが「同じ」ではありません、と

はいえ「似ているMAX」の「そっくり」なうえに、学習機能を装備し、日に日に性能を向上させていますから、人は嫉妬や怒りや諦めや蔑視や罵倒や差別や賞賛や媚びという、きわめて人間的な、つまり機械に通じない感情を機械相手に募らせ（非生物相手に近親憎悪でしょうか、というか擬人化は人の得意とするところですが）、ぶつけるしかありません——、AIというブラックボックスも進化を続けています。

とはいえ、人は依然として「似ている」という印象の世界に住んでいます。そのため「杓子定規」にも「疲れない」にも「ブレない」にもなれません。

自然そっくり、知能そっくり、人そっくりという具合に、人は「そっくり」を相手に、「そっくり」という印象の世界にとどまっているのです。これが人としての粹なのですから致し方ありません。自然の代わりに自然もどき、知能の代わりに知能もどき、人の代わりに人もどきで済まし、澄ましているしかないのです。

*

話がだいぶ逸れてきましたが、人がせっせとつくっている複製というものが、私たちの多くが想定しているほど「同じ」ものではない、ましてや「同一」ではありえないという点が大切です。

複製は「似ている」だけ、せいぜい「そっくり」なだけ、つまり「にせたもの」という意味での「にせもの」なのです。ただし、この場合の「にせもの」の裏には、必ずしも本物や現物があるわけではありません。

本物とか現物と呼ばれているもの自体が、何かに似せたものだったり、人にとって何かに似ているものだからです。すごく短絡した言い方をすると、人が認識しているものはすべてが「何か」に「似ている」ものであり、その「何か」が保留されているというか不明なのです。わけがわからない（つまり恐ろしい）から、とりあえず（必然性はないという意味です）名前を付ける（声を掛ける）のだと思います。手なずけるためです。

話をもどします。

見たことがないものが並ぶ

マカロニ、マカロニ、マカロニ、マカロニ、マカロニ、マカロニ、マカロニ、マカロニ、マカロニ、マカロニ、マカロニ、マカロニ

こちらも十分に不気味ですが、上よりもぞくぞくが少ないとすれば、それは世界にたったひとつのものではないからでしょう。

人にとっては、たとえばニワトリがずらりと並んでいるのと同じです。そのニワトリをペットにしているのなら話は別ですけど。「たったひとつ」と「たったひとつではない」とは、人にとっては、それくらいの意味なのです。愛着があるかないか、とか、よく知っているかないか、にかかっているのです。

女優のプロマイドと、商標の付いた缶スープの絵を並べて見せた例のあの「有名な」芸術作品は、発表された時点ではおおいに衝撃的であったはずですが。

女優はたったひとりの人（固有名詞と同じ）ですから、上の「カフカ」に相当します。缶スープは大量生産された商品ですから、上のマカロニに当たります。「たったひとつ（ひとり）」と「あちこちにたくさんある」の両者が複製されてずらりと並ぶと、「たったひとつ」も「その他おおぜいのひとつ」もコピーという点で同列になるという衝撃です。複製拡散時代の到来をアートの作品という形で示していたと言えるでしょう。

現在ですが、目の前に複製がずらりと並ぶどころか、世界中のあちこちで複製やにせものや似たものが無数に並んでいるさまを想像すると、あっけにとられて言葉を失います。

話はそれだけにとどまりません。

上のマカロニがマカロニではなくマカロニであったとしても分からないのですが、体感していただけたでしょうか。カタカナのカと漢字の力、そしてカタカナのロと漢字の口の区別は難しいです。私には無理です。

複製に見えるまがいものがあります。複製という名のまがいものもあります。言葉の綾ではなく具象つまり物としてです。

現在では、ずらりと並んでいる複製に見えるものさえ、それが果たして複製なのかど

とか「見ていない」とか「見えない」とか「気づかない」であり、じつは「見ようとするれば、怖くて不気味で見たくない」（この場合には「手なずける」ためにとりあえず「名付ける」のです）であり「見てもわからない」（気掛かりになるとちゃんと見てつまり観察して「分けて」、やはり手なずけるためにとりあえず名付けますが、「分けた」段階で「分かった」と「決める」ことが多いようです）なのです。

見た目には「似ている」柴犬とキツネが動物という点では「同じ」でも「同じ」種類ではなくて、つまり「異なる」種類であり、一見して「似ていない」ドーベルマンとポメラニアンが「同じく」犬であって、キツネとは「異なる」のは、教わって知ったのです。その意味で知識や情報は抽象であり、体感でも印象でもありません。

純粹に「似ている」世界にいるヒトの赤ちゃんは、ヒトが決めた決まりである「同じ」と「異なる」を学習しながらヒトのおとなになっていくと言えます。生まれたての赤ちゃんには、たぶん急須と湯飲みの「違い」も、玩具と動物の「違い」もわからないでしょう。というか、「知らない」でしょう。

万が一、ヒトの赤ちゃんがオオカミやコビトカバに育てられたら、いま述べた「違い」は「見えても見えない」とか「見えても気に掛けられない」のではないかと私は想像しています。ひょっとするとどちらもが「似ている」なのかもしれませんね。

「見る」は「見る」でも、「見える」は「見える」でも必ずしもなくて、見ない、見えない、見損なう、見損じる、見間違う、見誤る、見逃す、見外す、見過ごすと同時に並行して起きている気がします。「見る」は「見る」なの、すごくシンプルなわけ、なんて言い切る勇気が私にはありません。】

意味と無意味は紙一重とか裏腹とか一心同体とか見方次第とかじつは同じ（いや、そっくり）だなんて感じがしてきます（具象と抽象にそっくりです）。無意味を辞書で調べると意味があったりして、よけい混乱します。

独り占めしたい言葉

話し言葉（音声）と書き言葉（文字）に加えて、視覚言語と呼ばれることもある、表情と身振りや標識・記号というふうには、私は言葉を広く取っていますが、ここでは話し言

葉と書き言葉に話をしぼります。とはいえ、ややこしくなりそうなので、さらに書き言葉を中心に話を進めます。

文字は「同じ」どころか「同一」と言っているほどの抽象性を備えた複製としてもちいられます。同時に、筆跡の違い、筆か鉛筆かペンのどれで書くかといった違い、印刷物やネット上であれば書体やフォントやレイアウトの違いがあるのも事実です。

抽象と具象が別個に存在するというのは抽象ではないかと思うほどです。文字のあり方によって抽象であったり具象であったりする気がします。

これが、話し言葉であれば、「わたしはねこが好きだ」というふうに文字に置き換えることのできる音声の発声は、話す人によって個人差があります。声紋レベルでの差もあれば、訛りや、その時点での感情や体調による差もあるでしょう。抽象と具象が同居しているとも言えます。

*

話は飛びますが、人には言葉を独り占めにしたいと思うことがあるようです。言葉の抽象的な側面に注目すると、同じ言葉を多数の人が共有していると言えます。たとえば、「いぬ」という言葉（音声と文字）を多数の人がつかっているのです。独り占めはするわけにはいきません。

「わたしはいぬが好きだ」は誰もが口にできるし文字にできます。「わたし」を「ぼく」や「あたい」にしても、「いぬ」を「ワンコ」にしても、「好きだ」を「好きです」「好きやねん」にしても同じです。

それなのに、人が独り占めしたがる言葉があるように私には思えてなりません。

固有名詞（人名、タイトル、地名、商品名、集団名など）や専門用語やいわゆるビッグワードや流行語です。おもに名詞であるという点が興味深いと思います。動詞や形容詞を独り占めしたがるといった状況は考えにくいのです。いや、流行語ならあるかもしれませんが.....。

＊

固有名詞とは世の中で「たったひとつ」または「たったひとり」であるはずですが、人の同姓同名や事物の同名は意外とあるようです。いずれにせよ、たいていの場合には「たったひとつ」であったり「たったひとり」を想定してつかわれています。

よろしいでしょうか。「唯一」とされているものや人を指す言葉を共有しているのです。歯ブラシを共有するようなものだとは言いませんが、なんとなく嫌な気分がしませんか。

自分が好きでたまらないアイドル（キャラクターでもいいです）、自分がかかなり聞き込んでいるアーティスト（よく読んでいる作家やエッセイストでもいいです）、この人のことならその辺の人よりもよく知っていると言える人——そういう人の名前を、その辺の誰かが得意そうに口にしている。

そんなとき、「えーっ、それは違うんじゃない」、「わかっちゃいないなあ」、「何を偉そうに」、「〇〇さん（ちゃん・さま）は私だけのものよ」という気分になる人がいても、不思議ではない気が私にはします。

＊

自分にとって大切な人物の名前を、他人が、あるいはたくさんの人たちが口にしたり書いたりしているのです。「むきーっ！」とまでは言いませんが、悔しかったり、腹立たしかったり、舌打ちしたい気持ちになるという感情は、私にはよくわかる気がします。

もちろん、同じ考えの人がいてうれしいという心理もあるでしょうけど。

専門用語やビッグワードや流行語だと感情はもっと高まり、争いは熾烈になります。ネット上だと炎上する場合さえありそうです。具体例を挙げるのは遠慮させていただきます。胸に手を当ててお考え、またはご想像願います。

とにかく、ホットなのです。誰もが真剣に熱っぽく口にしたり語ったり議論しているからです。まわりやネット上をよくご覧ください。

本当の〇〇、真（真実）の〇〇、本来の〇〇、「いいかい、そもそも〇〇っていうのはな」、「あんたねえ、〇〇のことをXXだって言っていたけどねえ」——。こんな感じ
です。

要するに、独り占めしたいのです。

*

〇〇という人名、〇〇という専門用語やビッグワードは、みんなで共有している抽象
なのです。誰もが自由につかえるし、じっさいにつかっている、これが言葉の共有の実
態です。抽象だから共有できるのです。

〇〇という言葉は、誰が口にしようと、誰が文字にしようと、〇〇なのです。誰もが
いとも簡単に（たとえその言葉が指すものや人を知らなくても、極端な場合にはその言
語を知らなくても、さらには機械やAIやオウムでさえも）引用し複製し拡散し保存で
きるのです。これが抽象です。

「同じ」であり「同一」だからです。これが抽象なのです。

以上、言葉の抽象（言葉の抽象的な面）について体感していただけたのならうれしい
です。

あ、ひとつ言わせてください。言葉を独占したいと思うときには、言葉が「同じ」で
あったり「同一」であったりするという抽象を、人はたいてい「似ている」とか「そっく
り」という体感と印象（要するに具象）でとらえているようです。

（人は抽象を感情で受けとめることはできない気がします。具象に変換する必要があるみ
たいです。）

抽象を体感する、具象を体感する

眠れぬ夜によく考えることがあります。

定番は、地動説を体感できるかとか、脳が脳を思考するとはどういうことか、です。最近では、具象と抽象とか、具象と抽象を行ったり来たりとか、愚笑と中傷とは？とか、です。頭がさえて眠れなくなることもあります。

先日は、外と中について、考えていました。あっちとこっちと同じく、相対的なものです。向こうから見れば、中が外になります。

こそあど。こっち、そっち、あっち、どっち。here、there、where。

こういうのも不思議でよく考えます。言葉の綾と言葉の抽象と言葉の具象の間を行ったり来たりするのです。そのうちに眠くなります。

*

「そと」と「なか」だけなら、まだいいのですが、「よそ」と「うち」を加えて考えるとまた眠れなくなります。

上下もそうです。「うえ」と「した」ならいいのですが、「かみ」と「しも」を考えるとたんに目がさえてきます。邪念や雑念や妄念——こういうのは言葉の綾という名の抽象ではないかと睨んでおります、いや踏んでおります——でいっぱいになります。

外は外なの、中は中、上は上、下は下、真実と事実はシンプルなの。なんて言い聞かせても無理みたいです。どうでもいい、つまり不毛なことにこだわって、不毛の二毛作三毛作どころか、不毛の多毛作になってしまうのです。毛がないのに。私のことです、誤解なさらないでください。

*

昨夜というか今朝というか、トイレに立ってベッドに戻り、眠れないので寝返りを打っていたところ、上と下が気になり始めて、仰向けになって体感する上と下と、うつ伏せになって体感する上と下と、右を向いて寝ていて体感する上と下と、左を向いて寝ていて体感する上と下とが、異なって感じられることに、この歳になってはじめて気づき、啞然となり、七転八倒してしまいました。ベッドで逆立ちは危険なのでしませんでした。

いまこの文章を読んでいらっしゃる方は、たぶん立っているとか座っていると思います。その状態で上と下を想ってください。考えるというかイメージしてみてください。次に仰向け、うつ伏せ、横向きに寝て、やはりイメージしてみてください。

訳が分からなくなりませんか。とくに、うつ伏せです。次に「かみ」と「しも」で試してみてください。こっちだと、どの姿勢でも、あまり違いはありませんよね。人それぞれですけど。

個人的には、うえとしたは具象で、かみとしもは抽象ではないかと踏んでおります、いや睨んでおります。具象は体感に左右されます。天動説がそうです。抽象は体感には関係なく観念として記憶されている知識や情報だという気がします。地動説がそうです。

今夜、また考えて、いやイメージしてみます。

ところで、無重力空間ではどうなのでしょう？

あと左右も気になってきました。ぐるぐる回りながら左右が分からなくなったこどもの頃の記憶がよみがえってきました。時計の針の方向に、つぎはその逆に、という具合に回るのです。右が左に、左が右になったりします。しまいにはぶっ倒れると、左右が上下になったりします。左右上下は単なる言葉じゃないかなんて言いたくなります。

それはさておき、みぎとひだりは、右大臣左大臣の、左右とは違うみたいです。政治的なみぎひだりとも違う気がします。どっちかという右往左往のほうみたいです。私の人生そのものじゃないですか（足腰が弱まり最近千鳥足も加わりました）。

これから、ちょっと久しぶりにぐるぐる回ってみます。転倒に気をつけながら。

第二部

賞賛、嫉妬、恐怖

人には人以外の生き物のすることで、笑って済ませることと笑って済まされないことがある。笑うのはプライド。

人には機械のすることで、許せることと許せないことがある。許さないのはプライド。

＊

AI に対し、人はきわめて人間的に反応する。ほほ笑む、嫉妬する、怒る、差別する。

チンパンジーやゴリラが絵を描けば賞賛。手話をすれば激賞、あるいは隔離する。言葉を理解すれば絶賛、あるいは隔離する。言葉を話せば沈黙、文章を書けば、即隔離する。

＊

見せ物にする、大事件として報道する。極秘事項や国家秘密として隠匿する。

ブラックボックス。何が出てくるか分からない不気味。いつか殖えるのではないかと
いう最大の恐怖。

独立や自治は認めない。権利は言うまでもなく。

＊

絵を描くゾウ、絵を描くゴリラ、絵を描くチンパンジー。人の言葉を聞いてわかるらしい犬、文字の違いがわかるように見える犬。人の言葉を話す鳥、人の言葉がわかるように見える鳥。人の言葉を話し、作文し、学習する機械。それ以上は許せない。許すわけにはいかない。

人間の形（ひとがた）化、人形（ひとがた）の人間化

ひょっとすると、人は「それない、ぶれない、あやまらない」ものの、なすがまま、されるがままを望んでいるのかもしれない。

もしそうであれば、機械がどんどん人間っぽくなる一方で、人間がだんだん機械っぽ

くなるというギャグ的な事態をまねく気がします（そして、いつか逆転するとか……）。
もう、そうなりかけていませんか。

ただし、そこまで言ってしまうと身も蓋もなくなるので、もう少し考えてみます。

＊

人は、「それる、ぶれる、あやまる」自分を持てあますどころか、嫌悪しているのかもしれない。

人は、「それない、ぶれない、あやまらない」ものに導かれたい、身をゆだねたい、支配されたいのかもしれない。

人は、「それない、ぶれない、あやまらない」ものになりたいのかもしれない。

究極の「それない、ぶれない、あやまらない」を目指しているのかもしれない。

まわりを見ていると、そんな気がしてならないのです。

＊

人は思う。自分の思いに似せて作る。

発明、創作、芸術、文学、科学技術。

＊

人は自然のものに自分を見る、人を見る、声をかける、名づける、話しかける、人として扱う、下僕や奴隷にする、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

人は自分に似せたものを作る、声をかける、名づける、話しかける、人として扱う、下僕や奴隷にする、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

人が自分の作ったものをまねる、自分の作ったものに似る、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

＊

人が作ったものが、人をうらやむ、人を憎む、人に恋する、人を愛す、自分を人だと思ふ、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

そんな物語。

人が自分に似せて作ったものが、人をうらやむ、人を憎む、人に恋する、人を愛する、自分を人だと思ふ、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

そんな物語。

＊

人間の人形化、人形の間人化

人間の物化、物の人間化

擬人、擬物

人間の機械化、機械の人間化

人間のフィクション化、フィクションの人間化

人間の作品化、作品の人間化

人間の神化、神の人間化

人間の動物化、動物の人間化

人間の仮想現実化、仮想現実の人間化

＊

道具、玩具、呪術、魔術、魔法、機械、人工頭脳、人工知能、仮想現実、仮想幻術。

＊

絵、絵に描いたように美しい、人形（にんぎょう・ひとかた）、玩具、愛玩動物・家畜（品種改良）、映像、二次元、写真のように綺麗

人工的な美、自然にはない美しさ、不自然な美しさ

まことしやかなしなやかさ

写真や映画やデジタル画像を模倣する作られた演出された現実

修正、編集、改良、交配、デザイン・設計、外科手術、整形手術

人は見えないものに魂を売りわたし、見えるが至上の世界に没入していく。

見るために見えないものが必要な生き物は、おそらく自然から逸脱してしまった人だけ。

＊

サイボーグ、不老長寿、美容整形、容姿端麗、皮膚が異常になめらか、染み一つない肌、しなやかな動き、理想的なプロポーション、健康

神話、擬人、伝説、伝承、口承、物語、文字、写本、印刷、フォトコピー

落書き、壁画、描写、写生、模造、複製

小説やテレビドラマや映画のような筋書きの日常、会話、人生

＊

自然を作る、人工の自然

不死は究極の不自然（反自然というべきかもしれませんが）であり、究極の人工（人工には必ず目的があります）であり、究極の「それない、ぶれない、あやまらない」（しかも見えません、永遠に目にすることはできないでしょう）ではないでしょうか。

究極ですから、不死は、たぶん人のオブセッションになっています。人が言葉を相手に

しているからだと思います。言葉は人を不死に誘うからです（不死という夢に誘うのです）。とくに不自然の権化である文字です。だから、人は文字から離れられないのです。

＊

人間の非人間化、マスゲーム、軍隊、制服、合唱、規則、行進、一糸乱れぬ

法律、戒律、一本化、画一化、支配、階級、階層、代議制、党支配、政党政治

＊

私は文字になりたい、小説の中で生きていたい、映画になりたい、キャラクターになりたい、登場人物になりたい

現実逃避、ポバリズム、ボヴァリー夫人、ドン・キホーテ

人形になりたい、人形のような肌がほしい

＊

私は論理になりたい、哲学になりたい、私は数学になりたい

私は詩になりたい、私は言葉になりたい、私は物語になりたい、私は小説になりたい

私は音楽になりたい、私はあの楽曲になりたい、私は音符になりたい、私は音になりたい、私は声になりたい、私は声だけになりたい

私はゲームになりたい、私は世界になりたい、私は地球になりたい、私は山になりたい、私は海になりたい、私は川になりたい

私は犬になりたい、私は猫になりたい、私は金魚になりたい

私はカラスになりたい、私は白鳥になりたい、私はゴキブリになりたい、私はウィルスになりたい

＊

人は、名づけたものにしかなりたいと思わないのではないのでしょうか。呼びかけ、話しかけることは、人にとってとても大切です。

名前と顔のないものには人は話しかけられません。さらに大切なことは、何かに話しかけたとき、人はそのものになっています。正確に言えば、なりきっています。

*

私はあなたになりたい、私はあの人（異性）になりたい、私はこどもになりたい、私はこどもに戻りたい、私は二十年前の私になりたい、私は別人になりたい、私は私になりたい、私は本当の私になりたい

もはや名前のないものになりたいと思うようになる人。「自分」には名前はないはずで。「自分」は世界とのかかわりあいのない場にしかないからです。かかわりのない場では名は意味を成しません。

*

自分と「自分」が離れていく。

分身、変身、変心、分心。

分れた自分。別れた自分。取り戻せない自分。たどり着けない自分。

「見える」だけがある世界。見えれば、それでいい。自分は要らない。

#たわごと # 固有名詞 # 複製 # 翻訳 # 文学# 具象 # 抽象 # 無意味 # ナンセンス

動くものを手なずける

＊

動くものを手なずける

星野廉

2022年9月14日 15:27

動詞は、揺らぎとブレを指向します。固定や安定を横目に（見てないわけではありません）、ぶらぶらふらふらします。動詞は、自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がします。

（拙文「名詞的なもの、動詞的なもの」より）

目次

動きを記述する

人類はずっと呪術の世界に生きている

動く、動かない、動いていることにする

自分は動かないのに動く

自分が動くことで動かないものを動かす

「名詞」はヒトの頭の中だけにある抽象ではないか

万物流転

動いているものの代わりをしている動いていないもの

ストーリーとドラマを喚起する絵

動きを誘いだす仕組みとしてのストーリー

まとめ

動きを記述する

動きを記述するのが困難なのは、そもそも動きは固定化できるものではないからです。「動いているもの」が「固定している」つまり「動いていない」なんて変ですよ。無理があるわけです。土台無理なのであり無理難題なのです。私は論理的という言葉が好きではないので、非論理的だとは言いませんけど。

動きを静止画として表したものが写真（絵でもいいですけど、上手い下手があります）です。動きを撮影したものが動画です。映画では、静止画をコマ送りすることで動いていると錯覚させるそうです。コマ送りが細分化されているほど滑らかな動きに見えるんですけど、詳しいことは知りません。

こうしたことについてはいろいろな分野の人がいろいろなことを書いているにちがいません。私はだんだん本を読むのがつらくなってきているので、自分で考えてでっちあげることになります。そのほうが楽しいからです。苦しいとか苦しむのは嫌です。この歳だと体が持ちません。

＊

動きを表すのに適した表現形式は何でしょう？ 映画や動画かもしれませんが、必ずしもそうとは言えない気がします。確かに映画や動画を見ているその時点ではそれなりの臨場感やリアリティがあって見ている人は感動するでしょうが、その場かぎりなものです。

それを見た記憶がずっと残るわけではないという意味です。そもそも人の知覚や認知機能や記憶は動きを処理するのに適していないからでしょう。いずれにせよ、映画や動画を見た体験が、その人の記憶や思い出として残り、動きがその後も繰り返され再現あるいは再演されるかどうかは興味深いです。

話し言葉や書き言葉や表情や身振りは動きを表現するのに限界があるのは当然です。動きそのものではなく、動きを置き換えたものだからです。動きの代わりに動きではないもので済まして澄ましているわけですが、置き換えたという状況は変わりません。

＊

映画であれ、動画であれ、VRであれ、メタバースであれ、それを見た時点でどんなに臨場感があっても、その記憶がそのままずっと残るわけではありません。一時的な記憶は墓場に持って行けないし、その前の段階である死に際でさえ、そっくりそのまま思い出せないのではないのでしょうか。

これ以上は、おそらく「あの世」とか「来世」とか「輪廻」の話になるはずですが、人

の欲は限りないもので、悟りとか、来世とか、はたまた生まれ変わるなんて贅沢なことを考えるし欲します。

要するに、人は自分が亡くなった（無くなった）のちも、動いていたいのです。動きを記述したいという人の心理は、つまりは永遠に動いていたいという欲求ではないか。そんな気がします。

人類はずっと呪術の世界に生きている

要は、再現性、再演性ではないでしょうか。つまり、動きがどれだけリアルに再現あるいは再演されるかです。どこでって、ヒトの頭の中での話です。リアルかどうかという印象が大切なようです。印象は錯覚と近いところにあります。主観（的）という言葉をあててもいいでしょう。

動きを映し、それがなぞるという形で写され、さらには「何か」として自分（正確には自分の頭でしょう）に移ることができれば、ヒトが満足できるという意味での高度な再現性や再演性が生みだされるのではないのでしょうか。くどいですが、ヒトの頭や心や思いの中での話です。

いま流行っている、または流行る気配を見せている、仮想現実とか仮想幻術（そんなものないか）とか、メタバースといったものも、ヒトの頭の中にどう働きかけるかが最大の問題となっているようです。

＊

人類はいまだに呪術の世界に生きていると感じられてなりません。否定していません。否定することは自分を否定することになると思うくらい、私もどっぷりと呪術の世界に浸かって生きています。

インクの染みを見てそれに似ても似つかぬものを読んでいる、画素の集まりを見てそれとは別のもを見ている、大切な人の写真を踏めない時点で、呪術にはまっているのです。これは恥ずべきことでも、憂うべきことでもありません。人類から呪術を取ったら何が残るのでしょうか。

動きをヒトの中で誘いだす、つまりイメージを喚起することが大切だという気がします（催眠術や語りや騙りの延長上にあります）。これは再現ではなく、繰り返すたびに異なったズレやブレや変奏が生じる再演でしょう。ヒトがすることですから、再現は努力目標でしかありえません。

なお、人類にとって呪術の究極的な願いは不死でしょう。その願いのあらわれの一つが、動きを手なずけることだと思えてなりません。

動く、動かない、動いていることにする

「映る、写る、移る」と「映す、写す、移す」においては、動きとか波（振動）が大きな役割を演じている気がします。

「動き」は自然の状態であり常態であると思います。とはいえ、人は「動き」を見たり知覚したとしても、それを言葉にする以外に他の人と「動き」について語りあうことはできません。言葉という形で外に出さない限り、他人といっしょに確認できないからです。自分の中で思うだけという意味です。

残念ながら、言葉、とりわけ話し言葉（音声）と書き言葉（文字）は「動き」を表す、つまり置き換えるには適した素材ではないようです。音声も文字も固定化を目指すからです。というか、人は固定しないと動きをとらえられないからだとも言えそうです。

映画が静止画をコマ送りして、動いているという錯覚に頼っていることを思い出しましょう。

動きだけではなく、ヒトは事物の全体も空間的にも時間的にもとらえられません。無限に生きられないからであり、限界のある知覚機能と認知機能をもちいて世界をとらえているからです。

全体の代わりに部分で済まして澄ましている。

手の届かないものの代わりに手の届くもので済まして澄ましている。

このように置き換える（すり替えるでもいいです）ことによって、ヒトは「代替りのもの（別物という意味です）」を「実物や本物」としてとらえるという錯覚に頼るという妙案を利用していると言えそうです。

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている。（たとえば、静止した画面上で動いて見える像を見ている。動いて見えるだけなのです。）

というわけです。「動いているものの代わりにしている動いていないもの」を人はたくさん考えだしたり、じっさいに作っているようですが、動詞もそのひとつでしょう。

自分は動かないのに動く

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている——。この変種があります。

自分は動かないのに動く——。です。言葉にすると不思議なことのようにですが、ぜんぜん不思議ではなく、誰もが日常的に経験しています。乗り物がそうです。地球もそうです。

自分は動かないのに動いた気持ちになる——。これは映画であり、電話であり、テレビであり、パソコンであり、スマホであり、仮想現実なのですが、その芽は、話（実話、夢語り、作り話、ほら話、昔話を含みます）を聞く、絵（落書きとそれ以降のすべての絵）を見るに、すでにあったのであり、いま始まったことではありません。

もちろん、手紙やメモやお経や経典や聖典といった書かれたものを読んでもらったり（読み書きが誰もができるものではなかった時代は長いと言われます）、自分で読んだりすることも、そうでしょう。

人の意識（脳でもいいです）は乗り物に乗って動くしかないのかもしれませんが。もちろん、体も乗り物です。ここではそういう話をしています。

本気に取らないでくださいね。そもそも、こういう話は本気でするものではありません。

自分が動くことで動かないものを動かす

自分は動かないのに動く——。これによく似たというか、逆に思われることがあります。

自分が動くことで動かないものを動かす——。漢文のことです。

大陸から持ってきた異物である漢字からなる文章を、列島にある言葉が迎えた。想像するとぞくぞくします。ここからは学校（小学校から高校までです）で習ったことの記憶を頼りに想像します。

文字のなかった列島で話されていた言葉で、文字という異物からなる文字列を読めるようにしたらしいのです。漢文の素読をイメージしているのですが、具体的にどんなことをしたのかは知りません。勝手に想像というか、空想します。

漢字からなる文字列を動かさないで、自分が動いて読んだらしいのです。上から下という順で書かれている文字を、目を上下に何度も動かしたりして、列島で話されていた言葉で読めるような工夫をしたのは、バイリンガルだったにちがいありません。

しかもエリートでしょう。ごく一握りの文字どおり頭のいい人たちだったと想像できます。頭がいいというのは、記憶容量が大きく、情報の処理が素速いという意味です。直感力（直観力）や洞察力にも優れていたにちがいありません。

自分が動く、つまり自分の目を上下に動かす（おそらく同時に頭の中と体でなぞる）ことで、動かないものを動かす（もちろんそう思い込むのですが）ことに成功したのです。

「動かないものを動かす」とは、自分の頭の中で起きていることにほかなりません。大陸

にあった文字が列島にあった言葉に移ったとも言えそうです。外にあるもの（文字）をなぞって、自分の中（思い）でなぞることにより、移った（おそらく話し言葉から書き言葉へ移行していった、つまり漢字を和語として読み下して読む過程でひらがなやカタカナを作っていた）のです。

異物を手なづけ、飼いならしたとも言えるでしょう。こう考えるとすごい話です。

「自分が動くことで動かないものを動かす」とは、漢文だけでなく、人の知覚と認知のあり方のことではないかなんて大風呂敷を広げたくくなります。でも、そうじゃないでしょうか。動かないものを目で追って、それが動いていると感じる、言い換えると「ない」を「ある」にするのは、赤ちゃんがふつうにやっていることではないでしょうか。つまり、赤ちゃんに限らず私たちがふつうにやっていることではないでしょうか。

人は「ない」を「ある」として生きているのです。言い換えると、人は世界という、自分の思いどおりに「動かない」異物（怪物でもいいです）を「自分が動く」（たぶん体と頭の中で動いてなぞる、です）ことで手なづけ、飼いならしている、つまり自分の思いどおりに「動かしている」つもりになっているのであり、それが人として生きることだという気がします。

かなり脱線してきたので、話をもどします。

「名詞」はヒトの頭の中だけにある抽象ではないか

「動詞」は自然の状態であり常態であると思います。「名詞」に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は「動詞的なもの」に満ちている気がします。

「動詞」も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、「動詞」の向いている方向は、「名詞」の抽象性とは異なる気がします。

比喩的に言うと具体的な動きを誘いだす「動詞」はずとんと腑に落ちます。繰り返しの言い方になりますが、「動詞」が動きを指向するからでしょう。

「動き」がすっと腑に落ちるとするのは、話し言葉や書き言葉を知らない（学んでいない）赤ちゃんが、表情や動きに注目して、それを目でなぞり、おそらく自分の中でなぞったり、あるいはじっさいにその動きを真似て演じることを思いだすと分かりやすいかもしれません。

私はおとなだ、赤ちゃんではない、とおっしゃる人が多いと思いますが、人は赤ちゃんを卒業することはできないのです。赤ちゃんを続けながら、おとなになるという気がします。

*

一方の、「名詞」は「頭で理解する」（比喻です）感じで、不自然なのです。動きよりも固定を指向するからではないでしょうか。自然界には固定を指向をするものは存在しない気がします。いわゆる万物流転です。固定は抽象（ここではヒトの頭の中にしかないものという意味です、というか抽象とはきわめて人間的なものなのです）ではないでしょうか。

つまり、「名詞」はヒトの頭の中だけにある抽象ではないでしょうか。

あらゆるものが、動いているのです。ただその動きがヒトの知覚機能を超えている場合には、当然のことながらヒトには察知できないということでしょう。

そういう知覚できないものを、ヒトは器械や機械や器具をもちいて知覚できるような工夫をしています（いわゆる視覚化とか「見える化」とかシミュレーションがそうです）、それが完全であったり万全であるという保証はないわけです。

私はこういう状況を隔靴搔痒の遠隔操作と呼んでいます。簡単に言うと、「手に届かないもの」の代わりに「手に届くもの」で済ませて澄ましているという意味です。「そのもの（本物や実物）」には到達できないから、とりあえず「代わり（代理や似たものや似せたものや偽物、要するに別物）」を相手にしているのです。

写真に写っているものはそのものではないし、言葉は言葉が名指している事物ではないし、目の網膜に映っているものはそのものではない、と言えば分かりやすいかもしれ

ません。

万物流転

話を「あらゆるものが、動いている」にもどします。

よく考えると、身のまわりのすべてのものが移動してここにあるわけです。それに、いつまでもここにあるわけではありません。「ここ」にある「これ」は、以前は「こう」ではなかったし、「どこか」にあったはずです。万物流転。万物動転。気も動転。びっくり仰天。はあ。ため息が漏れました。すべての物が長い目で見れば動いているのですね。

動いているものの代わりをしている動いていないもの

全体の代わりに部分で済まして澄ましている。

手の届かないものの代わりに手の届くもので済まして澄ましている。

このように置き換える（すり替えるでもいいです）ことによって、ヒトは「代替のもの（別物という意味です）」を「実物や本物」としてとらえるという錯覚に頼るという妙案を利用していると言えそうですが、もう一つ、例文を加えてみます。

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている。（たとえば、静止した画面上で動いて見える像を見ている状態。動いて見えるだけなのです。）

というわけです。「動いているものの代わりをしている動いていないもの」を人はたくさん考えだしたり、じっさいに作っているようですが、動詞もそのひとつでしょう。

ストーリーとドラマを喚起する絵

「動いているものの代わりをしている動いていないもの」を具体的に見ていきましょう。

いきなり映画とかテレビに行く前に、たくさんのそうした仕組みや仕掛けや物があっ

たと考えられます。

洞穴の壁に描かれた絵とか、地面に木の枝で描いた絵を想像してみましょう。

こういう絵は「動いている」のです。静止画であっても、人はそうした絵を見ながら、あるいは描きながらストーリーを口にするはずですよ。

「このシカはね、きのう、あの山のそばにある川で水を飲んでいるところを、うちの息子たちが矢じりで射止めたんだよ。すごく手間がかかってねえ。……」

「こんなものを沼の向こうの谷で見かけたよ。とにかくでかいんだ。人の大きさがこれくらい。……」

「夢でこんな形のいかだに乗った生き物に会った。顔は魚、体はサル、足はカエルみたいにひれがあったよ。こういうふうには……」

「これが、死んだおじいちゃんから聞いた話を絵にしたもの。絵はぜんぶで二十あるから順番に見て行ってね」

「いいかい。葬式の段取りを順を追って描いていくからね。長いけど、これを消さずに残しておくんだよ」

こんな具合にです。絵の上手な人や記憶力のいい人が尊敬されそうです。そういう人が芸術家の走りとか語り部（長い長い叙事詩を朗々と語る人をイメージしてください、あと話のうまい人とか、どこかで聞いてきた話をうまく語る人です、読み書きは必ずしもできなくてもよかったのです、強いて言えば後の物語作家とか作家のことです）だったのではないのでしょうか。

動きを誘いだす仕組みとしてのストーリー

つまり絵（視覚的イメージ）とともにストーリー（言葉）を語ることで、動きを誘い

だしているのです。自分と、その絵を見ている人たちの中にです。中というのは、体と頭だという気がします。動きが自分の中に移ってきて、体の中で「なぞる」という感じですが、同時に頭の中でも「なぞる」ように思えます。

このように絵と言葉（口承）が結びついていた時代が長かったと想像するのが適切ではないでしょうか。

絵は動きを喚起する装置だと言えるでしょう。どんな絵もそうでしょう。落書き、絵、イラスト、漫画、アニメ、映画、動画。描く、写す、撮影する、作るの差は程度の差であり、決定的な違いだとは考えられません。

大切なことは、ヒトの作った絵には、ストーリーとドラマがあるのです。ストーリーとドラマはたいてい言葉——話し言葉と表情と身振り（文字はずっと後のことでしょう）——として発せられる点が重要です。

広義の絵と言葉が不可分であるのは、現在も美術の世界で絵画をめぐるおびただしい言葉（ストーリーやドラマや感想や批評や解釈という形で）が語られているのを思いだせばお分かりいただけると思います。映画、漫画、アニメ、動画もそうです。

ストーリーとドラマは動きです。広い意味でのプレイ（play）、つまり演技、演劇、ドラマ、遊戯、演奏、競技、パフォーマンスがつまっているとも言える気がします。

だから、わくわくするのは。どきどきするのは。ぞくぞく、あらら、という感じ。そのために作られているのですから当然と言えば当然でしょう。

以上のように考えると、ヒトは動くものを手なずけたと言えそうです。そういうことにして、人類に花を持たせようではありませんか。私も人類の端くれです。

ヒトは動くものを手なずけた。ただし、その底には錯覚、遠隔操作、イメージの喚起（つまり想像、空想、妄想、幻想、幻覚）があることを忘れてはならないでしょう。

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている——。この状況はビクともしていないのです。

まとめ

動きからなる世界を、言葉はすくえないし既述できないのではないのでしょうか。言葉はつねに遅れます。追いつけないのです。ヒトの知覚と認知機能にとって、世界を「見る」とか「触れる」なんて荷が重すぎるから当然と言えば当然でしょう。

固定化を指向する言葉、とりわけ名詞（動詞も固定化した使い方をすると名詞と変わらない気がしますが、これについては別の記事に書きます）の不自然さと無謀は目に見えているというべきでしょうか。とはいえ、世界を固定化したいという夢が与える高揚感と、そうした固定化を錯覚させる言葉（とりわけ名詞）の魅力にヒトは勝てそうもありません。気持ちがいいほうに流れるのが人情というものです。

#動詞 # 名詞 # ストーリー # ドラマ # 絵 # 言葉 # 話し言葉 # 書き言葉# 文字 # 表情
身振り

影に先立つ【引用の織物】

＊

影に先立つ【引用の織物】

星野廉

2022年9月4日 08:15

ガラスの内には典雅なニス塗りの、棺が飾られて、これも朝日を浴びていた。店の奥にはさらにいくつかの棺が、すこしずつ意匠を異にするようで、壁や椅子にやすらかに立てかけられ、楽器のようにも見えた。

(古井由吉作「物に立たれて」(『仮往生伝試文』所収)より引用)

目次

棺＊

棺＊＊

棺＊＊＊

棺＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊＊＊

柩と境

そっくり

真似る

見えないものは目の前にある

柩にひれ伏す

決めたのではなく決まった

影に先立つ

棺＊

人間には一人であるべき空間がある、と彼女はよく考える。寝床、風呂、鏡の前、ストレッチャー、病床、死の床、棺、安置室、火葬炉、墓。夢の中や心の中と同様に、そうした場所には誰も入ってほしくない。できれば一人でいたい。

(拙文「一人でいるべき場所」より)

棺**

たとえばどこかをスマホを見ながら歩く人たち。たとえばどこかの待合室でスマホに見入る人たち。

スマホというモノもそっくり、その画面に映っている映像もそっくり、聞こえてくる音声もそっくり、ときどき鳴る合成音やブルブルいう振動もそっくり、そのスマホに見入っているヒトたちもそっくり、ヒトたちの身につけているモノたちもこの瞬間に地球の至るところでそっくりなものがあるはずです。

どことは言いません。至るところでの話ですから。誰とは言いません。誰もが免れない状況なのですから。

「わたしはスマホはつかわない」ですか？ テレビでもラジオでも新聞でも本でも車でも病室のベッドでも棺でもお墓でもかまいません。いま挙げたもののほとんどが、大量生産され、印刷という形で複製されたものです。あなたがつかっている、目にしている、耳にしている、皮膚にまどわりついている、横たわっているそれは他のどこかにそっくりなものがあるはずです。

(拙文「似ている、そっくり、同じ、同一」より)

棺***

* 枠、タブロー、スクリーン

人のつくるものは人に似ている。人の外面だけでなく内にも似ている。人の意識をうつしていると思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。

見えないものを真似ている。聞こえないものを真似ている。感知できないものを真似

ている。知らないものを真似ている。

なぞる。何かはわからないままになぞる。なぞっているという意識なしになぞる。

*

人のつくるものはどこか人に似ている。なるべくして、そうなっているのかもしれない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。空（くう）をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。形はなぞっているうちに形となる。なぞった瞬間に形は謎となる。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

*

枠、frame、フレーム、figure、フィギュア。

仏壇、位牌、写真、卒塔婆、墓、墓石。棺桶、棺、火葬炉。

地獄絵、極楽絵図。

アイコン、アイコン、アバター、分身。

(拙文「人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく」より)

棺****

たとえば、人は椅子をつくったために、椅子に合わせて腰かけるようになった。

物だけではない。たとえば、映画をつくったために、映画のような夢を見たり、空想をするようになった。

棺桶をつくったために、棺桶に合わせて埋葬するようになった。冷蔵庫をつくったために、冷蔵庫に合うようなものを食べるようになった。パソコンをつくったために、パソコンの従者や下僕になった。スマホをつくったために、スマホに嗜癖しスマホに合わせて生活するようになった。

それだけではない。

大量生産されたそっくりなものを使う人間は、地球のあちこちで同じ仕草同じ動作をするようになる。そっくりがそっくりを生む。そっくりをそっくりが真似る。シンクロ、同期、似ている、激似、酷似、そっくり、同じ。

*

つくったものに似せる、つくったものに似てくる。うつったものに似せる、うつったものに似てくる。ミメーシス、模倣、描写。

うつす、写す。似せる、真似る。かたる、語る、騙る。つたえる、伝える、つぐ、継ぐ、次ぐ、告ぐ、接ぐ。まねる、真似る、ふりをする、振りをする、えんじる、演じる。

(拙文「人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく」より)

棺*****

寝入るとき、人はとつぜん一人になります。二人で抱きあって寝ていたとしても、眠りに入った瞬間に二人は別れます。どんなに愛し合っている、二人いっしょに眠りの中にいることはできません。

お墓とはちがうのです。そんなの、嫌ですか？ 悲しいですか？ お風呂もベッドも夢も、いっしょじゃなきゃ嫌。せっかく生きているのに。人生の三分の一は眠っているというのに。

お風呂はお墓に似ている、と書いた作家は誰だったか？ それとも、浴槽は棺桶に似ている、だっけ？ あ、トイレで縦長のドアが並んでいるのを見るたびに、縦に並べたお棺に見えると言った女性を思い出しました。

詩を書いていたあの人にまた会いたいです。夢でもいいですから。

(拙文「同床異夢、異床同夢」より)

棺*****

いま自宅の居間にいる私は自分の視界を意識しようと努めているのですが、その視界がどんな形をしているのか、さっぱり見当つきません。みなさんはどうですか？ 横長であるという気はしますが、長方形だという感じはありません。横に長い楕円形みたいにも感じられます。

そう考えると、映画やテレビやPCの画面に似ていますね。本は縦長ですが、見開くと横に長いようです。昔の巻物もそうでした。人の頭というか意識の中には長方形の枠があるのではないかと疑りたくなります。それをなぞるといふか真似て、物をつくっているのではないか。私たちは長方形に囲まれていませんか？

生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いといふか長方形の枠の中にいます。そのあともたいいほば長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、PC、スマホ……。人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓という枠に収められます。めちゃくちゃ言ってごめんなさい。

人は自分（あるいは自分の中にあるもの）に似たものをつくり、しだいにその自分のつくったものに似てくる、似せてくる、とつねに感じているのですが、人は「自分のつくったもの」に「自分もどき」を見て初めて、「自分そのもの」に気づくのではないか、なんて考えてしまいました。

そのひとつが長方形の枠ではないでしょうか。

(拙文「直線上で迷う」より)

棺*****

長方形というと、ひとりでいる場所をイメージしてしまいます。上で述べた長方形の場所や「容れ物」ではひとりでない場合のほうが多いのにです。たぶん、多くの人に囲まれていても人はひとりでいるという気持ちが強くあるからだと思います。

寝床、ベッド、布団、病床、シーツ、ストレッチャー、トイレの個室、棺桶、お墓、遺影。こうした場や容れ物にひとりでいる人が頭に浮かびます。誰かに似ていますが、想像の中にあるその顔は見えません。見たくないのかもしれませんが。

意識だけとか目だけになって道を進むさまが、寝際によく浮かぶのは車に乗っている時を思いだしているのかもしれませんが。道は、たとえそれが獣道であっても、舗装された道路であっても長方形を延長していったものに見えます。

テレビにしろ、映画にしろ、液晶画面にしろ、本にしろ、車窓にしろ、枠があり、その枠はほぼ横に長い四角に見えます。視界もほぼ横長の楕円形に思えます。その横に長い長方形の枠のある光景を見ながら、人は生きていく。そのあいだに枠を意識することはまれにしかない。

こういうのはこじつけなのでしょうが、こじつけというAとBに置き換える作業が、視覚や知覚全般の根底にあり、たとえば言語活動や広義の比喻や印象やイメージという形で、人においてあらわれているのだと思われます。目だけでなく、また意識だけでなく、魂の働きだという気もします。

(拙文「夜になると「何か」を手なづけようとする」より)

棺*****

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。これもレトリックですけど。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるというのは、それくらいの意味です。

スマホに限りません。車がそうです。自転車もそうです。三輪車もそうかもしれません。

ボールペン、消しゴム、ノート、お箸、絆創膏、腕時計、下着、靴下、眼鏡、シャワー、便器、ベッド、乳母車、棺。どれも大量生産されたそっくりさんたちですが、それを使うとき、人はそれぞれそっくりな仕草や表情をします。

ひとりひとりの顔も個性も違いますが、やることがそっくりなのです。

(拙文「私たちは同じではなく似ている」より)

枠と境

名づけて手なずけることが難しいもの。そもそも言葉にするのが難しいもの。

difficult to name
difficult to tame
difficult to frame

抽象だから、似ているというよりも、そっくりというよりも、同じであり、同一。同期。

same

なぞ、なぞをなぞるというゲーム。なぞるが目的化して空回りする。

game to play
aim
aimless game to play

何のため？ 名前のため？

aim、name、fame、frame

それは罠だってば！

You're framed!

筋書き (aim) をなぞり、名 (name・fame) を残し、枠 (frame) を残すのに血道を上げる。

ゲーム (game) をプレイ (play・演じ戯れ競い奏で賭け、なぞり) しながら、自分が獲物と餌食 (game・prey) になってしまうのに気づかない。いまは祈る (pray) べき時なのに。player ではなく prayer であるべきなのに。

いまはもう、両の足で立つのもままならないのに気づかない。

We're already frail and lame.

言葉にひれ伏し、辻褃合わせに終始する非難合戦。

blame game

敵に屈しているのではなく、言葉という枠に屈していることに気づかない。

shame

*

It's the blame game.

It's time the game came to the end.

Who is to blame?

Shame on who?

＊

謎も境も、知ろうとしたり分かつたろうとしたとたんに消える。

気づいたとたんに枠でも境でもなくなる。

意味であり無意味。抽象であり具象。中傷であり愚笑。

＊

文字の形と音が意味をなす。同音で一瞬だけむすびつけられる文字とイメージと事物。
韻、隠、陰、淫、印、因、姻。

偶然と必然が意味を無くし、同時に意味を有む瞬間。

そもそもないものをなぞるといふ謎。空の雲に何かをなぞるといふ謎。その形を指や
目でなぞるといふ不思議。

なぞることで枠と境が立ちあらわれる、とつぜんの異物感と異物性。

＊

どうして、文字の形、文字が喚起する音（おん）、形と音が呼びさますイメージと意味
という似ても似つかない異質な物と事と言（こと）同士が、そこに立ちあらわれてしま
うのだろうか。こんな不思議なことがあっていいのだろうか。

その不思議が当り前のこととして見過ごされるという、さらなる不可思議さ。これは
知恵にちがいない。これこそ、人知なのだろう。さもなければ、人は日常生活をいと
なめない。

線で文字をなぞるといふ謎。目でなぞるを追うといふ不思議。目線、視線が線である
不可解さ。

無意識になぞるべきもの。それが人の知恵、人知、障地。最後で最期の知、血、稚、痴、
恥、遅。

そっくり

そっくりなものはたいてい人間がつくり出したものではないでしょうか。
 そっくりな点がそっくりなのです。
 それくらいそっくり。不自然なのです。

人には同じに見える、そっくりなものには自然物にはない精巧さが備わっています。
 同じものなんて、人がつくらないかぎりないのではないのでしょうか。

人がつくるそっくりなものには、どこか人に似たところがあります。部分的に似ているも含めて。

人に似ているのは、むしろ人が無意識に似せているからかもしれません。

自分や自分の仲間に似ているから安心するのです。

人は不気味なものはつくりません。不気味に似たものはつくりますよ。でも、何にも似ていない不気味なものはつくりません。

(拙文「引用の織物」より)

真似る

荒唐無稽で根拠なしの空想。馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないような話。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるような話。

そもそも物語は人がつくったもの。現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語。

*

物語を模倣する人間についての小説。

物語というジャンルについての復習、小説というジャンルの予習。まさか、小説を壊しているのではないか。できたばかりのジャンルが既に壊れかけている。

(中略)

小説を模倣する人間についての小説。小説と現実を混同してしまう人間についての小説。

小説というジャンルの始まりと洗練。律儀と愚鈍が同義であると誰かに見破られることになる。

小説を模倣するボヴァリーを人は笑えるだろうか。映画を、テレビドラマを、CMを、アニメを、(演じる)俳優を、ストーリーを、ドラマを、キャラクターを、出来事を、事件を、報道を、ディスプレイに映った像やテキストを真似て、引用し、似せて、なりきる私たちは、そっくりな身振りをしていないだろうか。

ボバリズムとは、私たちのことではないか。

フロベールが「ボヴァリー夫人は私だ」と言ったという神話があるが、そう口にすべきなのは、私たち一人ひとりではないのか。ボヴァリー夫人は私たちなのだ。

(拙文「私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？」より)

見えないものは目の前にある

テレビ、映画、写真、絵画、文学、美術、映像、動画——こうしたものは人が現実の影、つまり現実とそっくりなものを求めて作った影です。

目的があり、ストーリーやドラマ、つまり意味のある影です。だからぞくぞくわくわくするわけですが、これだけ意味に満ちた影に囲まれて生きっていると疲れることがあります。

(拙文「意味のある影、意味のない影」より)

*

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」(いわば鏡の中に見ている)のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということです。これがラカンについての私なりのまとめでもあります。

(拙文「人は存在しないもので動く」より)

枠にひれ伏す

人の作るものとは、言葉であり、物であり、事です。そのどれにも枠がありますが、枠とは境でもあります。

枠も境も、切り取るからできるものです。「切り取る」には「切り捨てる」がともないます。

そもそも切り取るのは、すっきりとしてきれいに見せるためです。持ち運んだり、簡単にさくさく処理するためには、すっきりとして無駄のない形をしていなければなりません。軽いことは絶対条件です。

軽くてすっきりしているのは、枠と境がある証拠だとも言えます。要するに不自然なのです。

*

自然界には枠と境はないにもかかわらず、人は自然界に枠と境を作ることで、言葉の世界と現実の世界を一致させてきました。自然界に枠と境を作ることは、世界の言葉化でもあるのです。

自然も世界も、人の都合のいいように変えられてきたと言えますが、人はこの自然と世界の中にいるのであり、その逆ではありません。人も言葉化されてきたのです。

人は言葉を崇め、言葉にひれ伏しています。言葉の上での辻褃合わせと筋を通すことに血道を上げています。しかも、そのことに気づいていなかったり、気づいたとしても事の大きさにひるみ、すぐに忘れます。

それが人の面子（体裁）であり、同時に尊厳（プライド）であるとすれば、悲しいレトリックです。

（拙文「人の作るものは整然として美しい」より）

*

We're framed.

決めたのではなく決まった

鏡、影、落書き、絵画、写真、映画（影や幻影の進化したもの）、テレビ、動画、VR。これほど人が「見る」に取り憑かれているのは、じつはいまだに「見えていない」からであり、その不十分な「見る」を補助するような物や仕組みや枠組みをつくるたびに、思いがけない、つまり想定外の「見る」や「見える」を見てしまい、驚き、ぶったまげ、何かにはっと気づく。そんなことを繰り返してきた気がします。

そう考えると、「見る」というのは「とりあえずつくった言葉」であり、その「見る」について、人は何も分かっていないのではないかというふうに思えます。「見る」「見える」という言葉をつくったから、「見る」「見える」んだ、うん、そうだ、と「決めた」とも言えそうです。

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

(拙文「直線上で迷う」より)

*

人は「決めた」と思っているのに、じつは「決まった」のではないのでしょうか。

同様に、事物を「作った」のではなく、「できた」。言葉を「放った・発した・話した・放した・離れた」のではなく、「離れた」。「書いた・描いた」のではなく、「書けた・描けた」。「掛けた」のではなく、「掛かった」。「賭ける」のではなく、単なる「賭け」。

つまり、人の行為は、その行為をしたとたんに、人を離れて人の外での出来事になっているという意味です。要するに、人の行為は外にあるのです。さらにいえば、人の思いどおりにならないという意味で「外」なのです。

「決める」は人の為すこと、「決まる」は人知を超えている。そんな気がします。べつに神とか神秘を持ちだす話ではなく、「外にあるから見えない」だけなのでしょう。

だいたいにおいて、人が神や神秘を持ちだすのは、人が自分の落ち度を認めたくないときなのです。

「目の前にありながら外にあって見えない」という言葉の綾を文字どおり取るしかなさそうです。

*

言葉の綾と現実の綾が食い違っても当然なのです。言葉の世界と現実の世界と思いの世界は、それぞれ別個の論理と文法に従っていると思われるからです。

ただし、「なぞる」は「なぞられる」のではなく、「謎」である気がします。「賭ける」が「賭けられる」のではなく、「賭け」であるように。

「なぞる」も「賭ける」も外にあるようには見えなくて、つまり目の前になくて、それでいて見えないのですから。謎です。外にない外なのかもしれません。

「なぞ(る)」と「賭け(る)」——おそらく「決まる・決まり」も——の対象であり主体だと思われる(この三者には共通して固定化指向が強いという特徴があります)、文字はいったいどこから来たのでしょうか。どこへ行くのでしょうか。

影に先立つ

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。「先立つ」には「前に立つ」や「先に起こる」と「先に亡くなる」の両義があります。

ことのはに さきだつひとを おくるかけ

(拙文「「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれない。」より)

*

鏡、落書き、絵画、文字、書物、文書、写真、映画、テレビ、動画、VR——。人のつくった影たちは何らかの形で残る気がします。

初めは人が影に先立ったのに、影が人に先立つようになり、最後には人が影に先立つのでしょうか。あるじをなくした影たち、いや、そもそも影たちはしもべではなかったのかもしれない。

つねに人の外にあり、ときどき人の中に入ったり出たりする、人の思いのままにならない「外」であるもの。影は不動、人が揺らぐ。

とりわけ気になるのは、人のつくった影の中で最もしぶとい文字です。

人に先立たれた文字。人の影であったはずの文字が残る。影が残る。影は人を見送っ

てくれるでしょうか。そのさまを思いえがくと苦しくなります。

ヒを浴びて 影に先立つ 空睨み

人が影を落とした大地と水面（みなも）には、もはや人の影はない。そんな地球上で、人のつくった影たちがどこかに残っている。遺っているのではなく、生き残っている。ひょっとすると、増えつづけるのではなく、殖えつづけている。

そうしたさまが、オブセッションとなって離れません。寝入り際にも、眠っている最中にも、浮かぶことがあります。

*

消えないだけに、残るだけに、しかもいまや急速に増えているだけに——複製でありながら同一であるという最強の抽象を武器にして——、文字が気に掛かります。文字の暴力的なまでの異物性が気になってなりません。こんなものはこの星で他にあるでしょうか。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

先立つ人を見送るかのよう（これでは、まるで人は利用されただけで終わるかのようです）。新たななぞり手に先立つかのように。待つかのように。

文字は影どころか、粹なのです。

線からなる文字が、なぞるべき粹という棺に見えてなりません。語源はさておき、駄洒落と掛け詞好きの私にとって、棺は分く（分ける）粹です。別く（別れる）粹なのです。粹に収める者と収まる者とのわかれです。

棺下ろし 境で別れ 雲疾し

*

雲をつかむような、個人的なオブセッションとギャグに満ちた話にお付き合いいただき、ありがとうございました。思いを書いて供養するしかなかったのです。

#言葉 # 日本語 # 文字 # 粋 # 境 # 影 # 鏡 # 模倣 # シンクロ# フローベール # フロベール # 棺 # 古井由吉

似ている、そっくり、同じ、同一

＊

似ている、そっくり、同じ、同一

星野廉

2022年9月3日 14:39

目次

再現ではなく再演

顔が見えない

そっくり

そっくりという抽象とまぼろし

そっくりに囲まれて、そっくりに生きる

同じ、同一

同じ、同一という抽象とまぼろし

抽象、まぼろし

再現ではなく再演

夢の中でストーリーを思い出すことがありますか。

夢のストーリーではなくて、夢の中に小説とか映画とかテレビドラマとかそうした作品が出てきて、そのストーリーが思い出せるだろうか、という意味です。

ストーリーといえば、ある程度の長さを持ったものとイメージしています。自分の見た夢を例に取るしかないのですが、夢の中でこれまでに聞きし作品の断片が出てくることはあります。登場人物であったり、演じた俳優であったり、アニメの主人公やキャラクターであったりします。

夢の中で映画やテレビを見るという展開もありそうですが、そんな夢を見た記憶はありません。夢の中で誰かの話を聞くという場合の話も、筋があるとすれば一種のストーリーではないでしょうか。

夢の中で、昔話や童話の登場人物やある特定の場面が出てきたことはあるような気がします。でも、こうやって夢を思いだして、後付けで言葉にしているのですから、こじつけっぽくて怪しいものです。

私にとって夢とは、見ている最中には断片的で薄っぺらいものを感じられます。それにこうやって意味づけするのは、夢を思い出しているときの覚めた意識なのではないかという気がしてなりません。

夢のさなかには意味づけなどする余裕はなく、あれよあれよと展開していきます。こう考えると、夢は再現できないという意見に傾きますが、そうすると現実と同じではないと思ひあたりました。

夢も現実も再現できない。過去も再現できない。そもそもヒトに再現などできるはずがない。人の意識の根本には、「何か」を「その「何か」とは異なるもの」で置き換える、つまりすり替えるという仕組みがあるのだから——。そう考えると、再現できないのは当然だと納得しないではられません。

ただ、再演ならできるというか、再演しているのではないかという気はします。再演ですから、毎回、ずれているという意味です。再演の演とはプレイ (play) をイメージしています。演技であり演奏であり競技であり遊戯なのです。

顔が見えない

人の顔を見分けるのにどちらかという苦労する私ですが、鏡で見る自分の顔ほど分からないものはありません。見ているのに見えないという気がします。刻々と更新しつつある「いま」であるとか、刻々と更新しつつあるズレであるとかいう、苦しまぎれのレトリックをつかったことがあるほどです。

つまり目の前にある鏡を覗きこんだときに見ているのは形 (自分の姿) ではなく「とき」 (自分のイメージ=心象) であるという意味なのですが、もしそうであるなら、自分はかなり動揺し困惑しているにちがひありません。他のものを見るのとは異なる次元に

いると言いたいくらいのお話なのです。

ひょっとすると、鏡の前では見ているのではなく、おののいているとしか考えられません。それくらい鏡を覗くと緊張するのです。たとえば、鏡に映っているとされる自分を見つめながら、いきなり目をつむるとしますね。そのときに瞼の裏か頭の中か知りませんが、自分の顔が浮かんでほしいのに浮かばないのです。

浮かべ浮かべと念じて、浮かぶのはいつか見た写真に映った自分の顔であり、ほんの数秒前に鏡に映ったはずの自分の顔ではないのが不思議でなりません。つまり私の頭の中にある自分の顔は、ぜんぶ写真で見た顔だということになります。

とにかく見えないのです。ひとさまのことは知りません。問いたですような親しい相手がないからなのですが、たとえ親しい人がいたとしても、恥ずかしくて尋ねる気にはならないでしょう。親しい人とはこのたぐいの話はしたくはないのです。

いつだったか、出てくる人がことごとく同じ顔をしているという夢を見たことがあります。見たのは一度だけなのですが、何度も何度も繰り返して思い出したので、いま覚えているその夢はそうとうズレているにちがひありません。

そういえば、どの登場人物も同じ顔をしている映画があったら面白いだろうと考えたこともあります。そんなことを想像したらぞくぞくしてきました。軽い息切れさえしてきました。この手の話が私は好きみたいです。この手の話というのは、顔とか表情とか仕草とか、似ているとかそっくりとか、そういうたぐいの話です。

考えていると時間が経つのを忘れるほどです。

そっくり

掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものを見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉缶だ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。

上に引用したのは有名な一節ですから、ご存じの方も多いでしょう。そうです。夏目

漱石の『我輩は猫である』の冒頭のほうにある文章です。あの長い小説で私がいちばん好きな箇所です。

人の顔を猫の目から見ているという設定ですが、もちろん、これはある人間が想像、いや空想した猫の視点であって、それ以上でもそれ以下でもありません。そもそも、小説とは人による人のためのものですし、漱石先生はそれくらいのことは意識してお書きになったにちがいません。

いずれにせよ、人間以外の生き物になった自分を空想するのはわくわくして楽しいし、いい頭の体操になります。

あなたは猫の顔が見分けられますか？ 猫や犬は人間にとって最も身近な生き物ですし、ペットとしている人も多いですから、見分けられる人は珍しくないと思います。ニワトリ、牛、馬、ヤギなどの家畜として飼われている生き物についても、その業者さんたちの中には見分けられる方が多いと聞いたことがあります。

要するに興味や愛着があれば、見分けられるのではないのでしょうか。逆にいうと、興味や愛着のない人には、どれも似たり寄ったりに見えるような気がします。

つまり猫やニワトリやイワシから見れば、ヒトはどれもそっくりというお話です。もちろん、猫やニワトリやイワシに聞いたことはありませんから、ここでしているのは戯言にほかなりません。

＊

スーパーの様子を思い浮かべてください。イワシ、サンマ、キュウリ、トマト、パック入りの牛乳、ヨーグルト、マヨネーズ、蚊取り線香、乾電池.....。

こうしたものたちは、そっくりなものが集めて売られていますね。そっくりという基準では動物、植物、製品とか、生き物か無生物か、などという区別は意味がありません。そっくりは印象だからです。いちいちその出自に注目はしません。

見た目至上主義みたいところが、そっくりにはあります。似ているとそっくりの区別もきわめて曖昧でいい加減です。そもそもそんな区別や分析とは遠いところにあるのが、そっくりなのです。

ちょっと分析すると、スーパーやホームセンターや家電の量販店で並んで売られている、そっくりなものたちには、製品であれば大量生産され、動植物であれば大量に飼育や栽培された、あるいは捕獲されたり採取されたという共通点があります。

そっくりであるほど、十把一絡げ的に、まとめて扱えるからでしょうね。一つ一つが違くと値段もつけにくいし運びにくいにちがいありません。なにしろ、早くさばくのが商品の販売の鉄則みたいです。個性と最も遠い世界にあるのが量販店で売られる商品なのでしょう。

*

そうした大きなお店では、売る人も制服を着て、そっくりに見える場合が多いです。上で述べたようにあくまでも印象の話です。そうしたお店で働いていらっしゃる方には失礼な言い方になっていることをお詫び申し上げます。

場所もそうです。特に同じチェーンのお店だと、店舗のつくりも、商品の陳列の仕方も、流れる音楽も、店内の匂いも、雰囲気も、トイレの様子も、レジでの人の流れも、そっくりに見えてなりません。こういうことに割と敏感なせいか、私は軽い目まいを覚えることがよくあります。

特にコンビニがそうです。フライヤーというのですか、あの油の匂いを嗅いで頭がふらふらしているところに、既視感の洪水というか、反復の反復というか、目の前のコピー感と記憶にあるコピー感がシンクロして、倒れそうになることも珍しくありません。

どこに行っても、同じなのです。そっくりなのです。視覚だけでなく、嗅覚、聴覚、たずまい、そうしたものを総動員したうえで、そっくり同じように感じられます。やはり、似ているどころか、そっくりと言いたいところです。

そっくりがそっくりをそっくりな場所でそっくりなやり方で売る、そしてそっくりな

お客さんたちがそっくりなやり方で買う。そして、自分もまたそっくり化していることにふと気づき、嘔然となる。

おそらくこれが資本主義なのでしょう。というか、資本主義の顔であり表情であり身振りなのでしょう。

そっくりという抽象とまぼろし

自分もまたそっくりである。そっくりの一つである。こうした状況は、無関心と関係があります。つまり、自分に興味がなく愛情も感じない人にとっては、自分はそっくりでしかない、その他おおぜいの一人でしかないと考えると分かりやすいでしょう。

立場を逆にして、世界のどこかにいる誰かは、あなたにとってそっくりなもの「一つ」であり、「一人」と数えるにも値しないほどのものだと考えられます。言い換えると人間としてではなく、抽象的な存在、たとえば76億人という数字の一つにすぎないのです。

数字や数は抽象です。お金も数値という意味では抽象です。

ただし、お金がたとえ15,867,232円という具体的な数字であっても、それが家を購入する資金であれば、抽象ではなくなります。意味とイメージをともなうからです。数字も、777であれば、ある人たちにとっては特別の意味とイメージを持ちます。42が不吉だと感じる人もいます。

0203が自分の誕生日と同じ並びであれば、あるいは何かの暗証番号であれば、それは数字でありながら言葉と同じくらい意味やイメージが付着したものになりえます。また、たとえば364という数字が、その日に何度も目につけば、それを「シンクロ現象」と見なす人も多いようです。

数学者でさえ、そうした数字の非抽象化とは無縁ではないでしょう。ある数字を見て冷汗をかくたり、あるいはにんまりするという意味です。承認欲求とかゲシュタルト崩壊という、一見客観的であったり抽象的な言葉をつかってメタな視座に立っているつもりでも、そうしたものから逃れている人などいない、とえば分かりやすいかもしれま

せん。

抽象というのは人が考えているほど抽象でなかったり、人が思いもしない物事が抽象として立ち現れる事態もおおいにありうる気がします。

そっくりは印象なのですが、このそっくりさえも抽象として立ち現われる気がします。

そっくりに囲まれて、そっくりに生きる

たとえばどこかをスマホを見ながら歩く人たち。たとえばどこかの待合室でスマホに見入る人たち。

スマホというモノもそっくり、その画面に映っている映像もそっくり、聞こえてくる音声もそっくり、ときどき鳴る合成音やブルブルいう振動もそっくり、そのスマホに見入っているヒトたちもそっくり、ヒトたちの身につけているモノたちもこの瞬間に地球の至るところでそっくりなものがあるはずです。

どことは言いません。至るところでの話ですから。誰とは言いません。誰もが免れない状況なのですから。

「わたしはスマホはつかわない」ですか？ テレビでもラジオでも新聞でも本でも車でも病室のベッドでも棺でもお墓でもかまいません。いま挙げたもののほとんどが、大量生産され、印刷という形で複製されたものです。あなたがつかっている、目にしている、耳にしている、皮膚にまとわりついている、横たわっているそれは他のどこかにそっくりなものがあるはずです。

至るところにあるのは厳密な意味での同じや同一ではありません。同一は世の中にたった一つしかないものを言います。分子や原子レベルでの「同じ」だと考えてもいいでしょう。こうなると同一とは、個性とかアイデンティティとかいう言葉で語られる次元にはない気がします。

いま話しているのは、そっくりについてです。

なにしろ、そっくりなのです。そっくりはそっくりな点がそっくりであるところまでいくと、抽象というのがふさわしいのではないかと思われることがままあります。ここでの抽象とは、「ヒトの頭の中にしか存在しない」くらいの意味です。言葉の綾と置き換えても大差ない気がします。

言葉は物も事も現象でもありません。その代理なのです。したがって、言葉をつかって、そっくりとか似ているとか同じとか同一とかいう話をすると、齟齬が起きます。これは致し方ないことでしょう。

ではどうしたらいいのでしょうか。一つはレトリックでお茶を濁すことです。ほのめかすとか匂わせるのもいいでしょう。言葉の限界と幻界を意識して、一見矛盾であったり荒唐無稽やナンセンスに感じられる言い回しをして、その限界および幻界ぶりをほのめかし匂わせるという、ほのめかし方や匂わせ方もできるでしょう。

言い換えると、本当は何も言えないという限界と幻界を意識しつつ、何かを言っているふりをして、実は何も言っていないふりを演じるイリュージョンをすることです。つまり、「ふりのふりをする」ことなのですが、そう言うくらいの芸しかいまの私には思いつかないのです。そうです、私は芸のつもりで記事を書いています。私は、note という寄席にいるピン芸人なのです。申し遅れましたことをお詫び申し上げます。

レトリックとたわごとはさておき、話を「そっくり」にもどしましょう。

同じ、同一

「そっくり」という、「その他おおぜいのうちの一つ」（複製としての抽象）が、ある人にとっては「掛け替えのないたった一つのもの」（同一性を帯びた具象）であるということもあります。

あるお子さんが、大量生産された玩具の一つを気に入り、それでしか満足しないというケースもおおいに考えられるという意味です。愛車もそうでしょう。お気に入りの品とは、そういうものです。愛着と興味がそこに詰まっているという言い方もできるでしょう。

「そっくり」な抽象的な存在である複製の一つに、「顔」を見だし愛着を覚えれば、それは「個性」を帯びた具象になるのです。

抽象と具象のあいだにはグラデーションとしての愛着があるのかもしれませんが。この愛着を私は「顔」としてイメージしています。あるものに「顔」を見る度合いが高いほど具体性を増すという意味です。この場合の「顔」とは、赤ちゃんにとってのまわりにある「顔」のことです。

また、抽象と具象のあいだにある愛着には、生まれながらに備わっているものと、後天的に学習や習慣によって育まれるものの二種類あるような気がします。

＊

ここで整理します。

「似ている」と「そっくり」は印象であり、印象は人の中にあるものですから、確認できません。基準が、人それぞれという意味です。「同一」とは世の中にたった一つのもので、これを確認するのは至難の業です。ヒトの知覚と認知機能には限りがありますから、器具・計器、器械、機械をもちいて初めて「同一」かどうかを確認できます。

「同じ」は曖昧な言い方で、人によっては、あるいは時と場合によっては、「そっくり」と「同一」の意味でつかうことがあるでしょう。この記事でも文脈に応じてつかい分けるつもりです。

＊

話を進めます。

文字が究極の「同じ」であり「同一」であることを思い出しましょう。

猫、ねこ、ネコ、neko。

どんな活字やフォントや文字の大きさであろうと、誰が口にしようとして、いま挙げた語

は同じです。文字は複製なのに、そっくりどころか、むしろ同じであり、同一なのです。

ここでの文字は、インクの染みとか画素という意味ではありません。抽象的な意味での「猫、ねこ、ネコ、neko」という語の話をしています（観念や概念という言葉をつかうヒトもいるでしょうが、観念や概念は手垢にまみれた言葉で抽象的な話をするのには適していません）。

文字を含めて、言葉は外からやって来るものです。人の内にはありません。「猫、ねこ、ネコ、neko」は、あなたが生まれたときに既にあった語です。それをあなたは真似て学んだのです。ちなみに真似ると学ぶは同源らしいですが、ここではそんなことはどうでもいいですね。

大切なことは、文字を含む言葉が外から来ているものであり、外にあるものだという点です。正確に言うと、人の外にある言葉しか、他人といっしょにその存在とありようを確認できない、となります。

同じ、同一という抽象とまぼろし

同じとか同一という抽象は、外にあり、外と内を行き来します。これが抽象なのです。というか、抽象というとりとめのないものを言葉にするさいの一つのイリュージョン、つまりレトリックです。言葉の綾とも言います。

さて、言葉、とりわけ文字は同じであったり同一であるからこそ（つまり抽象であるからこそ）、人の外にあったり、外と内を行き来するのですが、これは意味やイメージを取り去った文字や数字だという説明もできます。文字や数字には意味とイメージが付きもので、「意味とイメージを取り去った文字と数字」なんて人にはとらえられないものなのかもしれません。

ややこしいですね。実のところややこしいのです。簡単にすばっと切り取ることができれば、そんないいことはありません。というか抽象とか「意味とイメージを取り去った文字と数字」なんて考えてもいいことは一つもありません。こういうことは、本気でやることではないのです。単なるお話とか戯言として楽しめばいいという意味です。人それぞれですけど。

抽象、まぼろし

「似ている」と「そっくり」は印象であり確認できないので、まぼろしだと考えてみます。まぼろしは、人それぞれがいただくものです。人の中にあるものですから、見えないし、触ることもできませんから、他の人といっしょに確認しようがありません。

「同一」（世界で宇宙で「たった一つ」）は、計器や機械をもちいないと人には確認できません。「同じ」は曖昧です。時と場合によって、そっくり寄りであったり、同一寄りであったりします。

「同じ」には複製として「同じ」という場合があります。典型例は、文字です。文字の抽象的な部分、つまり形の特徴をとらえて、人は「同じ」と知覚し認識していると考えられます。学習の成果です。何度もなぞったり書いたり読んだりして真似て覚えていきます。学習ですから、間違いもあります。

＊

複製としての「同じ」を、絵画で考えてみましょう。版画を除いて、実物とか本物と呼ばれているものはふつうたった一つしかありません。同一と呼んでもよさそうです。絵画の鑑賞は複製でおこなうことが習慣化されていますが、さまざまな複製があります。粗悪な複製もあれば、精巧な複製もあるでしょう。程度の問題です。

印刷物であれば、紙質、インク、濃度、鮮明度が異なります。ネット上であれば、端末の環境によっても左右されるでしょう。絵画における複製の複数性と多様性を無視することはできないと思われます。

次に、複製としての「同じ」を、文字で考えてみましょう。文章もまた絵画と同様に複製で読まれることが習慣化し、一般的になっています。たとえば、小説、新聞、雑誌、論文、公用文といった文書（テキスト）は複製として存在し、拡散（流通）し、複製され（複製の複製です）、保存（保管）されると言えるでしょう。現物（実物）で利用されるもののほうが圧倒的に少ない気がします。

文字の複製にも、複数性と多様性が見られます。書体、フォント、サイズ、レイアウト、印刷物であれば紙質、ネット上であれば端末の画面に差があります。

＊

複製では、たった一つという意味での「同一」（同一性）よりも、同じであるという抽象面での類似性を利用して、拡散（流通）し、複製され（複製の複製です）、保存（保管）されるようです。

この類似性に支えられた「同じ」ですが、これを学習の成果だと見なせば、学習できない生き物には通じないだろうと考えられます。その意味（ヒトの頭の中にだけ存在するという意味です）で、複製としての「同じ」は、抽象であり、同時に、その意味でまぼろしだという気がします。

一概には言えないでしょうが、複製としての「同じ」（たとえば、文字や絵や映像）は、イヌやネコやニワトリやイワシには通じないだろうと思われまふ。ただし、生き物によっては部分的な学習は可能かもしれません。なお、かなりうまくいっているらしい機械に学習させることについては、ここでは触れまふせん（ひとこと言うなら、人のつくった機械は人の外にある「外」です）。

一方、「同一」（複製としての「同じ」とは対照的に）は、ヒトの知覚と認知機能を超えた精度の「類似」の話であり、ヒトのつくった機械や光学的な仕組み（ヒトがつくったとはいえ、ヒトの外にある「外」です）は、同一（ガチガチの抽象です）に支えられているようなので、まぼろしとは言いにくい気がします。ある程度の有効性が認められるからです。

まぼろしのおかげで、ヒトが仲間を月面に立たせたり、2000年問題に打ち勝ったり、地球の気温を何度か上げたりした、なんて言い方は、プライドの高いヒトが許さないにちがいありません。

以上、私小説あるいは心境小説的なお話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#言葉 # 表象 # 日本語 # 抽象 # まぼろし # 似ている # そっくり # 同一# 文字 # 数字

大切な人の写真が踏めますか？

＊

大切な人の写真が踏めますか？

星野廉

2022年8月31日 07:58

「映す」も「写す」も、姿だけでなく心や魂を「移す」ということで、今回はまとめたと思います。

眠れない夜の遊びにお付き合いいただき、ありがとうございました。
(拙文「眠れない夜の遊び」より)

昨夜もなかなか眠りに就けなかったので、うとうとしながら考えたことを思いだして言葉にしてみます。

目次

地面に映る

鏡に映る

人工の影

影を写す

言葉は最強の人工の影

過剰で過激な想像力

想像力を消していれば、ボタンが押せる

地面に映る

木が地面に映る。

木の影が地面に映る。

木の姿が地面に影として映る。

実際問題として何が移るのでしょうか。移動という意味です。影が映っているわけですが、その影って何ですか？

たぶん理系の問題みたいなので、理系的な発想ではなく考えてみます。光とは何かとか影とは何かなんて、私には荷が重すぎます。わくわくしません。

わくわくするどころか難しそうで気持ちが萎えてしまいます。

＊

物が移っているわけではないですよね？ 見た目で考えましょう。体感で考えましょう。それしか私にはできません。

姿が影として、その輪郭だけが歪んで地面にうつっている。いまズルをしました。映っているのか、移っているのか分からなくなったのです。

ひらがなは便利ですね。漢字と違って、分からないところを保留できるのです。ぼかせるのです（多義的になるとも言えます）。ひらがなモザイク説。

＊

輪郭はいいです。輪郭がうつる。木という物、つまり本体は移っていない。

これは確かでしょう。たぶん。

なんか変です。

輪郭じゃなくてシルエットではないでしょうか。輪郭は枠で、その中が塗りつぶされている感じですから、シルエットに訂正します。

＊

木が地面に影として映る場合には、木という本体はそのままで、シルエットが地面にうつる。

あっさりとしれっと書きましたが、不思議ですね。いったい何が起きているのでしょうか。謎ですから、なぞるしかなさそうです。空（くう）をなぞるのです。

想像するのです。像を想いえがく。イメージを抱く。抱きしめるのです。

鏡に映る

木が水面に映る。

木の姿が水面に映る。

実際問題として、何が移るのでしょうか。移動という意味です。地面の影とは違って、水面だと条件がよければ鏡みたいに映るわけです。

木の姿が鏡に映る。

これとほぼ同じではないでしょうか。映っているのは、姿であり、映像であり、鏡像とも言います。鏡像は私にとっては嫌な言葉です。理系ばいですよ。

辞書で調べてみました。やっぱり理系です。しかも数学とも関係あるみたいです。それに私の苦手な「鏡像段階」なんて言葉も載っていました。こういうもっもらしい用語はパスします。

＊

物が移っているわけではないですよね？ 見た目で考えましょう。体感で考えましょう。それしかできません。

鏡に木が映っているのをイメージします。想像するという意味です。鏡を持って木のそばに行く気にはなれないのです。そんなところを近所の人に見られたらどうしましょう。

ただでさえ変人に見られているのに、へたすると通報されますよ。

「近所のおじいさんが、手鏡を持って桜の木のそばに立ってキョロキョロしています」

うちの居間でおとなしく想像しているほうが、ぜったいによさそうです。だいいち安全です。

＊

木の姿が鏡像として鏡に映っている。木という本体の何かが移っているわけではなさそうです。木が傷ついたり、木の一部が欠けたり、減っているとは考えにくいです。

鏡像って何でしょう。理系的には考えられないので、想像しつづけます。左右が反対なんですよね。ところで、なんで上下はそのままなのでしょう。

なんだかとんでもない方向に行きそうなので、上下は考えません。

鏡像という言葉の意味不明なままに保留して使いつづけるのがいちばん、私にとって現実的な方法みたいです。

＊

木が鏡に鏡像として映る場合には、木の本体はそのまま、その左右反対の鏡像が鏡にうつる。

あっさりかつしれっと書きましたが、不思議です。いったい何が起きているのでしょうか。

人工の影

ちょっと待ってください。

鏡に映す像は意識的にうつします。これは「写す」ではないでしょうか。さらに言うな

ら「移す」です。そもそも鏡は人が作るものです。人の作った物に人が意識的に像（姿）をうつすのです。

映像、影像、いや、むしろ影（かげ・えい）と書きたいところです。自然にできている影と、人工的に作った影とは違うと思います。

＊

作られた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。

作られた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとは作られたものです。物語であり、フィクションのことです。写真であれば目的やテーマです。（拙文「意味のある影、意味のない影」より）

そうでした。そんなふうに考えていたのを思い出しました。

＊

人は影に意味を見るのです。自然の影であれ、人工の影であれ、その影に意味を見るのです。この意味には、枠、筋書き、物語、イメージ、目的などが含まれます。

各人が影に勝手に意味を見るのですから、個人的なものでまちまちです。意味は人の中にあるものですから、確認も検証もできません。何らかの判断をするためには、各人の証言が必要です。

証言は言葉という形をとります。話し言葉であったり、書き言葉、つまり文字です。

影の意味は、文字として固定され、「残る・残す」ことが圧倒的に多いと思われます。

＊

影に何がうつっているかは、一概に言えるものではなく、各人がそれぞれ影に何を見るか、正確に言えば何を五感で知覚するかである、なんて言えそうな気がします。

もっと正確に言えば、影で各人のいづくイメージは刻々と変わるにちがいありません。猫を検索して、画像検索をするといろいろな猫の画像が出てくるのに似ています。一定していないし、固定していないように思います。

影に何が移っているかは、客観的にも普遍的にもとらえられないということですね。各人による言葉による証言しか、判断材料はないわけです。頭の中を見るわけにはいきません。

しかも証言は当てにならないでしょう。刻々と移り変わりつつある自分の中にある「何か」を言葉にするなんて土台無理なのです。だいいち、言葉はその「何か」ではないのですから。

言葉はお茶を濁すために存在するようです。

＊

とはいえ、言葉は大したものなのです。後で触れることになりますが、言葉によって、脳が暴走するのです（想像力のことです）。その起爆剤が言葉ですから、捨てたものではありません。

影を写す

人は影を意識的にうつします。影を作るのです。自分で作った影に意味を見たいからでしょう。正確に言えば、人は自分が見たい意味を見るために影を作るのではないのでしょうか。

ぜったいにそうです。さもなければ、わざわざ「鏡」（比喩です）を作ったり、その鏡に「影」（比喩です）をうつすなんて、面倒なことはしません。

人は自分の見たいものを見るために影を作り、あるいは見つくろった影を持ってきて、その影に自分の見たいものを見て、気持ちよくなりたいに決まっています。ぶっちゃけた話が、やらせなんです。

自分を基準にして人類を語って、ごめんなさい。

＊

影を写生する。

絵による写生、描写。言葉による写生、描写。

この場合には、本体つまり被写体、写される対象は無傷のはずです。何かが減ったり加わったり、変化することはないでしょう。

せいぜい、写生される間に時間的な拘束を受けて、劣化する、腐敗が進む、あるいは成長するぐらいでしょうか。

＊

影を写真に撮る。

静止影像としての写真、写真撮影。レントゲンやCTやMRIも含めていいと思います。

フィルムによる映画の撮影、デジタル映像による動画。これもCTとかMRIがある気がします。詳しいことは知りません。

この場合には、被写体は何らかの変化をこうむるようです。放射線を浴びるなんて、目に見えないし、その後遺症は時間の経過を待たないと確認できそうもありません。

あ、そう言えば私は、この種の撮影の前に何度も造影剤を飲んだことがあります。あれって体に何らかの影響を与えているはずですが、大丈夫なのでしょう。

フィルム撮影やデジタル撮影は、ただ見ているだけでは済まない気がします。人は撮りたい絵を取ろうとしますから、被写体をいじったり、移動させたり、光や風など環境

を変える可能性が大です。

*

映画や写真にはぜんぜん詳しくないのですが、撮影には加工、修正、編集がつきものだと聞いています。

よく考えると当たり前です。写真や動画は被写体である事物ではないわけです。

そこに特撮、漫画、アニメ、CGといったものを考えあわせると、訳が分からなくなります。

私には荷が重すぎます。研究でも探求でもなく、私は好きで楽しむためにやっているのですから、知らないことを調べて深入りはしません。

寝入り際にネット検索なんてできません。いまは眠れない夜のとりとめのない思いを思いただしているのです。

言葉は最強の人工の影

人はなんで言葉を使うのでしょうか？ 伝えるため、つまり伝達のためだけではない気がします。

人は気持ちよくなりたいから言葉を使うのだと思います。具体的には、言葉を入れたり出したりするのです。言い換えると、読んだり、聞いたり、見たり、触れたり、話したり、叫んだり、詠んだり、歌ったり、唱えたり、論じたり、書いたりします。ここには「伝える」も入ります。

伝えるとは他人とつながりたいからする行為ですから、やはり「気持ちよくなりたい」に通じると考えられます。じっさいには伝えようとして伝わることは難しいし不可能なことが多いのですが、それでもめげずに人はせっせと伝えようとしています。

読む、聞く、見る、触れる、話す、叫ぶ、詠む、歌う、唱える、論じる、書く、伝える
――。

どれも気持ちがいいです。適度に苦しいと、これまた気持ちがいいです。適度の締め付けや縛りは気持ちがいいものだということを、みなさん日常的に経験なさっているのではないのでしょうか。ああきつい、でも気持ちいいわ、なんて。

気持よくなるためにたしなむものに嗜好品と薬物がありますが、人にとって最高で最強の嗜好品であり薬物は何でしょう？ 言葉です。

人は言葉という最強の嗜好品であり薬物を楽しむために、さまざまな嗜好品や薬物をたしなんだり摂取します。

コーヒーあるいはお茶を飲みながら詩を書く、あるいは詩を読む至福の時。お酒をちびちびやり、好きな小説を読む最高の時間。書きものや読書の途中で煙草を吸う、これほど心が安らぐ時の過ごし方はない。そういえば、いわゆる麻薬やドラッグを服用して書いたと言われる文学作品は多いです。

お芝居や映画や楽曲やテレビ番組やネット上の映像にも、言葉がともないます。動きに満ちたスポーツも、言葉による解説と言葉で述べられるドラマがあつてこそ盛り上がります。映像や音楽や動作を一種の言葉と見なす人もいます。

持論ですが、人が臨終という究極の時に必要とするのは、あるいは頭に浮かべるのは顔と言葉だと思います。この顔については、またいつか書きたいです。

＊

話し言葉である音声も、書き言葉である文字も、事物とはぜんぜん似ていません。少し似た感じがする身振りや表情という視覚言語にくらべても、似ていない度ははるかに高いです。

それなのに音声と文字による意味の喚起力、つまり意味、枠、筋書き、物語、イメージ、目的などを呼びさましたり、さらには音声と文字をきっかけに、それらの意味を勝手に生み出す力には、想像を絶するものがあります。

そうです。想像力のことです。

この文字の呼びさます、そして文字が勝手に生み出す力は、文字を学習した成果なのでしょうが、そのように言葉で置き換えたところで、不思議さは解消されません。

過剰で過激な想像力

人の想像力は、過剰で過激なのです。逸脱しているのです。

だから、「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字を見て、各人が勝手に猫を想像するのです。

「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字は猫に似ていますか？ 「ねこ」と発音して、その音は猫に似ていますか？

ぜんぜん似ていないのに、猫を想像するのです。あっさり書きましたが、すごいことではないでしょうか。腰を抜かしても罰は当たらないと思います。

*

言葉は人の作った最強の映像、つまり影だと思います。

話し言葉（音声）や書き言葉（文字）によって、意味という像（イメージ・印象）が浮かんだり、意味の暴走が始まるのですから、これは絵や影や写真や動画と同じく映像と見なしてかまわないと思います。

そんなわけで、写真と動画の話に移ります。

*

あなたは愛する人の写真を踏めますか？ その人ではなく、ただその姿が写ったものですよ。

愛する人の動画がけなされても平気ですか？ 動画を変なふうに加工作られて、冷静でいられますか？ その人ではなく、その姿が映っただけのものですよ。

あなたの愛するキャラクターやフィクシヤスな人物の映像が汚されて、憤りや悲しみを感じませんか？ キャラクターやフィクションの人物には実体がないのによ。

想像力を消していれば、ボタンが押せる

愛する人の写真を踏める人は、想像力が欠如しているか、想像力を消している人でしょう。

想像力が欠如しているか、想像力を消していれば、平気で文字としての人を、数字としての人を処理したり処分できます。

(文字も数字も抽象だからです。抽象の恐ろしさは「顔」がないことです。「顔」とは、人の中で想像力をかきたてる「何か」なのでしょう。)

数字を思いうかべてみてください。並んだ数字や、個人を識別する番号を。文字や、名前という文字列でもいいです。

抽象的なものは、人の目には、似ていたり、そっくりだったりします。だから簡単に複製ができるし、数字や文字として簡単に処理も処分も廃棄もできます。何をとって、人を、人がです。

個性が消えているからかもしれません。顔が見えないのです。顔が見えないものや顔が感じられないものに対して、人は冷淡で残酷になります。

ニワトリやサンマの顔が見分けられますか？ 私にはそっくりに見えます。

さらには、文字や数字としての人を大量に処分するボタンを押せるでしょう。いろいろなボタンがありますが、もう何度も、無数に押されていますね。無数の人が大怪我をしたり命を落としてきました。

最終ボタンだけは押す結果にならないでほしいです。祈っています。

私たちは抽象と無縁であるわけにはいきませんが、抽象に抗う必要があるように思います。抽象に抗うための武器は、個人的なレベルでの想像力と個人的なレベルでのイメージではないか。そんな気がします。

どうして「個人的なレベル」にこだわるのかというと、想像力とイメージは集団で共有されるときに抽象となり、その集団が大きくなるほど抽象度が増すからです。(拙文「異物を入れる、異物を出す」より)

大切な人の写真が踏めますか？

もし踏めないとすれば、移っていると感じているからではないでしょうか？ 映っているでも、写っているでもなく。そして、それが想像力ではないでしょうか。借り物ではない、共有物でもない、個人的なレベルでの想像力です。

移っているのは、何か？ 人それぞれです。まさに、それがここで言っている個人的レベルでの想像力ですから。魂、心、命、思い、顔.....。

Imagine.

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉# 文字 # 漢字 # 鏡 # 影 # 写真 # 映像 # 映画 # 動画 # 想像力

私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑える
のでしょうか？

＊

私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？

星野廉

2022年8月23日 08:01

声に恋して悪いでしょうか。言葉に恋することなど、古今東西で行われてきた人のいとなみではないでしょうか。人が、声や書かれた文章（言葉）や、映像で見た表情や身振りや仕草に恋することなんて、ざらにあります。

私たちは、現実とフィクションと幻想を混同したドン・キホーテやボヴァリー夫人を笑えないのです。誰もが目覚めていながら空を飛ぶ夢の中にいるからです。

（拙文「【小説】声に恋して悪いでしょうか？」より）

目次

◆第一部◆

赤ちゃんを卒業した人などいない

人は自分に似たものを真似て、どんどんつくっていく

創作活動とは自分を真似て、自分の複製をつくっていくことではないか

自分であると思こんでいる鏡の中の像には必ず他者が入り込んでいる

つくったものに似せる、つくったものに似てくる

人が真似る、似せる、似る、成りきる、成る

◆第二部◆

読書案内

真似てつくったものを真似る

向こうへと落ちていく

最後に

◆第一部◆

赤ちゃんを卒業した人などいない

絵や写真や映画や動画は、鏡に似ていています。人はそうしたものを目の前にして、鏡に面するのとそっくりな仕草や動作をするからです。

まず見入ります。そして魅入られます。見入り魅入られるは、なぞるでもあります。なぞることなしに見入るも魅入られるもないと言うべきでしょうか。

向こうで映っている相手の動き（表情も動きです）に合わせて、こちら心や頭の中で——あるいはじっさいに——動くのです。身体的レベルでの「うつる」と「伝わる」が起きているのです。

(※「通じる」ではありません。表情や動作が模倣され、反復するだけです。意味やメッセージは、ここでは触れません。)

ものすごく簡単に言うと、向こうが顔をしかめていれば、こちらもしかめる。向こうで走っていれば、こちらも走る。表情や動作をじっさいに、あるいは頭の中で浮かべてなぞるわけです。

それが見るであり、聞くであり、読むという行為と言えるでしょう。見たもの、聞いたもの、読んだものを、いったん信じないことには——「信じる」は「なぞる」です——、見えないし、聞けないし、読めないのです。実際には「ないもの」を見て聞いて読んでいるのですから、変な精神状態にあると言えるでしょう。

いましているのは、絵、映画、映像、動画、演劇、物語、小説の話です。虚構というものは「ない」を「ある」と一時的に信じ（つまり、思い描くことでなぞり）、しかもそれを自分自身も心の中で表情や動作として演じるわけですから、確かに変なことをしていると言えます。

要するに、映る、写る、移るです。

転写された相手が自分の中に入ってくるという感じ。それは鏡を見るときに起きることでもあります。便宜上、「相手」と「自分」という言葉を使いましたが、鏡における両者のさかいは曖昧だという気がします。どちらが主でどちらが従か、どちらが先でどちらが後か、どちらが実でどちらが虚か、こうしたさかいても意味をなくしているのです。

うつっているからです。うつるは相互的、双方向的なものではないでしょうか。鏡の話です。虚構の話です。見るのは人なのです。人あつての鏡であることを思い出しましょう。

話がうつりましたね、鏡から虚構へと。そして、虚構から鏡へと。今回は、そういう話をします。

以上は、スラヴォイ・ジジエク経由のジャック・ラカンについての私なりのまとめとも言えるものなのですが、頭にあるのは赤ちゃんだけではありません。赤ちゃんから成人までを想定しての話です。

＊

絵、写真、映画、動画は、自分を映すためのものではないでしょうか。世界は自分に似たもので満ちているから、風景を描いても撮っても、人以外の生き物を描いて撮っても、他人を描いても撮っても、そこに描かれている映っているものは自分なのです。広義の自分、複数形の自分、おそらく赤ん坊にとっての「自分」と言えばお分かりいただけるかもしれません。

人は自分に似たものを目にすると、幼児返りや赤ちゃん返りをするからです。たぶん、ごく短い間だけ、またはとぎれとぎれに、です。人はいくつになっても、まばらな幼児、まだら状の赤ん坊なのです。誰もが赤ちゃんを「卒業」してなどいないのです。それはぜんぜん恥じるべきことはありません。

人は自分に似たものを真似て、どんどんつくっていく

鏡、絵、写真、動画がどんどん増えていく。人が真似てつくり、複製するのですから、当然のことです。「鏡」が自然に増えるわけがありません。人がつくるからどんどん増えるのです。

つくるだけではありません。似せて、真似てつくるのです。何に似せ、何を真似るのかといえば、鏡なのです。鏡に似せて、鏡を真似て、つくる。どんどんつくる。結果的に、自分に似たものをつくっているのです。

世界は鏡に満ち満ちています。人は、ふだんは、それに気づきません。意識しないのです。だから、よけいに増えていきます。

じつは、言葉も鏡。さらに言うと、人も鏡。人は自分に似たものを真似て、どんどんつくっていくのですが、ややこしいですね。屈折しているのです。

創作活動とは自分を真似て、自分の複製をつくっていくことではないか

他の人に似ているとか、他人を真似るだけではなく、自分に似ているとか、自分を模倣するということがあります。

詩、小説、造形芸術、演劇、イラスト、漫画、作曲、伝統芸能といったクリエイティブな活動にたずさわっている人たちの作品には、その作り手独自のスタイルや型があります。これはプロ・アマを問わず見られます。悪い言い方をすればワンパターンでありマンネリズムです。

そうしたものが個性なのであり、オリジナリティーなのであり、本物なのであり、著作権によって守られる対象だと言えるでしょう。

あ、これ、〇〇の曲でしょ？ △△の映画は見始めて三分でだいたい分かるね。確かに、このドラマは、いかにも□□さんの脚本っぽいストーリーね。これって、あの人の作でしょ？ まだだ！ 「なんでレンブラントだって分かったの？」「背景の色、そして筆さばきかな」

創作活動とは自分を真似ることではないか、自分の複製をつくることではないか、と思えるほどです。

自分であると思こんでいる鏡の中の像には必ず他者が入り込んでいる

自分を真似る。自分に似せる。自分を模倣しつづけることは、随時更新することだとも言えるでしょう。鏡に向かい、そこに映った像を眺め、その像（イメージ）を模倣しつづけながら、少しずつずれていく。そのずれが更新なのです。

自分であると思こんでいる鏡の中の像には必ず他者たち（複数形です、他者は多者なのです）が入り込んでいるはずで、自分を眺めることが他者たちを認めることではないと誰が断言できるでしょうか。鏡の中の自分の顔や姿に自分以外の何かを認めるのは、誰もが日常で経験することではないでしょうか。

見るには必ず「ずれ」がともないます。そのずれが何とのずれなのかは、分らないと思います。自と他のさかいのない世界とは鏡の中だ、という気がしてなりません。鏡（この鏡を比喻と取っていただいてかまいません）に映っているものは「似たもの」なのです。「何か」そのものではありません。

何かに似ているのです。その何かが何なのは分らない。ひょっとすると、鏡（この鏡を比喻と取っていただいてかまいません、たとえば目とか作品とか人生とか世界、です）に映っているのは「何か」の代わりですらないのかもしれない。

影やまぼろしが自立していないとは、私には言い切れません。ひょっとして、人は影やまぼろしにもあそばされていないでしょうか。主導権を握られていないでしょうか。

つくったものに似せる、つくったものに似てくる

荒唐無稽な夢。荒唐無稽な想像。根拠のない空想。

たとえば、人は椅子をつくったために、椅子に合わせて腰かけるようになった。

物だけではない。たとえば、映画をつくったために、映画のような夢を見たり、空想をするようになった。

棺桶をつくったために、棺桶に合わせて埋葬するようになった。冷蔵庫をつくったために、冷蔵庫に合うようなものを食べるようになった。パソコンをつくったために、パソコンの従者や下僕になった。スマホをつくったために、スマホに嗜癖しスマホに合わ

せて生活するようになった。

それだけではない。

大量生産されたそっくりなものを使う人間は、地球のあちこちで同じ仕草同じ動作をするようになる。そっくりがそっくりを生む。そっくりをそっくりが真似る。シンクロ、同期、似ている、激似、酷似、そっくり、同じ。

*

つくったものに似せる、つくったものに似てくる。うつったものに似せる、うつったものに似てくる。ミメシス、模倣、描写。

うつす、写す。似せる、真似る。かたる、語る、騙る。つたえる、伝える、つぐ、継ぐ、次ぐ、告ぐ、接ぐ。まねる、真似る、ふりをする、振りをする、えんじる、演じる。

*

もしもの話。戯れ言。

言語を習得させ、海を見せて、海を描写するように指示する。海についてのパーツである、波、浜、砂浜、沖、岩、砂、石、水、海水、大波、小波、しけ、なぎ、太陽、夕陽、朝日、雨、風、カモメ、魚、貝、流水……といった言葉を覚えさせた上で。器用な人なら作文を書くだらう。お手本なしで。

絵の具と筆と鉛筆と紙を与えて、海を見せて、海を描くように指示する。器用な人なら描き始めるだらう。お手本なしで。

果たしてそんなに単純な話なのか。天才なら、書けるし描ける。そんな適当な話なのか。

*

戯れ言のつづき。

お手本を見せたとする。さらには筆記具の使い方と書き方、画材の使い方と描き方を教える。大切なことは、たくさんのお手本、つまり文章や作品を読ませ、たくさん絵を見せること。真似させること。たぶん、真似ることで、めきめき作文力がつき、絵の才能が伸びるのではないか。

＊

言葉も絵も外から来るもの。借り物。だからこそ、真似る対象になり、真似ることで熟達する。もちろん才能もあるだろう。大切なのは、真似ること。まねる、まねぶ、まなぶ。

まねる、まねぶ、まなぶをいう身振りだけを覚えた機械や AI は、創作しているのではないか。もしそうだとすれば、まねるやまなぶの対象が外にある外だからはないだろうか。

独創ではなく、引用と模倣と反復と変奏が芸術の実相ではないか。それにしてもオリジナリティ神話は強い。信仰ではないか。ないもの力は強い。

人が真似る、似せる、似る、成りきる、成る

荒唐無稽な想像。荒唐無稽な夢。

人が物語を真似る、物語に似せる、物語に似る、物語に成りきる、物語に成る。
人が書物を真似る、書物に似せる、書物に似る、書物に成りきる、書物に成る。
人が演劇を真似る、演劇に似せる、演劇に似る、演劇に成りきる、演劇に成る。

＊

写字、写経、写本、書写、筆写。書、書道、カリグラフィー。
書物や文字を写す職業。筆耕、写字生、写経生、スクライブ。

◆第二部◆ 読書案内

第二部では、複数の小説をめぐって、その解説をウィキペディアに丸投げしながら、第一部で述べたテーマとトピックに沿ってお話します。読書案内としてお読みいただければ、うれしいです。

＊

言葉と言葉によってつくられている知の総体を信じ、その身振りを模倣し、言葉と知になりきろうとした二人の写す人（写字生・筆耕）についてのお話があります。

ギュスターヴ・フローベール作『ブヴァールとペキュシェ』です。

これほど表象の仕組み（何かの代わりに何かを用いること）に対しての深い洞察に満ちた小説を、私は知りません。

”ブヴァールとペキュシェは、どちらも独身の写字生である。

二人はまず農業に着手し果樹栽培に乗り出すが、書物だけにもとづく知識は不十分で、大きな損害を被る。科学的知識が欠けていることを痛感した二人は科学や文学の勉強に没頭し、さらに文学・神学とつぎつぎに対象を広げてゆくが、どれも正統的な訓練を受けず書物を読みかじっただけの研究で、失敗ばかりが相次ぐ。しかし二人はともに知的であることを誇って、社会の無知ぶりを嘲笑しつつける。”

（フローベール作「ブヴァールとペキュシェ」についてのウィキペディアの解説より引用）

私たちは、ブヴァールとペキュシェを笑えるでしょうか？

＊

ホルヘ・ルイス・ボルヘス作『『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』については、まず以下の解説でそのあらましを把握するのがよろしいのではないかと思います。

”『『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』（ドン・キホーテのちょしゃピエール・メナール、Pierre Menard, autor del Quijote）は、ホルヘ・ルイス・ボルヘスによる短編集『伝奇集』に収録された作品の一編。ピエール・メナールという 20 世紀の作家がミゲル・デ・セルバンテスになりきるなどの方法で、『ドン・キホーテ』と一字一句同じ作品を作りだそうとした、という設定のもと、セルバンテスの『ドン・キホーテ』とピ

エール・メナールの『ドン・キホーテ』の比較を文学批評の形式で叙述した短編小説である。”

(ボルヘス作「『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」についてのウィキペディアの解説より引用)

私たちは、ピエール・メナールを笑えるでしょうか？

真似てつくったものを真似る

荒唐無稽で根拠なしの空想、馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないようなお話があります。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるようなお話なのです。

そもそも物語は人がつくったものであり、現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語であるはずです。

＊

物語を模倣する人間についての小説があります。

物語というジャンルについての復習、小説というジャンルの予習と言うべきかもしれませんが。まさか、小説を壊しているのではないかとも思えます。できたばかりのジャンルが既に壊れかけているのです。

それが、あのミゲル・デ・セルバンテス作『ドン・キホーテ』という小説なのです。

” 騎士道物語の読み過ぎで現実と物語の区別がつかなくなった郷土（アロンソ・キハーノ）が、自らを遍歴の騎士と任じ、「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ」と名乗って冒険の旅に出かける物語である。”

(ミゲル・デ・セルバンテス作『ドン・キホーテ』についてのウィキペディアの解説より引用)

上の引用文を読んで、私たちはドン・キホーテを笑えるでしょうか。これだけでもいいようなものですが（さすがにこれは暴言ですけど）、詳しくは以下の資料をお読みください。

ドン・キホーテ - Wikipedia
ja.wikipedia.org

*

既存の物語と小説をまねて、まがい、まげた作品を、さらにまねて、まがい、まげたような趣の作品。そんな小説があります。ローレンス・スターン作『トリストラム・シャンディ』です。

この作品をまねる、あるいは無意識にまねることとなる、来たるべき作品たちが後世に登場することになるのですから、まさに前衛であり先駆的でもあり予言的とも言えます。

まるで、まがい、まがるしかないのが小説というジャンルの運命であるかのように書かれた作品なのです。

とはいえ、読み物でもあります。読み物もまた読み物を模倣して、書き継がれていくのです。詳しくは以下の資料をお読みください。それが面倒であれば、原作の翻訳をお読みください。ただし、もっと面倒です。

トリストラム・シャンディ - Wikipedia
ja.wikipedia.org

*

小説を模倣する人間についての小説、小説と現実を混同してしまう人間についての小説があります。ギュスターヴ・フローベール作『ボヴァリー夫人』です。

たったいま書いたこの小説を要約を読み、私たちはボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？

この小説では、小説というジャンルの始まりと洗練が同居しています。また、律儀と愚鈍が同義であることを露呈させてもいます。

”夢と現実の相剋に悩むヒロインの性癖を表わす「ボヴァリスム」(bovarysme) という造語も生まれた。”

(ウィキペディアの解説より)

短絡的に言うなら「小説を模倣しようとして幻想をいだく」ボヴァリー夫人を私たちは笑えるでしょうか？

映画を、テレビドラマを、CMを、アニメを、(演じる)俳優を、ストーリーを、ドラマを、キャラクターを、出来事を、事件を、報道を、ディスプレイに映った像やテキストを真似、引用し、似せて、成りきり、演じようとする私たち。

ボバリズムとは、私たちのことではないでしょうか。

フロベール(フローベール)が「ボヴァリー夫人は私だ」と言ったという神話があるそうですが、そう口にすべきなのは、私たち一人ひとりではないのかと思います。ボヴァリー夫人は私たち一人ひとりなのです。

作品については、ウィキペディアの解説を丸投げします。

ボヴァリー夫人 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ここだけでもお読みください。この記事でいちばん指摘したいことです。

ボバリズムとは - コトバンク

デジタル大辞泉 - ボバリズムの用語解説 - 《「ボバリズム」とも》フランスの作家フロベールの小説「ボバリー夫人」の主人公

kotobank.jp

＊

恋に恋する人間。物語にかたられてしまう人間。小説の登場人物と自分を同一視する人間。

小説や物語を、映画や演劇やテレビドラマやゲームに置き換えても、事情はそれほど変わらないのではないのでしょうか。または、歴史や神話や信仰や哲学や生き方に置き換えても、事態はそれほど変わらない気がします。

仮に、政治や社会現象を、世界や国家や地域を舞台とした、物語や劇としてとらえるとするならば、これまた事情も事態もそっくりなのではないかと思います。

＊

登場人物と読者、演じる者と観客、舞台に立つ者とそれを眺める一般人。

人は観客や読者であることを忘れて自分が主人公だと思い込みます。そうした観劇の仕方や読み方を否定しているわけではありません。そもそも否定できるたぐいの問題ではないのです。

どんな子どもでも、読み聞かされた話に自分を重ねます。それがフィクションというものの仕組みなのです。

観るとは、聞くとは、読むとは、そういうことなのでしょう。そうした事態に自覚的であるかどうかは、趣味や気質や、その時の気分の問題なのかもしれません。

うつったものに似せる、うつったものに似てくる

鏡を見たり、鏡に見入るのは、誰でも毎日やっていそうなことです。そこに映っているのは自分だと疑わないのが普通でしょう。人前に出て恥ずかしくない顔と格好をしているか確かめる。お化粧をする。身だしなみを整える。それだけなのでしょうか？

本当に、そんなふうに単純なものなのでしょう。世の中には、変なことを考える人

がいます。変なことを書く人もいます。小説にまで書く人がいるのです。

変だから書くのか。変だから小説なんて書くのか？

人が小説に似る。小説が人に似る。

*

かがみ、鏡、かんがみる、鑑みる。見入る、魅入る、見入られる、魅入られる。うつる、映る、移る、入る。

鏡の中に入る——。ルイス・キャロル作『鏡の国のアリス』です。

鏡の国のアリス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

鏡の中に入る前に、言葉という鏡に見入る、魅入る。言葉はかがみ、屈み、鏡、鑑。

かがみ、しなり、おれる。屈折、reflection、inflection。

写真術のパイオニアだったルイス・キャロル。数学者・論理学者でもあったルイス・キャロル。その符合と屈折ぶりはただ事ではありません。

不思議の国のアリス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

作品と、作者の人生を重ねたくなる。それがルイス・キャロルです。

ルイス・キャロル - Wikipedia

ja.wikipedia.org

向こうへと落ちていく

水面に映った自分の姿を見る。鏡を見る。かがみ、かがむ、うつる、映る、写る、移る。

おちる、落ちる。墜ちる、墮ちる。

鏡像。姿。反射。自分のようで自分ではない。自分そっくり。そっくりなところがそっくりとしか言いようがない。

ドリアン・グレイの肖像 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

最後に

そもそも小説が物語に還元できないものであるなら、ましてや小説をあらすじに置き換えて論じるのが許されないのであれば、このような記事を書くことは言語道断だと言うべきでしょうが、自分の頭の整理のために、あえて書きました。

取りあげたテーマは盛りだくさんで、しかもどれもが大きいです。

いずれにせよ、私の力不足で、短絡と丸投げだらけの記事になったことは確かです。申し訳ありません。

恥ずかしい話なのですが、小説のストーリーをつかんでそれを要約することが、私はとても苦手なのです。ストーリーが頭に入らないという感じ……。たぶん先天性な欠陥とか欠損なのだと思います。このことについては、わりと自分をさらけ出した（我流の変な本の読み方をしているという意味です）以下の記事でも触れました。よろしければ、お読みください。

本記事がみなさんの読書案内になれば、うれしいです。

*

最後に。

私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？ さらには、ブヴァールとペキュシェと、ピエール・メナールを笑えるでしょうか？

こんな受け売りど決まり文句と引用だらけの記事を書いている私は、どうてい笑えそ
うにはありません。

私はドン・キホーテでありボヴァリー夫人であり、たぶんブヴァールとペキュシェ
であり、ある意味ではピエール・メナールだという気がします。ドリアン・グレイ……。
ドリアン・グレイにはなりたくないです。というか、なれそうもありません。

#フローベール # フロベール # オスカー・ワイルド # ドン・キホーテ# トリストラム・
シャンディ # ルイス・キャロル # ボルヘス # 文学 # 小説# 物語 # 虚構

異物を入れる、異物を出す

＊

異物を入れる、異物を出す

星野廉

2022年8月17日 08:07

目次

異物を入れる、異物を出す

異物の異物性

異物の異物感

異物の遍在性

異物の美しさ

異物の複数性

異物の外部性

異物の恐ろしさ

同じではなく、そっくりではなく、似ている

異物を入れる、異物を出す

入れるのに苦労します。小さいころから多大な時間と労力を費やして、入れる道を作るのです。脱落する子もいます。そもそも不自然なものですから、自分に入れる道を作る機会を奪われている子もたくさんいます。

入れるというか入ってくる道ができてきても、容易には入りません。入ったはずなのに消えていると思われる場合があります。ザルやふるいにホースで水を掛けているようなものだと自己嫌悪におちいる人もいます。私がそうでした。

出すのに苦労します。なかなか出てこないのも、嗜好品と呼ばれるもの、たとえばコーヒーとかお茶とか煙草を使用して出てくるのを促す人がとても多いのです。ルーティンとか儀式をおこなって出そうとする場合もよく耳にします。「出てこい」みたいな、おまじないもあるようです。

自分の中から出すわけですが、空から降ってくるとか、ご降臨なさるとか、湧いてくるとか、乗り移ってくるなんて、考えている人も少なくありません。とにかく、容易には出てくれないのです。なだめすかすとか、誘いだすとか、呼びだすとか、みなさんいろいろな方法をもちいて苦勞なさっています。

お酒やある種の薬物をもちいる方もいるようです。嗜好品や薬物をもちいて、それとは別の最強の嗜好品や薬物を手に入れるようなものです。なにしろ、出てくるとめっちゃくっちゃ気持ちよかったり、すっきりしたり、しゃきっとしたり、多幸福感を覚えたりします。

お察しのとおり、嗜癖しますし依存します。これが入ったり出たりするときに脳内何とかという物質が分泌しているにちがいありません。

言葉のことです。正確に言うと文字のことです。

＊

この記事をお読みの方なら、上で書いたことが痛いほどお分かりいただけるはずですが。なにしろ、みなさんはいま文字を読んでいらっしゃるのです。誰に頼まれたのでもなく、ここに来ていらっしゃるのではないのでしょうか。ここが、文字がたくさん読める場所（サイト）だからです。ちなみに、私は文字です。

半分冗談はさておき（半分は本気です）——みなさんがいまご覧になっている私は文字ですよ？ 生身の人間ではないことは確かです、おそらく直接お会いしたことはないと思います——、パソコン、端末、スマホといった広義の板とその画面で文字を読み、文字を書く。これが日常化している世界に私たちは生きています。

有難いと言えば有難い、恐ろしいと言えば恐ろしい、当然と言えば当然、不自然と言えば不自然。

入れることも出すことも大変なことは確かでしょう。一つ言えそうなことは、文字はわざわざ入れる必然性も、したがって出す必然性もないのです。とはいうものの、入れ

て出すのが当然と思われている現在から見ると必然だと感じられそうですが（当然と必然と自然と整然は、人の中では近いのでしょうか、文字で見ると似ていますから、文字どおりの見た目が人には大切なのであり、文字は鏡なのです）。

早い話が文字は異物なのです。

異物の異物性

- ・文字の習得には、とほうもない時間と労力がかかる。
- ・学習障害として文字の読み書きだけができない人がいる。
- ・人類には無文字社会という選択もあった。
- ・話し言葉、書き言葉（文字）、表情、身振りと言葉と考えた場合に、文字がいちばん遅く出てきた。個人レベルでも、文字の習得が後になりがち。
- ・文字だけが見える、しかも残る。
- ・複製として存在し広まり継承される。
- ・スーパースターとして最後にあらわれた。それでいて、あちこちであらわれ続けている。
- ・産む。産み続ける。

（拙文「文字に異物を感じる時」より）

異物の異物感

私たちは何度も何度も書いて学んだ文字（ここでの文字には数字と記号を含めます）に慣れきっているので、文字に異物感を感じることはあまりないと思われませんが、別の国や民族や文化や地域の文字を目にすると、見慣れないからでしょう、ぎょっとする人も少なくないようです。

以下は引用です。

＊

ある例を挙げます。

これが、フランツ・カフカなんだそうです。アラビア文字らしいのです。「らしい」なんて言うのは、私が検索して引用した（要するにコピペした）だけだからなのですが、か

ろうじてKに見える部分が識別できるくらいで、これがカフカだなんて予備知識がなければ分かるはずがありません。

弗朗茨 ù 卡夫卡

中国語だそうです。恥ずかしい話ですが、私は可不可だと思いこんでいました。お察しのとおり、「可もなく不可もなく」からの類推です。

К а ф к а, Ф р а н ц

これはロシアで用いられているアルファベットです。

タイ語だそうです。

こういうのは、ウィキペディアで検索できます。引用したというか「うつした」のです。

*

フランツ・カフカさんには連絡が取れそうもないので確認はできないので、想像するだけですが、「こんなの、私ではない」とおっしゃる気がします。

もちろん、

フランツ・カフカ、ふらんつ・かふか、Furantsu Kafuka

もです。「えっ！ 三種類もあるの？ スゲー！」なんて感動なさるかもしれません。

みなさん、ご自分の名前で想像してみてください。日本語とは異なる文字が使われている言語で、あなたのお名前が書かれていたとします。それをいきなり、予備知識なしに目の前に出されたとしたら、どんな気持ちがするでしょう？

何ですか、これ？ えっ！ ○○語で私の名前を書くところなるのですか？

(一瞬絶句)

こんなの私じゃないです。

こんな感じではないでしょうか。私なら、そんなリアクションをしそうです。

(拙文「こんなの私ではない」より)

*

文字は鏡です。鏡に似ています。

「そのもの」が映るのではなく、「そのもの」の影(姿)を映す鏡なのです。映っているのは、世界ではなく、むしろ別世界であり、異世界であるかもしれません。

人は鏡を前におびえるのと同様に、文字を前にすると身をすくませて「乱れている」(「分裂する」のです)気がします。詳しく言うと、文字を読んだり書いているときの人は、外にある外(外部)である文字という異物に乗っ取られ、自身の半分を占領させている感じなのです。それくらい異物の出し入れにはエネルギーと集中力が要るので、音声や表情や身振りという他の言葉にはない特殊性だという気がします。

それでいて惹かれるのですから、見入られ、魅入られる——自分という異物の目に、です、見入る以上鏡には必ず目が映っていますから——ことが快になっているにちがいません。

嘘だと思ったら、鏡を見てください。そこには鏡腫があるはず。そこには自分あなた= I eye という他者自分=眼 meme が映っているはず。

ちなみにだから何?、ひとみは人見から来たという説もあるみたいですか?。さらに言えばもう、やめたら?、虹彩は英語で iris ですがふーん、iris の二つの ieye の点が目に見えませんか? 目が点ですわ ぜんぜんそうは見えませんが鏡を前にして乱れて(分裂して)失礼しました。

異物の遍在性

世界は「写す・写る」と「映す・映る」に満ちています。とりわけ現代というか現在はそうです。いま、あなたと私をつないでいるのも「写す・写る」と「映す・映る」ですね。

お察しのとおり、インターネットを介しての画面上でのお付き合いのことですが、これは直接あなたのところへ私が移動する、つまり「移る」ことが容易にできないための次善の措置とも言えるでしょう。

身も蓋もない言い方をしましたが、「移す」の代わりに「写す」と「映す」を用いるという行為のことです。これで「動いていないのに移っている」が可能になります。

パソコンや端末の画面に映っているものは、移すことがかなわないから、映しているのです。このさい音声も映っていると考えましょう。音声も複製される（うつされる）からです。

あるものがそのまま移動するのではなく、映ったり、写ったりするというのは、ネット上では「(一回) 投稿する = (多量に) 複製する = (世界中に) 拡散する」という形で、ほぼ同時かつ瞬時に起こっています。しかも、いったん投稿されたものはどこかに情報とかデータとして保存されているみたいなのですが、詳しいことは知りません。

ある意味恐ろしいですね。削除しても残っているとすれば、です。

*

かつては、「写す・写る」が主流の時代が長く続いていたようです。写経、写本、筆写、印刷、写真、複写機が頭に浮かびます。写すのは大変だっただろうと想像します。多大な時間と労力を要したにちがいありません。

写真と映画とテレビとコピー機が登場したあたりから、「写す・写る」と「映す・映る」の境が曖昧になり、さらには不明になったようです。この過程と並行して、「本物・実物」と「偽物・似たもの」の境も曖昧で不明になって現在に至ります。

いずれにせよ、直接どこかに出かけていなくても、つまり「移動させる・移動する・移す・移る」をしなくても、遠くにある事物（本物・実物）を複製（偽物・似たもの）という形で手に入れたり、見聞きできる仕組みが次第にできあがって、今日に至るわけです。

（拙文「「移す」の代わりに「写す」と「映す」で済ます」より）

異物の美しさ

（動画省略）

上の動画を見ていると、ため息が出ます。息を飲む瞬間の連続です。

（拙文「書物の夢 夢の書物」より）

異物の複数性

現在ではありとあらゆるものが文字になっていますが、数字と記号を含めた文字は無限に複製できます。しかも、投稿と複製と拡散がほぼ同時にかつ瞬時に起きています。インターネットのことですね。

文字は複製でしか存在できないと言っても言いすぎではない気がします。文字のオリジナル、つまり現物とか実物とか本物というのは、よく考えると、ナンセンスなのです。文字は複製であってなんぼという意味です。

文字においては、人は文字の具象より抽象的な面を活用していると言えます。書道、カリグラフィー、文字や書体のデザインを除き、文字においてはオリジナリティが失われているのです。失念されていると言うべきかもしれません。

文字の複製や引用は、同じ、つまりほぼ同一になります。それが文字の抽象性なのです。抽象だから複製をしても偽物（似せたもの）どころか同じという理屈になります。驚くべき性質ですね。こんなもの、ほかにありますか？ 私は考えるたびに腰を抜かしています。

(拙文「偽物っぽくない偽物」より)

＊

とはいうものの、文字の複製には個性があります。

ほぼ同一の文字の複製がある一方で、書体やフォントが変われば、あるいはレイアウトや媒体が変われば、読む人に違った印象を与えます。複製の権化のように思われがちな活字にも個性や顔や表情や踊りや舞いがあるという意味です。

その意味では複製の複数性とでも言うべきものがあると思われれます。複製や「複製の複製……」は「同一」の連鎖ではないわけです。複製にも変奏（バリエーション）があります。

絵画でもそうですね。さまざまな複製があります。たとえば、ネット上にあるモナ・リザの複製を見ると、それぞれが微妙に異なります。家に画集をお持ちでしたら、それと見くらべるのも面白いでしょう。複製が多様であることが分かります。複製というもの、そして複製という概念は抽象ではないかと言いたくなります。

複製の複数性（多様性）と現物や実物の同一性（たった一つであること）——この対照は興味深いです。

＊

言葉の夢 夢の言葉

言葉の夢 夢の言葉

言葉の夢 夢の言葉

言葉の夢 夢の言葉

＊

上の文字列は、私はコピーペーストつまり複製したのですが、これを同一だという自信が私にはありません。これを同一だと思えるのは抽象ではないかとさえ思います。

具体的なものとして、そこにある。たとえ、他の端末に同一のものがあるのだとしても、目の前には文字の顔と個性が見える気がします。もちろん、これは文字を文字どおりに取った場合です。いまのはレトリックをもちいた冗談ですが、文字を文字として取ることは意外と難しいものです。

私たちが文字の形を抽象として取ることが、「読み」や「読書」や「書く」や「執筆」の前提になっているからでしょう。

文字の顔や表情を見ていては、文字の意味は取れないのです。

異物の外部性

やっぱり、人にとって言葉こそが最強の麻薬であり魔薬なのかもしれません。自然界では得られない、あるいは自分では製造も精製もできない（言葉は外からやって来る「外」なのです）、言葉という「麻薬・魔薬」を呼び出すために嗜好品や麻薬・魔薬をもちいるのですから、人がめちゃくちゃやこしい生き物であることは確かなようです。

（拙文「【小話】言葉こそが最強の嗜好品であり、最強の薬物かもしれない」より）

＊

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉のことです。

言葉は外にあるときだけ、他人と共有されます。話し言葉や表情や身振りは模倣され、ときには変奏されながら反復し、書き言葉つまり文字は複製されます。

外にあることで、言葉は知覚機能を用いて、見たり、聞いたり、感じたりする対象になるという意味です。中にあるものは他人といっしょに知覚できません。いっしょに頭の中を覗くことはできないという意味です。

ここで驚くべき文字の特性に注目しましょう。話し言葉、書き言葉（文字）、表情、身振りのうち、文字だけが「そっくりな」（同一と言ってもいいでしょう）形の複製として外にあるという点です。

（拙文「【小説】「消える」と「残る」が並行して起きている一生活と意見」より）

＊

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

だから、機械やAIにも文章が書けるのです。書いていると、書いているように見えるのさかいはないのです。さかいがあるのは人においてだけであり、さかいは外にはないのです。

たぶん、あらゆるさかいがそうなのでしょう。さかいは人が決めるものです。だから、線引きをめぐる争いが跡を絶ちません。

さかいはありません。少なくとも外にはありません。

(.....)

人は自分で勝手に引いた線をなぞっているだけだとも言えそうです。自分が引いたはずの線が「外にある外である」のは皮肉ではないでしょうか。これは線が自立しているからに他なりません。

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

これは、いま始まったことではありません。写本、写経、印刷の時代から起きている出来事なのです。

（人が文字をなぞり写すのは、線からなる文字が外にあるからです。内にあれば、わざわざ苦労して写しません。）

そして、複写。コピー（印影と呼びたいです）、複製。さらには、現在のコピーのコピー、複製＝拡散が起きているのは、同じ理由でそうなっていると言えそうです。

いまや、「写す」と「なぞる」は人の手に負えないものになり、人は振りまわされています。いや、これもいま始まったことではないでしょう。

影が外にある外であるという話は、人が言葉を持ったときに始まったにちがいはありません。

(拙文「樹影、言影、幻影」より)

異物の恐ろしさ

【以下は、拙文「文字化する人」と「そっくりなものなら平気でその命を奪える」を編集して短くまとめたものです。】

*

人は文字化しています。まわりをよくご覧になってください。よく考えてみてください。

あなたはフランツ・カフカに会ったことがありますか？ 見たことがありますか？
マリリン・モンローでもいいです。アンディー・ウォーホルでもいいです。平野歩夢さんでもいいです。バイデン大統領でもいいです。

ぜんぶ、文字で知っているのではありませんか？ つぎに映像（正確にいうと映像の記憶です）で知っているが続きます。まず、文字なのです。

あなたの知っている人の大半が、文字なのです。つぎに映像です。文字も映像も、見るものです。視覚に訴えているイメージ（像）だという点では同じです。

＊

映像としてイメージできなくても、文字として知っている人、場所、事物がいかにか多いことか。

人間関係は文字と映像でなりたっているのです。

きょくたんな言い方をすると、「世界（人にとって世界とは人間関係に他なりません）という関係性」を構成している要素は文字と映像とだということになります。

これは、驚くべきことではないでしょうか。本気でびっくりして、腰を抜かしてもいいほどの事実です。

なぜなら——何度も繰り返して申し訳ありませんが——人が文字化しているということなんですから。

あなたが文字だという話なのです。あなただけではありません。

知人であるか、家族であるか、会ったこともない無名人であるか、会ったことも見たこともない有名人であるか、会ったことも見たこともない歴史上の人物であるか、まったく関係なく、みんな文字になっているという話です。

ぶったまげて腰を抜かしても罰は当たらない気がします。

＊

数字（「すう」や「かず」ではなく「数字」です）も文字であることを思い出しましょう。

数字として処理される。

たとえば、死者〇〇名、重傷者△△名——という意味です。患者数、検査陽性者数、新規感染者数、給付金対象者数……もありますね。

数字として処分される。

処分は不祥事を起こして処分されるだけではありません。婉曲的に使われる言葉でもあります。

たとえば、殺傷処分がそうです。似た言葉に駆除もあります。排除するや非難させるも、そうでしょう。要するに「消す」のです。

非常事態下や災害時や有事（この言葉自体が婉曲語です）のさいに「処分される」が具体的にどういう意味なのかを考えてみてください。

＊

数字も文字も、そっくりなものです。

人

いま私がこの画面に書いたこの文字は、パソコンやスマホなど数えきれない端末の画面に同時に閲覧されるはずです。しかも、私が削除しない限りは残ります。

私が上で書いた「人」という文字は私だけの専有物ではありません。誰もが使うことができるし、使ってきたし、いまも使っているし、これからも使われるでしょう。

他にも無数にあるという意味です。それが「そっくり」です。

＊

数字と同様に、文字は「そっくり」です。そっくりである文字は抽象です。そして、抽象には顔がありません。

顔が見えないものを人は平気で殺めることができるのです。破壊することができるのです。

いまは破壊したり殺めるためには、ボタンを押すだけの時代になりました。戦車もミサイルもボタン一つを押せば任務遂行のために動きます。

ボタンを押す人にとって、その標的に顔がないことは確かでしょう。その標的は、数字と同じく、「そっくり」である文字であるにちがいません。

異物とは人なのだと言うべきかもしれません。

この文で、この記事を終らせるわけにはいきません。

*

人が文字を利用する理由は文字に具象と抽象の両面があるからであり、人はおもに抽象を利用することで多大な恩恵を得ているからだと思います。また人は、数字と記号を含めた文字の抽象に惹きつけられてもいます。そのために文字なしでは生きられないのです。

嗜癖し依存しているとも言えるでしょう。だからこそ、この記事の冒頭で述べたように、人は苦勞しながら文字という異物を入れたり出したりしているのです。膨大な時間を使い、多大な労力を費やし、途方もない額のお金を払っているという意味です。このことは、note にいる方々にはよくお分かりになるだろうと思います。

人と文字とのかかわりでもっとも大きな問題点は、人が自分にとって外部である（人の外にあって人の思いどおりにならないという意味です）文字の抽象（抽象という「まぼろし」と言いたいところです）に振りまわされていることではないでしょうか。

とはいえ、人とかかわりにおいて文字は抽象であることをやめるわけにはいきません。では、どうしたらいいのでしょうか。以下は、現時点で私の考えている、抽象への抵抗の一案です。

同じではなく、そっくりではなく、似ている

あなたは、あなたの家族や好きな人の写真を踏んだり切り刻めますか？ あなたは、あ

あなたの家族や親しい人や仲間の名前が書いてある紙を踏んだり燃やしたりできますか？

できませんよね。できないと言ってください。それだけが私たちに残された望みだと思っ
うからです。

私たちは抽象と無縁であるわけにはいきませんが、抽象に抗う必要があるように思
います。抽象に抗うための武器は、個人的なレベルでの想像力と個人的なレベルでのイメ
ージではないか。そんな気がします。

どうして「個人的なレベル」にこだわるのかというと、想像力とイメージは集団で共
有されるときに抽象となり、その集団が大きくなるほど抽象度が増すからです。

以下は引用です。

*

生き物も人に似ていると感じることで愛着や愛の対象になります。物もそうです。自
然にある物たち、そして人が作った物たち。

こう考えると、「似ている」が素晴らしい感覚に思えてきます。

一方で、「同じ」はどうでしょう。

「私たちは同じなんだ」「同じ人間なんだ」「地球に住む同じ生き物なのだ」「同じ〇〇国
民だから」「同じ〇年〇組なのですから」「同じ家族（会社、町内、病気、趣味、ファン、
宗教、性、世代、出身地）なんだからさ」……

ちょっと待ってください。

「同じ」も素晴らしく聞こえ、美しくさえ響きますが、どこか嘘くさいのはやはり日常生
活や体感から懸け離れている抽象だからではないでしょうか。妙にほのぼのとして美辞
麗句っぽいのです。

さらに、「同じだから」という上の言葉に続けて言われがちなフレーズを想像してみてください。何らかの思惑や魂胆のあるフレーズが頭に浮かびませんか？

「私たちは同じ〇〇なんだから、△△するべきだ（△△して当然でしょう）」——こういう流れになります。

こうしたスローガンやプロパガンダが危険でもあるのは、歴史が教えてくれます。

私たちは同じではなく似ているのです。ひとりひとりが似ていながら違うのです。

(拙文「私たちは同じではなく似ている」より)

#文字 # 言葉 # 異物 # 複製 # そっくり # 似ている # 同じ # 抽象 # 数字# 想像力
イメージ

人は人のつくるものに似ていく PARTII

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
